

增訂

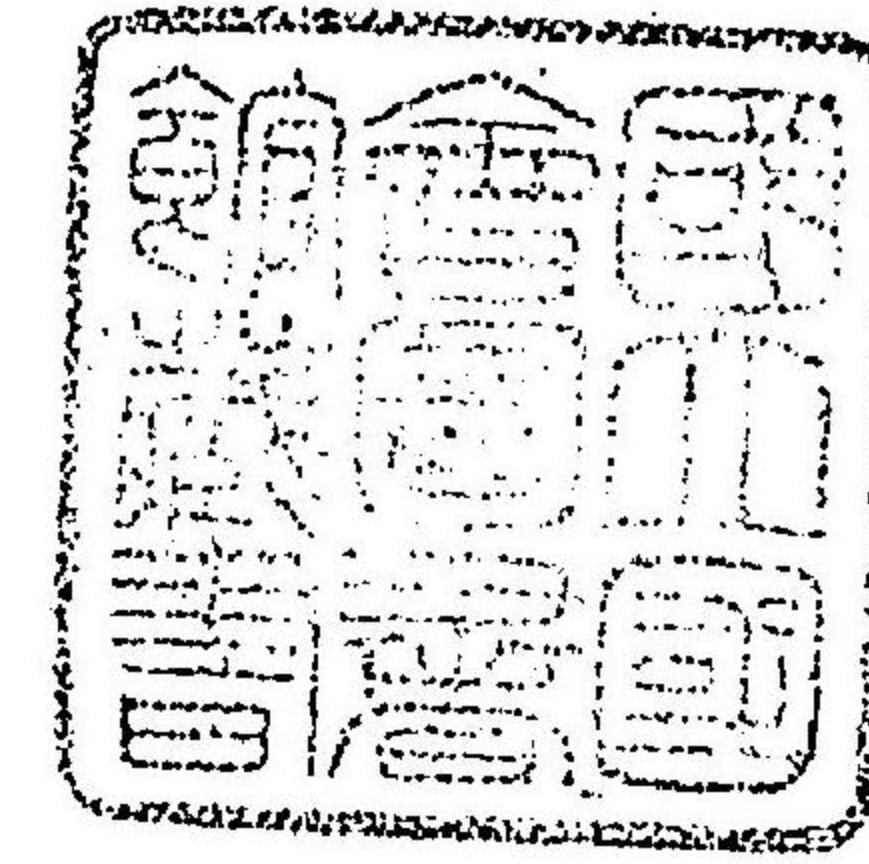
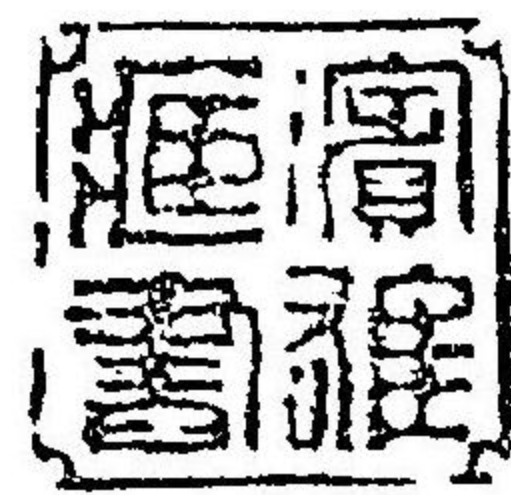
國書解題



025.15a58/kg y(ch)

111875-112024  
35字の詩

珠 擿  
披 海  
沙 以  
雨 求

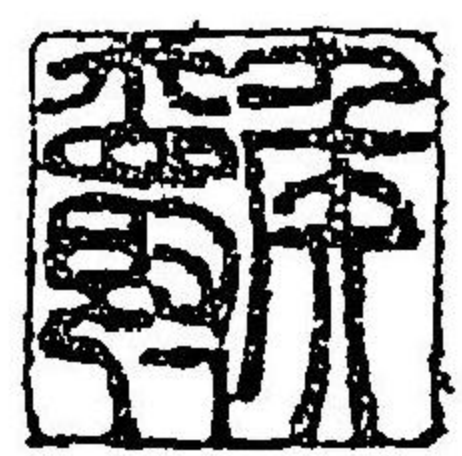


112023



見寶

侯爵蜂須賀茂韶題



德



不

孤

必

有

隣



戊戌年夏

聲書



各科本收第

種書由來點



梅妻与疎梅

題款藉句當

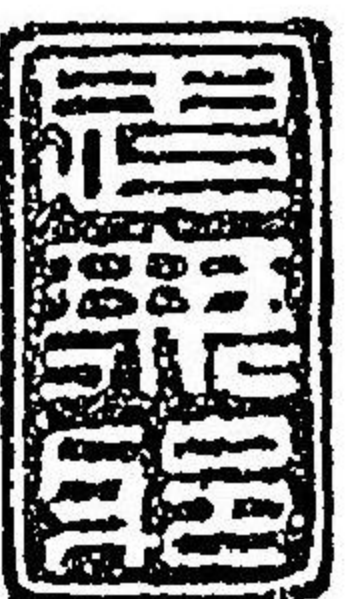
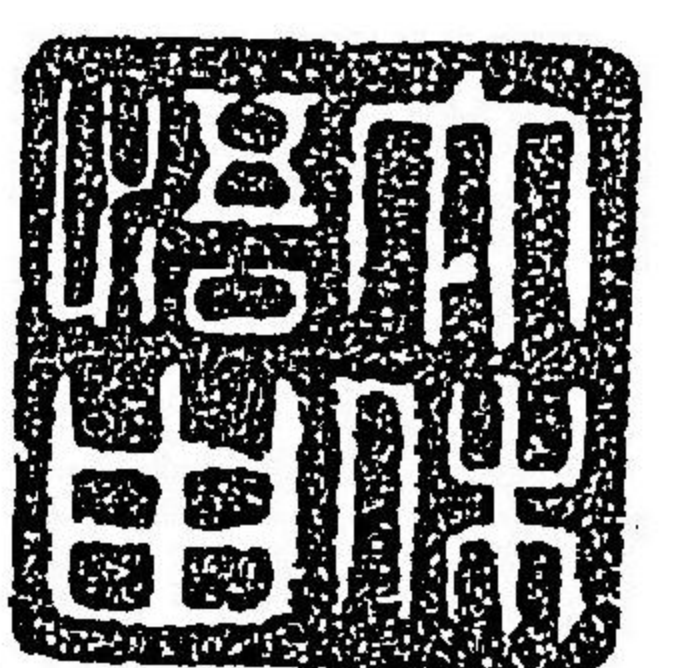
力心畫案以當

畫案解



戊戌九月

永平悟由



存善法

心



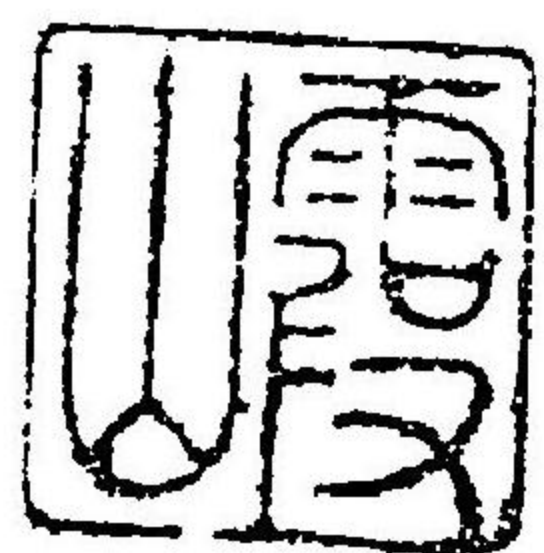
子河海

山野芳



丁酉年冬月

一室山人題





奇石

公

象

待有餘而後

待有餘而後

讀書必無



讀之入時

梅養書



平生至樂

筆日翻



壽

伯壽康久世通禧壽



壽  
如  
海  
長



古今中外

行



人編  
致遺  
於



斷  
管  
更  
功  
德  
更

陪  
于  
壘  
切  
若  
亭



# 家語

昭和十一年冬  
吉澤重定

## 再版國書解題序

言語は思想表彰の具なれども、思想の發達は亦た言語に負ふ所多し。人類に言語なかりせば、社會の進歩は永く禽獸の境を脱する能はざりしならん。文字の發明ありて、言語書記せられ、典籍の形をなすに及びては、前人の思想數百千年の後に傳はりて、後世を感化し、影響す。こゝを以て、嬰兒三才かつかつ言語を學ぶもの、稍や長じては典籍に就いて前人の思想を窺ひ、學ぶこと半生にして、早く既に文明社會の一員となることを得、復た太古以來人類の變遷を繰返す必要なし。現今の文明は實に古來文明の累積せる結果にして、今日五尺の童子も、智識發展の程度に於ては、或は數百年前の大人を凌ぐものあり。これ文化の日進する所以にして、典籍の貴ぶべきこと亦た以て知るべし。故に能く一國文化の跡を討尋せんとするものは、必ず先づ古來の典籍



を研究せんことを要す。これ世に文獻學の必要なる所以なり。蓋し我が國最舊の典籍として最も信憑すべきものは、古事記日本紀にして、其制作は實に西曆七百年代に在り。今を距ること凡そ一千二百年とす。爾來時世の隆汚治亂ありと雖も、歴代の學者が筆述せる無慮幾千萬の典籍は、皆我が日本文獻學の資料となすべく、我が國文明の由來する所皆其中に求むべきなり。奈何せん、かくの如き無數の典籍は、一人のよく讀破し得べきものにあらず。又時勢の進歩につれて専門の業務益分岐するを以て、一人にしてこれらの典籍を涉獵する必要も亦たあることなし。こゝに於て、この百千の典籍を分類し、解題し、學者若くは實際家の參考に資せんことは、最も有益にして、文化ある社會には必ず無からざるべからざるものなり。我が國古くより解題の書無きに非りしかども、收むる所甚だ尠く、且つ其範圍も一方面的の書籍に限られたり。かの清朝幾多の碩儒の手に成れる四庫全書總目に比

すべきものあらず。余またかつて泰西諸國に遊びて、目錄解題書の整備せるを見るに及びて、いよいよこの種の事業の、我が國に於ては前途なほ遼遠なるべきかを歎じたりき。圖らざりき佐村八郎氏が一介の書生を以て、拮据十年、よくこの大事業を成就して、學界の渴望を醫するに至らんとは。佐村氏は實に我が國文獻學者としての一大事業を成したるものといふべく、その功業に於ては幾多の典籍を述作し置きたる前哲の偉業にもをさをさ劣らぬものと謂ふべし。余はもとよりこの書を以て完璧たりと信ずるものにあらず。然れども佐村氏が單獨の事業たるを思ひ、從來の群書一覽等に甘んぜし余等が青年時代を憶へば、微疵の故を以て、この危然たる大冊を作り得たる佐村氏の氣力熱心を歎賞するに吝なるものにあらず。國民も亦た大に氏の勞を多とすべきものありと信ず。この書の今日の學界を裨補すべきはいふまでもなし。漸々に改善せられ、増補せられて、學界の珍とな



り、一般の文獻學者は勿論、永く後生を便益すべきは亦た信じて疑はざる所なり。往昔古事記日本紀の述作せられし時代には、文化の源泉は全く支那に在りき。今や奎運日に盛にして、全國校庠の設あらざるなく、近年國力益發展して、地方圖書館の設立日に相踵ぐ。現今の支那は却りて我を師として、清國留學生の來遊せるもの既に數千人を超ゆといふ。日露開戦の詔勅新に煥發して、國勢の伸張際涯なからんとするに方り、文學の方面に於ても、この種の典籍を得たるは、亦た豈に國運隆昌の一現象たらざらんや。こゝに印刷成れりと聞きて、聊か欣喜の情を敍ぶ。

明治三十七年二月征露宣戰詔勅の下りし後三日、

上田萬年しるす。

南軒に仰臥して便々たる肚腹を曝露しつつ、乃公今曬書すと答へたる郝隆が事は措きて問はずとも、世閒猶ほ書傷病に罹れる者は太多かるべし、知らず何をか書傷病者と謂ふぞ、アヂソン曾て其の「タツトラ」中に得意の諧謔を弄して云へる事あり、渠れは古今一切の著者作家に關して、書名に博通せること、確に一大學者と稱するに足るべし、其の原稿の出所を審にし、其の改版の經過に精く、且つ讀書界の之れに與へたる毀譽をも悉く暗せるは、眞に驚くに堪へたり、爾若し試に一著者に就きて渠れに質すあらんか、渠れは乃ち其の著書の題目を舉げ、其の出版者の姓名を告げ、並に其の印行の年月を示して、以て能事了れりと爲さん、否、更に一步を進めて深く究むる所ありとも、渠れの揚々として爾に教ふる所は、恐らく紙質の善良、校合の謹嚴、活字の美麗なることなどに過ぎざるべし、蓋し渠れは是れを以て眞箇深沈なる研究と做し、堅實なる批評と做せるにて、若し他の文體の適



否を談じ、思想の當否を論じ、乃至章句を摘舉して特に其の麗彩を贊歎するが如きは、假令著者精神を傾注したる所なりとも、渠れの見て以て反りて浮薄の研究と做し、皮相の瑣談と做す所なればなり」と、嗚呼是れ實に所謂書傷病者を罵倒して餘す所なきものにあらずや、然り而して余輩の竊に恐るゝ所は、這の『國書解題』の體裁動もすれば斯くアヂソンの描寫せる書傷病者に髣髴たるの譏あらんことなり、借問す佐村君は果して一大書傷病者なる乎、豈に夫れ然り然らんや。抑々多讀と精讀との得失如何は、古來夙に議論の存する所なり、ブリーの如きは、吾れは多く讀まんことを力む、而かも多くの書を読むことを敢てせず」と云へり、是れ精讀家の毎に録して以て銘箴となせる言なるべし、然りと雖も、此の如きは實に寧ろ一箇偏狹の陋見たるを免れず、吾人由來書を読む、決して徒に書に讀まれんことを願はず、須らく書を利用して自家藥籠中の物となさんことを期すべし、乃ち

強ひて一書を反復して章編の三絶に至るを望まず、寧ろ博覽して甄別取捨せんことを勉めんとす、蓋しアヂソンも亦其の『ホキツグ、エキザミナー』中に於て言へることあり、誰人も多少の意味を持せずして筆を執り書を書きんとする者はなし」と、果して然らば區々たる小冊、碌々たる俗書たりとも、讀者一隻の眼光を有するあらば、藉りて以て發明し資益する所あるは疑なし、況んや名聲喧傳せる所のもの、未だ必ずしも以て吾が研究參考の用に供すべしとも限らず、墜簡叢編反りて善良の者なきを保せざるをや、是れ猶ほ遺賢の曠野に隱逸せるあると一般なり、エマルソンが有名なる書籍の外は手にすべからずと云へるは未だ可ならず、ポープ謂へらく、唯是れ有名なる出版者の發行する所なるが故に、斯の書購讀すべしと云ふは、恰も有名なる裁縫匠の製作する所に係るとの理由を以て、衣服を購求し、又敢て自家の體軀に適すると否とを問ざるに同じ」と、其の愚誰か憫笑せざらん



や、乃ち知る、この『國書解題』の如きは解題書當然の任務として、古今の著作、大小と凡聖とを擇ばず、兼收並列、以て學者の搜索取捨に使せるのみ、此の書を善用すると悪用するとは、佐村君の毫も關する所にあらざるを、佐村君豈に書傷病者ならんや。

尙且つ余輩の特に喜ぶ所は、佐村君の此の事業は實に我が國文明の眞髓を保存し、吾人祖先の精神を永く後昆に傳ふるに、太だ有力なるべしと信ぜらるゝことなり、蓋し書籍は實に個人の腦裏より湧出し來るものなると同時に、又是れ時代精神の先驅たり反映たるものなればなり、而して草昧の蠻民は只だ口耳傳誦して、未だ書契の用を知らず、世態愈々開明に赴きて、始めて文獻亦愈々具備する所以を考ふるときは、書籍の尊重すべき理由乃ち明ならん、然るを古來本邦の典籍に就きて詳細なる記録を作さんと志せし者鮮し、即ち空しく散佚するに任せ、徒に湮滅するに委ねられたり、慨嘆に堪へざるべけんや。

言ふ莫れ、國寶は嘗だ繪畫、彫刻乃至建築の秀逸を指すと、余輩を以て之れを見れば、眞に國家の寶物たるべきものは、寧ろ書籍に於て之れを求むべしとす、蓋し余輩が國寶として尊重する所は、其の能く一國文化の代表者たる點に在り、固より區々たる骨董的玩弄品を以て之れを視るにあらざればなり、請ふ更にアヂソンを援引するを許せ、アヂソン其の『スペクテーター』中に於て言へらく、凡そ書籍は大天才の人類に與ふる遺産にして、代々傳承して以て未生の後昆に貽すの贈品なり、爾他一切の藝術も亦以て吾人の思想を不朽ならしむるに足ると稱せらると雖も、其の持續する實は太だ短し、彫像は僅々數千年間存立するに過ぎず、建築は更に短く、色彩は建築よりも又短命なり、ミカエル、アンジエロ、フオンタナ、ラファエルの徒亦焉んぞ後世に至りて、フィチアス、ヴィトル、ヴィス、アペラスの今日に於けると同一運命に陥らざるを知らんや、看よ幾多彫刻家、建築家、畫家、大名は空しく殘存し



て、傑作は疾く喪失し去りたるにあらずや」と。

夫れ然り、歐米諸邦、書籍の保存に意を用ふる最も篤し、盛邑大都は勿論、山嶺水隈の小市府たりとも、博物館を設けると同時に、圖書館を建つるを以て市街第一の修飾となし、又必需となせり、ロード、ベークンが圖書館は古聖先哲の遺骸を安置せる廟宇なりと謂ひしも、亦以て偶々其の尊重なる所を明にせり、而して繼りて我が國を見れば果して如何、大小市邑星布羅列せりと雖も、就中博物館を有し、圖書館を有せるものは、寥々晨星も昏ならざるなり、否、近頃には及んでは、政府漸く國寶の調査に従事し、保存に盡力するありと雖も、未だ余輩の所謂眞の國寶たる書籍に及ばず、名山祕閣乃至世家巨族珍襲の卷帙恐らく乏しとなさずと雖も、殆ど之れを知るに由なし、猶ほ名器の地底に埋没せるが如し、只管識者浩嘆の種となるのみ、即ち佐村君の斯の鴻著は、又以て國家の眞寶を發掘し、顯彰し、登録せるものなりと言ふべきか、

其の玉石混淆して強ひて別かたざるは、玉固より皆美玉なると同時に、石亦必ずしも凡石たるに了らざるべきを以てなり、古人曰はば、他山の石亦用ゐて吾が玉を琢磨すべしと、石礫豈に悉く無用の贅物ならんや。

余輩曾て歐米を遍歴して各所の圖書館を參觀せり、而して特に感嘆措かざりしは、北米合衆國圖書館の設備太だ整頓せることなり、凡そ米國圖書館には必ず其の中央に於て参考室の設あり、室中置く所は、孰れも大小各國の辭書、百科全書、人名錄、地名錄、乃至書籍雜誌の目錄、解題分類索引等なり、以て讀者の隨意に抽出し、搜索するに任ず、到れり盡くせり、我が國圖書館も亦速かに此の好模範に倣はざるべからず、幸に近時此の類の参考書編輯出版せらるゝもの、漸く多きを加ふ、而かも這の『國書解題』の如きは、實に参考書中の参考書なる事を記せざるべからず。



勿論彼の國には文庫事業夙に發達し、書籍の販鬻早く弘通せると同時に、目錄解題の類も亦早く世に存せり、例之目錄としては、獨逸のゲスネルの『ビブリオテカ、ウニヴェルサリス』の如きは、早く第十六世紀の半期に成り、又解題としては、佛人ドビユールの『ビブリオグラフィ』、アリストリクチャーヴの如きは、第十八世紀の中頃に出でたり、英國にて亦ブラウント、オルヂスの著書太だ舊りたり、而して近時に及んで詳略精疎愈々具備し、年刊あり、月報あり、週録さへ行はれて、學者の便利を謀ること極めて周到なり。

否、是れ嘗に歐米諸邦の事のみならんや、支那に於ても亦勿論目錄解題は夙に編成せられたり、即ち目錄は劉歆の『七畧』に昉る、而して劉向の『七畧別錄』あり、早く解題の範を垂れたるは、人の皆熟知せる所なり、宋朝以來此の類の編著相踵ぐ、『崇文總目』、『郡齋讀書志』、『直齋書錄解題』を始めとし、明朝には『文淵閣書目』あり、清朝に至りて『天錄琳琅書目』、『千

頃堂書目』、『經義考』等撰述太だ多し、終に『四庫全書總目提要』成りて、畧ほ兼備せるを見たり、唯だ爾來繼業の未だ曾て大に振はざるを憾とす、近刊『頤宋樓藏志』の如き稍々珍となすべきか。

獨り我が國邊陲に位し、文化久しく幼稚の搖籃を脱せず、従つて目錄解題の如きも亦太だ乏しかりしは、前已に述べたるが如し、藤原佐世の『日本見在書目』は夙に寛平の昔時に成れり、而かも片々たる一小冊子のみ、永仁中清原業忠『本朝書籍目錄』を作る、亦同轍なり、『廣益書籍大目錄』なるものあり、慶元の際早く印行せらる、而かも猶ほ太だ疎少のものなりと覺ゆ、『法家文書目錄』なるものあり、専門に限れりと雖も、稍々備はる、此の書一面に於ては解題の遠祖と謂ふべし、而かも眞に解題と稱すべきは、林羅山の『日本書籍考』を以て濫觴とす、而して其の收録せる所は、僅々百十有三部の和書に過ぎず、幸烏宗意の『倭板書籍考』も亦七百五十餘種を擧ぐるのみ、尾崎雅嘉の『群書一覽』は從來稀有の



善書と稱せらる、而かも猶ほ記述する所未だ二千部に満たざるなり、維新以後に及んで、西村某續編を作れりと雖も、未だ弘く行はれず、近頃に至りて始めて中根氏の『諸家著述目録』あり、赤堀氏の『國語學書目解題』あり、相踵ぎて世に出づ、寔に聖代奎運旺盛の瑞兆と謂つべし、而して特に佐村君の『國書解題』の如きは、掉尾の大著述にして、實に藝林學圃獲麟の思ありとす、此の書一たび出で、始めて我が國文獻亦稍稍他邦に耻ぢずと謂つべき乎、曩に其の初版成るや、余輩頻に勸めて之れを歐米の大圖書館に寄贈せしむ、又竊に微志の存するところを見るに足らん。

然り而して今茲に更に大に訂正を加へ増補して再版に附せるを聞く、誰か其の偉績を贊嘆せざらんや、獨力經營孜々として怠らず、前後八年の星霜を閲して漸く其の業を卒へたり、收載する所無慮二萬五千種、之れを第一版に比すれば、増す所約一萬種に及べりと云ふ、嗚呼

盛なる哉、讀者知らずや、四庫全書著録する所の如きは實に三千四百五十餘部にして、其の存目に上れるもの亦七千部に達せず、即ち此の書收載の部數に於ては、遙に彼れを凌駕せるは争ふべからざるを。然りと雖も余輩亦敢て這の書を以て完璧視する者にあらず、試に初版に就きて之れを言はんか、遺漏太多く、考據亦未だ詳かならず、例之余輩の郷里讚岐の地誌に就きて之れを索むるに、『讚岐名所圖會』もなく、『西讃府志』もなし、隣國伊豫に關しても亦愛媛の面影等缺けたるが如し、今度再版即ち爾く訂正増補を行へりと稱するも、固より遽に全備を期し難かるべし、蓋し異笈珍函盡く窺ひ畢な集めんことは、一生の力を窮むとも猶ほ能くし難かるべければなり、殊に寫本手録の冊子に至りては、値遇尤も沮む、到底津涯を知らざるをや、『枕草子』に安貞本なるものある事は余輩曾て之を耳にせしのみにて、空しく歲月を經過したりしを、この頃圖らず當地の藏書家鐵齋富岡氏の許にて



之れを見るを得たり、毫及愚翁の奥書あり、頗る珍奇と做すべし、而してこの書再版にも亦未だ収録せずといふ、又余輩先年諏訪に遊びける折寫させたる新古の寫本類も大概は漏れたる由聞き及べり、以て他を類推するに足らん、是れ然しながら一つには余輩校閲者の責免れ難しとも言はんか、竊に慚愧に堪へざるなり、將た又編述の體裁に就きても、猶ほ多少の異論あるべし、試に夫の『群書一覽』と較べんか、必ずしも輕しく軒輊する能はず、『一覽』の鑒別詳明にして、品題の精確なるは復た争ふべからず、特に名著に關しては幾多有益有趣の話柄を載せたる如き讀者の大いに嘉ぶ所なるべし、例之日本紀に就きて彼此對照して知らるべきが如し、然りと雖も總じて體例整頓し、貫串折衷して、詳畧其中庸を持し、未だ曾て冗漫の弊を認めざるは實に『國書解題』の長所と謂はざるべからず、若夫れ每書得失を考核し、醇疵を辨別するに於て、往々未だ周到ならざる所ある如きは、獨力短少の歳

月を以て校理し、薈萃せるもの、理に於て不得已と做すべし、之れを以て直に佐村君を目するに、アヂソンの書傷病者を以てするあらば、ただ酷なり、余輩は唯だ朝野の學者が速に此の惠賜を利用して、我が國事物の研究大に振起するあらんことを切望して止まざるなり、豈に徒に多識を衒はんとする者の資用に給するを期せんや。

因に云はく、ドクトル、ジョンソン言へることあり、凡そ人開希望の虚榮心を悔悟せしむるもの、公立圖書館に如く處はなし、四壁高架陣列する所幾億萬卷、皆是れ覃思精覈の後に成れるもの、而かも今は僅に其の名を目錄中に存し、徒に學問の莊嚴を増さんがために藏蓄せらるるに過ぎず、復た作家の辛勞を顧慮し、往時の聲譽を回想する者なしと、果して然らば、今この『國書解題』每書作家の小傳を掲げ、以て世を知り人を識らしむ、佐村君の功德宛も幾多不祀の鬼を配享して、廟食せしむるに同じ、魂魄必ず泉下に於て合掌歡喜する所あらん、積善の家



豈に餘慶に乏しからんや。

明治三十六年十月三十日

京都帝國大學圖書館に於て

谷 本 富 識

### 初版國書解題序

文學のとしと月々にいやす、みゆく大御世の光には世にうつも  
れたりし古き書もあらはれまたあらたにめつらしき書とも、出来  
るはいともめてたくよるこはしき事なりされといにしへ今の書の  
かきりなく多きを一わたりたにも讀見むとするにはすくなくならさ  
る月日といとまとなくてはいえあらずまたその書ともをよまむにた  
たうはへのかたはしをのみ見てそのむねとあるおもむきまたこれ  
を世にはたらかすへきよしをわきまへすしては何のかひかはあら  
むさるをゆるやかなる月日といとまとはたれも得かてにすなる今  
の世にしてかきりもなき書ともをよくよまむことはまことにかた  
きわさなればかならずそのふみともむねとあるふしふしこゝろ  
つくへき事からを今より後の若人のためにさし示しふるへする書



はなくてはえあらずもとよりはやくこゝに意をもちぬてしるせる  
ふみなきにはあらねといまた精しく足り整へるものなきをこの國  
書解題は悉るしさまも深く心してすへてあかぬことなき道のしる  
へとこそおもはるれされとこはもとよりたやすからぬしわさなれ  
はいまた全くなりをはさるまへにさのみほめたへむもいかゝな  
れと雄々しくいそしくおもひ立ちたるつくりぬしのこゝろさしの  
うむかしさはいふもさらにてつきつきかくさまによるつたらひと  
とのほりゆくめる大御代の光こそなほいとめてたくたふとく仰く  
へきことなりけれ

明治三十年四月の十日ばかり

きのふけふ野山の櫻もさきいてゝ

あさなあさなにみちたらひゆく

春の光をまちよるこひ樂しみつゝ

春の宮につかへ奉る

### 本居 豊 穎 するす

佐村八郎君國書解題を編著刊行す抑國書の中には其體裁甚た整は  
ず殆と隨筆に類似して如何なる事項を目的として記載せるやを知  
る能はざるもの少からず加ふるに書寫にて傳はりて未た上梓せさ  
るものも多ければ動もすれば誤脱を免るゝこと能はすして學者閱  
讀の不便甚た大なるものなるに今此解題の編著に依て是等の不便  
を除き學者をして一目其如何なる書なるやを知らしめ且つ速に其  
事理を解せしむるを得眞に有益の書にして佐村君が學者社會の爲  
めに盡せる功績甚た偉なりとすへし

明治三十年四月

加 藤 弘 之



國家日進文明人事月趨紛煩凡百之業貴簡明要約於是陸有鐵道海有汽船益出益新而文學獨守舊株而可乎且如我國書汗牛充棟欲一々研究之鱗河蚊山維日不足佐邨君有感於此就上古以來至德川氏之羣書選擇必須至要者記其體裁主旨題號年代及著者傳記等名曰國書解題徵余敍余曰善哉舉也此書之出人々不費歲月不勞心力得知古今羣書之梗概謂之學者之鐵道汽船亦可漢土已有四庫全書提要等諸編此書亦庶幾可並鑣相馳乎抑學者所務在博而深此書則捷逕而已門戶而已須自此進而升堂入室徒以此書爲足非余之所望思佐邨君之意亦必在於此也是爲序

明治三十年六月

高等師範學校教授正六位 南 摩 綱 紀

識於東京望岳坊環碧樓時年七十又五

書目其猶人目乎人士之衆欲盡察其胸中善惡邪正惟日不足苟一見其眸子則梗概判然矣載籍之夥欲悉知其書中精粗良否亦惟日不足苟一讀其目錄則要畧瞭然矣是佐村君所以有國書解題之著也雖然人目出于天然百發百中書目則成于人著不能盡命中而此編也由達識博覽諸名家之贊助則所謂十目所視與天然何擇是爲引

丁酉歲抄

中洲老人毅撰

ものまなひを、せむとならば、ふみのはやしの、まけきを、わけさるへからず、ふみのはやしの、まけきを、わけさらむには、ものまなひは、なるへからず、それわけいらむ、まるへにもなれとて、こたひ、佐村ぬしの、ものしいてられたる、國書解題は、ものまなひせむともからの、いとよきまるへふみなり、これよりさきに、かくさまなるまるへふみの、なきにし



もあらねと、さはいへと、ことそきたり、ことに、今の明治のおほみ代となりてよりこなた、いてまうて來にたるふみのはやしも、はた年に月に、まげくなれ、はいよ、ますます、わけまとふへくなむなりになる、さばかりまげきふみのはやしなれば、それわけいらむともからの、まゐるへは、このふみにしくものこそ、あるましかりけれ、

明治三十年十一月

文學博士 黒川眞頼

世愈進而書愈多書愈多而讀之愈難是提要書之所以出乎世也然提要之著豈易乎哉不可不博通古今之書一也不可不特知其書之要二也不可不品評得其當三也支那提要書中以紀曉嵐四庫全書提要推爲第一蓋以能兼此三者也本邦提要之書頗多然舉其闕點亦復不尠中學教諭佐村君著國書解題欲補其闕點以期完全其意甚美而其力甚勞勞已之

力而爲世閒之便益是著者之本意也歟至其取捨選擇繁簡詳畧之當否具眼者自能知之余不敢贅贅言也

明治三十一年三月 東京 西村茂樹識

邦人著書始于上宮太子三經疏爾來一千三百餘年載籍之夥無慮二萬七千餘部古者唯漢文耳若國語亦漢字記之中世始有國字國文尋起於是漢字國文併行又相雜糅而有史有記或以邦人思想評論印度支那風教或以孔孟老佛之心商量國家政刑禮樂皆綽綽有餘裕加之近百餘年又有西洋之學其初纔不過譯述以知大要今則不然英佛獨露之言語文章沛然風靡苟不解蟹行之書者不能伍學者之閒從上群籍一切唾棄無復顧者然及國步愈進圭運益盛則亦不可不溫故而一旦束於高閣者卷冊浩漭體裁錯雜學者每憂焉佐村君八郎講學之暇徧搜邦人著書一一提記其題目要旨及著者傳等以字母爲符號便于索引命曰國書解題漸



次刊行。頒布學者。於是群書梗概。一目瞭然。世之唯知有洋籍。未解國書爲何者。亦當得自此進。而知其用也。昔者上宮太子。以漢文釋三經。漢人深服其言論文藻。更註解而傳于世。寔爲我國名譽矣。今之以橫文著書者。果能得使歐人屈服乎。吾將刮目而觀之。

明治戊戌春季

青巒 大内 退 撰

昔者藕益智旭之作。閱藏知津也。歷年二十。禮始獲成。稿云。先是宋有王古居士。創作法寶標目。明有蘊空沙門。嗣作彙目義門。旭不以爲足。每展藏時。隨閱隨錄。書成未及梓。行遺囑門徒。得襄其事。今佐村君固異其撰編。次一萬種之書目。作其解題。以四五百種爲一卷。隨成隨刊。故人已得見其一斑。則全豹之美。可推而知也。蓋輓近文化大進。新書百出。故三十年前普通之書。亦往々有不爲人所知者。況於珍籍奇書乎。學者由此而進。則去迂路就

捷徑。溫故而知新。可復無大過矣。是爲序。

明治三十一年十月

碩果 南條文雄 撰

目錄の書の必用なる事は、古人もしばしば論ひ、また其かたの書もいと多くして、屋上架屋といふべし、但し學びの道はさまざまに分れて書籍の數はた濱の眞砂の數しれざれば、其書の名をだに、筑紫の海沖にもゆてふ不知火の知らずして過ぐるものいくばくならむ、こゝに佐村ぬし増荒男の心ふりおこして、勤のいとま世にありとある國書どもをあまねく涉獵し、其書々々のあらましを去るし、世に公にせんとす、斯道のためいとよろこばしきことなりかし、そもそも我御國または支那國のもるもの書目は、いづれも類をもちて部をわかつたるを、本書はこれと異なりて、書名の頭字の音によりて五十音の順序



に分てり、こはうち曇りたる日に、海山のけしきを見るが如くにて、心ゆかぬこゝちぞすなる、さるはおのが舊弊とかいふらむこゝろのならはしなるべくや、されど目録の書の用は、同類のものを一つとところに集めて、史類國文語學美術など、分ちてこそ、覽者に便益をあたふるものなれ、かの錯雜なる千よろづの書名を並べいだし、僅に著書の年月作者の畧傳をしるせるのみにては、其益少かるべし、但しかゝる大業は、はじめより完全ならんことは望みがたきわざにしあれば、ともかくも速に成功あらむこそよからめ、あはれ此書落成の後、これによりて更に部類を分ち其書々々の評論なども加へて、改めつくりたらしましかば、いとゞ世に有益ともなりなまし、さてこそ佐村ぬしの功大なりといふべけれ、こは此書のはしがきをと乞はるゝまゝに、おのがおもふよしをいさゝかまゐりして、やがて序文にかへむとす、

明治三十二年九月

櫛齋 木村 正 辭 撰

解題せる書籍目録、余の藏せるものも、十二三種に下らず、されど、そのをさめたる書籍、いづれも、少數にして、十分なる用をなさざるは、讀書社會の缺典なり。學弟佐村八郎氏、こゝに見るところあり、多年、その事にかゝりて、遂に、この書を完結せり。その功實に、大なりといふべきなり。氏の、このことをおもひたつや、世の人、皆、その成功をあやぶめりあやぶみたる理由はいかに。國書の數、維新前までのもののみにて、二萬部にあまらむ。そを、一々解題せむとするには、おほくの時間と、おほくの學者と、おほくの資金とを要せざるべからず、さては、ある團體の事業としても、容易のことにあらざるを、個人として、それに、従事せむとするがごときは、到底、成功の望なきものなりといふにあり。余は、ひとり、その成功をあやぶまず、あやぶまざる理由はいかによく、氏の人となりを知れ、ばなり。氏は、きはめて、謹直、事をなすに、苟もせず、かつ、事に勉強にして、又、熱心なり。國書解題は、おほくの時間を要す、されど、こ



のこゝろをもてるうへは、中途にして、挫折するがごときことなきは、明かならむ。余の、この點につき、あやぶまざりしは、非か。氏、おほくの師をもてり。皆、當時の宿學鴻儒なり。余も、また、國文學につきては、氏のために、教授の勞をとれり。氏の、余に對して、その情誼のあつきより考ふれば、他の師に對しても、また、余に對するがごとくならむ。國書解題は、おほくの學者を要す、されど、このこゝろをもてるうへは、誰も、皆、それを補助するならむ。余の、この點につき、あやぶまざりしは、非か。時間を要すること、學者を要すること、は、氏、一人の力、よく、そをなすことを得るは、余の信ずるところなり。たゞ、資金にいたりては、いかゞあらむとは、余の、當時、氏にむかひて質したるところなりき。氏は、その時、このためには、家産を傾けむこゝろなりといへり。氏に、かゝるこゝろあるうへは、これまた、憂ふるに足らざらむ。余の、この點につきても、あやぶまざりしは、非か。あはれ、氏は、余の豫期せしごとく、勉強と熱心とをも

ちて、それに従事し、おほくの師の補助の下に、遂に、この名譽ある大著述を完結せり。余のよろこびいかにぞや。余は、氏と師弟の關係あり。故に、氏の一身のことは、さらなり、氏の家のことも、大かたは、きゝ、知れり。氏は、周防國都濃郡久米村の人なり。氏の家は、村中の舊家にして、父君も、母君も、共に、郷黨の間に尊敬せられたりといふ。氏は、その四男にして、いとけなき時より、學を好みしかば、父君も、母君も、専ら、そのかたに心をもちぬて、訓育せられたりとか。父君は、身まかれり。母君、氏の志をなさしめむとて、明治二十四年、氏を東京に出だせり。氏の、余がもてきたりしは、實に、この時にて、言語動作、一見、尋常の書生にあらざるを知れり。その後、余はたびたび、氏にあへりあふ。毎に、氏のあつきこゝろに感じたり。ことに、慈恩をおもふこと甚しく、談、たまたま、そのことにおよべば、忽ち、涙を落せり。思へば、氏が、哲學館にいりても、高等師範學校にいりても、常に、精勵のきこえありしは、はやく、學業を、へて、慈恩



に報いむとのこゝろなりしならむ。かの東京府城北尋常中學校の教諭になるや、氏は、余をとひて、中等以上の教育者たることは、父母が生における最終の囑望たり。その囑望をみたしたる今日、父は、さらなり、母もはや、今は、この世になし。生が恨、實に、いふべからざるものありといへり。僅に、教諭になりし時すら、しか、父母の君をしぬびたりしに、この大著述の完結せる今日、そを見する能はざる氏の恨は、また、いかばかりならむ。さはいへ、かゝる大著述をなしたるうへは、氏の名譽は、さらなり、これによりて、父母の君の名もあらはれむ。氏、心をなくさめて、可ならむか。氏は、更に、續編を著はして、いよいよ、讀書社會の缺典を補はむといへり。余は、また、その成功をあやぶまず。世の人も、今は、皆、その成功をあやぶまずらむ。氏、つとめよや。はげめよや。

明治三十二年十二月

落合直文

日月星辰、天之象也、山川河嶽、地之理也、經史子集、人之文也、而以經緯天地、以網羅萬象者、實爲人文之功也、然則經史子集之文、類而別之、題而解之者、事豈可少也乎、或曰、經史子集於彼則備焉、我邦獨無經也、余曰、吁、何其然、彼所謂經也、與吾史同矣、夫六藝之文、詩書春秋、皆史也、我先皇之典、皆有之矣、唯其易也者、畫三爻以象萬物、獨無之也耳、然我自有我國體、以立人極也、夫天開地闢、神聖生於其中、立國體以爲道本、仰觀俯察、經綸靡遺焉、固不用易也、然則彼六藝之用、既具於吾史矣、且彼經者多出於魯人孔子之刪定、視之於我神聖之所立、偉訓赫々、帝子皇孫、萬世遵守者、大有間焉、抑孔子之所祖述、憲章曰堯舜、曰文武、後皆亡滅、無有遺業、則又比之於我寶祚、與天壤無窮者、則果如何也乎、是彼土雖有經乎、皆空論也耳、至於我邦、則不然也、且我祖宗之訓、固非彼典、漢訓詰所能及、而其實正行於今日、則雖無經文、何慊焉也乎、周防人佐村八郎、生於寒鄉、懷抱宏遠、少好讀書、內外之書、博綜靡遺也、頃者撰國書解題、以網羅群籍、既行之於世、又



將作續編以補之、以與彼四庫全書總目提要相對也、其所解書凡一萬五千餘部、續集又在此外、類別提要、實爲古今希覲大作、自非執志之堅、設心之精、則孰能致之、彼土作提要、成於帝皇之手、而費數年之久、今也八郎以寒鄉之士、獨力編纂、數年爲此巨觀、余深服之也、及其調序、乃書所見以弁之、其於人文以經緯天地者、分類解題、八郎之功亦豈可沒也耶、

明治三十二年十一月

前大學教授從六位

內 藤 聡 叟

國書之多其麗不億有其名相似而其事不相似者有其名異而其事不相似者有其名不必示其事者其他難詳著者之名者異本並存者屬僞作者錯雜混亂何人能識別之此解題者以不可無也曩佐村八郎君來訪余曰欲著國書解題請假一臂之勞余固嘉其舉而竊疑其成否其後無幾發行其第一册既而及第二第三册余始知其刻苦勵精從是君罷官而退拋一

切世務專從事于此陸續發行遂至第十七册其間僅經二星霜耳頃君又訪余曰國書解題將以來月完了請爲作序余於是乎益服其堅忍不拔之志蓋國書解題之著實學者之大業也然而君拮据黽勉遂成此業豈可不爲國家賀之乎哉雖然今試翻閱此書其所逸者不爲少是甚可惜也因望君他日作續篇以補之所謂得隴望蜀是也及印刷成書所偶感以爲序

明治三十二年十一月

井上哲次郎撰

松永貞徳の戴恩記にいへらく「一切の書を見るに、手をもあらず、頭にもいたゞかず、その儘ひらきみて、めづらしきことあればおのが智慧とし、すこしの誤あれば作者をそしる。一書を著すほどの人の、さのみおろかなることのあらんや。後生のわれらを導かんがために、そこばくの氣をつくせる古賢の志、あがめても尙あまりあり、丸が門人にこのことわりを識得あらば、はかなき繪草子をよみても、その撰者に



一返の回向あるべきものなり」といへり。古人の學に篤きことは、これにてもしられたり。今の世の批評家といふもの、我學のあさく拙きをおもはで、只管に人の非をあなぐり求む。古人は爪弾しても憎むなるべし。今人の眼を以て古人の書を見んに、誤れることもとよりおほからん。これ時世の異ればなり。雲をしのぐ高山も塵ひぢよりはじまり、廣遠なる學理も微細なる研究のあつまれる結果なり。古人をそしる今人の學問智識、それやがて古人がいたつきの賜ならずや。これをおもへば一篇の文、一卷の書、みなわが師にひとしといふべし。むかしに泥むはよろしからねども、古書をそしり古人をなみせんは、學問の道にあらず。今の人今の心をもてむかしの世を笑はゞ、後の人後の心をもて、又今の世をわらはん。後生を益せんとしてつくれる古人の書は、げに手をあらひ頭に戴きてもよむべきものなり。かなしきかな。古人の書きのこし、ふみやうやう失せて、文庫などに收められたるも、埋木

となりはつるが多かり。こゝに佐村八郎君ありとある國書を解題せんとおもひ起して、身をもわすれ、官にも離れて、このみとせがほど、朝に夕にいそしみつとめられし心づかひ、おもへば涙もわくばかりなり。この書の學問の上に功績おほきは、いふもさらなり、かくれたる古書をあまねく人にしらせ、古人の勞苦を世にいだし、君が志、輕薄なる世の人のまなびうべきことかは。この書に解題せる書一萬五千餘部、著者の傳記をさへそへられたるは、君が志の程もいよいよしるし。この書をみん人、古人の勞苦をおもふにつけても、たれかは君がいたつきをしのびざらむ。かばかりの大事業を、一人の力にてなしをへたりしいさを、貞徳もし世にあらましかば、いかばかりかあがめたふとままし。百年の後の世の人もとこしへにほめたゞへん。あはれあはれ今の世の批評家には、いふがまにまにいはせてんものぞ。

明治三十二年十二月十日、 芳賀矢一しるす。



目錄の學は昔も必要の事とはせられたれども、今の世と爲りては、其の必要の度益加はれり。文化の進むに隨ひて、書籍の供給愈多くなりたれば、古今の書を涉獵して、智識を長せんと欲する者は、いかなる書よりか著手すべき。群書の種類と、良否とを、豫め知れるに非ずんば、無益の書を播きて、光陰を徒消すること多からん。

殊に専門の學に従事する者、其の學科に屬する史籍論著の類を博く深く研究せんとするには、其の學に關係少き者を省きて、専門の良書のみを精擇せざるべからず。かゝる場合には、詳備精確にして、便利なる目錄の書あらば、其の學者を裨益すること、専門の良師の指導を受くるにも勝れることあるべし。

然るに本邦には、未だ目錄の書の全備せる者有るを聞かず。群書一覽の一書あれども、其の書の成れるは、享和年中に在りて、天下の逸書未だ世に出でざりし頃なれば、博搜旁羅して収録せる所謂群書の目も

今に至りては、掛漏の憾無きこと能はず。故に今人を裨益すべき善良の目錄を得んと欲せば、今世の流布收藏に係る有らゆる群書に就きて、更に一書を撰述せざるべからず。佐村八郎君此の事の急務なるを思ひ立ち、公務の暇を以て、國書解題二十五冊を撰し、三年にして功を竣へ、學界に於て看過すべからざる此の闕陥を補へり。君幼き時より國書を嗜み、高等師範學校の國語漢文專修科に入りて、最も勉學を以て聞えたりしが、卒業の後、未だ幾年も經ざるに、忽ち此の大著述を完了せり。君の勤勉衆に超ゆること、此に至りて益著しく、其の學者を裨益するの功、尋常の論著翻譯の比擬すべき所にあらず。

抑、予更に君に望むことあり。此の書の學者を裨益するは、書の名を已に知りて、其の解題を知らんと欲する時に在り。若専門の學科に於て、之に屬する群書の名を知らんと欲せば、此の書に由りて搜索すること甚難からん。清の乾隆勅撰の四庫全書總目の如きは、部類屬を甄別



することを重要なる目的の一としたる書にして、此の書の伊呂波別なるとは、目的固より異なれば、彼の書の如き體裁は敢て此の書に望むべきに非ず。されども學科の種類に従ひて排列せる索引一卷を作りて附録とし、専門の學に従事する者をして、索引に依りて書名を知り、然る後本書に就きて解題を讀むを得しめば、即ち一部の書にして、二様の便益を與ふることを得べし。君の勤勉にして撓まず屈せざることは、已に此の書の竣功に於て著しければ、索引を作るの勞、君に於て何か有らん。是れ予が此の書に序するに當りて、敢て此の希望を附記する所以なり。

明治三十三年三月十日

嘉納治五郎識す

### 國書解題凡例

一 國文學は國民が思想感情の射映にして、またあらゆる學術の根底なり。故に如何なる學者といへども、その研究を等閑に附すべからず。唯その書の浩瀚なる、悉くこれを涉獵せんは、人生短日月の事業にあらず。加ふるに國文學の書はその表題を一見しては性質を推測し難きもの多く、高尚なる表題の下に、淺薄にして價值なきものあり。平凡なる題號を有して、しかも頗る有益なるものあり。外題によりて玉石を判たんこと最も困難なりとす。

加之、國書を一讀して、その内容を把握せんこともまた甚だ困難なり。古の學者には名利の念に薄く、書を著すも後世に遺すに意なきものあり。随つて表題の如何に注意せず、分類秩序等にも用意せざりしもの少からず。後世より學問上貴重材料として採らるゝが如きは、先哲にとりては或は意外のものならん。これを要するに、浩瀚なる國書に就きて、一々その内容の如何を熟知せんことは研學者にとりての一大困難なり。今や文運日進して爲すべき事業益多し。青年の學者をして、時間と勞力とを節減して學修の道を容易ならしめんことも最も必要なり。先進の學者もまた徒に涉獵該博を誇りて、世と遠ざかるべき時代



にあらず、社會の發達と共に學問もまた専門に分岐して、局部に就きての深遂なる研究をなすべき必要いよいよ生ぜり。解題書の止む能はざる所以は一にして足らざるなり。

古來この種の書なきにあらず。然れどもその中に收載せる圖書の數多くは數十百に止りて、『群書一覽』の如きも、一千七百部を超えず。これ今日の學界をして満足せしむること能はざる所以なり。且つまた從來の解題書が、作者の傳記に注意せざりしが如きは、最も遺憾とすべき所とす。

今の時と古の世とは國文學研究の上にも大なる異同あり、今日の標準を以て古人を規矩せんことは酷に過ぐべし。著者は故人の功勞を多とし、その啓導に感激するものなり。然れども明治時代の學者としては、先覺の創業のみに満足すること能はず、茲に身の淺學菲才を忘れて、あはれその事業を完成せんと思ひ立てるなり。幸に聖代の闕典を補ひ、學者幾分の參考に資することを得ば、著者が喜はこれに過ぎず。

一 本朝の典籍は中世以後しばしば兵燹の厄ありて、散亂亡佚せしもの多し。然るに今や奎運の盛なる、出版業の發達圖書館の擴張等は日々その歩武を進め、秘書珍本の曾て見ることも能はざりしものも、また漸く世に出でたり。本書解題せる所は、上古以來慶應三年までの編著に係るものにして、無慮二萬五千部十餘萬卷の多きに達せり。眞に聖代の餘澤といふべし。

一 圖書の取捨撰擇は濫にすべしにあらず。著者の菲才争でかこれに當らんや。現存の圖書は醇疵を問はず、良否を辨せず、汎涉するに従つて網羅せり。但しその陋本偽書たる疑ありて、先輩の説あるものは掲げて參考に供へたり。撰擇と評論とに至りては、更に他日の研究を期せん。

一 現存普通の圖書といへども、聞見の及ばざるあり、珍架に置かれ、祕府に收められたるものに至りては、また著者が稽查の及ぶところにあらず、こゝを以て遺漏せるものなほ多からん。そもまた更に他日の補修によりてその責をつくさんとする。

一 書名の編次は五十音順による。一書にして二三の名あるものは、各名の下に掲げ、解題は最も普通なる名稱の下に施したり。卷冊數は主として卷數を掲げ、卷數の明らかならざる場合にのみ冊數を挙げたり。冊數は傳寫の都度適宜に變更せるもの多くして、原著者の意にあらざればなり。寫本に就きては、著者の見



たるもの適寫本にして、既に早く刊行せられたるもあり、また近く活刷に附せられたるもありて、管見に入らざるもまた多かるべし。

一 解題中、◎符を以て編著者を分てり。また必要ありて原本若くは他書の文句を引用する時はその首尾に「」符を用ひ、書名を引用するときは「」符を用ひ、註解を要する時は「」符を用ひ、澁難なる文字には振假名を施せり。

一 本書に三種の索引あり。その一は著者索引にして、姓名の五十音順によりて傳記の所在を示し、その二は分類索引にして、全書目を十一綱五十五目に分ち、種類によりて搜索するの便に供し、その三は字畫索引にして、難讀異訓の書名を舉げ、字畫によりて搜索し易からしむ。

一 著者の閱覽し得たる圖書は、帝國圖書館、内閣文庫、東京帝國大學附屬圖書館、東京高等師範學校附屬圖書館、京都佛教大學附屬圖書館等の所藏にして、何れも特待優遇を以て編纂上の便益を與へられたること多し。

一 本書は明治二十九年の秋編纂に着手し、同三十三年春にいたり、一萬五千餘部を解題し得て出版せり。これ即ち本書の第一版なり。爾來引續き増訂に従事し、更に一萬餘部の解題を増補し、今や再版の功を畢ふるに至れり。その間文學博

士芳賀先生と、文學博士上田先生とは終始特別の指導を給ひぬ。著者が官職を離れて、専心この事業に従事し得たるものは、殊に上田先生の保護によれり。前後通じて八年の事業、偏に兩先生の賜なり。成業に際してその恩義に感ずるところとますます深し。

一 本書の再版に就きては、再び左記諸先生の校閲を煩せり。初版以來の恩遇は謝辭の盡すところにあらず。

圖書屬兼華族女學校教授	井上 賴 圀 先生
東京帝國大學教授文學博士	上 田 萬 年 先生
女子高等師範學校教授	關 根 正 直 先生
東京帝國大學教授文學博士	芳 賀 矢 一 先生
東京帝國大學教授文學博士	萩 野 由 之 先生
東京帝國大學附屬圖書館長	和 田 萬 吉 先生

一 井上圓了先生、今泉定介先生、嘉納治五郎先生、谷本富先生、三宅米吉先生等は、また再版に就きて尠からざる保助を與へられたり。この外直接間接に有益なる注意を賜ひし先輩知人、當初以來數十百人の多きに上れり。



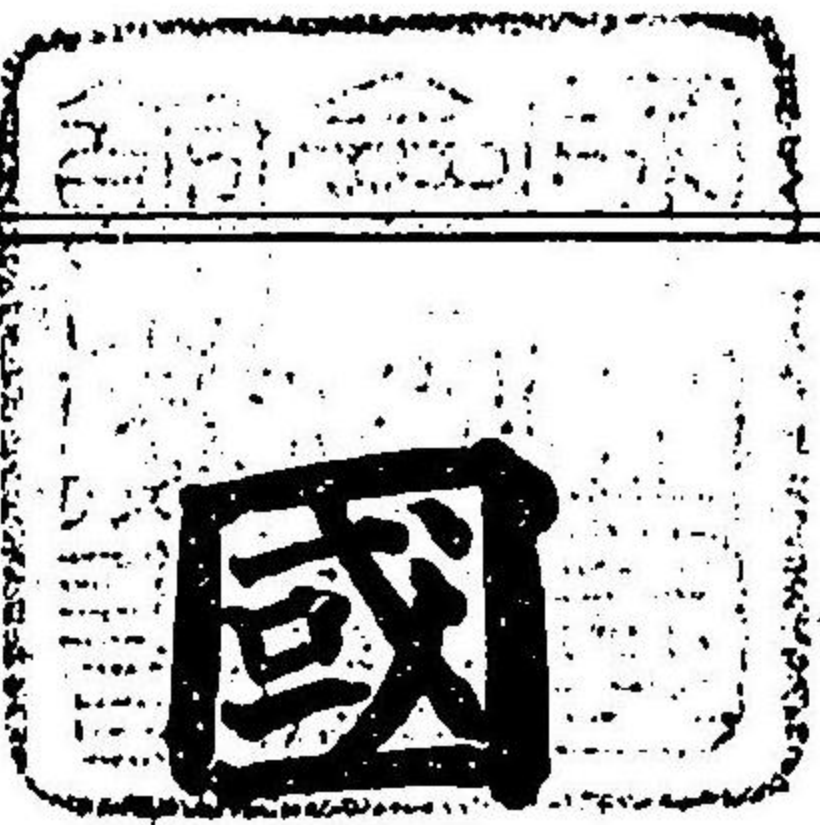
一本書第一版の校閲者贊助者は、井上圓了、井上哲次郎、井上頼國、今泉定介、上田萬年、遠藤利貞、岡倉覺三、尾崎徳太郎、落合直文、河田熊、木村正辭、栗田寛、小杉楳邨、重野安釋、島田蕃根、白井光太郎、關根正直、高津鋏三郎、田中稻城、谷本富、坪井正五郎、鳥居枕、内藤耻叟、那珂通世、中村清二、西村茂樹、芳賀矢一、萩野由之、畠山健、服部宇之吉、平田盛胤、三上參次、三宅秀、三宅米吉、宮崎道三郎、物集高見、本居豐穎、渡邊又次郎、和田萬吉先生等なり。多くは著者が學問上の師にして、この編纂に就きては親しく示教を辱うせり。再版に方りて更に拜謝の意を表す。尾崎、落合、栗田、内藤、西村の五先生が、再版に先ちて世を捐て給へるは、學界の不幸はいふまでもなし。著者の痛恨いばかりぞや。謹で一本を墓前に供す。

一發行上に少からざる助力を與へられたるは、石川照勤、瀧口吉良、林平次郎、渡邊兵吉の諸氏にして、就中渡邊氏は第一版の始より、再版の終まで、毎に親切なる補助を與へられ、本書の成業に負ふところ實に著大なり。茲に謝意を表す。

明治二十七年三月十日

帝國艦隊浦鹽斯德第一回砲撃の公報に接したる日

著者 佐村八郎識す



# 國書解題

## 佐村八郎著

# あ

あいけいん

哀敬篇 松三卷 佐藤 坦  
 斐斐禮につき考證詳説したるものにて、巻端に總論五則を擧げたり。  
 ◎佐藤坦の傳は「愛日樓文集」の下にあり。

あこたまりまひり  
 愛古堂漫稿 一卷 大槻 清崇  
 著者の詩文集にして、詩百首、文五首、番編追録五首に、更に福堂詩議を附載す。成島柳北の跋あり。

あさか

あさか

明治七年甲戌(二五三四)活刷に附す。  
 ◎大槻清崇の傳は「鴻漸齋一百詩鈔」の下にあり。  
 愛日齋隨筆 松五册 古屋 鼎  
 論語の註釋香なり。篇を追ひて章ごとに諸家の説を擧げ、且、自家の説を加へて註釋せり。愛日齋は著者の一號。卷首に題して「愛日齋隨筆」の二十六といへり。もと、著者の隨筆中、經の說に關するもの三十卷ありきといへば、本書は、思ふに其の中の一部なるべし。寛政六年甲寅(二四五四)春、堀大簡等の序あり。  
 ◎古厩鼎は熊本の儒なり。享保八年癸卯(二二三八)に生る。字を公鍊といひ、愛日齋と號す。幼より學を好み、長するに従ひて業成る。寶曆年中、靈應公大に學舎を興すに方り、愛日齋を擧げて國學訓導とし、又侍講とし、藤百石を給す。其の學博覽精密、抄出する所最も多し。即ち周易說、尙書說、毛詩說、春秋說、禮記說、孝經說、論語說、毛詩品物考、

あしひら

字考、子説、雜説等あり。天明十年庚戌(二四五〇)正月二十二日、六十八にて歿す。  
 愛日樓文集 四卷 佐藤 坦  
 著者自家の詩文集。愛日樓は著者の一號なり。成書の由来に就きては、松平冠山の緒言に、いへることあり、以て其の一般を窺ふべし。曰く、「一齋先生文詩稿本、有累數十卷、余嘗借讀、其文、成三册、小泉侯亦鈔一册、今合爲一集、末又以日光山行記、附焉」と云々。而して、本書第一册には、序十六、記十二。第二册には、論二、辨二、墓銘十四、墓表一、碑陰記一、行狀記一。第三册には、説六、題跋十一、雜著八、遊記二、賦四、贊十、銘五。第四册には、古今體詩、二百三十四、詩文通じて三百二十九首を收め、附載に日光山行記を掲げたり。文政十二年己丑(二四八九)三月刻成す。  
 ◎佐藤坦は朱子派の鴻儒なり。捨職と稱し、一齋また愛日樓と號す。安永元年壬辰(二四三三)江戸に

あしひら

(1)



一本書第一版の校閲者賛助者は、井上圓了、井上哲次郎、井上頼圀、今泉定介、上田萬年、遠藤利貞、岡倉覺三、尾崎徳太郎、落合直文、河田巖、木村正辭、栗田寛、小杉樞、重野安繹、島田蕃根、白井光太郎、關根正直、高津鉄三郎、田中稻城、谷本富坪、井正五郎、鳥居忱、内藤耻叟、那珂通世、中村清二、西村茂樹、芳賀矢一、萩野由之、島山健、服部宇之吉、平田盛胤、三上參次、三宅秀、三宅米吉、宮崎道三郎、物集高見、本居豊穎、渡邊又次郎、和田萬吉先生等なり。多くは著者が學問上の師にして、この編纂に就きては親しく示教を辱うせり。再版に方りて更に拜謝の意を表す。尾崎、落合、栗田、内藤、西村の五先生が、再版に先ちて世を捐て給へるは、學界の不幸はいふまでもなし。著者の痛恨いかばかりぞや。謹て一本を墓前に供す。

一發行上に少からざる助力を與へられたるは、石川照勤、瀧口吉良、林平次郎、渡邊兵吉の諸氏にして、就中渡邊氏は第一版の始より、再版の終まで、毎に親切なる補助を與へられ、本書の成業に貢ふところ實に著大なり。茲に謝意を表す。

明治二十七年三月十日

帝國艦隊浦鹽斯德第一回砲撃の公報に接したる日

著者 佐村 八郎 識す

# 國書解題

## 佐村八郎著

### あ

あひくへん

哀敬篇 三卷 佐藤 坦

喪祭禮につき考證詳説したるものにて、巻端に總論五則を擧げたり。

◎佐藤坦の傳は『愛日樓文詩』の下にあり。

あひくへん

愛古堂漫稿 一卷 大槻 清崇

著者の詩文集にして、詩百首、文五首、舊稿追録五首に、更に福堂詩説を附載す。成島柳北の跋あり。

あひくへん

愛日齋隨筆 五册 古屋 鼎

論語の註釋書なり。篇を追ひて章ごとに諸家の説を擧げ、且、自家の説をも加へて註釋せり。愛日齋は著者の一號、巻首に題して、愛日齋隨筆卷の二十六と、いへり。もと、著者の隨筆中、經の説に關するもの三十卷ありきといへば、本書は、思ふに其の中の一部なるべし。寛政六年甲寅(二四五四)春、堀大簡等の序あり。

◎古原鼎は熊本の儒なり。享保八年癸卯(二三八三)に生る。字を公鍊といひ、愛日齋と號す。幼より學を好み、長するに従ひて業成る。寶曆年中、靈感公大に學舎を興すに方り、愛日齋を擧げて國學訓導とし、又侍講とし、祿百石を給す。其の學博覽精密、抄出する所最も多し。即ち、周易說、尙書說、毛詩說、春秋說、禮記說、孝經說、論語說、毛詩品物考、

あひくへん

愛日樓文詩 四卷 佐藤 坦

著者自家の詩文集。愛日樓は著者の一號なり。成書の由來に就きては、松平冠山の緒言に、いへることあり、以て其の一般を窺ふべし。曰く、一齋先生文詩稿本、有、累數十卷、余皆借讀、鈔其文、成三册、小泉侯亦鈔詩一册、今合爲二集、未又以日光山行記附焉、云々と。而して、本書第一册には、序十六、記十二。第二册には、論二、辨二、墓銘十四、墓表一、碑陰記一、行狀記一。第三册には、説六、題跋十一、雜著八、遊記二、賦四、贊十、銘五。第四册には、古今體詩、二百三十四、詩文通して三百二十九首を收め、附載に日光山行記を掲げたり。文政十二年己丑(二四八九)三月刻成す。

◎佐藤坦は朱子派の鴻儒なり。捨職と稱し、一齋また愛日樓と號す。安永元年壬辰(二四三二)江戸に

(1)

あひくへん

あひくへん



あゐそめ

生る。幼より讀書を嗜み、又臨池の技を好み、長ずるに從ひて騎射刀鎗の術一として學ばざることなし。寛政二年始めて幕府に仕へたるも、後仕を辭して、専ら學術を稽査し、業成るに及びて諸侯の門に出入し、經史を講じて頗る尊敬を受けたり。天保十二年、幕府庶政を一新し、賢良を求むるに際し、一齋を擧げて備員となし、祿二百石を授け、別に俸米十五口を給し、昌平官舎に住せしむ。これより士民の其の門に入るもの無慮三千人の多きに及びたりとぞ。著書數十百卷あり。愛日樓文時、辨道雅蕪、孝經解意補義、孫子副註、言志錄、周易闡外書、啓蒙闡外書、圓考、古木大學旁釋補、大學摘說、中庸闡外書、論語闡外書、孟子闡外書、近思錄闡外書、傳習錄闡外書、白鹿洞揭示問、揭示碑、九卦講義、名草廣定論、禿髮藥籠、愛日樓稿本、濟版略記、初學課業次第、同綴錄、俗簡英餘、課業背誦等。其の他小著寄寓枚舉に遑あらず。就中本書愛日樓文時は天保十三年九月孫子副註、吳子副註、言志錄、言志後錄、言志晚錄、言志續錄と併せて幕府に獻じたるものなりといふ。安政六年己未(二五一九)八月二十四日八十八歳にて歿す。

あゐそめがは

一種の戀愛小説。最初火内に侍る梅壺の侍従として、いとなまめける女房に、筑紫の住人宰府安樂寺の神主、中務よりすみといふが、在京の折懸想して、漸く深き中となり、後、其の侍従一子を伴ひて、夫を尋ね筑紫に下りたるに、所在不明、容易く尋ね得られざるより、遂にあるそめ川といふに身を投げ

あゐるか

◎井原西鶴の傳は「小夜風物語」の下にあり。  
櫻陰腐談 二卷 僧 海國  
問答的に記述したる漢文の隨筆なり。蓋し其の題は「櫻陰比事」に倣ひたるなるべし。東山天皇の寶永七年庚寅(二三七〇)の自序あり。卷毎に目錄をかゝけて搜索に便せり。

あゐるいけいんき

奥羽永慶軍記 廿九卷 戸部 正直  
奥羽兩國の軍事に關することを輯録せるものなり。其の自序中に「近世兵亂記録、獨關奥羽兩國之事、故予採摘兩國之諸將」云々と。蓋し其の當時の事實に疑あるものは、先置の書記に考へ、又古老の直談に糺し、十有餘年を経て成れるものなり。其の載する區域、天文、永祿年間(一六五九)に始まり、慶長、元和年間(一六六〇)に終れるより、奥羽永慶軍記と名づけたる由も記せり。

あゐるかいんき

奥羽海運記 本一巻 新井 君美  
奥羽二州より江都に達する海運の事を論述したるものにて、土木家河村瑞軒が幕府の命を受けて講究したるものを、新井白石が後に筆述したるなり。從來奥羽より東都に向へる船運は、航海一年餘の久しきに亘り、且、船積覆沈の危難多かりければ、幕府大に之れを患ひ、寛文十年庚戌(二三三〇)の冬、瑞軒に命じて其の方を掌らしむ。依りて航運の

たる次第、及び蘇生の事、よりすみが一籍を其の子に譲りたる事等を綴りたる古物語なり。

あゐのうせう

瑤蕪鈔 七卷 僧 行譽  
和漢の故事、國字、漢字の義理、言語の起源等、凡そ五百三十六項を説明理解したるものなり。種々雜事を取り交せて紹介せるより、塵の意をとり、瑤蕪鈔とは名けたるなるべし。本書を増補したるものに「塵添瑤蕪鈔」あり。文安三年丙寅(二〇六)五月に作れること、其の奥書に見えたり。著者行譽の事は「觀勝寺金剛佛子行譽」とあり。

あゐあゐひこ

嚶々筆語 二卷  
諸家の隨筆を集めたるものなり。嚶嚶は鳥の友を求むる聲なりとて名けたる名なるべし。野之口隆正、岡部東平、西田直養、僧義門、長澤伴雄、加納謙平、城戸千橋、木居内遠、村田春郷、小泉保敬、大橋長廣、伴信友等のもの、凡そ三十五條を收む。天保十三年壬寅(二五〇二)正二位具集の序、正三位有功の序等あり、同年出版す。

あゐいんひ

櫻陰比事 五卷 井原 西鶴  
近代の有職的假名物語にして、四十五條あり。宋の桂萬榮の「棠陰比事」に擬へ作るより、類似の題號を與へたりといふ。元祿二年己巳(二三四九)正月の刊行に係る。毎巻目錄を掲げ、且、其の大意を示せり。

制度航運の針路、救難の方法等を講ぜり。是より船僅に三箇月餘にして江戸に達し、覆沈の患、亦、極めて減ぜりといふ。本書は寛文十二年壬子(二三三二)に於ける瑞軒の方案意見等を記したるものなり。「甘雨亭叢書」第二十三にも收めたり。  
◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

あゐらきん

奥羽舊事 一巻 齋藤 馨  
奥羽の名家、峯名、島山、大崎、葛西、二階堂諸氏の事績を論述したるものなり。漢文にて記す。明治二十年丁亥(二五四七)出版せらる。

あゐらきん

奥羽觀述聞老志 廿八卷

古書傳説を引證して、奥州全體の地理沿革等を詳記したるもの。凡例中に、「凡此書例始舉一國郡縣、次敘官使、次記土貢、是乃欲令視者覽見奥羽之曠濶歷代之人物、土地之便利焉、次之以名蹟而詳地理之考證、次之以故事而考古今之治亂、次之以遺事而知東國之舊說、終之以東遊而證其事也」と云へり。本書内容の梗概を知るべし。享保四年己亥(二三七九)に成稿したるものにて、同年の自序あり。或は「東奥州觀述聞老志」といひ、或は單に「觀述聞老志」と題せるもあり。又、近年宮城縣にて活版に附したるもあり。

◎佐久間義和は仙臺藩の人、源姓にして、千歳と字し、彦四郎と稱し、洞島、谷軒、太白山入等の號あり

あゐらきん

もと新田親重の子なりしが、幼より畫に巧なるを以て、仙臺侯の畫所佐久間有徳の養子となり、遂に其の祿を襲ふ。後書を澤井穿石に、經を游佐木齋に學び、遂に儒官となり、程朱を主張して東奥に顯る。また本邦の歴史地理に精し。著書は本書の外に、五十四郡考、鹽竈松島圖記、名所郡志、復讐記事、容軒書畫譜、太白山人文集等あり。元文元年丙辰(二二九六)二月十一日、八十四歳にて歿す。

あゐらきん

奥羽軍記 二卷  
奥羽地に於ける後三年合戦の記事なり。即ち源義家が、清原武衡、家衡の謀反を征する時、金澤國府の合戦に、新羅義光が都を忍び出でて力を合すること、權五郎景政が、島海に左眼を射られながら敵を射返せること、其の他瀧口季賢、三浦爲次、伴兼、秩父武綱等の名士あつて、大敵を打ち亡ぼせる有様などを詳しく記したり。

あゐらきん

源義光の傳説を記述したるもの。漢文にて記せり。寛文元年辛丑(二三二二)林向陽の序、同二年端亭子丁的の跋あり。當時舊本を得て、版刻を企つるに際し、序跋したるなり。別本寫本には「武衡記」を附したり。

あゐらきん

奥羽巡見記 本一巻 榊原左兵衛  
寶曆十一年辛巳(二四二二)御代替り巡見使の命を

受けて、奥羽二州、松前等を巡見の時、其の臣宮川直之をして、三月二十三日江戸出發より、八月二十三日江戸に歸着まで、經歷したる所の郡村、領主、神佛、名所、山川、古蹟、原野等に關する事を、私の日記として、筆録せしめたるものなり。天明元年辛丑(二四四一)中原常政の跋あり。本書は別に「三國日記」または「奥羽并松前日記」といふ。  
◎榊原左兵衛は幕府の御使番たり。

あゐらきん

奥羽并松前日記 本一巻 榊原左兵衛  
一名、奥羽巡見記」の下に解題せり。

あゐらきん

奥羽道記 本一巻 丸山 可澄  
元祿四年辛未(二三二二)岩城郡岩木山の温泉に入浴したる時の紀行なり。經るところの山川、神佛、名所、古蹟、土産、風俗を略記し、里程を記し、最後には總行程四百三十三町、内十三里は舟路と統計せり。

あゐらきん

奥羽美智野志於里 本一冊 古川 辰  
奥羽紀行なり。道路、里程、名所、古蹟等を紹介して、旅客に便せり。寛政七年乙卯(二四五五)の自序あり。「僕」がたびたび御方の御いづくしみ淺からず、世にありがたきことに思ひ侍りし、故郷に歸

あゐらきん



あうらめ

るに及び、おなごり一方ならず、老し身のいと悲しく、よしや御かたみにもならんと、みちのおくいつ羽なる名所登蹟、こゝかしことなく、圖しまいらするも、かきりなきの盛しがたく、ものゝ一つ二つを畫き、奥羽道のしおりと題し、拙筆の恥しみもかへり見す、平井尊君の玉机の下に呈し侍るならしと記せり。

◎古川辰の傳は「東遊雜記」の下に掲ぐ。  
あうらめいしやうし

奥羽名勝志 五卷 古川 辰

卷の一に白川關より最上川に至るまで二十一箇所。卷の二に羽黒山より松前渡海に至る十九箇所。卷の三に松前より胡笳を吹く圖に至り、卷の四に津輕青森より南部東海嶮道及び石巻に至る二十一箇所。卷の五に金花山より岩城平並に飯野八幡宮に至る十二箇所。一々圖をあらはして、二州の都邑、名所、山川、舊蹟等を詳記す。著者嘗て巡見使に従つて同地方を巡りし時記したる者なり。三宅徳方の跋あり。

◎古川辰の傳は「東遊雜記」の下にあり。  
あうらめいしやうし

奥羽旅行の記 一巻

享和元年辛酉(二四六一)江戸より立ちて奥羽に旅行したる時の記なり。卷首に江戸より奥羽に至る道路を圖し、名勝、社寺の所在、道法、城主の氏名、領高等を掲げ、記は和歌者流の如く徒に文を飾り四民の見るによしなきものなほ省き、相模入道が「入國記」にならひ、國家郷民に益あらん事のみな

あうぎせ

肥前國佐賀鍋島氏の領内櫻岡の景を吟詠したる詩歌を集めたるものなり。卷首に木下順庵の記を掲げ、櫻岡十境二十境等の題を掲げて、詩歌文章を集めたり。明暦太上皇の御製、聖護院法親王及び諸卿の歌、野竹洞の序、林恕の歌、二品親王道晃の跋等あり。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

◎藤原清輔は有名な歌學者なり。彼の歌學を以て著れたる顯季の孫にして顯輔の子なり。鳥羽上皇に仕へて正四位皇太后宮大進兼長門守に至る。平素心を歌學にひそめ、最も和歌を善くして當年の歌人藤原俊成、僧西行と並び稱せらる。嘗て二條天皇の教を奉じて續詞華和歌集を撰び、將に成らんとする比、帝崩じ給ひて奏覽を歴りし故、救撰には列せざりき。高倉天皇の治承元年丁酉(一一八三)卒す。其の著せるところは、本書奥儀抄の外に、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等の歌學書あり。皆、語學、文典、作歌等の研究に資すべし。

あうらわ

あうらわ

櫻花の品類を撰びて、各、着色したる圖繪なり。別に詳しく説明は附せず。年代、著者共に詳ならず。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ

あうらわ

文九年己酉(三三二九)の考なる由をいへり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ

あうらわ

奥州に於ける古文書を輯集したるものなり。其の數十數箇あり。編輯の年月、及、編者を詳にせず。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ

あうらわ

奥州に於ける古文書を輯集したるものなり。其の數十數箇あり。編輯の年月、及、編者を詳にせず。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ

あうらわ

奥州に於ける古文書を輯集したるものなり。其の數十數箇あり。編輯の年月、及、編者を詳にせず。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ

あうらわ

奥州に於ける古文書を輯集したるものなり。其の數十數箇あり。編輯の年月、及、編者を詳にせず。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

◎三木光齋は江戸忍ヶ岡の隠士なり。別に越後一圓誌、掌中奥羽全誌等の著あり。

あうらわ



あうしろ

り好みて書を讀み、歌を詠じ、又瀧本流の書を學ぶ。年十六のとき始めて和文を綴りしを、村田春海、見て其の才を稱せしと云ふ。尋で藩侯に給事せしが、幾程もなく仕を辭して家居し、卒に其の藩士只野伊賀に嫁す。居ること二十年許にして伊賀歿し、男女の兄弟亦先づ亡せしかば、綾女はいたく零落せり。之れより奮つて書を著し世に知られ、兼て父祖の名を顯さんと決心し、文化十四年「獨考」三卷を著して藩國經濟の得失を論ず。「奥州ばなし」も亦、その折の雜筆なり。著書凡て六部七卷あり。本書の外、獨考二卷、磯づたひ一卷、不問がたり一卷、七くき一卷、昔ばなし一卷是れなり。皆よむべし。文政七年甲申(二二八四)六十二歳にて歿す。

あうしろはるばるんぼんがひびき

奥州北部二本木開業記 一巻

三本木の開墾者、新渡戸十次郎父子の計畫成績等を推稱して、公衆の贊助を促せるものなり。該地の風土、氣候、往來、運輸、物産の品類等を記述せり。萬延元年庚申(二五二〇)の作に係る。著者は盛岡の藩士といへど、其の名詳ならず。

あうしんべん

櫻史新編 一巻 青山 延光

花神、名區、名華、雜記等に分ち、古詩に據りて考証したるものなり。明治十三年庚辰(二五四〇)弟延壽の序を附して活刷す。

あうしつせんざん

櫻室撰纂 一巻 櫻井 維温

あうひん

著者の詩文集。一に「櫻室集揚餘瀝」といひて、詩歌文章、凡そ數百篇を輯めたり。弘化四年丁未(二五〇七)元旦の作詩より掲出す。

◎櫻井維温は仙石藩の督學兼侍官たり。安永五年丙申歲(二四三六)備前國是里に生る。字は子良、東門と號す。出でて但馬出石の儒官櫻井家を嗣ぎ、高木紫明に廬後に學び、後、京阪に遊びて、岩川淇園、中井竹山等に親交し、更に江戸に出て頼杏坪、倉成龍清、大窪詩佛等と不朽社を結ぶ。仙石侯に仕へて能く政治の得失を論じ、大老仙石在京の意に逆らひて幽閉せらる。左京等罪せられし後前職に復し、園藩の敬重する所たりき。安政三年丙辰(二五一一)六月歿せり、年八十一。

あうせいでん

櫻精傳奇 二巻 是亦 道人

我が國第一の名花、櫻を傳奇體に敘したるものにて、櫻を一女子に擬し、其の麗麗絶世の美なる事を悉論せり。漢文に記して二冊に作る。文政十三年庚寅(二四九〇)蝶化道人の序あり。著者は亦道人は泰山府君と肩書あり。

あうはんちゆうきふ

奥藩騷動記 一冊

仙蓬家中監助の記なり。即ち綱宗隱居の後、幼息龜千代の後見役伊達兵部少輔、原田甲斐と結託して、龜千代を毒殺せんとせるを、老臣伊達安藝、其の謀を江戸に訴へ、悪事明白たりしより、甲斐、安藝を殺して自殺したる轉末を記したるものなり。末に、大久保忠教が「三河記」の脱稿を載せたり。

あうひん

櫻の品類を擧げて説明圖解したるものなり。櫻樹六十九種を列れて、各、花の色、葉の形、開落の氣節等を詳記せり。菅田純永といふもの、見聞に依つて補へるところも加れり。一名、怡顔齋櫻品と云へり。怡顔齋は著者の別號櫻品の名は櫻樹の品類を列擧せるより起る。著者の博物書には蘭品、介品、石品、梅品、苔品、菜品等の十品あり。本書は其の一なり。寶曆八年戊寅(二四一八)正月に成れり。本書を撰べる意は、其の凡例に「日本六十餘州に櫻樹すくならず。とりわけ山城、大和、河内、和泉、攝津、此五箇國に多し。今此の書には、唯、品類のみを載せて名所の櫻は後編に殘す。しかばあれど、古今一品となりたるは、名所の櫻だもことごとくくする。たとへば、鎌倉の桐が谷、津ノ國伊勢等の櫻、これら諸所にうつし、うゑ廣まりて一品となり、世人これを賞す。故に、こゝに示す。又、世に名高きも、しかと一品ならざるは、こゝに除く。津ノ國金龍寺、東地主櫻、西山西行櫻、或は鞍馬の湯櫻のたぐひなり。その外地名により古地名によりて名となりたるものあり。家櫻、墨染櫻、瀧櫻、雪井櫻、これらたぐひ擧げてかぞへがたし。も、以つてその一端を知るべし。

◎松岡玄達は京都の人にして成卓と稱し、恕庵また怡顔齋と號す。初、備前山崎國醫、伊藤仁齋等に學ぶ。たまたま詩經を讀じて草木の名を知らざるに困み、更に稻若水に從ひて本草學を修め、竟に此れに精通して名一世に顯れ、本草の事に至つては、

いろは順に作れる辭書にて、收むるところ凡そ二萬餘言あり。辭書として體をなしたる大部の書にては、此の書或は其の始めなるべし。成書の由来は自序中にあり。曰く、茲に先考荒木田盛貞、年頃もてあそびし書どもの中、いさゝかがあること、の葉をば、千早振神の御號を始めたてまつり、花紅葉の折々につけて拾ひあつめ、其の名をあふむ抄とよばれし、まかはあれど、いまだ草稿なりしを、成の歳のかぐつちの災にかかりてなくなりぬ。まことなりかし、身はがうなの如く、家は山がらのやどりとかや、凡て家塾に傳へたる書籍は、まばらなく、盛衰がつられし歌ども五千餘、身まかりし跡の反古堆にむれありしをやうやう見出で、四の時を分け、戀雜の卷に至りては八冊になしし外に連歌の句ども、又下官にまつけし神道庭訓抄などいへる、これ等はたぐふべき本もなきを、今片簡をだに見ず、灰燼となし侍るは、げにいととへて云はむに物なし。さてやはかりにあらむも、餘りほいなく侍れば、中に此の書を思ひ出で、其の跡なきものに、まるし見侍れど、こゝろくさくさの事ども、野邊の草よりしげく、濱のまさこといへらむには、いともいふかしのみにぞ。されど、もと鴨鶴抄といへるもただ人の口につきたるいはれなれば、云云と。寛文十三年癸丑(二三三三)二月稿を起して、貞享二年乙丑(二三四五)四月功成れりといふ。龍尚舎の漢文序あり。外に目錄一卷、引用書目一卷を添へたり。

あうひん

奥民漂到難國款狀 一巻

寛政七年乙卯(二四五五)松前若狭守領分、奥州松前、前、孫太郎、安次郎、重兵衛といふもの、難阻

あうひん

櫻品圖説 一巻 山崎 嘉

櫻花の種類を集め、一々之れを圖説したるもの。即ち松岡玄達の「櫻品」と大同小異の博物書なり。寶曆八年戊寅(二四一八)の作。

あうふ

山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

あうふ

櫻譜 一巻 松岡 玄達

櫻樹の品類を列擧したるものなり。著者松岡玄達の傳は「櫻品」の下にあり。

あうへん

櫻辨 一巻 松岡 玄達

櫻樹に関する諸家の説を列載したるものなり。著者の傳は「櫻品」の下にあり。

あうみんへうたつたつこへんじちり

奥民漂到難國款狀 一巻

寛政七年乙卯(二四五五)松前若狭守領分、奥州松前、前、孫太郎、安次郎、重兵衛といふもの、難阻

あうむし

鴨鶴言 一冊 松平 定信

天職の事、徳を慎む事、學問の事、下情の事、君臣の事、賢才の事、祖宗の法の事、流弊の事、風俗の事、禮の事、樂の事、政と教と人情と理との事、政の事、任官の事、賞罰の事、生財の事、名器の事、幾術の事、山川の事、利義の事等を記述せり。蓋し天明六年丙午(二四四六)卯月、著者白川侯が、脇坂安業朝臣へ送りたる書なりといふ。

あうむし

松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

あうむし

鴨鶴集 十冊 高瀬 梅盛

諸家の俳諧を撰集したるものにて、明暦四年戊戌(二二二一)十月申宛成る。

あうむし

鴨鶴抄 一冊 荒木田盛貞

元禄十四年辛巳(二三三六)四月八日歿す、年八十九。或はいふ元禄十二年歿す。

あうむせ

◎荒木田盛貞は國學者齋藤の子にして、徳元天皇の貞享四年丁卯(二三三七)九月二十六日歿す、今、詳傳を得ず。



あつち

あつちてんこく

支那人の日本語を記したるものなどに就きて、其の漢字を抄出し、五十音順に排列せり。自序中に、此の一とちば、から人の己が國の舌だみ言に、吾が華言をまればさびひつる音の字もて、書籍どもに書き記しおけるを、見あたれるまよにおし考へて、其の假借字を、こなたの音に叶へて、よりよりに書き轉めたるなり」といへり。一々出所を示し、引用の書には、東音譜、書史會要、音韻字海、全浙兵制、中山傳信錄、隨類得、圖書編、武備志、登壇必究、日本考異、篇海類編、國華合記、日本風土記、魏志、隋志、北史、月令廣義等を挙げたり。文化四年丁卯(二四六七)の著にかゝる。

●伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

あつちもんだふ

鸚鵡問答 一卷 丹羽 氏祐

主張の心學に基き、儒佛道を論じて、日常の行事を説明したるもの。文化十年癸酉(二四七三)の自序中に、「故に古の賢人々は、皆自明にして、躬に行ひ、且文にも筆し置き給へり。誰か之れを尊信せざらん。余は之れに異り、今日までまよひし事どもを反して、自問自答に綴り侍り。是れ偏に我があやまちを改めん爲めに、よき人の口真似なり」と云々といへり。同十二年洪水翁の序、同十一年手島堵庵の門人久世友輔の跋、同十三年兒島祺の跋等あり。翌十四年出版す。

●丹羽氏祐は美濃國岐阜の人にして、心學者なり。

伯享と字し、家を遠原舎また令新亭と號す。

あつちくわんか

鸚鵡館遺稿 十卷 細井 徳民

著者の詩文集。卷一に五言古詩、七言古詩、五言律、五言排律、七言律、卷二に七言律、五言絶句、七言絶句、卷三に七言絶句、卷四、五に序、卷六に記、紀行、卷七に行狀、傳、説、銘、説、論、題跋、雜文。卷八に碑誌、卷九、十に書版。以上凡て三百餘首を收む。附録に、著者の墓誌、碑名、行狀等を掲ぐ。本書は、門人神保行簡、泉長達、樺島公禮等の校正したるものなり。文化四年丁卯(二四六七)上杉治憲の序、同五年泉長達の序、同四年神保行簡の跋等あり。十冊に作る。

●細井徳民の傳は「詩經毛鄭異同考」の下にあり。

あつちくわんか

鸚鵡館遺草 六卷 細井 徳民

著者の假字書雜著を集めたるものにて、卷一に野芹(上中下)、卷二に上民の表、教學、政の大體、農官の心得、卷三にもりかみ、對人の問忠、建學大意、卷四に管子牧民國字解、卷五につらつらぶみ。卷六に花木の花(本書對某侯問書。附録に、與樺世權手簡等を收めたり。天保六年乙未(二四九五)林衛の序あり。同年男徳昌の編輯發行したるものにて、同人の跋あり。

●細井徳民の傳は「詩經毛鄭異同考」の下にあり。

あつちうせんたうへうかん

奥陽仙道表鑑 二卷

あつち

奥羽の諸家、廬名、二本松、岩城伊達、大崎、相馬等の戰爭實記なり。年代、著者等が記載なし。

あつちまふるる

白馬會部類 五冊

諸家の記録によりて、古來の白馬會次第を部類したるものなり。

あつちごんやうまうしあげしよ

青木昆陽申上書 一卷

青木昆陽の建白書なり。銀錢の事、度量の事、朝鮮人參の事、貞蠟の事等を論辯建議したるものなり。思ふに享保の比のことなるべし。

●青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下にあり。

あつちだれ

青すだれ 一冊 秋香亭矩久

元祿時代の發句連句等を集めたるものなり。元祿十六年癸未(二四三三)十萬堂米居士の序あり。同年出版す。俳諧文庫第十八編「俳諧珍本集」中に收む。

あつちごんやうまうしあげしよ

青砥藤綱模稜案 十卷 瀧澤 馬琴

青砥藤綱一代記の讀本なり。卷首に其の本傳を掲げ、本文に入り、其の父祖の履歷等より、藤綱が一生を縦横に書き綴れり。中間繪圖を挿めること他の讀本と異らず。前集後集各五卷より成る。而して前集には文化八、辛未歲(二四二七)仲冬十二日

あつち

あつちのはらかつせんき

美濃國青野ヶ原に於ける合戦の記事。豊臣太閤薨去の事より、叛逆者行罪のことまでを記して、通編十八條より成れり。

あつちのふえ

青葉の笛 一冊

青葉の笛に關する和文體の物語なり。一名「村上天皇物語」とも名けて、天皇の御時、内裏のほとりに、夜な夜な笛をふく者ありて、其の音世の常ならぬを、天皇聞しめし、在原中將業平に敕して、その者を尋ねさせ給ひしに、業平美しき稚兒に出で逢ひて其のよしを告げ、稚兒に隨ひてその仙居に到り、青葉の笛を授かりて、天皇に奉りし由の物語を記せり。寛文七年丁未(二二二七)の刊行なり。

あつちのうしつたりとるあつち

青表紙附殿居袋 十冊

徳川氏時代に於ける武家の法制、典故等を記録す。武家の勤め方、衣冠、邸宅、武器、行列等諸般の法度制規、定例などを委細に記し、間々圖解をも掲げた。其の附録たる殿居袋、青表紙と同種類のものにして、武家年中行事、武家諸役班列、諸般の法度及び心得と、其の外に日光山、紅葉山、東叡山、三緑山、聖堂等の略圖及び略傳を蒐録せり。二書何れ

も徳川武家の状態を知るには便要闕く可からざる書なり。

●大野廣城の傳は「泰平年表」の下にあり。

あつちかん

青蜜柑 一冊 未處

俳句の集にて、寶永四年丁亥(二二六七)京都にて出版したるものなり。

あつちけい

赤井系圖 一卷

清和源氏赤井氏の系圖。河内守頼信、伊豫守頼義、肥後守頼清等より、木枝數十代を経て、忠家、忠泰、公雄等に終る。各代生死功討、戰陣の略歴等を、漢文にて記入せり。著作の年月詳ならず。續群書類從「卷百三十、系圖部第二十五」に收む。

あつちけ

赤井家譜 一冊 赤井 澄隨

廬田大炊守家光、六世赤井伊豆守忠家より、赤井彌兵衛時重に至る赤井家の系譜なり。貞享三年丙寅(二二四六)漢文にて記す。

あつちそふうせつか

赤蝦夷風説考 一卷 最上 常矩

最初は蝦夷の沿革を記し、天明六年丙午(二二四四)六「蝦夷國界見届御用として、常矩が彼の地に渡航したる始末、當時勘定奉行松本伊豆守へ差出したる書面及び見聞雜記等なり。もと天明八年の編な

るを、後に本多利明が訂正増意したるもの、即ち此の書なり。

●最上常矩の傳記は「度量衡説統」の下にあり。

あつちほしみやこかたき

赤烏帽子都氣質 五冊

滑濬浮世草紙にして、都人の自慢氣質を書き顯したるものなり。末文に、「僕も又亭主の好の赤烏帽子、自慢づくしを取組で、世にある人に見せ侍るは、おそれ入しと斷りないふのも、けつく自慢氣質に成らんや」と云へり。明和九年壬辰(二四三二)の刊行に係る。

●永井堂絶友は大阪の人、明和安永比(二四〇〇年代)の小説家なり。本書の外に、「世間侍婢氣質」の著あり。

あつちかきやうふじやうしよ

赤坂狂夫上書 一卷

嘉永七年甲寅(二二五四)江戸赤坂町藤四郎店の謙藏といふもの、家名再興を思ひ起して、遂に逆上し、將軍城内に紛れ入りて、處分を受けたる事の始末を略記せるものなり。「秘蹟叢書」中に收む。

あつちめもんあやゆるま

赤染衛門綾菴 五冊 一 瓢 軒

平惟茂と赤染衛門の娘玉綾菴とに關する物語なり。惟茂が信州戸隠山鬼退治の功により、玉綾菴を賜ふよしの敕證ありしことより、鬼仁親王が叛逆を謀り、且、玉綾菴に戀慕して難題を申し懸けし事











あかほり

書に照して予が家の見聞記の真偽を證せんと欲し、裔に請うて予が見聞記と裔の家秘抄とを對照するに、二書ほとんど、符節を合するが如し。こゝに於きてか、予、始めて見聞記の村選の偽書に非らざるを知り、又家秘抄の貴ぶべきを知れり。と曰ひ、又大石の末裔本傳に證明して、貴殿御傳來の江赤見聞記は、拙者家傳の家秘抄、則、義士傳を勝寫せしものと鑑定し、且、一帖の相違も無之に付、七冊へ夫々實印を押捺致置候也。其雄七代孫大石多久藏、阿謙藏殿と曰へる書面を添へたり。本書の價値以て知るべきなり。

あかほりしものかきみ

赤穂義士隨筆 四冊 山崎 美成

赤穂義士に關する生前死後の雜事を蒐録したるものなり。此の書は同じく美成の編輯なる「赤穂義士一夕話」に洩れたることを書き集めたるものにして、四十七士の遺物眞蹟、肖像、神鈴等を數十項に分ちて圖解記述し、義士に關するあらゆる事柄を網羅したり。以て大に温古の資料となすに足る。「赤城落穂集」と名く。嘉永七年甲寅(二五一四)の大沼枕山の序あり。書は凡て橋本玉蘭の筆に成れり。安政二年乙卯(二五一五)の刊行に係る。

◎山崎美成の傳は「書家恒覽」の下にあり。

あかほりしものかきみ

赤穂義士人の鑑 二冊

清水 正徳

赤穂義士小野寺十内秀和が其の妻に贈りたる消息文書を輯めたるものなり。赤穂の戀起るや、秀和

あかほり

あかほりしものかきみ

赤穂義士物語堀内氏の覺書 二卷

堀内 勝豊

赤穂義士の動靜言行に至る實話記事なり。即ち四十六士泉岳寺に退き、官命を待ちて諸大名に預られし時、其の中、大石真雄をはじめ、十七人細川氏の邸に移る。此の時堀内勝豊、主命に依つて林兵助村井源兵衛等と此の人々を預り、其の切腹當日まで傍にあつて見聞したる始終を筆記したるものなり。従つて記事も元禄十六年癸未(二三六三)二月四日までの事なり。末に死後堀内氏より義士に由緒ある人々に消息せし書簡文を掲げたり。

あかほりしものかきみ

赤穂義人録 二卷 室 直清

赤穂義士復讐の顛末を漢文にて記す。即ち救使下向の始より、諸士切腹の終までを敘し、更に四十六士の傳、及び其の子孫行罪の事に至るまで、修飾せず、事實のまゝに記述したるものなり。元禄十六年癸未(二三六三)の撰。

あかほりしものかきみ

赤穂郡志 二卷 忠 廉

播磨國赤穂郡の、庄郷、領主、城廓、町割付り、諸村、川筋、道筋、古城、古蹟付り古人、神社、佛閣、土産、風俗等を記せり。卷首に赤穂の地圖を掲げ、末に延享四年丁卯(二四〇七)の漢文自跋あり。

あかほりしものかきみ

赤穂義士銘銘傳 一冊

元禄十五年壬午(二三六二)赤穂城主淺野長矩の遺臣四十餘名、江戸に吉良義央を殺して、主の讎を復したることあり。本書は、其の復讐遺臣各個の略傳を記したるものなり。

あかほりしものかきみ

赤穂義士人の鑑 二冊

清水 正徳

赤穂義士小野寺十内秀和が其の妻に贈りたる消息文書を輯めたるものなり。赤穂の戀起るや、秀和

あかほり

あかほりしものかきみ  
赤穂遺臣の復讐に關する雜記なり。當時諸義士の書したるを、淺野大學頭へ贈りて、同家に永年秘藏したりしものといふ。

あかほりしものかきみ

赤穂四十七士傳 二卷 青山 延光

赤穂四十七義士の各傳記を漢文に記したるものなり。文政十二年己丑(二四八九)九月の作なり。著者が「佩弦齋雜著」中の一なり。  
◎青山延光は水戸の儒者なり。有名なる青山延子の長子にして、文化四年丁卯(二四六七)に生る。初め佩弦齋又晚翠と號し、晩に春夢居士と號せり。天性強記にして幼より讀書を好み、尤も力を文章史學に盡せり。年十八、赤穂四十七士傳を作りて水戸烈公の愛する所となり、擢用せられて彰考館の編修總裁に累進し、力を修飾刪潤に致す所甚だ多し。弘道館の立つに及びて父延子教授提擧となり延光亦、その教授たり。父歿するに及びては教授頭取となり、藤田東湖、會澤正志等と共に一藩文武の教化を補佐し、藩治を興發せし功績實に少からず。明治維新の世となり、朝廷徴して大學中博士に任ず。明治三年庚午(二五三〇)九月、享年六十四にて病歿せり。編述する所甚多く枚舉するに遑あらず。主なるものを舉れば、本書の外に國史紀事本末、國史論贊、南狩野史、佩弦齋外集、征韓雜誌、野史纂略、三藩事略年表、雪夜清話、義人遺草、刀劍錄、酒史新編、騎史新編、櫻史新編、名花有聲畫、學校興廢考、

あかほりしものかきみ

赤穂事件 秘一巻

赤穂遺臣の復讐に關する雜記なり。當時諸義士の書したるを、淺野大學頭へ贈りて、同家に永年秘藏したりしものといふ。

あかほりしものかきみ

赤穂四十七士傳 二卷 青山 延光

赤穂四十七義士の各傳記を漢文に記したるものなり。文政十二年己丑(二四八九)九月の作なり。著者が「佩弦齋雜著」中の一なり。  
◎青山延光は水戸の儒者なり。有名なる青山延子の長子にして、文化四年丁卯(二四六七)に生る。初め佩弦齋又晚翠と號し、晩に春夢居士と號せり。天性強記にして幼より讀書を好み、尤も力を文章史學に盡せり。年十八、赤穂四十七士傳を作りて水戸烈公の愛する所となり、擢用せられて彰考館の編修總裁に累進し、力を修飾刪潤に致す所甚だ多し。弘道館の立つに及びて父延子教授提擧となり延光亦、その教授たり。父歿するに及びては教授頭取となり、藤田東湖、會澤正志等と共に一藩文武の教化を補佐し、藩治を興發せし功績實に少からず。明治維新の世となり、朝廷徴して大學中博士に任ず。明治三年庚午(二五三〇)九月、享年六十四にて病歿せり。編述する所甚多く枚舉するに遑あらず。主なるものを舉れば、本書の外に國史紀事本末、國史論贊、南狩野史、佩弦齋外集、征韓雜誌、野史纂略、三藩事略年表、雪夜清話、義人遺草、刀劍錄、酒史新編、騎史新編、櫻史新編、名花有聲畫、學校興廢考、

あかほりしものかきみ

赤穂城請取在番引渡覺書 二冊

元禄十四年辛巳(二三六一)三月十五日脇坂淡路守が木下肥後守と共に、淺野長矩の居城受取の命を蒙り、直に赤穂城に入りて在番を勤め、翌年二月參頭向まで、細大事實を記録したる日記覺書なり。

あかほりしものかきみ

赤穂精義參考内侍所 秘四十卷

赤穂遺臣の復讐始末を詳記したるものにて、細大漏すところなし。近年「今古實錄」中に五卷二冊として活刷せるものあり。

あかほりしものかきみ

赤穂忠義傳 一巻

赤穂四十餘士の復讐始末を詳述す。明治十九年丙戌(二五四六)活刷に付するところなり。

あかほりしものかきみ

赤本智恵鑑 五卷 岡本 宣就

一種諧謔の寓言的雜話なり。全巻、滝先生傳、貝の藝づくし、犬と猿との相撲、鶴の眞似する鳥、佐々良三八、十王の勳進、烏助左衛門、黙の任侠、大酒金平等の標題の下に、和漢の故事、昔話を巧妙に應用し、種々なる奇智を演ずる模様を面白く、なかく書き立てたるものなり。文は勿論諧謔なれども、更に淫猥に流れず、暗に教訓の意を寓せり。明和七年

あかほりしものかきみ

庚寅(二四三〇)の著述刊行なり。

◎岡本宣就は、膳齋主人飯袋子と號す、兵隆流の兵法家なり。天正三年乙亥(二三三三)に生る。上泉秀胤に従ひて小笠原氏隆の兵法を學び、井伊直孝に仕へ、軍師となりて、歴功あり。後隱居して安分子又は喜庵と號し、書畫和歌を嗜めり。明暦三年丁酉(二三二七)三月十一日歿す。享年八十三。

あかほりしものかきみ

赤松記 一巻 僧 定阿

赤松氏歴代の記録なり。即ち最初赤松氏が村上天皇の皇子具平親王より出て、稍下りて播磨國佐用庄赤松谷といふ所にながされ、子孫をここに住めるより赤松氏となせること等より、其の子孫の浮沈功罪等を詳叙せり。記者は最後の文中に、「何事も當時分にては一切不入事を書集めなかく候へども自然又不審なること、誰に問ひ候はんも成り中間敷候間、後先のわけもなく書付申候。誠のたわごとし之れにて候へども、年寄の事と思召候へ」と書き終り。天正十六年戊子(二二四八)八月吉日回鑪守入道定阿八十四歳にて書したる由記せり。

あかほりしものかきみ

赤松系圖 秘一巻

村上源氏赤松氏の系圖。即ち第六十二代村上天皇を初祖として掲げ、三品兵部卿廣平親王、第六十三代冷泉院、四品兵部卿致平親王等を経て、數十代の後、晴通、通興等に至れり。「續群書類從」卷百三十六に收む。別本四部、即ち岡本木、梶井木、山本木、外一部あり、皆同書同卷に收めたり。

あかほりしものかきみ

赤松系圖 秘一巻

村上源氏赤松氏の系圖。即ち第六十二代村上天皇を初祖として掲げ、三品兵部卿廣平親王、第六十三代冷泉院、四品兵部卿致平親王等を経て、數十代の後、晴通、通興等に至れり。「續群書類從」卷百三十六に收む。別本四部、即ち岡本木、梶井木、山本木、外一部あり、皆同書同卷に收めたり。

あかほり



あかまつ

あかまつ

赤松再興記 一卷

明徳四年癸酉(二〇五)赤松譜代置の奉取せる神璽を、紫宸殿に納め奉りて、赤松次郎法師丸は罪事を赦され、初めて出仕し名を政則と改め、加賀半國備前三箇保出雲宇賀庄等を領したる事等より起筆し、天文八年己亥(一一九九)十一月二十一日、赤松政村幕府の意を蒙りて左京大夫に任ぜられ、公方家の一字を受けて晴政と改號せると迄を記す。群書類從「三百九十三」の巻に收めらる。

あかまついひ

赤松十家 本一冊

三木別所氏滅亡の記なり。天正五年丁丑歲(二二二七)三木長治、織田信長に西國征伐の先手を頼れしが、後、約に背きて秀吉の爲に三木城を圍まれ、長治自殺せし事を委しく記せり。卷首に赤松家、門葉十家の號を記せるより、取りて書名としたるなり。

あかまつらやい

赤松略譜 本一卷

村上源氏赤松氏の略譜なり。村上天皇第七の皇子具平親王の長子、贈太政大臣從一位師房が、後一條院の寛仁四年庚申(一一八〇)十二月二十六日、始めて王氏より出で、源姓を賜はりしことより、終に慶長年中澁州關ヶ原の役の上總介則房、其の外赤松左兵衛尉等の一族、宇喜田秀家と石田治部少輔三成に屬して、没落し、其の家絶亡するまでを記せり。著作の年月を詳にせず。『群書類從』卷百三十三

あかまつらやい

赤紫 二冊

著者の俳諧集にして、北村季吟の加點したるものなり。寛文十一年辛亥(二三三一)の編にかゝる。○道弘は南都に住したる俳人なり。

あかまつらやい

無飽三才圖繪 六卷

遊客花街の狼藉を、天地人の三才に附會したる洒落本なり。中に滑稽諧謔の甚を挿み、鄙俗猥褻をも打ち雜へて、天象、地氣、人音、殺菜の事に至るまで、あらゆる虚構を列れたるものなり。無飽三才圖繪の名は、「和漢三才圖會」に於たりたるなるべきが、著者は「遊客晝夜散財」といへども飽事なきが故に斯く題すといふ。其の散財の文字を三財と書けるは、早春發兌の冊に財を散ずるとは吉左右よからずと書肆がいへる故に散を三と改めたりといへり。文政四年辛巳(二四八一)菊月中旬の作。○曉鐘成の傳は「雲錦隨筆」の下にあり。

あかまつらやい

秋草 本三卷

有職故實に關する著述なり。室町の古禮を祖述して武家の禮法、故實、制度、典章等を説明す。著者は、吾家の武家故實に關する研究を四部の書に作り、春草、夏草、秋草、冬草といひ、合せて四季草と稱せり。本書は卷上武家禮法部七、人家稱呼部十四、人體部二十三、役名部十一。卷中官位部九、衣服

あかまつ

部四十、刀劔部九、家作部五。卷下酒食部十四、道具部九、進物部八、祝儀部九、凶事部四、雜事部六。すべて三卷十四部百六十八條より成れり。奥書に、右一冊は今世武家に常にありふれたる事どもの故實を考へ記して孫らに傳へしに置くとあるなり。此の秋の日に書きつれば、即ち秋草と名くるなりとあり。安永六年丁酉(二四三七)九月二十日の自記也。○伊勢貞丈の傳は「安藝叢書」の下にあり。

あかまつらやい

秋雨夜話 二卷

男八右衛門、女おきき、おききを主として作りなせる世話小説なり。明治十九年丙戌(二五四六)活刷す。著者かくすは「まるのや」と肩書せり。

あかまつらやい

あきすけあそいへのたあはせ

顯輔朝臣家歌合 本一卷

長承三年甲寅(一一七四)九月十三日、顯輔朝臣の家に於ける歌合にして、基俊の列にかゝれり。

あかまつらやい

秋田城記 本一卷

羽州秋田城の記にて、漢文三枚に寫傳す。元祿十三年庚辰(二三六〇)の作なり。○木村立は松軒と號す。

あかまつらやい

秋月系圖 本一卷

秋月氏の系圖。即ち遠祖後漢孝靈皇帝の孫阿智王、及び高貴王、對馬守春實等より、寛永三年丙寅(二

あかまつ

あかまつ

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい

あかまつらやい



あきのく

あきのく

安藝國郡名の事 本一巻

安藝八郡は古來沼田、賀茂、安藝、佐伯、山縣、高宮、高田、豊田なるに、何時の頃よりか、沼田、高宮の二郡名失せて、佐西、佐東、安南、安北となれり、寛文四年甲辰(三二四)に至りて、右四郡を佐伯、安藝の二郡とせり、斯くては六郡なるより、又、改めて、佐西を佐伯、佐東を沼田、安南を安藝、安北を高宮と復舊せり。然るを、其の實未だ名の如く還らざるを論じ、高田は高宮に、沼田は豊田に混じたる事等を論じたり。

あきのく

安藝國土産門 本一巻

安藝地方の物産を記したるものなり。蓋し其の文體より推す時は或は同地方の風土記類より此の部門を抄録して一冊を成したるもの、如し。年代著者共に詳ならず。

あきのく

安藝國長門島考 本一巻

瀧 昌應

安藝國長門島に就きたる考證にて、幾多の古書を引き、古書に謂はゆる長門島は今の倉橋島の事にして、今の江波島を長門島とて、書にも、神祠の名にも記せるは、無稽の説なりと論ぜり。寛政六年甲寅(二四五四)六月の作なり。

◎瀧昌應の傳は「安藝國郡名祖歸記」の下にあり。

あきのく

秋野七草考 一巻 北野 菊塢

秋の七草はき、なばなくす、なでしこ、をみなへしふらばかま、あきがほに關する古今の諸説を集録したるものなり。文化九年壬申(二四七二)版行す。◎北野菊塢は陸奥の人なり。號を秋芳、梅隱といふ。江戸に住せり。かれて植物の事に精しく「群芳譜」の著あり。今日四季共に觀者の集へる東京向島の百花園は、菊塢の創始開園せるところなりといふ。天保二年辛卯(二四九一)七十餘歳にて歿せり。

あきのく

秋の夜 四巻

有賀 長伯

あきのく

秋の日の 一巻 加藤 曉臺

門人六の持ちたりし芭蕉及び其の門人等の連句と合編したる曉臺及び其の門人の句なり。安永元年壬辰(二四三二)編す。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」中にも收めたり。

あきのく

秋夜長物語 一

仇討物語なり。鎌倉の士に山口のあきむらといふものあり。壽永のころ日本一の夜盜、金山八郎右衛門といふもの、あきむらを殺して財貨を掠む。其の子山口あきみちと力を合せて復讐を謀り、妻を間者として金山が妾となし、謀慮多年、遂に其の志を果す。之れより後、妻は假にも兩夫に仕へたる罪業を消滅せんとて尼となり、あきみちもひとり俗に執着せんよりはとて高野山に入りて僧侶となれる一條の物語なり。所々に挿める畫はきも古色を帯びて愛すべき所あり。書は横綴の一冊子なり。

あきのく

秋山系圖 本一巻

甲斐源氏秋山氏の系圖。即ち最初伊豫守鎮守府將軍頼義より、新羅三郎義光、判部三郎義清等、本枝數十代を経て、從五位下修理亮正俊、其の族幾人に終れり。著作の年月詳ならず。續群書類從「卷百二十七、系圖部第二十二」に收む。

あきのく

秋山氏問書夜話抜書 本一巻

秋山某の問書集中より抜書したる雑話録なり。即ち清淨の事、神代文字の事、滿つれば開くる事、平生の工夫、別と崇との別等より下人の召使ひやうに至る、凡そ十八項、其の師より聞きたることを記し付けたるものにて僅に八枚の寫本なり。

あきのく

握奇經集解 本一巻 長沼 宗敬

支那の兵書「握奇經」を註解したるもの。握奇經は、

あきはな

花園左大臣の子梅若君と西山の瞻西上人との關係を書きたるものなり。初め後堀河院の御時、西山の瞻西上人を桂海といひしが、壯年の時三井寺に花園左大臣の子梅若君といふ童をみそめて契を結びしこと事端にして、遂に叡山と三井寺との争となり、叡山の衆徒園城寺を燒き拂ふに至れり。其結果梅若君は勢多の橋より入水して死し、桂海律師は更に西山の岩窟に庵室をむすびて勤行し、後に東山に雲居寺を草創したる事ども詳しく物語したるものなり。歌を多く入れ、詩も一首見えたり。

あきはな

安幾被起帖 一帖 小野 道風

著書の假名書歌帖なり。野跋二種ありて、各、模刻數本あり。其の一は原本有栖川王府に秘藏せらる。半紙本にして全文反古のうらに書き試みたるもの如く、眞箇に古色拂すべしものなり。寛政九年丁巳(二四七七)五月松平越中守定信朝臣の序ありて伊豫松山少將定國朝臣が模寫せしめて刻せるものあり。歌數、凡そ四十八首を載せたり。又橘千蔭が跋文を加へて、享和元年辛酉(二四六〇)七月、大江成美が刻して、今世書家間に流傳するものあり。又

あきはな

四庫全書簡明目錄に云ふ「握奇經」一巻、舊本風后撰と題す。漢の公孫宏解、晋の馬隆述讀、漢志、隋志、唐志にも皆載せず。宋志始めて著録す、詳かに其の文を考るに、蓋し唐の獨孤及が八陣圖記に因つて依託して之れをなす。然れども其の言、具に條理あり、流傳すること四五百年、談兵者の祖とするところとなす。本書は之れを註解したるものにて卷首に自序あり。

◎長沼宗敬は、兵學家なり。寛永十二年乙亥(二二九五)に生る。字は外記、濠齋と號す。宗敬洛陽の說を信じて經書を研究し、傍ら甲州兵法を學び、古今の兵書を稽査し、和漢洋を參用し、銃馬築城の制に至るまで究めざることなし。其の最も深く悟るところのものは、風后の握奇、武侯の八陣なりといふ。聲譽海内に高けれど、備門に奔馳することをおぼえず、學徒數千人、佐枝尹重、宮川尙古の二人、最も著る。これによつて宗敬の學兩派に分れたり。元禄三年庚午(二三五〇)十二月二十一日に歿せり、年五十六。

あきはな

握奇經集解 本一巻

兵書「握奇經」の圖說につき、集解詳論したるものなり。門人等筆記體に、假名文にて註解す。

あきはな

握奇經集解或問 本一巻

長沼宗敬の著せる握奇經集解に因り、或問的に更に遺漏を補ひ、餘意を記述したるものなり。正徳三

あきはな

あきはな

あきみち 本一巻

あきはな

秋はぎの譜 一巻 横山 潤

萩に關する一切の事件を輯録す。萩培養の法、花色の事、品類の事、及び萩の名ある諸草の事、又萩に關する詩歌等、あらゆる萩に縁あるものをあつめて記せるものなり。安永四年乙未(二四三五)に備後海の序あり。思ふに同時代の上梓なるべし。

あきはな

あきみち 本一巻

あきはな



あけみ

年癸巳(二三七)に書ける自序あり。幼にして美濃福田敬壽に就きて經書を學び、長じて澗濱、勿齋に從ひて兜蓋の學を勉む。諸處歴仕の後、退隱して閑鈴の學を門生に授く。門人千餘人あり。著す所、本書の外再辨一、單騎單械製二、孫子管...

あけみ

握奇八陣集解筆授 本一巻 握奇經の圖説につきて論辯したるものなり。著者、卷首に記して「陣法は兵家の先務なる故に、風后の提奇、及び孔明の八陣を發明して、陣法三卷となす。是れ其の初巻なり。但し握奇は既ありて圖なく。八陣は圖ありて説なし。故に和漢の雜兵家其の圖を作り其の説を分て教習すること紛々たり。然れども先師其の圖、其の説を疑ふて辯論せること左のごとし。」といへり。以て本書の性質を窺ふべし。序もなく跋となし。

あけみ

安久多河 本五巻 歴代敎諭和歌集の中より、備後國の名所に關するものを、輯録したるものなり。卷末に「書きたむる言葉のありやあくた川、ながれてのちの人も見るかな」と詠ぜるに據りて、書名「安久多川」を撰みたるなるべし。卷末に「天和三癸亥歲(二三三)妙蓮寺」と記せり。

あけみ

芥舟 一冊

芥舟

あけみ

著者の俳句集なり。元祿五年壬申(二三五)五月の編にかゝる。芥舟は俳人にして江州水口に住せり。

あけみ

亞槐和歌集 三巻 飛鳥井雅親 大納言飛鳥井雅親の家集。亞槐は大納言の唐名なるより書名とせり。今版本に「飛鳥井家集」と題せるもの、即ち是れなり。先祖飛鳥井雅親の家集を「明日香井集」といへるより彼れを區別せんため後人が心してかく名けたるものなるべし。

飛鳥井雅親は雅世の長子にして和歌を善くす。後花園天皇の朝に仕へ、奏議中納言を歴て權大納言に至る。寛正六年乙酉(二二五)敎を奉じて近古以來の和歌を撰び進む。文明五年癸巳(二二三)剃髪して僧となり、榮雅と名のりて閑雅に樂めり。其の著は、本書の外、飛鳥井家法とて歌學の一書あり。

あけみ

明鴉 一冊 谷口 蕪村 几童、馬南その他の連俳句を集めたるもの。安永二年癸巳(二四三)の編なり。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉齋全集」中にも收めたり。◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

明鳥後の正夢 一巻 爲永 春水 浦里時次郎の事績を面白く書き綴れる人情小説。松亭金水の稿本を筆削したるものにて文政四年辛

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

行祐(十一)、光慶(十一)、宿澤(十一)、行行(十一)等の作。天正十年壬午(二四二)十月五日編輯す。續群書類從「卷四百八十一」連歌部第十二に收む。

あけみ

朱 紫 本三巻

越谷 吾山

芭蕉の發句數十首を選出して、評註したるものなり。筆端に「あけの玉垣、むらさきの軒端、神まがたる祇園の傍に舍りを求めて、しばらく部の旅寐をなんばかりにきき云々とあり。題詞の出所も知るべし。時に、俳人孫計來りて、芭蕉の發句の註解を質問するにまかせて、此の作ありきといへり。文中朱を以て増減を加へたるもの多し。此の書、蓋し、本人の手稿なるべし。

あけみ

あけみ

あけみ

あけみ

阿古義物語 四巻 式亭 三馬 勢州阿漕が浦なる一場の争亂を事端として、忽ち多岐の關係を生じ、實副四郎吉香の浮沈、鳴戸橋内芳賀の生涯、さては、阿漕平二が忠魂義膽無雙の活動、少女摺菱が孝心義志非常の行跡、岩窟大王白波雲平の積善無道等を骨組とし、遂に芳賀の妹、即ち吉香の妻園葉が竹節松操よく千娘萬難を忍びて、遂に百年の愁眉を開ける一條の讀本小説なり。全編四巻十二冊より成れり。一名を大磯十人斬といへるは、事の始めに其の事實を洩したればなり。作者は有数の小説家なるが、其の主義は本書の凡例中に明らかなり。曰く、「道の神史は時代を東鑑によると雖、素より作物語なれば露ばかりも實説に

あけみ

あけみ



あさひ

式亭三馬の阿古義物語の續篇なり。即ち三馬が前巻の例言に「道の昔編述未だ稿を畢らす。全部八巻、先づ半を製て世に廣くす。後巻四本、閉市を俟て高覧あらば余が幸、甚しからん」と記せるが、其の後、其の志を果さずして病歿したりければ、其の遺意を受けて門人狂歌亭三馬(爲永春水)之れを補定し、歌川國安畫圖の業に與りて、一書を成せる所なり。文政九年丙戌(二四八六)秋七月の序あり。全編六卷十冊より成れり。但し本書は頗る當時の子女の嗜好に適し、大に其の名を博したるが、風俗墮亂の故を以て罰せられ、書は悉く絶版せられたり。◎爲永春水の傳は、「いろは文庫」の下にあり。

あさひけいり

淺井系圖 一巻  
淺井系圖、正二位權大納言公綱より、天正元年癸酉(二二三三)九月朔日、江州小谷城に自殺したる、備前守長政の子女に終る。「續群書類」百六十二の巻に收む。

あさひのついで

淺井三代記 十五巻 山雲子  
織田信長時代に於ける江州小谷の城主、淺井亮政の家譜なり。即ち淺井亮政、次男久政、其の子長政に至る三代、相襲きて小谷の城主なりしが、遂に親戚織田信長の爲めに滅亡せられたることを詳記したる記録なり。最初、永正の亂、軍評議の事、佐和山へ押寄する事、磯山の城を資落す事、島井本合戦の事等より、信長彌大坂表を引取り給ふ事、付り淺井朝倉對陣之事、坂井右近堅田寺内を棄取る事、等の

あさひ

最後に至るまで、凡そ九十八箇條より成れり。著者山雲子は京都の人坂内直頼の事にはあらざるか。◎宗岸龍父の傳は、「朝鮮珍花叢集」の下にあり。

あさひものがたり

淺井新三郎助政の事績を記したるものなり。淺井祖先の事に始りて淺井、上坂、兩家和睦の事に終り、體例は小瀬甫庵の太閤記に倣へり。

あさひのついで

淺川傳右衛門記 三巻  
豊臣太閤の時於ける諸將士の、逸事奇話を輯録したるものにて、寶永三年丙戌(二三六六)六月十八日、某の末記に、「此の書は淺川傳右衛門、江戸柳川にて、承傳候儀書留申置書を寫置者也」とあり。「傳修書」二集「卷十、十一、十二」に收む。

あさひのついで

淺川早引集 二巻 川治 宜麥  
貞享以下天明に至る芭蕉其他の俳句附合を集めたるもの。一巻を發句の部とし、一巻を付合の部とせり。享和三年癸亥(二四六三)編者宜麥の自序あり。◎川治宜麥は通稱平右衛門、老翁集、睡堂等の併載あり。豊太の門に學びて、其の二世を襲へり。著書は此の外に、時月句集、兩文庫、建歌仙等あり。

あさひのついで

牽牛花品 二巻 峯岸 龍父

あさひ

すめ朝がほのうへ(母はゆふがほのうへ)といふを戀ひ慕ふ事の一條を典雅流麗なる和文にて寫し、物語なり。惜むらくは年代及び著者を知らざるを。

あさひのついで

朝顔花併 一巻 蘇家秋菴園  
異様朝顔の品目を集輯し、併せて其の繪圖を示したるものなり。嘉永六年丑癸(二五二二)上梓せり。◎蘇家秋菴園は浪華の人なり。

あさひのついで

牽牛花水鏡 一巻 秋水 瘦菊  
牽牛花の花態葉形、變種異類等を詳示す。其の種類凡そ數十種あり。文政元年戊寅(二四七八)の刊行にして、伊澤信情の序に「和歌の詠、秋花七種の一にあれば、宋の楊萬里始めて、詠せしよりは、二百有餘年前にあり。文化の未此の花を賞し、奇を聞はしめたり」とあり。其れ等の結果より成れるものなることを知るべし。

あさひ

麻刈集 一巻 各務 支考  
著者及び諸家の俳句集なり。芭蕉翁百回忌の後にこれを撰せりといふ。編者の序あり。

あさひのついで

淺吉一亂記 一巻  
赤穂義士復讐の記事なり。淺野長矩、吉良義央の關係事件なるより、殊更に淺吉一亂記と名付けた

あさひ

朝倉英林宗滴 一巻 朝倉 英林  
朝倉太右衛門英林が子孫に與へたる教訓書なり。始めに朝倉宗滴語とて英林が物語中の人の心得となるべき事を掲げ、明應三年甲寅(二一五四)宗滴十八歳の時より、弘治元年乙卯(二二一五)七十九歳まで職務十二度の年代記を敘し、其の他、書翰數通を添記したり。

あさひ

朝倉英林は文明六年甲午(二一三四)に生る。本名は朝倉教景、髪を剃りて宗滴と號す。宗家に亂あるとき、宗家を扶けて軍功を樹つ。天文二十一年壬子(二二二二)八月、七十九歳にて病卒す。

あさひ

朝倉雜話 二冊 手島 和庵  
心學道話の書にて、文化三年丙寅(二四六六)發行したるものなり。

あさひ

手島和庵は京師の人にして心學者なり。

あさひ

牽牛花の品類圖説なり。蓋し浪花に於て牽牛花流行せし時作りたるものなり。文政二年己卯(二四七九)の著に係る。

あさひものがたり

朝顔二十花撰 一巻 萬花園主人  
牽牛花の種類中より珍花奇葉のもの三十六種を撰擇し、その三十六歌仙に擬へて、着色したる圖繪なり。嘉永七年甲寅(二五二四)の刊行に係る。

あさひのついで

萬花園主人は成田屋留次郎の號なるべし。何となれば、本書は同人著の三都一朝、兩地秋比、都鄙秋興等の牽牛花園繪と同體のものなればなり。

あさひのついで

朝顔叢 二巻 四時庵形影  
牽牛花の圖説なり。別種異類一々に就きて圖せり。網羅するところ、凡そ五百餘種あり。文化十三年丙子(二四七六)の刊行に係る。

あさひのついで

四時庵形影は京都の人なり。

あさひ

朝顔始末記 八巻  
越前朝倉家興亡の實録なり。即ち朝倉家の祖、表米親王(孝德天皇の皇子)の始めより、天正年間、朝倉義景滅亡の終に至るまでの盛衰終始の事績等を詳記し、殊に朝倉家と足利織田との關係、及び加越兩州の僧徒一揆に關する記事等大部を占めたり。

あさひのついで

朝倉亭御成記 一巻  
將軍越前朝倉左衛門督景景の卒に臨むる時の記事なり。供廻り、産物、其の他のこととを記す。永祿十一年戊辰(二二二八)五月十七日の事なり。「群書類」四四〇九の巻に收む。

あさひ

朝倉敏景十七箇條 一巻 朝倉 敏景  
修身齊家に關する訓誡を規定したるものなり。最初、於朝倉之家、宿老を不可定、其の身の器用忠節によりて可申付之事より十七箇條を記し、末に「相かまへて子孫に於て此の條々書をまもられ、摩利支天八幡の御教と被思候は、かろくも朝倉の名を相つゞく候、末々に於て我がまゝにふるまはば候は、たしかに後悔可有之者也」といひ、更に「子と思ふ親のこゝろのまことあらば、いさむる道にまよはざらめや」といふ今川了俊の歌を引きて闡發せり。年代詳ならず。「群書類」四四〇三の巻に收む。

あさひ

朝倉敏景は京師の人にして心學者なり。



あまひん

◎朝倉敏景は斯波氏に属し、延元申越前坂南郡本郷丸城に居り、敏景正左衛門尉と稱し、斯波氏三老臣の一たり。後斯波氏衰へ其の奸臣家政を専らにせる故、敏景撃ちて之れを亡し、徒りて一粟谷に居る。應仁元年京極持清と戦ひて之れに勝ち、山名宗全より甲刀馬等を賞與せられ、文明五年癸巳(二二三三)五月、大將軍足利義隆より、越前の守護とせらる。此の歳義隆の命によりて、斯波氏の族を伐ち尋で刺殺し、英林寺宗雄居士と號し、幾ならずして卒せりといふ。生死の年月詳ならず。

朝倉上

徳川三家、諸大名、遠國諸役人より、將軍家へ献上せるもの、品目書なり。正月より十二月まで次日を逐うて記せり。記書の年月詳ならず。

あまのこま

淺瀬のしるべ 一卷 藤井 高尙  
古今の謠を題として、其の義を敷衍したる教誹的和文なり。文化二年乙丑(二四六五)刊行せり。出家の宿禰俊信の序、及び菅晋帥の跋あり。

◎藤井高尙は備中の人、松廻舎と號す。明和二年乙酉(二四二五)生る。備中吉備津宮の祠官にして、正五位下長門守に叙任す。學を本居宣長に受け、殊に物語文を研究し、甚だ文章に堪能なり。從ひ學ぶもの、頗る多かりき。天保十二年辛丑(二五〇一)八月十七日年七十七にて卒せり。諡して三寸鏡靈神といふ。其の著す所は、伊勢物語新釋、紫式部日記釋、松の落葉、三のまる、松屋文集、松屋文後集、文あ

はせ、神能御臨日記、源平拾遺消息文例、佐善神、おくれし雁、出雲路日記、日本紀の御局考、大祓後々釋、ひきものたまめ、及び本書淺瀬のしるべ等なり。

あまのけい

淺野系譜 本二卷  
始祖、六條院判官の時代、檢非違使左衛門尉次郎光時より起りて、本枝數十代にして、元祿の赤穂城主内匠頭長矩に至り、更に數十代を経て、天明以後にまで及べる系譜なり。

あまのけいげん

淺野家分限記 本一卷  
淺野家の財産世帯の統計帳簿なり。故に委しくは「播州赤穂城主淺野内匠頭長矩家中分限帳」といふ。即ち、家老職、番頭、中小姓頭、足輕頭、用人、使番、等より足輕人足に至るまで、其の人数、姓名、扶持石高、及び金高等を記したるものなり。

あまのたかみのかみげん

淺野内匠頭分限帳 本一卷  
淺野家中の分限記なり。末に「元祿十五年壬午(二三六二)十二月十四日夜討し記せり。」

あまのなやじらうきん

朝比奈彌次郎吟味 本一册  
朝比奈彌次郎の吟味に關する書類にて、幕府評定所より引續きて、内閣文庫に保存せり。寛政三年辛亥(二四五二)のものにかゝる。

あまのこ

あまひものかたり

朝日物語 本一卷  
信長、秀吉の盛時に於ける、諸將の逸話數條を記載したるものなり。一名を「祖父物語」と稱す。其の由は、尾藩の祖三位中將松平忠吉の時、清須の朝日村梯屋喜左衛門祖父の物語なるより、名付けたる、と、奥書に見えたり。「續群書類從」卷五百九十九合戦部第二十九に收む。

あまがたけおまかげ

淺間嶽面影草紙 一卷 柳亭 種彦  
丹波國水上郡柏原の、木の瀬といふ鏡師の娘字の葉といふを連れて、淀の船に乗り、船中惡漢の騷動ありし時、狼狽して人の子と取換へ、同乗の一人も同じく字の葉を吾が子と心得、闇を犯して逃げたるに始り、其の變遷等を主に作りたる十七回の小説なり。明治十八年乙酉(二五四五)活版に附す。

あまのまきえん

朝熊山縁起 本一卷  
伊勢分峰、志摩の國內なる朝熊山の縁起由来なり。法印權大僧都某の奥書に、「此一卷永正八年辛未(二二七一)五月中旬之候、濃州下向之時、於圓鏡寺定照院令書寫し」とあり。「續群書類從」卷八百〇三、釋家部第八十八に收む。

あまのまきえん

淺間山迎接會記 一卷 僧 圓曉

あまのこ

信州淺間山に關する縁起俗説等を記せり。もと、信州淺間山貞樂寺迎接會來由化疏」と題したり。全篇佛説的解釋になり、從ひて牽強附會せるもの多く、一種の俗書なり。

あまのまきえん

淺間山大變日記 本一卷  
信濃國淺間山、噴火の慘狀を記したるものなり。天明三年癸卯(二四四三)六月十八日に於ける噴火の記事なり。卷首に噴火猛烈なる圖を掲げたるさまは、當時の實狀を見たるもの、筆記なるべし。

あまのまきえん

淺間山の記 本一册 清田 絢  
天明三年信濃淺間山噴火の災を筆記せしものなり。中に記するところによれば天明三年癸卯(二四四三)六月十八日辰の刻より震動し、其響の甚だしき六里外に聞え、又噴火し始めては、廿四里以内は闇黒の世界となりしといふ。其の大變想見すべし。同年の自序あり。而して此の書は上野高崎の女子藤堂某氏の筆記する所なりと序に見えたり。最初に災害につきて所々よりの來狀を寫し載せたり。

あまのまきえん

淺間山燒記 本一卷  
天明三年癸卯(二四四三)信濃國淺間山噴火の時、信上二國より江戸へ注進せし書狀を編輯したるものにて、一々當時の實狀を盡せり。別本「淺間山燒記」といふものあれど、大同小異、或は此の本を抄

出したるものなるべしと思はる。

あまのまきえん

淺見綱齋答 跡部良賢問 目一卷 淺見 安正  
四書五經中の諸難點に就き、問に從つて答辯したるものなり。附録には、著者が嵯峨に遊びて諸生の爲めに講じたる易理の筆記、又白鹿洞揭示筆記、楠公に就きての講義筆記、出師表筆記等を載せたり。

あまのまきえん

阿州將裔記 一卷 乾 正直  
阿波の國なる三好家の家系略記なり。即ち最初、足利義冬以下の系圖を記し、阿州三好の系圖を詳叙し、終に長曾我部元親か三好家を討てばして阿州を領治するまでを記せり。「群書類從」三百九十五の卷にあり。

あまのまきえん

阿州三木氏所領宛行狀 本一卷 越智 直澄  
觀應二年辛卯(二〇一)七月二十一日以來の、同氏所領宛行狀を集めたるもの。弘化三年丙午(二二五〇)六月十九日越智直澄の奥書あり。

あまのまきえん

足利學校記 本一卷  
下野國足利學校の記なり。卷首に聖廟の圖を掲げ、

以下漢文を以て學校の狀況を記し、次に藏書の目錄を擧げ、其の末に、「右數百卷之書、曆數十百年、而存于今者、真天幸哉。其餘近世所藏若干卷、不暇枚舉、略記其概、以承好古之人而已」と記せり。慶長四年己亥(二五九九)、編者の自跋あり。「前學校三要野稱於城南伏見里書寫」と書せり。

あまのまきえん

足利學校舊記 本一卷  
下野國足利學校内の狀況より始め、草創以來の沿革盛衰を略記す。書體を案するに、書上類のものなるべし。

あまのまきえん

足利學校舊書目錄 本一卷  
下野足利學校の藏書一千餘を收載す。今、内務省の寫本による。

あまのまきえん

足利學校境内井建物繪圖 本一卷  
同校の境内總坪數より、諸建物の内外詳細繪圖なり。同校に於て編輯するところなり。

あまのまきえん

足利學校古文書寫 本一卷 茂木 善  
慶長以來、寛永に至る間の、同校古文書(日記書留)類を輯集したるもの。「乙丑歲」と記して善の奥書あり。乙丑は慶應元年(二五二五)の事なるべし。

◎茂木善の事は、「足利學校繪圖」の下にあり。







あしなひ

二十年癸未(二三〇三)七月寫したる由を記し、奥書に、右の書は寛永元年子の年(二二八四)諏訪備前守殿御領分に相成候以後領主へ書出せし物と見ゆる」と書き添へたり。

あしなひき

蘆名家記

三卷

會津の守護蘆名修理太夫盛氏一家の記録なり。即ち蘆名家滅亡の濫觴より、金上遠江守討死の事、及び河原田新國武勇の事に至る大項十二より成れり。年代著者共に詳ならず。群書類從三三〇八十九の巻にあり。

あじのはな

あじの花

一卷

高岡 主人

種々菓子(の)圖繪を列載したるものなり。表題「あじの花」は恐くはあぢの花にて味の意なるべし。因りて「あぢの花」の下に解題せり。

あしなひのたいじ

足踏之大事

二卷

小笠原宗長

弓術射的の足踏故實の傳書なり。今見るところは、寛文四年甲辰(二三二四)六月、中川勘左衛門より、中村七兵衛へ傳ふる數枚の寫本なり。

あしなひのたいじ

蘆分鶴

一卷

川合 正俊

大阪の古地理書なり。大阪全市の蕨、山川、市街、建築等に關して巨細に記述したるものなるが、著作の年月詳ならず。

あすかが

あすか

作の年月詳ならず。目録によれば、第一御用間氏名より、三味所付といふに至つて二百九十八條あり。然るに此の書は、八百屋間屋までにて百二十四箇條を收載せり。一卷を缺本としたるものなるべし。

あすかのあしなひ

飛鳥井家集

三卷

飛鳥井雅親

大納言飛鳥井雅親の家集なり。本書は先祖飛鳥井雅經の家集を「明日香井集」後に解題せるものと、いへるより、彼れ此れを區別せんため、大納言の唐名をとりて「亞槐和歌集」と別名す。蓋し後人の所業なるべし。

◎飛鳥井雅親の傳記は、本書の別名「亞槐和歌集」の下に掲げたり。

あすかのあしなひ

飛鳥井家式法

二卷

飛鳥井雅親

飛鳥井家作の法式書なり。即ち歌の題目に關する事、歌の段紙に關する事等を旨と論じたるものなり。著作の年月定かならず。

あすかのあしなひ

飛鳥井家歌式

二卷

飛鳥井雅親

八代集の内、天雨波といふものと、姉小路家手附尾葉抄と、短冊便紙の書法、詩歌會の心得等を記したる冊書といふものとを集めて一冊としたるものなり。天正十六年戊子(二二四八)左中將雅親の奥書と、寶永元年甲申(二三六四)明珠庵藏本の奥書とあり。

あすか

明日香井集

二卷

飛鳥井雅經

參議雅經の歌集なり。板本に飛鳥井集とあるは飛鳥井雅親の集にして「亞槐集」の事なれば此の集とあまり混すべからず。此の集、古寫本の奥書に、「元仁四年卯月四日、戶部尚書在判」以「雅孝朝臣本」書寫之畢。嘉元二年十月、此集相公之御集也。家之正本紛失、依假借冷泉前大納言爲宮卿之本、仰治部大輔藤原爲統、令書寫之。彼本書落字錯等繁多、尋正本、重可改者也。飛鳥井大納言入道殿御判、明應二年十一月令書寫一校了。同三年五月、云々等あり。

◎飛鳥井雅親は藤原賴經の子、刑部卿宗長の弟なり。和歌を善くするを以て、土御門天皇の朝にありて和歌所に直し、教を奉じて源通具、藤原定家等と新古今和歌集を撰す。承元中、左近衛中將に轉じ、建保六年從三位に進み、承久二年參議に任ぜられ、同三年辛巳(一一八八)五十二歳にて薨せり。雅經、嘗て和歌を藤原定家に學び、其の流、漸く世に重んぜらる。

あすかが

飛鳥川

三卷

中山 忠義

宋儒性理學の事を假名書に物したるものなり。即ち陰陽、太極、儒道等の至理を、諸例を引きて易解俗譯したるものなり。慶安元年戊子(二三〇八)端午の後日物したる自序に、「聖賢のこゝる根は淵の深きが如くなれど、拙き筆に任せれば、瀬になる心地とする。飛鳥川と名けしとまたまかなり。」云々等あり。

あすかのあしなひ

足助八幡宮縁起

二卷

越谷 吾山

三河國足助八幡宮の縁起なり。俗佛説を以て牽強附會すること多し。年代著者共に詳ならず。「群書類從」六十八の巻に收む。

あすかのあしなひ

雅語習

二卷

越谷 吾山

「俳諧あすならふ」によりて、「は」の部に解題せり。俗語習 二卷 越谷 吾山

あすかのあしなひ

明日も見よ

一冊

通俗平易なる心學上の繪入教訓集なり。本書の梗概は紀ノ應信の序に明なれば別に贅せず。其文に曰く、「此の書は予が書する所にして予が作にあらず。古、明の學生簡輯、あざなは、功載といふ人の作れる五論書三十卷、本朝これを翻刻して世に流布す。其のころ此の書の大旨を摘書したる小冊子あり。幼童のために國字に書き添へて梓にふる世に行はる。蓋しいかなる人の述ぶるといふことをまらさず。今また繪に巧なる北尾政美の筆をかり、本文の意味を繪にあらはし、日に新にして日々新なりといふこゝろを以て、明日も見よと題し、書林に興ふ。」云々と。寛政三年辛亥(二四五一)刊行せり。

あせう

蛙抄

八冊

冠部、直衣部、車輿部の門を立て、更に多くの目を分ちて、一々に故實を略示せり。

あすかが

あすかまほひにけつわ

飛鳥山十二景和歌

一卷

芥川 寸艸

江戸飛鳥山の眺望十二景は、筑波茂隆、秩父遠影、瀧野川夕照、梶原村田家、王子深樹、平塚落雁、鴻巣秋月、染井夜雨、黒堤山殘雪、豊島河船帆、中里曉鐘、西ヶ原晴嵐なり。一々之を圖し歌を添へたり。元文

あすかが

安壽嘉川

二卷

安壽嘉川

諸事雜説の見聞録なり。其の序の略に曰く、「享保以來世の中よるづの事移りかほり、古の風も大方失せたり。何の益にもならざる事ながら、自ら聞見せしむるを書せり。」云々と。述べて文學風俗等のこととを記したり。世態の定めなく移り行くさまよりとりて安壽嘉川とは名付けたるなるべし。

あすかが

飛鳥川古歌

一軸

岡本 宣就

「飛鳥川もみちながる、葛城の、山のおき風ふきぞしむらん」の古歌一首の筆蹟なり。下に、洞光畫伯の物せる紅葉散る瀑布の畫を附して装設したり。

あすかが

飛鳥山十二景和歌

一卷

芥川 寸艸

江戸飛鳥山の眺望十二景は、筑波茂隆、秩父遠影、瀧野川夕照、梶原村田家、王子深樹、平塚落雁、鴻巣秋月、染井夜雨、黒堤山殘雪、豊島河船帆、中里曉鐘、西ヶ原晴嵐なり。一々之を圖し歌を添へたり。元文

あせう



あそこ

あそこをまわすしやう

阿蘇惟澄申狀 一卷 阿蘇 惟澄
阿蘇大宮司惟澄が其の軍事に功忠せる次第を摘要して言上したるものなり。其の文の最後に全編の要を摘みて曰く、凡惟澄自最初大小之合戦數百度、所討取兇徒數千人、其間自身被執、死事七箇所、令討死親類若輩百餘人也。所詮惟澄立申荒涼軍忠否、以誓文有御尋御方之傍置之日、若有爭申仁者、可申披者也。仍取證言上如件」とあり。以て全編の大意を領すべし。正平三年戊子(二〇〇八)九月作れるところなり。群書類從「三百九十九の巻に収めらる。

阿蘇三社大宮司系圖 本一巻
阿蘇大宮司系圖。即ち神日本磐余彦尊、神八井耳命より、靈元天皇の眞享六年己巳(二三四九)なる宮内少輔從四位下友隆に至れり。續群書類從「卷百六十五に收む。

あそのみちもんじよ

阿蘇宮文書 本一巻
肥後國阿蘇社の古文書を編輯したるものなり。貞享二年乙丑(二三四五)なる、無名氏の奥書に、「大宮司宇治友隆の家藏本數編中に就いて、事績に関するものを録して、一冊となす」と記せり。

あそのみやうばい

阿蘇宮略記 本一巻
肥後の國阿蘇宮の略縁起傳なり。卷末に大宮司の系圖を附録とせり。記述の年月、及び記述者の名を詳にせず。

あだちみぢ

愛宕宮筒

愛宕山へ參詣の事に話して火災の警戒すべき由を述ぶ。蓋し愛宕山に祀る所の権現は火を守る神と云ふより、之れを縁にして火事火災に関する俗説諸種を書き集めて其の戒、用心としたるものなり。これを愛宕宮筒といへば、著者が人と共に愛宕參詣の途中火の用心に關することを説き示し、さてそれらを材料にして此の書を作りたるより名けたるなり。其の緒言中に「いでや世の中に恐れの中に猶ほ恐るべかりけるは火の難にこそあれ。やつがれ昔より一筋に此の事をのみ慎み思ひて、書に來り、人に尋ね、自ら之れを試みなどして、はしはし記し置ける火の用心の事々々、今日道連の人に語れば、かゝることを人にも知らせて後人の戒

あだちせ

めにもせよかし、さあらば此の御神の御心にも適ひてんなどあながちにいさめられ、こゝかしこふるし置きけるを書き集め、其の始に愛宕の御神託書たる説を探り得ぬも、ひとしほに有りがたく、卷の始にこれを記して、愛宕みやげと名付るものならし」と、以て其の由来を知るべし。三十四箇條より成れり。元禄十二年己卯(二三五九)版行したるものなり。

あだちがはら

安達ヶ原

早川兵庫の子、若太郎が復讐の實録なり。後三條院の時代に奥州福島の大守藤原景高の臣、早川兵庫、故ありて秩祿を沒收せられて諸國順禮の途に上り、悪逆入雲のために殺害せられたる、兵庫の子若太郎が、辛苦を経て終に父の仇を報したる始末を記せるなり。安達ヶ原は昔、彼の邊の地名なりしと云ふ。全部七冊十編に分れ、作者は文章主人にして、甚は石田莖華なり。

あだちせんく

あだち千句

著者の俳諧千句の集にして、年時を記さざれど、元禄年中の編なるべし。
◎乾重次は越前敦賀の人、字を貞恕、通稱を次郎兵衛といひ、一彌軒と號す。姓は後に犬井と改む。俳匠安原貞室の門に入りて、花の水の號を襲ぐ。近江大津に住し、寶永年中に歿したりといふ。或は松永貞徳の門人にして、元禄十五年壬午(二三六二)三月四日、七十五歳にて歿したりといふ。

あだちものがたり

足立物語

足立政定の一代記なり。寛文三年癸卯(二三三三)大河内造酒委秀元、父大膳大夫入道成也齋が語説に依つて記述し、その足立長十郎、加々瓜兵衛門に贈りたるものなり。筆記者自ら奥書して此の記の虚偽ならざる證として父秀元の判を添ふるよしを記せり。政定は大河内綱政の長子にして、出でて足立馬助が家を繼ぐ。故に足立を氏とす。天正十一年眞田征討の時、大久保忠世等と沼田に出張し、其の後越前に浪落し、後陽成天皇の慶長十九年大坂陣の時仙波表の陣に屬し、元和六年庚申(二二二八〇)の卒去までを記したるなり。
◎大河内秀元の傳は、朝鮮物語の下にあり。

あだばなせんく

あだ花千句

著者の俳諧千句の集なり。編輯の年月は記さざれど、寛文年中の編なるべし。
◎野々口立圃の傳記は「なまな源氏」の下にあり。

あだぶくろ

安多武久路

弓馬に關する故事、及び武器馬具等の事を、問答體に記したるものなり。寶曆六年丙子(二四一六)霜月二十八日の自序ありて、本書の大意をかき、又同八年戊寅の年なる無名氏の序あり。
◎近藤壽俊は正徳二年壬辰(二三七二)に生る。初め半輔と稱し、老後宗三と稱す。人となり淡泊にし

あだちも

あそのみちもんじよ

阿蘇宮文書

肥後國阿蘇社の古文書を編輯したるものなり。貞享二年乙丑(二三四五)なる、無名氏の奥書に、「大宮司宇治友隆の家藏本數編中に就いて、事績に関するものを録して、一冊となす」と記せり。

あそのみやうばい

肥後の國阿蘇宮の略縁起傳なり。卷末に大宮司の系圖を附録とせり。記述の年月、及び記述者の名を詳にせず。

あだちみぢ

愛宕宮筒

愛宕山へ參詣の事に話して火災の警戒すべき由を述ぶ。蓋し愛宕山に祀る所の権現は火を守る神と云ふより、之れを縁にして火事火災に関する俗説諸種を書き集めて其の戒、用心としたるものなり。これを愛宕宮筒といへば、著者が人と共に愛宕參詣の途中火の用心に關することを説き示し、さてそれらを材料にして此の書を作りたるより名けたるなり。其の緒言中に「いでや世の中に恐れの中に猶ほ恐るべかりけるは火の難にこそあれ。やつがれ昔より一筋に此の事をのみ慎み思ひて、書に來り、人に尋ね、自ら之れを試みなどして、はしはし記し置ける火の用心の事々々、今日道連の人に語れば、かゝることを人にも知らせて後人の戒

あだちみぢ

熱海案内記

熱海入湯の手引書なり。卷端に題して「伊豆國賀茂郡葛見庄熱海案内記」といへり。熱海全體に關する地理を擧げ、詩歌、俳諧等をも記し、温泉の涌出は寛保二年壬戌(二四〇二)までに九百九十四年になる由を記せり。最後に心得書として旅客の注意すべき條件をも掲げたり。

あだちみぢ

熱海行記

熱海の紀行にして、文中多くの詩歌を挿めり。其の序の大意に曰く、「去年元禄丙子仲春下弦、奥武門之義士、藤原泰岡老丈、伴子貴高人、赴于豆州賀茂郡熱海温泉。老丈尊命、余以侍、驛路之長夕、第恐不才難、無益於旅、列、軍征、矣。老丈素有文有、武、至温泉之途中、游心於名山勝水之景色、作、後、歌、及、詩、吟、余亦每、驛亭、綴、杜撰、或、遊、于温泉近隣境致、玩、兔毛楮子、矣。淹留二旬餘、而歸路發、熱海、經、三島箱根之山行、見、相州大山、鏖、倉、而、及、入、武、江、之、居、第、但、語、有、數、十、首、且、書、老丈之優歌於同卷、茲、簡、中、矣。今、歲、遂、筆、俚、語、而呈、林、祭、酒、先、生、敬、希、改、削、或、留、林、門、之、高、弟、二、三、盟、受、批評、再加、前、後、詠、詞、爲、小、冊、即、名、熱、海、行、記、也」と。以て本書の性質由来を知るべし。元禄

あだちみぢ

熱海紀行

寛政七年乙卯(二四五五)、友人門子等と豆州熱海温泉に入浴したる時の記にして、五月七日江戸を出で、同九日熱海に着し、二十九日家に歸る。其の間、經過したる、この地理事項を記せり。
◎清水長年は江戸の人にして、松平忠雅(豐前守池田氏)の臣たり。安兵衛と稱し、子鑑と字し、東陽と號せり。

あだちみぢ

熱海十興

温泉に浴する興、暮に海濱に遊ぶ興、隨心巻を訪ふ興、日金山に登る興、般若院に遊ぶ興、瀧の湯塵敷より海上を見る興、瀧の湯より磯道を経て歸る興、錦が窟船中の興、網代に至り長谷寺に詣る興、熱海郷中を逍遙する興。以上の十興を記したるもの也。元禄四年辛未(二三五一)の自序あり。余北越の邊土に生れ、過きにし貞享五年の夏、初めて彼の境に趣き、又元禄辛未の夏、再、至りて温泉に浴す。高きに登り深きを渡り、近きに歩み、遠きを眺むるに、其の勝景更に擧げていふべからず、然るに、此の書を誌して、十興と名くるは、人の笑を諷くるに似たり。偏に蓋湖管見のなす所、大海の一滴、九牛の一毛のみ。只、願くは諒める人、一を以て十を知り、十を推して百を知らば、無量の興ともなりんかし」といへり。本文の筆つかひ、またこれに類せり。著者の姓名はあらばさす。

あだちみぢ



あたまみち

熱海地誌 一巻 鈴木 長頼

伊豆國熱海の地誌にして、形勝門、温泉門、山川門、神社門、梵宇門、墓冢門、土産門の七門に分ち記せり。元禄十二年己卯(二三五九)の自序、野必大の跋あり、同十三年の上木にかゝる。

◎鈴木長頼の傳は「日光山御堂再修記」の下にあり。

あたまみち

熱海日記 一巻 藤原 葛滿

あだものがたり

あだ物がたり 二巻 平 爲春

三寶の信、佛教の理を寓言的に解釋す。即ち萬境無常の理を諸島に託し、諸所に繪畫をも挿みて易解し、知識道徳の根本的教育を、主として作りたるものなり。其の趣意、因縁、及び題號の出所等は著者の自序に詳なり。其の一端に、「我れも年たけよはひかたぶきぬれば、此の世のながらへ程もあらじと思へば、寵愛の童女の手すさびにも、又はなからん後の紀念にもなまざやと志して、卯月五日の雨の徒然に記し置つることなくをき改め侍べり、始終寓言の如くなれば、なづけて、あだ物がたりとやせん。まことに水のあはれなることばりなり。須磨のおま人にはあらねど、轉りし翁がことに

あつたぐ

廿八日、光明天皇の曆應二年六月二十七日、同康永二年三月二十九日、同貞和二年十一月九日、同四年九月二十七日、及び後光嚴天皇の貞治二年三月一日の禁裡に於ける御會御宴等の記録にて、事皆禁中の式典に係る。

◎綾小路敦有は參議從二位にして、應永七年庚辰(二〇六〇)二月十五日七十九歳にして薨せり。

あつたぐ

あつたぐ 一帖 小川 奎綱

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あたまみち

熱海地誌 一巻 鈴木 長頼

伊豆國熱海の地誌にして、形勝門、温泉門、山川門、神社門、梵宇門、墓冢門、土産門の七門に分ち記せり。元禄十二年己卯(二三五九)の自序、野必大の跋あり、同十三年の上木にかゝる。

◎鈴木長頼の傳は「日光山御堂再修記」の下にあり。

あたまみち

熱海日記 一巻 藤原 葛滿

あだものがたり

あだ物がたり 二巻 平 爲春

三寶の信、佛教の理を寓言的に解釋す。即ち萬境無常の理を諸島に託し、諸所に繪畫をも挿みて易解し、知識道徳の根本的教育を、主として作りたるものなり。其の趣意、因縁、及び題號の出所等は著者の自序に詳なり。其の一端に、「我れも年たけよはひかたぶきぬれば、此の世のながらへ程もあらじと思へば、寵愛の童女の手すさびにも、又はなからん後の紀念にもなまざやと志して、卯月五日の雨の徒然に記し置つることなくをき改め侍べり、始終寓言の如くなれば、なづけて、あだ物がたりとやせん。まことに水のあはれなることばりなり。須磨のおま人にはあらねど、轉りし翁がことに

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

あつたぐ

あつたぐ 一巻 天野 信景

を記し更に本書の奥書に、「右大臣基房公奉教被<sub>レ</sub>尊<sub>ニ</sub>下當社起<sub>レ</sub>、仍書<sub>ニ</sub>寫家本<sub>ニ</sub>獻<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>者也。延久元年(七二九)八月三日、大宮司從三位伊勢守尾張宿願員信とあり、「群書類從」卷二十四に收む。

幾多のあつたぐに、詠調をつけて、俗唱の手引したるものなり。即ち一語の尾音、及び一句一句の語尾長短等に符を記して獨習に便せり。



あじまか

而在歎し云へり。
概評 本書は敘事を主として潤飾を事とせず、ま
かも事實を直筆して隠避する所なければ、當代武
家の制度、法令、政略、經濟、其の他奉上統下の事實
考究には唯一材料たり。されば林道春は評して「東
鑑文章、雖古之書紀實錄、然其事爲有實乎。
校三之源平盛衰記、平家物語、而彼此其眞偽亦可見矣」
と云へり。又文科大學教授星野恒氏は嘗て史學會
雜誌に、本書を評して、「此の書敘事確實、實に
野ならず。簡にして能く盡す。頼朝の天下經營の
方略、北條の政權擡擡の心曲等、描寫して其の眞末
を具備せり。たゞ頼朝變死の一事は曲筆を免れず
と雖、其餘は皆直書して諱まず(頼朝の傍嬖、政
子の姉姪の類、隱避する所なきを以て之れを知
るべし)彼の平家物語、源平盛衰記等の、専ら潤飾
を事とするものと、素より日を開くして語るべき
にあらざる云々と云ひ、又、「六國史以後、朝廷久し
く著撰なし。頼朝頼朝を開くに及び、乃ち此の書あ
り。此の時、大江、中原、三善の諸博士、京師より來
り、政務に參與し、文墨の事に任ず。故に其の記す
るところ、措筆の風習を脱し、轉、武辨の氣象を帶
び、措語多からずして能く細大の事實を曲盡す。其
の淵源、書紀實錄に在りと雖、當時外記日記の類を
參酌して自ら一種の文體をなす」云々と云はれた
り。以つて本書の眞價を知るべし。

あじまか

女風 吾妻鏡 六册 市川 三升
女子風俗に關する草紙紙なり。全部始終繪入にし
て本文は細字を以て繪の間に記せること當代草紙

紙の例のごとし。本文は佛徳市川三升の作にして
畫工は歌川豊重なり。文政八年乙酉(二四八二)の
春、日本橋青物町今利屋より刊行す。
◎三升の名は、江戸の佛徳市川十郎景代の俳名
なるが、本書は、其の七代目十郎の著なるべし。
七代目十郎は、五代目十郎白濱の孫にして、寛
政三年辛亥(二四五二)に生れ、幼名を小玉といふ。
叔父六代目十郎早世したるより、其の養子とな
りて七代目を相繼す。安政六年己未(二五一九)六
十九歳にて歿せり。

あじまか

東鑑異本考 一册 榎原 長俊
東鑑の異本を考證したること名の示すが如し。即
ち叙三十幅卷の三、又吾妻鏡集解の中にも收めら
り。最初に東鑑の異本として活字本東鑑、板本東
鑑、假名本東鑑、古寫本東鑑、東鑑脱漏等を擧げ、次
に東鑑部類として東鑑末、東鑑集、東鑑綱要、吾妻
鏡提要、東鑑三箇有職、東鑑疏等を出して、各解題
を施し、次に外國東鑑傳説として、曝書亭集、昭代
叢書等の文を引き、最後に詳細なる改正板本東鑑
の目錄を載せたり。
◎柳原長俊の傳は「駿河國志」の下に出づ。

あじまか

東鑑集要 二卷
吾妻鏡の全部につき、其の綱要を摘みて列記した
るものなり。即ち吾妻鏡の讀者が其の本文の多に
屬し、繁を厭ふより、事を略し要を抽き、加ふるに
人君の賢愚、時政の得失、執事の臧否等を評論し

あじまか

東鑑算改補 一巻 安藤 有彦
東鑑は高倉の院の治承四年庚子(一八四〇)に起り
て、龜山の院の文永三年丙寅(一九二六)に至る凡
て八十七年間の事なり。月の大小、日の干支、及び
閏月、日月食等、皆、店の長慶宣明曆に據れり。但し
其の法に據りて訂すに尙誤脱多しとて、此の書を
著せりといふ。其の補訂目を擧ぐれば、年閏者十
三、月閏者三十七、誤者九、重出者二、月大小閏者百
十七、誤者二十一、日支干閏者四百十二、干閏者一、
干閏支誤者一、日誤者四、支干誤者百八十一、支誤
者九十四、干誤者六十五、日重出者三、日食閏者五
十三、差者十二、月食閏者六十二、差者二十六等な
り。延寶四年丙辰(二三三六)六月、自らの奥書捺印
あり、當時の版行なるべし。

あじまか

阿都滿珂比 五卷 栗本 玉屑
東西諸國を遊歴したる紀行なり。阿都滿珂比(東
貝)の名は、都の西の國々島々まで見巡りて、つく
し貝の冊子を作り、ふたみな合せて、貝おほびに准
へたりといへり。寛政六年甲寅(二四五四)の記な
るべし。自序、伴蒿溪の序、正三位藤原眞直の序、加
茂周、皆川、松濤亭、向古等の跋あり。
◎栗本玉屑は播磨の俳人にして觀應と號す。米田
村神宮寺の住僧なり。

あじまか

吾妻紀行 三卷 谷口 重次

あじまか

て、まかも他の記録を雜へ考へず、全く吾妻鏡を讀
むに便したるものなり。成書の出來、記述の範圍、
記事の脱漏等を述べたる總論より、右大將頼朝の
略評、左金吾頼家の略評、右大臣實朝の略評等を上
卷とし、下卷には平政子の略評、大納言頼經の略
評、中將頼朝の略評、末尊親王の略評等を記せり。
元祿七年甲戌(二三五四)中冬、これを書き畢れりとい
ふ。同八年乙亥四月版行す。

あじまか

東鑑莊名 一巻
東鑑に載するところの諸州の莊名を抄出して、其
の國々の下に之れを列ねたり。

あじまか

東鑑脱漏 一册
後堀河天皇の嘉祿元年、同二年、及び安貞元年の三
年間の日記なり。吾妻鏡卷の二十六と二十七との
間の脱漏なり。群書一覽に「東鑑の全本を以て刊本
の第四十五卷の闕けたるを補はんが爲に別に刊行
するところなり」と記せれど誤れり。寛文八年戊申
(二三二八)の版刻にて、外籤に東鑑五十三と題し、
寛文本に附して發行せり。

あじまか

東鑑脱漏抽纂 一册
寫本島津本を刊本と比較參照して幾多の脱漏條項
を抄録纂輯せり。即ち十六の卷の内二項、十七の卷
の内一項、二十一の卷の内十一項、二十五の卷の内
二項、二十七の卷の内四十三項、三十一の卷の内十

三項、三十二の卷の内二項、三十三の卷の内七十七
項、三十四の卷の内八項、三十七の卷の内十項、四
十の卷の内一項、四十一の卷の内一項、四十六の卷
の内一項、すべて十三卷の内より百七十二項を抄
録せり。書末に「延寶己未庚申念六、偶得島津氏所
藏之本「勝寫」とあり。延寶は靈元天皇の年號にし
て、己未は其の第七年(二三三九)なり。

あじまか

東鑑不審問答 一巻 伊勢 貞丈
東鑑中、不審の點に就きて問答したるものなり。即
ち布引高敬といへる人の東鑑に於ける種々なる疑
點難問に對し、著者が一々答辯したるものにて、其
の條項數十に及べり。
◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下に掲ぐ。

あじまか

東鑑末 一巻 林 恕
東鑑の中より、抄出假名書にして、若狭少將酒井忠
勝朝臣へ呈したるものなり。慶安四年辛卯(二三一
一)正月、自らの奥書あり。
◎林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

あじまか

吾妻鑑類標 二巻
吾妻鏡全部の索引目錄なり。即ち該書所載の事項
を悉く伊呂波分けにして、一々その項目を擧げ、一
一原本の丁数を掲示したるものなり。同書開卷の
手引として最も貴ぶべし。著作の年代及び著者を
記さず。

あじまか

あじまか

上卷は京都三條橋より勢州桑名までを記し、中卷
は尾州熱田より駿州安倍川までを記し、下卷は駿
州府中より江戸日本橋までを記したる紀行なり。
名所は各圖をあらはし、古人の詩歌及び自詠の和
歌をも擧げたり。自序、及び元祿四年辛未(二三三
五)一、宇部宮三近の跋あり。三卷一册に版行す。
◎山田斗巻一は齋藤と號せり。幼にして賢となり、
長じて諸家に筆を學び、山田松黒を師として、其の
技に達し、更に新曲數十を製し、自ら一機軸を出
す。當時の上下最も稱賛し、從ひ學ぶもの數千人に
及び、後世傳へて山田流といふ。賢官は累遷して檢
校に至れり。文化十四年丁丑(二四七七)四月十日、
六十一にて歿す。淺草山谷源照寺に葬る。其の墓誌
は知人太田錦城の撰するところなり。
◎貝原篤信の傳は「白蝶集」の下にあり。







あなまが

七丁の末のくるまに轡をかため、まきに出てける京わらべをまたふゆゑに、跡追といふもの爾なりといへるによりて知るべし。

◎中川喜雲の傳記は「案内者」の下にあり。

あなまがし

編穴さがし 五册 類齋

滑稽文の隨筆にして、社會裡面の真相を描き、暗に其陋點を諷刺せるものなり。「穴さがし」と名くる所以も此に在らん歟。著者の自叙に、「はやうあめる穴さがしも、はかなき世のことぐまにならずらへて、人の心をはつかしめ、玉餘の直なる道にいざなはんとの本意になん侍るまかばあれど、濱の眞砂の敷つもりて、五の巻のうちに言ひ残せし言の葉も、所せげなれば、又後の文をつりて、猶そのたらざるを補はん」といへるも此の趣意なり。明和八年辛卯(二四三二)に刊行す。

◎類齋のことは「當世穴さがし」の下にあり。

あなまがしぐき

穴生元服記 和一本

天文十五年丙午(二二〇六)十二月十九日、足利義輝が元服加冠したる時の詳細記録なり。

あなまがし

穴太記 一卷

本書は群書類従本によりて「萬松穴太記」の下に解題せり。

あなまが

阿難話 一卷 各務 支考

あはし

東華坊終焉の記、及び追善の句を集めたるもの。正徳元年辛卯(二三七)二月出版す。近年發行の俳諧文庫第八編「支考全集」中にも收めたり。◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

あはしあはし

兄弟姉妹 和一本 足代 弘訓

「寛居雜纂」中の一書にして、兄弟姉妹の意の古語に用ひられたる、あに、おと、あね、いと、せ、い、ろ、せ、いろね等を説明したるものなり。

◎足利弘訓の傳は「寛居開書」の下にあり。

あながちちてはせ

姉ヶ小路家てはせ抄 和十三卷

てにをばに關する説明にして、一名を「手附尾葉抄」といふ。明珠庵釣月の頭註あり。其の奥書にいふ、「道般卷々古來所傳之手附尾葉抄也。然其秘訣不竭者數條在之、明師與旨其作例古歌並以之隨頭書記畢」と。十三卷一冊に作る。

あながちちし

姉ヶ小路式 和十三卷

てにをばに關すること、十三條十三卷に説明したる傳書にて數枚の、一冊に寫傳せり。「姉ヶ小路家てはせ抄」と、大同小異のものなり。

あなうせう

蛙獲抄 二册

一畫毎に一首の發句を題味したる畫卷なり。發句と畫と共に見るべし。半輪舎冬札の序に「米倉兵某

能畫の名あるを以て、文子舎のゆし、好士達人の玉の句を、非手の蛙の夫にはあらぬ歌ぶくるに、拾ひ集めて題字とし、對松の癖みよりして、句意を解せしむ」とあるにて本書の性質を概知すべし。刊行は延享四年丁卯(二四〇七)。著者は米倉某なり。

あはくすあきじつ

安濃白水記實錄 和八卷

伊勢安濃津城下一騒動の記録なり。明和年間藤堂高豊の家士、玉置作十郎、私欲に迷ひ、四天王寺の住持を欺き、秋葉山権現の神託といつはりて、白水の巻といふ一巻を著し、土民を誑惑せしより、遂に安濃津城下に騒動を起せし始末を記せるなり。

あはかつぎんそんたか

安房上總郡村高 和五卷

仁の巻に安房國安房、平、朝夷、長狹郡の總高九萬二千九百十石三斗五升二合二勺七才を擧げ、義の巻に上總國植生、夷隅。祝の巻に市原、長柄。智の巻に出邊、武射。信の巻に望陀、天羽、周准の各郡村石高を列記す。五冊一帙に作る。

あはささみけ

安房里見家記 和一本

安房國里見家累代の記録にして、開卷に累世の略系を掲げ、次に里見九代の子業を一代毎に略記せり。寛永八年辛未(二二九)山田某の記述する所。

あはし

阿波志 和十二卷 藤原 憲

阿波の國一圓の地誌なり。首卷は總論、第二卷は徳島城下誌にして第三卷以下一郡一卷とす。第一卷には十郡方位圖、建置沿革、風俗、形勝、疆域、戸口、貢賦、官員、制度、兵馬、僧尼、氏族其の他の數項を分ち、第二卷以下また各郡圖、郡名、地名、戸口、公署、祠廟、佛刹、古蹟、土産等十數項を設け、一々正史實查に據り、精確詳細に記録したる地誌なり。本書は徳島藩侯其の儒臣に命じて旁搜精査せしめたるものなれば、その杜撰の書にあらざるは論を俟たず。文化十二年乙亥(二四七五)の撰なり。

あはすいめ

粟雀 二册

長崎の俳人古道並に正秀等の俳句を集めたるものなり。寶永元年甲申(二三六三)、京都俳諧書林井筒屋庄兵衛發行す。

あはせかぐみ

異理安者世鏡 三册 増穂 殘口

神儒佛の三道に關する漫筆なり。即ち三道末流の徒が、徒に反目嫉視の餘り、却て修身護國の要を忘れ、世の害を招くを戒めんとして、一方には三道終極の至理は一致なりと調和に務め、一方には能く三道の差別を辨へて、吾國風の變ずべからざるとを論じたるもの。正徳六年丙申(二三七六)刊行す。

あはせかぐみのぶそぞ

合鏡對の振袖 一卷

あはすい

筋書小説の最短期編なり。前後二編より成りて、前編には勸善懲惡のこゝろを録し、後編は戲場の正本にあやからしめたる如し。所々に挿畫ある小本なり。

あはせかたばらちちようじせ

給帷子着用時節 一卷 柳原 資定

給帷子着用時節の事に就きて、柳原一品資定と稱名院と問答したる二通の贈答文なり。文中風俗研究の資たるもの多し。天正十五年丁亥(二二四七)仲春初三の日なる從三位清原朝臣國賢の奥書に、「右以彼尊賢眞筆寫之」とあり。「群書類從」百十九の巻に收む。

◎柳原資定は故實家にして別に「犬追物口傳日記」の著あり。

あはせかたばらちちようじせ

給妻雪古手屋 六卷 南仙笑楚滿人

古手屋入耶兵衛、忠兵衛、梅川、於妻の關係を作成せし小説にて、門人學亭古滿人の校訂するところなり。明治十九年丙戌(二五四六)活版一冊に作る。◎南仙笑楚滿人は楠彦太郎と通稱す。江戸の人に於て、芝居川町に住し彫刻を業とせり。(或は醫を業とし、傍ら習字の師たりしとも、また輜師なりきとも云ふ)寛政年間敵討草紙を著し、大に世に知らる。著書には敵討三組並、同水滸蜀江錦、同布施利生記、同時雨之友、同長太郎柳、同篠川衛、同梅之接、同養女英、同松寄生、同鷲酒屋、同沖津白浪、同讚誠漢、同柳下真崎、同袴勝負、同春手枕、同聖山魁、同三人娘、同柳四郎兵衛、仇討意寫繪、仇報妹背枕、仇報部印籠、敵討能捨山、仇報孝行車、仇討碓打

手、仇報高尾外傳、姪敵討扇面、復讐岐枝川、告子之闘男、山茶太平記、八橋調能流、五人揃目出度娘、虚空太郎武者修行帖、三世相郎滿入算、新撰戲樂通寶、一狂言狐書入、増補執柄太郎、初学墨染日記、銘者正宗刀珍説、猫の嫁入、今度は鬼忠子、古渡日記帳、幸給剛殿神、冬雪物語、無難作行形曾我、昔語姑獲鳥仇討、千匹半、百合者多武眼、等あり。就中「敵討三組並」を以て傑作となす。文化四年丁卯(二四六七)三月九日歿す。芝西窪の心光院に葬る。

あはたぐさるがいの

粟田口猿樂記 一卷 僧 尊應

京の粟田口に於きて勸進したる猿樂の記事なり。卷首に「永正(後柏原天皇の年號)第二仲呂中澁於粟田口勸進猿樂之記」とあり。四日間の興行に都合三十番を演じたる記事なり。記者は最後に、「今の世にはかやうの事もきよある心地して侍る。又行末にかやうの心つかひたれくも侍るべきとて、あしおき侍るものなり」と云へり。西湖木頭丸といふもの、奥書に「此の一帖者曾門准后尊應筆とりてか、せ給ふと曾覽人の申侍るおもしろく侍りて寫しとめつるものなり」とあり。「落陽田樂記」と合して「群書類從」三百六十三の巻に收めたり。

◎尊應は二條後福照院園白持基の息にして、文明三年辛卯(二二二)五月二十九日、第六十代の天台座主に任ぜられ、(時に年四十)粟田口青蓮院に住し、明應二年癸丑(二二五三)三月四日、座主職を辭せり。永正十一年甲戌(二二七四)正月八日、八十三にて歿す。

あはたぐ



あはたの

あはたのこころいづこ

粟田左府尙齒會詩 一卷

藤原 在衡

粟田左府藤原在衡が其の粟田の山庄に於きて尙齒會を開きたる時、主客の詠したる詩歌を集めたるものなり。律詩、古詩等都合二十首より成れり。尙齒會は、安和二年己巳(一六二九)に開らる。『群書類從』卷百三十四に收む。

◎藤原在衡は寛平四年壬子(一五五二)に生る。中納言山陰の孫、僧如無の子なり。伯父但馬介有頼養ひて嗣となす。延喜十二年文章生となり、同十七年伊豫備前掾となり、翌年對策登第して少内記職人となる。之れより官位累りに進み、終に從二位左大臣となる。在衡は五世に歴仕し、職にありて朝參を廢したる日なし、一日暴風雨あり。在朝の者相謂つて曰ふ、格動在衡の如きも、今日は亦朝參を廢するならん、言未だ畢らざるに簾笠して至るものあり、これを見れば即ち在衡なり、時人實に嘆稱せりといふ。天祿元年庚午(一六三〇)七十九歳にて薨じ從一位を贈らる。

あはたのこころ

粟田日記 三卷 畑 維龍

撰者維龍が、粟田に居たりし時の日記なり。假名書隨筆す。寛政四年壬子(二四五二)泊浪居士の序、及び伴蒿蹊の序あり。  
◎如維龍は京師の儒者にして鶴山と號し、勘解由と稱せり。文政十年丁亥(二四八七)十月八日、八十歳にて歿す。

あはたのこころ

淡路常磐草 八卷 中野 安雄

淡路一國の地誌なり。全國の地勢、山川、神社、佛閣其の他同國に關する古今の事件を集輯す。緒言の中に、「古今の蹟思ひつゝくるこそ心行くわざなれ。往來せし國の事、知らまほしく、史冊と共に遺れる條々を據とし、語りつきいひつげる老びとの言辨を參へて、年頭書いつけ侍りしを誌しとめつれど、風土記の逸れしより、微を取るに縁なく、家に書乏しくして、博考へがてなれば、洩れぬる事、誤れる事おほかめれ。猶や行き、國は天地と榮え、道は日月と明らけく、常磐草に久しかるべきを壽きて、常磐草となん命けめしといへり。名の出所も併せ知るべし。享保十五年庚戌(二三九〇)の自跋あり。八卷四冊に刊行す。

あはたのこころ

淡路國繪圖 一折 松川 半山

淡路一國の地圖にして、元治元年甲子(二五二四)淡路國春村學人河野逸、添削の語を附す。  
◎松川半山は翠榮堂と號し、畫圖と略註と共に自ら著すところなり。

あはたのこころ

淡路國太田文 一卷

淡路國津名郡、三原郡の郷保村の田畑、社寺、領家、地頭等を擧げ、末に「貞應二年(一八八三)四月

あはたの

あはたのこころ

日」と記して、散位藤原朝臣外三人連名の奥書あり。曰く、右大略注進如件。但於庄園者、任建立最前立券文旨、注進仕之間、有不審歟。於國領者、付當時文書之旨、今可注進申候。仍言上如件」と。蓋し貞應年中武藏前司入道が、鎌倉の命を承けて、本邦諸國の太田文を編輯する時、鎌倉より諸國の守護に命じて、國領田園等を調査書上せしめたる時、當國の守護職より差出したるもの、寫なるべし。『群書類從』卷九百七十三、雜部第百二十三に收む。『淡路國々領庄園田園地頭注文』また「注進國領庄園田園注文」等標題せる寫本あり。

あはたのこころ

淡路國天平十年正稅帳 一卷

淡路國の收稅帳簿。即ち聖武天皇の天平十年戊寅(一三九八)に檢録したるものなること、名の示すがごとし。古代徵稅の一斑を見るべし。

あはたのこころ

淡路國論鶴羽山勸進帳 一卷

論鶴羽山の緣起を敘述したる短篇なり。後柏原天皇の大永六年丙戌(二一八六)七月記せり。『群書類從』卷八百二十、釋家部第百〇五に收む。

あはたのこころ

淡路諸記 一卷 柏亭 眞直

淡路國津名郡なる伊非諸宮に參詣したる時の記。享保十二年丁未(二三八七)三月十五日、攝津津守に至り、十八日あら川口より舟に乗り、同日津名郡志筑浦に上り、茲に淡路の事を記し、二十四日伊非

あはたの

あはたのこころ

安房國全圖 一卷 鶴峰 戊申

安房國長狹、朝夷、平、安房四郡の二百七十二箇村、九萬三千八百八十六石二斗一升〇二勺三才の統計帳なり。元祿十四年辛巳(二三六一)井上大和守以下の檢證にかゝる。

あはたのこころ

安房國郷帳 本一巻

後奈良天皇の天文十二年癸卯(二二〇三)堂宇再興の時の勸進帳なり。

あはたのこころ

阿波國井戸寺勸進帳 本一巻 僧 芹誠

俳諧の集なれど、何時何人が編輯したるものなるか知らず。

あはたのこころ

安房圖 本一折

安房一國總高九萬二千六百四十一石六斗八升の各領域を主として記したる略地圖なり。慶應以前のものなり。

あはたのこころ

阿波出集 四冊

俳諧の集なれど、何時何人が編輯したるものなるか知らず。

あはたのこころ

同國郡境、陣屋、驛市、新田、道路、社寺其の他の略地圖なり。嘉永二年己酉(二五〇九)の出版なり。

あはたのこころ

安房國地名考 本一巻 秦 樞丸

古昔古歌にある同國地名につき考證したるもの。寛政元年己酉(二四四九)三月、上總林忠の考訂するところにして、數枚に寫傳せり。

あはたのこころ

阿波十郎兵衛實記 一卷

寛文年間南海に十郎兵衛といふ海賊あり、法を犯し、邪惡を逞うして旅人を害する事一方ならざりしが、遂に積惡露顯して攝津兵庫の岬に梟首せられ、其の惡名を後世に遺つ。本書は其の一代の惡業を委しく記述したるものなり。明治十九年活刷に附せり。

あはたのこころ

あはたのこころ 一冊 山本 西武

著者の俳諧千句なり。寛文五年乙巳(二三三三)一月下旬の述作にかゝる。  
◎山本西武は京都の俳人。もと綿商なりしが、松永貞徳の門に學びて風外軒また無外齋と號す。著書には、砂金袋、句讀、何上草ついで子、萩の花、應筑波等あり。皆俳諧の書なり。晩年髪を剃り、寛元天皇の延寶六年戊午(二三三八)三月十八日、七十にて歿せり。

あはたのこころ

粟生系圖 本一巻

粟生氏系圖、即ち堂園自道長より、粟生永綱、將監、新衛門等に終る。『群書類從』卷百四十九に收む。

あはたのこころ

阿波名所圖會 二卷 探古室墨海

阿波一國の事實の綱要を記し、繁文を避けて、圖示を專にす。四國巡拜の道筋に倣ひ誌せり。文化八年辛未(二四七二)の作、同年武者小路實純卿の序、浪花隱士 壽亭龜雄の跋あり。

あはたのこころ

阿比於比 本一巻 伴 直方

假名遣に關する考にて、最初に、あひおひ、おしれ、おはすてやま等十二語の假名遣を考へ、次に「古言梯正誤」と題して九語等を論じたり。天保十二年辛丑(二五〇一)閏正月四日、著者の奥書に、「此の外にも、聊つづの誤は見ゆれど、假名遣にあづからぬは悉く省きぬ」とあり。

あはたのこころ

相生集 本二十卷 大鐘 義鳴

奥州日本松封内の地誌なり。山川、郷里の沿革より、古今の人事、名勝舊蹟の事等、あらゆる史書に據りて詳記考證したるものなり。『相生集』の名は、其の



あひおひ

例言中に「昔が二本の松の相生にいよ／＼榮えんことをこそ、とほきしてなりけれ」と説けり。天保十二年辛丑(二五〇)の自序、同壬寅(二五〇)の序あり。二十卷十冊に寫し傳ふ。

あひおひのいば

相生の言葉 一卷 宮部 義正  
義正夫婦の詠草、及び冷泉家附答の歌等を輯めたるものなり。此の中には冷泉爲村の詠歌あまたいれり。爲村の奥書に云へることあり。夫婦の歌がきあつめて、當家の文庫にきまめ置るゝ志をよるこびて、いもとせの中につもりしやまとうた、これぞ相生の松の言の葉よはひは高砂、道をおもふひとつ心は、住の江のふかき契りをこむる一帖になむ。安く永しといふ三つの年、やよひ中の八日、小倉山陰老権置覺と。其の題號の出所、及び成書の時代等知らる。安永三年(二四三四)は後桃園天皇の御世なり。

安鼻起農綱 三卷 清原 道舊  
宮部義正は、歌人なり。享保十八年癸丑(二三九三)生れ、三澤と號し、忠八郎と稱す。上州の人、高崎侯の太夫なりき。冷泉爲村の門に學びて和歌を善くす。妻、萬また歌に巧なりき。義正は教授を以て業とはなき、れど、門人甚だ多し。其の著書は本書の外、三澤類聚、三澤日記、三澤五百首、三澤千首、野邊の髪、同春集等あり。寛政四年壬子(二四五二)正月二十一日年六十にて歿す。

あびきのつな

安鼻起農綱 三卷 清原 道舊  
五十首に基きて、語源を論じたるもの。異國音之例

格、假字用標之意得、五十連音之起、單音一意之註、五十連音初生本義等を論じ、主として、一音義のこゝとを説明せり。天保十二年辛丑(二五〇)春の自序あり、同夏出版す。

あびだつていふこと

阿毗達磨俱舍論要解 十卷 僧 普寂  
「阿毗達磨俱舍論」は尊者婆伽藍豆の造るところにして、能く廣説の精要を攝括し、性相の綱記を提挈せり。此の書は論の縁起を明し、教起の意を明し、論の宗旨を辨じ、藏所攝を明し、翻譯の異を明し、論題目を釋し、更に文に隨ひて解釋す。明治二十年活版六冊に發行せり。

普寂の傳記は「華嚴經探支記發抄」の下にあり。會津學風申出 一卷 保科 正之  
幕府の詰問に對して正之の差出したる書類を輯めたるものなり。藤田東湖の跋文あり、曰く、我が相公、大道運轉せるを嘆き、臣等等に命じて上古の典籍を檢討せしめ、猶廣く諸家の學風などに心を用ひ玉ひけるに、會津は神侯以來、神道を尊崇し、垂加派などとして今に其の道を奉ずるものありと聞き玉ひ、其の學風の大意を、今の會津侯も問ひ玉ひければ、右の書き付三通、並びに冊子一卷を上れりと、臣等等に示し玉へり。因て之れを見るに、其の垂加派を奉ずるもの、言ふ所は、秘事秘傳など云へる鄙陋なる事にて、彪等の常に嘲り笑ふ所なり。水野彌太夫なるもの、言ふ所は尤のやうなれど

あひだつていふこと

會津學風申出 一卷 保科 正之

會津神社誌 一冊 服部 安休  
神名を掲ぐる、と天神地祇凡て二百六十八座、會津郡八十九座、耶麻郡七十六座、大沼郡六十二座、河沼郡四十一座等なり。其の安積郡越後下野の領地にあるものを省けり。寛文十二年壬子(二三三二)林春齋、林聖宇、山崎垂加等の序、吉川惟足の跋、及び自跋等あり。  
服部安休は奥州會津の人なり。

あひだつていふこと

會津道中記 一冊 會津領内往來の案内なり。全路の里程、方位等の略圖を示し、且、地理上有名の事には各々其の來由等を記して看者の實用に供せり。年代著者詳ならず。

あひだつていふこと

會津陣物語 十卷  
徳川家康會津征伐の記録なり。石田三成謀叛の事より、家康仙臺に使を遣せし事までの始末を記せり。此の書讀者をして悦ばしむるを主として編輯したるものなれば、其の文潤飾に過ぎ、却りてその實を失ふもの多く惜むべしと先輩既に評せり。

あひだつていふこと

會津日新館繪圖 一折  
會津藩校日新館の明細圖なり。講堂、講學寮、講塾舎、各武術鍛錬場、諸役所、教員詰所、番所、普請方、其の他、藥園、庭苑、廊下、泉水に至るまで、殘る隅

あひし

も、簡んで悉ます。たゞ、澤内新右衛門なるもの、兼て申出置しよしの書のみ其の見識學力を見るべしと云々。いはゆる澤内新右衛門の書付は滔々數千言、國學、歌學及び和漢の文體等に就きて意見を陳述し、卓見服すべし、簡少からず。  
◎保科正之の傳記は「會津風土記」の下にあり。

あひし

會津記 一冊  
家康に關する軍記の一部分なり。即ち慶長六年辛丑(二六一)六月、家康、上杉景勝退治のため、大阪を出づるに筆を起し、沿道諸國の攻伐落城等の事歴を敘し、遂に關ヶ原戰争に及べり。記者及び年月を記さず。

あひし

會津舊事雜考 三卷 向井 吉重  
會津領に於ける古來の雜事を考證せるものにて、時代は神武天皇に始まりて後水尾天皇の御世に至る、凡そ二二百年間の事件を録せり。就中地理的事件を主とせり。寛文十二年壬子(二三三二)の白跋あり。主命によりて編纂したるものなりといふ。  
◎向井吉重は會津の人にして、新兵衛と稱せり。「會津四家合考」の著あり。

あひし

會津紀行 一冊 源 高主  
寛延四年辛未(二四二)主命により江戶より奥州若松に至りて江戶に歸りたる時の紀行なり。和文にて記せり。

あひだつていふこと

會津軍記 四冊 杉原 親清  
徳川家康會津征伐の軍記なり。石田三成逆心あり、上杉景勝また異心あるに依り、會津に向けて進發せる事より、其の後景勝赦免せられて上落せしまでのことを記せり。延寶八年庚申(二三四〇)十月、國枝清軒の序に、「酒井讚岐左少將源忠勝麾下の士、杉原彦左衛門親清に命じて慶長庚子辛丑の會津戰伐の古事を輯せしむ」と云へるにて、著者及び年代を概知すべし。  
◎杉原親清は、杉原常陸介親憲の族にして、上杉氏の宿將なりといふ。

あひだつていふこと

會津見聞録 一冊  
會津御家風の事、官制の事、在所治法の事、衣服の事、刑法の事、裝束の事、學校の事、武備の事等の目に分けて記述せり。

あひだつていふこと

會津山水賦 一巻 林 恕  
會津の山水を賦したる長編にて、寛文七年丁未(二三二七)の作にかゝる。内閣文庫に特別書として藏せり。  
◎林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

あひだつていふこと

會津四家合考 二卷 向井 吉重  
「四家合考」の題下に解説せり。

あひだつていふこと

あひだつていふこと

あひだつていふこと

會津八幡續年日記 三卷  
奥州會津河沼郡稻川庄塔寺村なる正八幡大神宮の舊記なり。年代を逐ひて會津の沿革、變遷、及び舊來の異事出來事等を詳記したるものなり。右は八幡宮を奉祭して以來、年々早春に長嶺續年日記として仁王般若を誦し來りしが、天正十九年の比より、此の事やみぬるを後に追思して此の續年日記を作らるなり。

あひだつていふこと

會津藩職漆制度祕書 一冊  
會津藩に於ける職漆に關する制度法則を集録せるものなり。後花園天皇の寶徳年間より櫻町天皇の寛保年間に至る、凡そ二百九十餘年間のものを集め綴れり。編纂者、及び成書年月未だ詳ならず。

あひだつていふこと

會津風土記 一冊 保科 正之  
會津領内四郡の風土記なり。會津四郡の全圖を掲げ、封城、風俗、城封侯附郡村(田島戸口牛馬附)山川(原石湖泉附)道路(關梁附)土產、神社、佛寺、墳墓、人物、古蹟等の項目を分ちて詳細に其の風土を記せり。寛文六年丙午(二三二六)の作。同年山崎嘉の序、同十一年林恕の序、林憲の跋等あり。  
◎保科正之は松平姓なり。徳川二代將軍秀忠の第四子にして、慶長十六年辛亥(二二七)の五月七日に生れ、小字を幸慶と稱す。六歳の時信濃國



あひる

高遠の城主保科正光の養子となり、因りて保科氏を冒し、字を信濃と稱し、尋て元服して肥後守に任す。寛永二十年癸未(二三〇三)七月、會津若松城に轉封せられ、治績大にあらはる。寛文十二年壬子(二三三三)十二月十七日、六十四歳にて封地に卒す。神葬を行ひ、土津靈社と號す。晩年山崎闇齋を聘して性理の學を講せしめ、且、士民に之れを奨励したりと云ふ。著す所、本書の外に、輔養齋、玉語附録、心録、會津學風申出等あり。

あひるのうしゆぶんげんぢやう

會津領主分限帳 本一冊

會津領主歴代の略系、及び分限石高を記せるものなり。最初、茶名の祖、義連、泰衡退治の功を以て頼朝より會津を得たることより、轉じて佐竹、伊達、蒲生、上杉等の領となり、正保元年甲申(二三〇四)保科正之に封せられ、夫より世々相繼ぎて同容貞に至る。中に就きて保科氏の事を記すること、最も委しく、その生卒冠婚なども記し、更に府内市店の名、寺社工商の員數までを載せたり。寛文五年乙巳(二三二五)の作なり。恐くは保科氏家臣の手に成れるものなるべしといふ。

あひのきやうげんしやう

問狂言集 本三巻

春日龍神、朝長、那須、道成寺、翌月等都て七十九番の能の間語りを輯め記せり。今、天保五年甲午(二四九四)の寫本による。

あふん

押韻 本一冊 齋齋 急閑

あふじか

策を畫するに至れり。安政五年幕府の元老井伊氏の爲り、青蓮院宮、近衛左大臣等の幽せらるゝと等しく、同志と共に捕縛せられ、翌六年己未(二五一九)十月七日、江戸に於て死刑に處せらる。時に年三十五。刑に臨んで詩歌あり、曰く、排遣手欲掃妖突、失脚墜來江戸城、井底痴蛙過盛慮、天邊日月缺高明、身臨湯鑊家無信、夢破鯨濤劍有聲、風雨他年苦石面、誰顧日本古狂生、歌に曰く、よかる身は君が代思ふ真心の、深からざりしふるなるらん」と。

あふぎながし

扇流し 本一冊

古歌を輯めて、各、彩色畫を加へて扇面形に仕立てたるものなり。歌數すべて百〇二首あり、中には小倉の百人一首に倣ひて選び、扇流しの名は其の仕立の方によりて選びたるなるべし。作者、及び年代を詳にせず。

あふぎのき

扇之記 一卷 西村 義忠

和漢の傳記に由りて扇に關する古來の雜話を輯録したるものなり。挿畫あり。又扇の繪圖を附けたり。寛政五年癸丑(二四五三)正月の自序、同四年正月の自跋、及び同年六月伊藤善齋の跋あり。◎西村義忠は京都の和學者なり。一に合龍堂と號す。本書扇之記の外には其の著書多し。

あふじか

押字考 本一巻 伊勢 貞丈

あふじか

あふじかのぶ

阿佛乳母の文 一卷 阿佛 尼

藤原爲家の妻、阿佛尼が其の子紀の内侍に遺したる書翰の長文章なり。修身の方、奉公の法、及び佛

あふじかのぶ

阿佛坊道之記 一卷 阿佛 尼

一名「十六夜日記」の下に解説せり。

あふじかのぶ

阿佛尼海道記 一卷 阿佛 尼

京都より鎌倉へ下る和文の紀行なり。阿佛尼東くたりと異名同物にして、固有の名は「十六夜日記」なり。因つて性質、年代、註釋、著者等詳しくは同書の下に解説せり。

あふじかのぶ

阿佛尼東くたり 一卷 阿佛 尼

古人の花押を考證したるものなり。即ち古來の花押を擧げ、一々に例據を引きて論證し、且、押字に五體あることを辨じ、又、後世、花押を例と稱する事の誤なること等を論じたり。卷首に「和漢押字」と、白石翁の同文通考に其の誤を盡せり。今、更に何をか云はん。然れども少しく思ふ所を左に記すのみ云々と云へり。其の趣意の一端を知るべし。◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

あふみおぼし

淡海落穂集 本三冊

往古以來徳川氏中葉に至るまでの近江の國に關する歴史上の事實を輯録したるものなり。従つて國中町村の沿革等をも、雜へ記せるなり。同國の沿革地理等の研究には此上なき参考たるべし。年代著者共に詳ならず。

あふみをん

淡海温故錄 四巻

近江一國の歴史地誌なり。即ち歴史的事實を主として名所、舊蹟、山川、湖島、郡村、神社、佛閣、風土等に關する事を各郡別に於て、諸史雜記によりて證明したるものなり。古歌古詩等も、皆、之れを引きて證明の用とせり。近江の歴史地理の研究には價値ある参考書なり。

あふみち

近江地誌 本一巻

近江國十二郡を分書して、各郡下に村名、石高等を記し、次に國中の行程、陸行、舟行、四隣、産物、社寺、名所、舊蹟、古戦の年月、武將の姓名等を記せり。

あふみち

近江地圖 本一冊

近江一國の簡略地圖に道路里程町村等を主として誌したる舊地誌なり。著者及び年代詳ならず。

あふみのくにんそんき

近江國郡村記 本一巻

近江國十二郡の各郡村名を列擧して石高上り高を記し、各郡總高一國總高を擧げ、更に領主の名、所領高地名等を列載す。

あふみのくにんけんし

近江國細見圖 一鋪 山本 重政

一國を圖して「近江國大繪圖」と題せり。領主附、名所、舊蹟、名物、土産、及び諸方への道程等を記せり。寛保二年壬戌(二四〇二)に版行す。◎山本重政は河内の人なり。

あふみのくにんけんし

近江國地圖 本一鋪

近江國、夫上、愛知、神崎、蒲生、甲賀、野洲、栗本、滋賀、高島、伊香、淺井、坂田の十二郡、各村名を色符し、他國よりの道路を記し、湖中彦根より諸方への船路九十三所を示す。各郡の石高村數、及當國總高を記し、元禄十四年辛巳(二三六二)二月、非伊掃郡頭、本多隠岐守、鳥居掃磨守等の署名あり。

あふみのくにんけんし

近江國番場宿蓮華寺過去帳 一卷

あふみの



あふみの

軍人戦死者の過去帳なり。元弘三年癸酉(一九九三)五月九日、近江の國馬場宿米山の麓、一向堂の前に於て合戦ありし時、討死自害したるもの、姓名二百餘名を列ね、間に年輪、辭世等をも併せ記し、更に後に各々の法名を掲げたり。『群書類從』五百十四の巻に收む。著者は蓮華寺住職とのみありて、其の名を記さず。

あふみのくにつらばあきんそき

近江國別浦八幡縁記 本一巻

近江粟津森八幡宮の沿革來歴記なり。最初八幡大神の御系譜を掲げ、天武天皇の白鳳三年乙亥(一三三五)字佐八幡の託によりて近江粟津森八幡宮に臨御ましくたること、此の後漁人等の之れを別浦と稱へしことより、終に後鳥羽院の元暦年間(一一九三)に社家焼失の事、土御門院の建仁中同社再興の事、後土御門天皇の應仁元年丁亥(一一二七)謂はゆる應仁の大亂に寺宇民家滅亡したることまでを録せり。著者詳ならず。『群書類從』神祇部七十四の巻に收めらる。

あふみのくに

近江風土記 本一巻

『大日本總國風土記』第十八、淺井郡の部なり。嘉慶二年戊辰(一〇四八)四月上旬、左中將藤原元隆寫本の奥書あり。右風土記殘冊之中、近江國淺井郡の餘卷、求閑院大臣家之藏本、以官本途校讀畢しといへり。

あふみみすんところうたあはせ

近江御息所歌合 一巻

近江御息所に於ける歌合の歌集にて歌數凡そ二十首を集めたり。奥書に、「四條大納言公任卿以三手蹟本(寫留者也)とあり。年月詳ならず。『群書類從』二百十三の巻に收む。

あふみめいしよづゑ

近江名所圖會 四冊 秋里 離島

近江の國の名所圖繪を掲げて、各、その由緒、沿革、景致等を詳に説明したるものなり。且同國の歴史、風俗、産物、又は俗語俚言等をも示し、まゝ關係ある故人の傳記をも載録せり。編書の詞、此の書の範圍を知るに足らむ。曰く、「此編は江湖の勝槩を専らにして湖の四邊は官道の順路に隨ひ、行程の歴る所は無用の地名と雖も、悉く連續す。海道の外は眼涯の及ぶ所の名區は洩さず、本文の條下にまゐるす。三道の外は後編に譲りて、ここに載せず。追て編輯して全備ならしむ」とあり。而してその所謂後編(五卷)は同書の卷末廣告に記しあれども、未だ現本に接せず。本書は卷の一に江南、卷の二三に江西、卷の四に江東の部を記せり。文化十一年甲戌(一四七四)四月の新刻に係る。編輯には秋里離島泰石田の二人あたり、晝は、郡園月、西村中利の二人従ひ、浪華の書林、藤原忠兵衛、河内屋喜兵衛、河内屋太助の合梓するところなり。

◎秋里離島は京師の人なり。名を舜福、字を湘夕といふ。著書には、郡名所圖會、同捨遺、郡林泉名勝圖會、河内名所圖會、和泉名所圖會、攝津名所圖會、伊勢路名所圖會、同後編、東海道名所圖會、攝州名所圖會、木曾名所圖會、住吉名勝圖會、須磨明石名所圖會、

あふみよ

圖會、俳諧早作傳、佛撰拾引節用集、花月名所、繪本年代記等あり。

あふみよちしりやん

近江輿地誌略 本百卷 寒川 辰清

近江國地誌の最も詳細なるものにて、第一卷引書目と總目とのみにて、其の引書の數實に四百八十四部に及べり。第二卷以下に建置、沿革、國郡縣鄉莊、村保、里町、國府、御所等の名義より、藩封、國造、國司、國守、介、様、目、郡司、庄司等の事以下城地道路を記し、各郡別に、山川、鄉村、社寺、名所、舊蹟、人物、土産に至るまで、あらゆる地誌的事項を網羅詳述せり。凡例は編者の心構を見るべし。郡の序次廣狹に拘はらず志賀郡を始めとす。これ大津あるを以てなり。大津は近江の廣邑にして、東西南北の通路みな之れによる。故に開卷大津を以て始めとす。また人物の編、此國に産せし人を記す。産士と雖も有功なきは記さず。小藝と雖も人口に膾炙するは記す。佐々木數代の戦、姊川の役、淺川の陣に首級を得るほどの士は萬を以て數へり、故に、これを省く。遺漏せるにはあらず。佐々木義實、義秀、義郷の如きは偽名にして其の人なし。江源武鑑、及び近世の偽書これを記す誤りなり。又行程の編は、專、諸國の道路を記す。膳所を以て樞要とするは、吾が住める地を以てして書すが故なり。又、凡そ郡ごとに、其の郡の由て來る所、疆界等を記し、其の下に村々を屬す。條ごとに圖を畫て標題とす。神社、佛宇、古城跡、古塚、山川、みな其の下に屬す。よつて其の村より一段低し、亦其の村内の神社、佛宇等の界内にあるものは、其の村の字頭より

あふみの

あふみのくに

阿芙蓉疑聞 本八冊 鹽谷 世弘

有名なる清英鴉片戰爭に關する論文記録を蒐めたるものなり。著者の序文に「今觀、清鴉片之禍、其由不、咸、予、腹、痛、歟、蓋鴉片之禍、自、澳門、居、西洋諸夷、始、夫、諸夷之居、澳門、從、明、中、葉、一、清、治、而、不

あふみのくに

あふむの言の葉 本一巻

一段低し。其の以下皆かくの如し云々、詳細に記したり。近江の舊地誌に關する著述多き中にも、其の事實を網羅せること他に之れに及ぶものなし。享保十九年甲寅(一三九四)伊藤東涯の序あり。全部百卷四十冊に寫傳す。

あふみのくに

あふむの言の葉 本一巻

教訓となるべきことを書き記して、人に與へたる和文體の隨筆なり。徳をつゝしむ事、學問、下情、君臣、賢才、祖宗の法、流弊、風俗、禮、樂、政教、人情の理、政、任官、賞罰、生財、名器、淺微、山川、利義等の項目に就きて面白く通俗的に物したるものなり。末文に「かゝる事はたれくも存じ候ふ事、何の書にも有之事ながら、格別御心易きにつき見おぼえ候事書さるし候。……みなく、これらも人の口まればにてゆめ／＼行ひえたる事は無之候。御心付ひとへに御れがひ申候。口まねにうち思ふまいなかくもまたひまにあふむのことのはでかし」といへり。年代著者を詳にせざるは遺憾なり。

あふみのくに

阿芙蓉疑聞 本八冊 鹽谷 世弘

有名なる清英鴉片戰爭に關する論文記録を蒐めたるものなり。著者の序文に「今觀、清鴉片之禍、其由不、咸、予、腹、痛、歟、蓋鴉片之禍、自、澳門、居、西洋諸夷、始、夫、諸夷之居、澳門、從、明、中、葉、一、清、治、而、不

あぶらかす

油 糟 一冊 松永 貞徳

山崎宗鑑の前句を借りて、それに附句を試みたるものなり。淀河、御余の二書と合せて、貞徳三部の書といへり。寛永二十年癸未(一七〇三)出版す。近年發行の俳諧文庫第二編「芭蕉翁以前俳諧集」上巻の中にも收む。

あべのゆめものがたり

阿部家夢物語 本一巻 阿部 定次

◎松永貞徳の傳は、歌林雜話の下にあり。

あべしけいづ

安部氏系圖 本一巻

阿部四郎兵衛定次の自記なり。松平記(七卷あり)の首巻にして天文四年乙未(一一九五)より同六年までのこと數條を記せり。卷末に六月二日阿部四郎兵衛入道定次と書せり。

あべしけいづ

安倍氏系圖 本一巻

安倍氏系圖。即ち孝徳天皇の元年六月始めて左大臣に任ぜられたる倉橋藤原より、天文博士家氏、及、仲道に終る。『群書類從』卷百七十に收む。別本一編(二編の内一編)亦、同書同卷にあり。

あべしけんしよ

安部十全書 一巻

本書は醫書にして皇朝醫書便覽に「此の書道三の所選にして紀州粉河の邊に藏する家ありと云へども詳かならず」とあり。

あべせいしんしよ

安倍正統支族系譜 本一巻

安倍倉橋藤原の後裔たる、安倍氏の正統支族の系譜なり。

あべしけんしよ



あまのせ

あまのせ

安部晴明記 五卷
陰陽家安部晴明の詳傳なり。學才、見識、經歷等、終始假名書に物し、繪畫を挿みて詳細に記述した。まゝ俗説に近きものあり、正確なる史料にはあらず。巻首には太田草の序を掲ぐ。

あまのせ

安倍仲磨入唐記 四冊 僧 誓譽
安部仲磨が入唐の次第、即ち唐道傳來の用意、及び在唐中の事績を詳叙し更に其の詠歌に就ての異説等を列れ、最後に阿部晴明の唐道傳などを擧げたり。行文鄙俗にして記事往々怪誕に渉るの嫌なきに非ずと雖、まゝ参考するに足れる節も少からず。寶曆七年丁丑(二四一七)の刊行に係る。

あまのせ

亞墨竹枝 一卷 井上 默

井上默の詩集なり。天保十四年癸卯(二五〇三)阿波の國撫養浦の舟子初太郎といふ者、漂流して米利堅より歸る。其の説話を聽きて作れる所にして、凡そ二十八首あり。毎編其の事實を註して讀者に便せり。弘化二年乙酉(二五〇五)前川文の序、秋田晴吉の跋、翌三年廣瀬建の序及び後崎強の序あり。

あまのせ

葵祭御蔭神事記 本一巻

賀茂兩宮に於ける葵祭りの由來及び御蔭の神事行列を略記せるものなり。

あまのせ

尼草有馬原覺書 本一卷

天草一揆の軍功始末記なり。抑も天草一揆は、浪人瀬川次太夫、矢木庄兵衛、樋口權太夫、伊野太左衛門、小谷治右衛門、安井喜之助等異宗の徒蜂起せるより、上使松平甚三郎、立花左近將監忠茂等の城攻したることなるが、本書はこの軍に軍功をあらはしたる事實を筆記したるものなり。著者は書中記名の所、盡く安井喜之助の名、末にあれば或は同人の筆記なるべしともいへり。

あまのせ

天草覺書 本一卷

天草一揆の覺書。松平伊豆守家中の日記より抄出したるものなり。文化十四年丁丑(二四七七)藤原勝榮の奥書あり。見聞雜記の第十一にあり。

あまのせ

天草軍記 本二巻

天草島原に於ける一揆征討の軍記なり。或は島原軍記とも稱す。切支丹宗の浪人集合蜂起したるを征伐討せる記事なるが、當時の現筆にあらで潤色を加へたる後の記事なりと先輩も云へり。其の體の整然完結せるよりするも然るべし。附録に小笠原氏の武備に關することを略記するを見れば同藩士の編ならざるべきか。末に備信原が天明六年丙午(二四四六)の跋あり。

あまのせ

あまのせ

天草軍記 本七卷
天草一揆征伐の軍記にして、初め一揆の起原より一揆蜂起の事及び、終に征伐平定の顛末を詳述す。全部七卷六十餘項に分つ。

あまのせ

天草征伐記 本十八卷 田丸 具房

天草一揆征伐の顛末を詳述す。最初耶蘇教の初めて吾が國に傳來せしことより、天草一揆の起因、景況、及び征伐の始末等、項目を分ち、順序を立て、詳細に記述せり。野史として、又參考たるべし。

あまのせ

天草備考 本三卷 上田 宜珍

幾多の古書に據りて、肥前天草の變遷沿革より、地誌、歴史に關する雜事を記載せるものなり。享和二年壬戌(二四六二)東肥前江公正の漢文序あり。三卷二冊に寫傳す。

あまのせ

天草物語 三卷

一名「島原合戦記」の下に解題あり。

あまのせ

尼子晴久夢想被百韻 本一巻
夢想と題せる連歌百韻より成れり。其の内、御(二

あまのせ

あまのせ

天岩戸初日門松 一卷 東西庵南北
於染、久松の終始を主として作れる小説、即ち全卷

句、申歲(一)、久丸(一)、與(一)、卯歲(一)、酉歲(一)、辰歲(一)、宗養(九十)等の作に係る。續群書類從二卷四百八十一、連歌部第十一に收む。

あまのせ

天神壽詞節釋 本一卷 三好 義英

中臣壽詞を註釋したるもの。本文の一句一句につき、助辭に至るまで詳細に註釋す。

あまのせ

天津皇産靈考 本一卷 佐野 經彦

人生産靈の事につき、古典によりて研究考證したるものなり。

あまのせ

天津祝詞考 一卷 平田 篤胤

天津祝詞の詞に就きて考證したるものなり。延喜式の大祓の詞の中に「天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮如此乃其波」とある天津祝詞といふは、即ち大祓の詞なりと、先輩の説きたるを、著者は之れを非として、別に祝詞の詞ありといふ事を考證論定したるものなり。文政五年壬午(二四八二)の自序あり。

あまのせ

天岩戸初日門松 一卷 東西庵南北

於染、久松の終始を主として作れる小説、即ち全卷

あまのせ

天野遺話 本一冊 天野彌五右衛門

古教訓書、古書翰並に諸家の遺書類を集めたるものなり。即ち井伊直孝が嫡子直澄に贈れる遺書、立花宗茂が本多忠勝に答ふる武邊の心得書、松平信綱の行狀、松平綱政の物語、太田氏に授る石壁築様口傳、其の他の數編を收む。史料の參考たるべし。著作の年代及び編者の傳詳ならず。

あまのせ

天野系圖 本一卷

天野氏系圖、即ち淡海公の一男南家の祖贈太政大臣武智勝より、治部卿參議從二位乙磨、右大臣中衛大將是公、正二位大納言雄友等本枝數十代を経て、應永七年庚辰(二〇六〇)八月十日安藝守に任ぜられたる。天野修理亮秀政、支藩助景道、天野彦三郎景助に終る。續群書類從「百六十一」の卷に收めらる。別本一冊、亦同書同卷にあり。

あまのせ

白水郎子紀行 本一卷 岡西 惟中

天和二年壬戌(二三四二)夏四月より、伊豫、讃岐、備前、備中、安藝等を漫遊したる時の紀行なり。父母に分れ妻子を失へること、旅行を企てたる因縁等より書き起し、詩歌、俳句等をも載せたり。

あまのせ

猿の子物語 一卷

あまのせ



あまのつゆ

璽の子が兼光少將の妻と生れあひたりといふことを種として書き綴りたる物語なり。寶物集第五に曰く、難波の浦の璽の子は十六年といふに願力に依て兼光少將の妻と生れあひたりとぞ。海士子の物語には申たるぞ。願の志かくの如き事に侍る故や。無下に近づくの事には侍らざるや云々とあり。

あまのつゆ

享保延享の間須磨にありて詠み出でたる歌の集なり。諸歌百首あり。末に「此一帖をくりかへし見て、須磨の浦の煙となさでもし草、かくもはかなき璽の嶺、虚空庵似雲」とあり。題號の出所知らる。◎似雲は虚空庵と號す。

あまのつゆ

熱海入湯の紀行。寛文四年甲辰(二三二四)阿波侯の夫人某が江戸を立ちて、伊豆の國熱海の出湯に遊びし時、隨行せし某女子の作りたる和文紀行なり。

あまのつゆ

當代に於ける政教の一斑を論じたるものにて、其のかきかたばや、折たく柴の記をまねたり。其の序に「新井白石翁の折たく柴の記を見て、此の文つくり侍るべしと思ひ立つて筆をとり初めし、不敵にもまがましけれ。さはさりながら元來家の外に出すべき物にもあらず。子孫なんどの往々公につかふまつるべきにも、君の御恵みを忘れず。

あまのつゆ

に限り、其の大略を圖したるものなり。此の地北より南へ、海に出る事二千二百二十九丈、南北の淵さ九十二丈と記せり。

あまのつゆ

海人藻芥 三卷 惠命院宣守 僧部法門中の典度禮格、官職の故實を主として記述し、傍ら禁中の事に及べり。其の題號の由つて出づるところは、著者が自詠にかゝる「はかなくもかきあつめたるもしほぐさ、いやしきあまのつゆ」ともみよといへるに基きしなり。これ間接の縁によりて名けたるものにて、内容をおらばはしかめる題號といふべし。伊勢貞丈の武器考證に、海人藻芥は應永二十七年庚子(二〇八〇)之れを著すと見えたり。元禄七年甲戌(二三五四)の版行なり。著者に就きては本書なる無名氏の跋に、右三卷は惠命院内大臣權僧正の作なり。後に大勝金剛院僧正といひたりし由を記せり。

あまのつゆ

天野屋傳 一巻 一巻 義士傳附録として、天野屋利兵衛の傳を漢文に綴りたる數枚の寫本なり。

あまのつゆ

安間平治由緒書 一巻 安間平治彌 徳川家康の臣、安間平治彌といふもの、経歴勤勞を記したるものなり。即ち同人が家康が甲州武田と連年戦争の比、其の麾下に屬しし「特功を

あまのつゆ

立て、家康より俸祿居宅を得しこと、平治彌の名を得しことなど細に同人の由緒経歴を記せり。◎安間平治彌は遠江の國磐田郡見付住居の浪人なり。其の祖、はじめは河内に在り、元弘建武の比、楠正成と共に官軍に屬し、中古今川氏に服し、後遂に家康の臣となりしものなりといふ。

あまのつゆ

雨夜三盃機嫌 二冊 木笛庵瘦牛 花街の遊人を題詠したる狂詩集なり。各遊客の雑名を作り、そ一首中に詠み入れて凡て九十八首をなせり。室町邊大福長者の子に敬と行きぬけたる風流男あり、其の人あまりに花街に耽りて、終に父に追はれて嵯峨山の麓に里すみとなれる、若隱居垂羅軒無職といふ者が、杉の葉、檜柴など折くべて藥罐の尻をふする片手に、いにし悪性の忘れがたくて、ぼつ／＼かきつけたりといふ。浮世の色の大寄狂歌九十八首を集めて、各圖繪を挿入せり。それを京都、江戸、大阪三箇國の同好に土産とし分たんとて版行したるものなりといへり。其の名の起りは、水道一盃、難波一盃、白河一盃、此の三水を呑む人のならぬ事ども、すさまじく其の品定め定めれば、これなん雨夜の三盃機嫌とは名付け侍るか」と云へり。以て其の成立をも知るべし。元禄六年癸酉(二三三三)京都に於いて物したるは、木笛庵瘦牛なり。

あまのつゆ

折折親のむかしを思ひ出る媒にもなりなん。よしや流れて傳ふるあとのつたなきにもせよ、賢きにもせよ、いさゝか公の事心得る助けにも残さまほしくて、例の愚なる筆にまかせて記してゆくに云々とあり。孝盛晩年に、先手より火付盜賊改を勤務せしが、之れを罷められしを憤り、卒に此の編を艸したるなり。書中載するところ、寛政改革の一斑より、定信朝臣の逸事、當時の名臣矢部定謙、中川忠英、長谷川宣以等の遺聞を傳へ、且は教化の隆夷し、士風の愉情に陥りたること等を論じたるなり。◎森山孝盛の傳は「殿のなだまき」の下にあり。

あまのつゆ

雙天橋立 五卷 十返舎一九 仇討小説なり。丹後の國日下部藤彌太といふもの同僚大見崎、飯貝の兩人に殺されしより藤彌太の二人の妻の父の仇を復せし始末を綴れる者なり。文化三年丙寅(二四六六)初め二巻を刊行し、次の二巻と最後の二巻とは順次その翌年に刊行せり。◎十返舎一九の傳記は「道中膝栗毛」の下に掲ぐ。

あまのつゆ

天橋立圖 一冊 丹後國與謝郡天橋立を圖したるもの。東は宮津城より、西は岩瀧に限り、南は海が磯より、北は江尻に連歌附句等さまざまの體あることを導かしを、雨夜のため書つたりて、師の校閱を乞ひたる書なるよし、永正十六年己卯(二七九)五月の自跋に見えたり。◎柴屋軒宗長は連歌師なり。文安五年戊辰(二一〇八)駿河島田驛なる鍛工の家に生る。幼にして敏慧なりしかば國主今川義忠召して左右に近侍せしめたり。嘗て連歌師宗祇の弟子となりて門中に秀づ宗祇の新菟玖波集に宗長の句の入れるもの二十八首あり。宗祇の死後宗長を推して花下の宗匠とせんとしたれど遂に固辭せり。宗長の號は天徳を経て賜るところなりといふ。連歌の祖典を究め、其の名愈四方に著る。享祿五年壬辰(二一九二)三月十六日八十五歳にて歿す。

あまのつゆ

湯淺 二元禎 古名士の逸話等を集めたるものにて板倉重昌、細川忠興、水野勝成、紀頼宣卿等其將名士の殊勝なる事實を述へ、或は之れを品評したるものなり。巻首に「秋雨のよはに寒く、燈を剪て古き物語をかきあつめれば、さてなん雨夜のともし火といふべし」と、題せしより書名を得しなるべし。寛政十二年庚申(二四六〇)の小牧屋喬の奥書あり。◎湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

あまのつゆ

雨夜の名古李 一巻 千歳 一 稿保己一以下檢校三十餘家の詠歌を集めたるもの

あまのつゆ

雨夜記 一巻 柴屋軒宗長 連歌に関する隨筆なり。著者としる其の師宗祇

あまのつゆ

源氏物語帯木の卷、雨夜の品定めのところを註釋したるものなり。婦女子の爲め本文の首傍に俗語を以て詳解せり。其の趣意は紫女七論中に源氏物語雨夜の品定め條も同じく讀みやすく物したらしといへるによりて、或る人より多くのむすめどもの教へになるべきやうとて請はれたれば、斯く俗語交りに易解したる由、其の自序附言等に見えたり。巻首に上田秋成の序あり。明和六年己丑(二四二九)の作。安永六年丁酉(二四三七)初夏の上木也。◎加藤宇高伎(或は美樹と書す)は、和學者なり。靜の舎と號し、大助と通稱す。享保十年乙巳(二三八五)江戸に生れ、幕府の大番の士となり、歳二百三十歳を食む。賀茂筑洲に從學して、同じく古風を唱へ、京攝の地に門人多し。著すところは、本書の外、

あまのつゆ

なり。歌數凡そ二百數十首あり。安政四年丁巳(二五一七)二月纂輯したるもの。纂輯補助としては檢校松重一、同風香一従へり。著者千歳一は檢校なり◎宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。



あみだき

静舎歌集、静舎雜著、古事記解、土佐日記注、伊勢物語注解、古葉法解、假名問答、假名類聚、木曾路之記等あり。安永六年丁酉(二四三七)六月十日、年五十三にて歿せり。

あみだきやうきんせんせう

阿彌陀經欣厭鈔 三卷 僧 性均

阿彌陀經を註釋せしものなり。阿彌陀經は彌陀の淨土の莊嚴の相等を説きたる經文にして、本書はこの經文を註釋したるものなり。本書の外、阿彌陀經を註釋せし未だ甚だ多し。今其の中の主要なるものを擧ぐれば阿彌陀要解俗談、阿彌陀經鼓吹、阿彌陀經義要、阿彌陀經類宗鈔、阿彌陀經私集鈔其の他數種あり。

◎性均の傳は「新選發心傳」の下にあり。

あみだじりやうきんせんせう

阿彌陀寺略縁記 一卷

長州赤間關聖衆山阿彌陀寺は、貞觀年中、僧行教の草創したるものにて、元暦二年乙酉(一八四五)壇浦の戦に、入水し給ひし帝、及び二位尼を葬りし寺として、陵上に御廟を建て、後鳥羽院の敕によりて伽藍を再興し、許多の莊園を附し給ひたる等の事を記載せり。

あみだばたかものたり

あみだばたか物語 一冊

彌陀の教理を解して安心起行を説示したるものなり。上下二巻中の項目は「休と爲思と問答の事、十萬億土遠からざるなり、西方を淨土とし給ふ事、十

あめのみ

萬億土衆生の五體に仰りてある事、諸佛菩薩一體の事、一體の佛諸佛と成り給ふ事、諸宗一理の事、諸宗分れたる事、阿彌陀の教に従ひて往生し易き事、觀念の事、はうれん一枚起請の事、つとめのさほうの事、ぜんだう發願の事、光明遍照の事、願以此功德の事等十五條ありて、皆佛敎の至理、彌陀の教法等縁に因つて説教したるものなり。明暦二年丙申(二三二六)初春の刊行に係る。惜むらくは著者を知らざるを。

あみこきやうきんせんせう

網繁鯨繪解 一巻

捕鯨漁船の圖に就き其の成立方法を明細に解説したるものなり。漁家の參考たるべし。著作の年代、及び著者の姓名等共に詳ならず。

あめだまりおこしたてならびにどりはからひかたのる

雨溜起立並取計方の類 一冊

幕府評定書より引續きて内閣文庫に保存せる書類にして、享和元年辛酉(二四六一)のものなり。

あめのいほばえ

天石笛 一卷 宮内 嘉長

平田篤胤が天石笛を得たる次第を具に記述したるものなり。文化十三年丙子(二四七六)下總國にありて濱村の八幡宮に詣り、ふと此の天石笛を得たり。抑、天石笛とあるは皇孫瓊々杵命の天降座せる時に、積羽八重言代主神の製らして祝き奉り玉へるものなりといふ。篤胤偶然之れを得たることとのる。

あめのみ

静舎歌集、静舎雜著、古事記解、土佐日記注、伊勢物語注解、古葉法解、假名問答、假名類聚、木曾路之記等あり。安永六年丁酉(二四三七)六月十日、年五十三にて歿せり。

あみだきやうきんせんせう

阿彌陀經欣厭鈔 三卷 僧 性均

阿彌陀經を註釋せしものなり。阿彌陀經は彌陀の淨土の莊嚴の相等を説きたる經文にして、本書はこの經文を註釋したるものなり。本書の外、阿彌陀經を註釋せし未だ甚だ多し。今其の中の主要なるものを擧ぐれば阿彌陀要解俗談、阿彌陀經鼓吹、阿彌陀經義要、阿彌陀經類宗鈔、阿彌陀經私集鈔其の他數種あり。

◎性均の傳は「新選發心傳」の下にあり。

あみだじりやうきんせんせう

阿彌陀寺略縁記 一卷

長州赤間關聖衆山阿彌陀寺は、貞觀年中、僧行教の草創したるものにて、元暦二年乙酉(一八四五)壇浦の戦に、入水し給ひし帝、及び二位尼を葬りし寺として、陵上に御廟を建て、後鳥羽院の敕によりて伽藍を再興し、許多の莊園を附し給ひたる等の事を記載せり。

あみだばたかものたり

あみだばたか物語 一冊

彌陀の教理を解して安心起行を説示したるものなり。上下二巻中の項目は「休と爲思と問答の事、十萬億土遠からざるなり、西方を淨土とし給ふ事、十

あめのみはしらかうしよ

天之眞柱考證 一卷 鶴峰 戊申

「天之眞柱」の所論を考證したること名の示すが如し。人智は限りあり、天地の理は究りなきより、之れを理論にのみ訴へずして、其の證據を引きて天柱の理證を説明せりといふ。文政四年辛巳(二四八二)十一月二十八日の筆なり。同文政六年春出版す。◎鶴峰戊申の傳は「神階録」の下にあり。

あめのやまた

天ノ八衢 一卷 岩下 貞融

神道の事を記したるものにて大項を二道、幽事、顯露事、惟神、鎮魂、言靈等に分ちて論述せり。其の巻頭に二道、四教の圖解をなし、「おのれ二道四教をかきなへ、やがて其を天八達之衢としも名つくるは、これみな高天原の神事なるをあらはすなり。今更に其の圖を製りて、其が下に外國書の上をさへにとりいでてまゐるせるは、外國書もみなわが神典の註脚なるをまめすなり。」云々とあり。嘉永元年戊申(二五〇八)寺門良、岡部春平の序あり。同二年己酉の八月版行せられたるものなり。

あめのやま

雨の舎 二巻 加藤 敬豊

◎岩下貞融は信濃國の國學者にして、姓、滋野を稱し、通稱を多門、字を會侯といひ、櫻園、管山等の號あり。著書は本書の外に、櫻園雨後、不繫舟、善光寺史略、善光寺別當傳略等あり。或は信濃善光寺の樂人なりきといふ。慶應三年丁卯(二五二七)歿す。歳六十七。

あめのみ

武藏國裝飾郡の地誌なり。同郡中のあらゆる名勝古蹟神社佛閣、名木奇石等、其見聞に隨ひて記載し、往々自詠の和歌を加へたり。享保十八年癸丑(二二九三)の自序、藤舞政の跋あり。二巻一冊に作られたり。

あめりかごんかん

亞米利加御返翰 一卷

亞米利加御返翰の時もたらしかへしたる返翰を編輯し、嘉永六年癸丑(二五二二)合衆國使船來航に關する雜事を附記したるものなり。

あやしのへん

綾緒之反轉 二巻 前田 夏蔭

林國雄の「詞の緒環」の誤謬を、指摘評論したる語學の書なり。綾緒の名は「詞の緒環」の原名「詞の綾緒」により、「反轉」は機械の具の「くるべき」反轉」と云ふに取れり。

あやしき

あやしき 一冊 芳賀 一品

一品、秋風の雨吟俳句にして、天和三年癸亥(二三四三)の作にかゝる。

◎芳賀一品は京師の人にして、名を治貞といひ、冥靈堂、崑山翁等の號あり。鶴冠井令徳の門に出て、檀林派の俳人として名あり。また畫を善くせり。著書は本書の外に、萬水入海、丁卯集、一塵重山、八宗懸隔等あり。寶永四年丁亥(二二六七)四月二十八日、五十六にて歿す。或は云ふ六十有餘と。

あめのみ

始末を、當時隨行したる宮内嘉長、石上鑿通の二門人が記述したるなり。それは篤胤が石上に、「この笛得つることの趣きは、そこと嘉長とが、よく知れ、國に歸りて、後いとまあらむとき、二人してそのあらましをかき記しおきてよと、のたまはすに、かしこまりてなむ」と、書最後に記せり。光格天皇の文化十四年丁丑(二四七七)三月十五日述作したるものなり。

あめのはれま

雨のはれま 一卷 虛 白齋

種々なる教訓的雜語を物語としたるものなり。凡て十數項あり。毎項狂言を挿入す。著者は、書肆のものとめまかせて、反古の三つ五つを採出し、雨のはれまと題して、榎本兩やどりの後につくといへり。天明六年丙午(二四四六)初春の作なり。

◎虛白齋は京師の俳人なり。弘化四年丁未(二五〇七)十月下旬歿せり。

あめのみはしら

天之眞柱 一卷 鶴峰 戊申

天地國土の義に就きて考證したるものなり。卷首に書して曰く、「神代以來の眞義、若今日の事實に徴すべし。唯天地國土の説のみ諸説紛々として、學者の惑ふところ少からず。故に今海内談天の說を通考し、以て神世傳來の眞義に徴し、同學の士に示すにん」と。文政元年戊寅(二四七八)の著、同四年刊行せり。

◎鶴峰戊申の傳は「神階録」の下にあり。

あやせんせいぶん

綾瀬先生遺文 二巻 龜田 綾瀨

著者の漢文集なり。雜體凡て六十一編を収む。嘉永七年甲寅(二五二四)關宿儒官男龜田長保の編せることなり。

あやしき

綾 錦 三巻 菊岡 清涼

最古來の佛語宗匠の系統を糺して之を詳にし、又、古今作者の發句を集め、更に句合歌仙等の雜事を記したる者也。享保十七年壬子(二二九九)の自序中に、「因是遂以古書爲力、中略略老謙之前、拂其聒上之塵、近任其所知、各選我持量、次第々々猶蜘蛛之繩系、綾錦之分、以爲此書題號云爾」とあり。

あやめ

文 布 二巻 倭 文 女

賀茂眞淵の門人倭文女の歌文集なり。散り遣りと題して其の遺稿の歌を入れ、且、下巻には倭文子の菜石に書きたる眞淵の文、及び朋友の哀悼の歌等をも輯め添へたり。寶曆八年戊寅(二四一八)六月に物したる村田春道の序あり。

◎倭文女は歌人なり。享保十八年癸丑(二二九三)に生る。其の人となり恰爾温順にして、慈愛に富み、加茂眞淵の門に入りて歌文を學ぶ。十八歳の時

あやめ



あやのこ

伊香保組行を作る。その文體の絶妙なる先進の士...

あやのこ

綾小路俊量卿記 一卷 綾小路俊量...

あやのこ

あやの松 一册 芳水...

あやのこ

白糸 阿屋女草 一卷 鶴亭 秀賀...

あやのこ

菅浦前操の弦 一卷 近松 半二

あゆひせ

冠子、松洛、関介、出雲の合作に係る淨瑠璃本なり。

あゆひせう

あゆひ抄 六卷 富士谷成章...

著者の俳句にて、元禄十四年辛巳(二三六一)京都...

あゆひせう

荒川主水光利が一生の武勇事歴を記したる小説。

あゆひせう

保田光則は仙臺の人にして、通稱を定次郎といふ。

あゆひせう

脚結抄考 一巻 保田 光則...

あゆひせう

脚結抄翼 二册 富士谷成元

あらのか

荒小田 一册 舍經

あらのか

荒井流鷹書 二巻...

あらのか

荒木田守武句集 一巻 荒木田守武

あらのか

荒木田守辰句集 一巻 荒木田守辰

あらのか

荒田の原 一册 舞興

あらのか

荒山故郷錦 四巻 島山 保躬

あらのか

荒木田守辰



あらひが

著者の俳句集なり。元禄五年壬申(二三五)五月の編輯にかゝる。

◎舞興は大阪の俳人なり。

あらひがはのき

洗革記 一冊

伊勢 貞丈

工藝、故實等を物したる隨筆にて、開卷第一に洗革の事を記せるより洗革の記とは題したるなり。序致なし。年代詳ならず。

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下に在り。

あらまほし

安良滿保志 五冊

中井 積徳

種々の雑事を評論せる和文體の隨筆なり。警世矯俗の文字に乏しからず。思ふに時勢に慨するところありて、幾多の希望を述べたるより、さてこそあらまほしといふ、願望の名は付けたるならぬ。

◎中井積徳の傳記は「七經影題略」の下にあり。

あらまかつせき

荒山合戦記 一巻

能登國荒山に於ける合戦の記事なり。此の戦は嘗て機田信長同國石動山衆徒の不行狀を告め五千貫の寺領を減して千貫の地と代へしを憤り、後信長が本能寺の變ありし時此機失ふべからずとて衆徒等剛者温井貞正、三宅正數、遊佐長員等を勧誘して終に反旗を擧げけるを能登の守護職前田又左衛門利家の征討したる事實を記録したるものなり。其の變は天正十年壬午(二二四)六月のことなり。「群書類從」卷三百九十二に收む。

ありそらみ

有磯海 一巻

僧 浪化

芭蕉が奥羽行脚の時、浪化の住所越中井波に着きての「早稻の香や分入みちら有磯海」の句を始め、俳句を集めたり。元禄八年乙亥(二三五)の編なり。近年發行の俳諧文庫第十編「元禄名家句集」中にも收めたり。

◎浪化は越中井波瑞泉寺住職なり。東本願寺の族といふ。芭蕉の門に入りて俳諧を學び、應々山人とも號せり。元禄十六年癸未(二三六)三月九日歿す。年三十三。或は三十二、三十四ともいへり。

ありとほしむらじんか

蟻通明神考 一巻

蟻通明神は和泉國日根郡長繩村にあり。諸家の考を參し、歌集の句等を引證して、同明神の事を説明せり。自序に、「かつらの翁」とのありて氏名を詳にせず。卷末に「琴保癸丑(二三九)木犀主人諸書泉之思亭」と記せり。

ありなごみ

有無草 一巻

六誹園立路

著者の隨筆、端書に「其の事、がの事につけて、いざ事問はんの友人に答へんもおぼえの覺束なく、さあらん時にそこれなんあたへて其の問をおさむ。左はいへ問はんことのかずかすはありやなしやの都鳥の古歌に思ひ寄せて、此の書を名付け侍りし」といふ。

◎六誹園立路の傳記は「老の灯」の下にあり。

ありのま

青天白日 四冊

陸 可彦

史談、逸話、故事、雜説等を集めたる隨筆なり。即ち著者の遊録より門人共の抄出したるものにして、一々其の出處由来を明にしたれば、杜撰のものには非ざるべし。編者の端書に、「こゝろもことばもつたなければ、見きく事のありのま、なれば、よしこれをもて名とせよか」といふまゝに、やがて此のいつまきとなしぬ」とあるにて題號の意も知るべし。然るに、右のばしがきにも、「此いつまきとなしぬ」とあり、飯田備の序にも「備在塾中抄出五冊」とあり、現在の本四冊のみなるは如何にか。文化四年丁卯(二四六)の編纂に係る。

ありのやぶ

蟻の宿 一冊

台 軒

俳句の集にて、寶永三年丙戌(二三六)京都に出版したるものなり。

◎台軒は肥後國の俳人なり

ありはらけい

在原氏系圖 一巻

在原 業平

左原氏の系圖、舊名「葛葉集」と名く。平城天皇、阿保親王、民部卿仲平、中納言行平等より、朝之公、之見國等に至る。「續群書類從」卷百七十四に收む。

ありはらなりひらあそんし

在原業平朝臣集 一巻

在原 業平 業平の和歌五十八首を集めたり。最朝、大原やなし

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻

あらし

ありまをんせん

有馬温泉記 追加 一巻

河合 章堯

攝津國有馬郡湯ノ山温泉の記事なり。其のあたりの名所、舊蹟を詳記し、且、湯ノ山十二景の題詠を附したり。延寶五年丁巳(二三三)の作。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

僧 高泉

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有房中將集 一巻

藤原 有房

著者の歌集にして、春夏秋冬戀雜を分ち、百餘首を收めたる數十枚の寫本なり。

ありまをんせん

有馬温泉記 一巻

堀 正意

寛永四年丁卯(二二八)七月、攝津有馬温泉に入浴したる時の記にて、問答體に温泉の理を論じ、陰陽鬼神の事にまで及べり。坊間版行のもの、は、林羅山の「有馬温泉記」と合版せり。

◎堀正意の傳記は「朝鮮征伐記」の下にあり。

ありまをんせん

有馬記 一巻

本廿一冊

天草切支丹一件より、有馬家の浮沈事績を記述せり。元禄六年癸酉(二三三)年間の覺書を中心として編輯したるものなり。

ありまをんせん

有馬系圖 一巻

本一巻



ありまわし

有馬地誌 一巻 黒川 玄逸
攝津國有馬の地誌にて、山川、社寺、畷、温泉の出所功業等を略記せる漢文なり。寛文四年甲辰(二三二四)其の主に隨行して、入浴したる時の記なり。

ありまてんき

有馬傳記 一册 有馬 晴信
有馬修理大夫晴信の家記なり。龍造寺肥前守隆信と合戦に及びしこと、肥前長崎に於て黒船を焼討せしこと、大阪兩度の陣に發向せしこと等、凡て三箇條の記事を略述したるものなり。

ありまていしよ

有馬日書 一册 平泉 鬼貫
著者の俳諧書なり。貞享元年甲子(二三四四)九月二十八日の編にかゝる。

ありまのさかた

ありまの道の記 一巻 稻懸 大平
天明元年辛丑(二四四一)八月十七日より出でて、

ありもり

有馬湯山記 一巻 貝原 篤信
京都より有馬に至る行路より、有馬温泉の主治、入湯の法、他國温泉との比較、有馬の名勝、物産等の事を記せり。

ありまめいしよき

有馬名所記 二巻 貝原 篤信
京都より、攝津國有馬温泉へ行く、道筋及び有馬の名所古蹟を細叙したるものなり。即ち有馬紀行文なり。寶永八年辛卯(二三七一)正月版行せり。

ありまやまめいしよき

有馬山名所記 五巻 平手 政長
攝津國有馬湯ノ山の紀行にて、名所古蹟を詳述せり。主として俳諧發句より成る。寛文十一年辛亥(二三三一)生白堂行風の序、同十二年の自跋あり。

ありまゆのやまのき

有馬湯山記 一巻 貝原 篤信
京都より有馬に至る行路より、有馬温泉の主治、入湯の法、他國温泉との比較、有馬の名勝、物産等の事を記せり。此の書に河合草堂の「有馬温泉紀道加」を合せて、寶永八年辛卯(二三七一)小冊子に合刻せり。

ありまのさかた

在盛卿記 一巻 在盛
長祿二年戊寅(一一八一)以後の日記殘編なり。文政三年庚辰(二四八〇)成島司直の考證あり。

膳大夫となり、後、從二位に叙せられ、刑部卿に任ぜらる。

ありよしけたいおぼえ

有吉家代々覺 一冊
細川氏の臣、有吉氏數代の家記なり。即ち最初、有吉將監、細川刑部少輔元有に仕へしことより、其の子萬助立言、細川藤孝に仕へ、其の子平吉立行、藤孝、忠興に仕へ、其の子内膳興道、内膳弟、頼母英貴、其の子頼母英安、内膳興道の大藏貞久、其の子四郎左衛門貞親に至るまで、數代細川氏に仕へて軍功ありし事を詳しく記したるものなり。年代詳ならず。

ありまのさかた

或所歌合 一巻
保延四年戊午(二七九八)の歌合にして、藤原基俊の判にかゝる。

ありまのさかた

或所歌合 一巻
永久四年丙申(二七七六)七月二十一日の歌合にして、仲實朝臣の判にかゝる。

ありまのさかた

鴉鷺いくさ物語 一册 兼良
鴉鷺の合戦に事よせて作りたる寓意物語なり。慶安二年己丑(二三〇九)梓行せられたり。

ありまのさかた

安永十年正月元日後宴次第 一巻
第百十九代光格天皇の御元服當日の記録なり。即ち安永十年辛丑(二四四一)正月元日のことにかゝれるなり。

ありまのさかた

鴉鷺千句 二册 江崎 幸和
著者の俳諧集なり。正保三年丙戌(三〇六)十一月の編にかゝる。

ありまのさかた

安永庚子唐館圖 一鋪
安永九年庚子(二四四〇)長崎なる唐館總圖の圖なり。館内の土地神、天後宮を始めとして、一番より十三番旅館までを圖す。元祿元年戊辰(二三三八)長崎奉行が唐人の居所を定めて、此の安永九年までにて、九十三年になるといへり。

ありまのさかた

安永庚子の出島圖 一鋪
長島出島なる阿蘭陀屋敷の細圖なり。即ち表門水門を始めとして邸内の模様を悉く圖して之れをあらはせり。安永は後桃園天皇の年號、庚子は其の第九年、即ち紀元二千四百四十年にあたる。

ありまのさかた

安永日光御參詣記 二巻
徳川十代將軍慶應院家治日光社參の記録なり。安

ありまのさかた

安永日光御參詣記 二巻
徳川十代將軍慶應院家治日光社參の記録なり。安



あんきく

永五年丙申(二四三六)四月、日光參詣の時、於ける行列、及び祭禮の規式等を記せるものなり。

あんきくばいじゆつしよはんがき

東北は放火山、山里村、平野村、淵村等を境とし、西南は四番五番の石火矢壺を境界としたる長崎圖なり。安永七年戊戌(二四三八)長崎勝山の書林、大島文字右衛門が再版したるものなり。

あんきくさいえうせり

安永最要抄 本三卷

「安永集」中より、其の要を摘取したるものにて、馬の禁忌、療法等を記せり。

あんきくしや

安永集 本六十卷

馬の病に對する療法、藥法等を列舉説明したるものなり。安永の名も蓋し之れより出で、種々其の方法を集成し盡せるより集とは云へるなるべし。六十卷、悉く假名書にして通俗の書なり。歌醫伯樂には勿論、一般農にとりても亦参考のものなり。編者は馬師皇弟、驥禁、驥説、豊安、安論の五人之れを編せるよし、卷末に記せり。

あんきくしや

假名安永集 十二卷 道派

馬師皇弟の安永集を増補したるものなり。自序に曰く、本朝、平仲國以來馬書多し、代々相傳へて藤氏仲繩に傳へ、仲繩より道嶋に傳へ、嶋は傳へて余

あんきく

後白河法皇五十路に滿たせ給ふによりて高倉天皇の御賀を奉り給へる當日の賀の次第を詳記したるものなり。著作の年月詳ならず、群書類從(五百二十九)に收む。

あんげんかいげんきだめのみ

安元改元定記 本一卷  
高倉天皇の承安五年乙未(一八三五)七月二十八日安元と改元す。此の次第先例等を漢文にて詳叙したるものなり。『群書類從』卷二百八十六、公事部第三十九に收む。

あんげんぐわんねんじやうわいをかうたいじんけうたあはせ

安元元年十月十日右大臣家  
歌合 一卷  
當日の課題は落葉、初雪、曉鶯、歌人は大貳卿、賴政朝臣以下二十名にして、判者は清輔朝臣なり。安元元年乙未(一八三五)十月二十九日に書寫するところ、『群書類從』百八十七の卷に收む。

あんきく

安國記 本一册

徳川家康一代の記録なり。安國は家康の法號、本書は家康が幼時より、元和二年丙辰(二二七六)に家康薨せし後、東照宮の教諭を贈られし事までを記せり。此の書は岡崎物語、松平物語等と少異なるのみ。彼れ此れ参照すべし。

あんきくきんてん

安國旗劍傳 本七册

あんきく

徳川家康の軍事に關する記。安國は家康の法名なり。即ち初めに徳川祖先累代の略史を敘し、次に家康幼時の因縁より、秀吉、家康小牧合戦の終りまでを詳記したるものなり。

あんきくきんてん

安國公遺文 本一册

徳川家康が秀忠の北の方に興へて、幼子の教養法等を説諭したる消息文なり。此の書秀忠の後嗣に就きて物したるものなれば、最初に、秀忠の二子、即ち竹千代(家光)國松(忠長)の兩人中につき、家督相續を取り定めたることを略記し、次に消息の本文を掲げたり。安國院は家康の法名なり。

あんきくきんてん

安國殿御家譜 本六卷 松田 以范

徳川家康の誕生より、薨去、社號敕賜のことまでを系統的に記せり。慶安三年庚寅(二二一〇)の自跋に奕世の史傳家たる友人仁木某の手書を借り、更に添削を加へたる由あり。六冊に寫傳す。「安國殿御家譜」と大同小異のものなり。

あんきくきんてん

安國殿御系圖 本六卷

徳川家康の事績を記述したるものなり。安國は家康の法名、一には安國殿御家譜とも稱せり。系圖といひ、家譜といふと雖も必ずしも系統的にあらず。書中記載するところは、天文十一年壬寅(二二〇二)家康の誕生より、一生の武略政策を敘して、其の薨後東照宮號敕許のことまで全編假名書に記せ

あんきく

に至る。斯の書を按ずるに、虚多く實少し。鄙拙、素智狭劣なりと雖も、馬師皇の安永集を因するに、靈方、醫術其の妙測り難し。此に於きて、暇日、本朝の馬書、及び師皇刊本を獲て、未だ詳ならざるものを略し、其の尤なるものを選びて訛舛を校訂し、假名を交へて増損す。擲ぶこと未だ精しからず、採る、と未だ廣からずと雖も、敢を奉じて撰して總て十二卷となす。卷首に奏文を掲げ、又無名氏の序を載せたり。慶長九年甲辰(二二六四)刊本す。

あんきくしや

行脚集 一册 五柏

五柏並に涼菟等の編述にかゝる俳句集にて、元禄十六年癸未(二二六三)京都にて版行したるもの也。◎五柏は伊勢國桑名の俳人なり。

あんげんおんがのみ

安元御賀記 一卷 藤原 隆房

安元二年丙申(一八三六)朔生四日、太上法皇即ち

あんきくきんてん

安西軍策 本七册

毛利家に關する戦軍記。初め大内義興、同義隆のことより書き起し、元就の四隣攻伐、吉川、小早川の各地勇戦等の戦狀を詳記し、遂に朝鮮蔚山の役に筆を止む。全部七册二百餘項あり。

あんきくきんてん

安西軍略 本一卷

永祿、天正間に於ける、諸將の軍事を輯録したるもの。最初永祿十一年戊辰(二二二八)毛利氏大友氏の開戦より天正十八年庚寅(二二五〇)毛利勢伊豆下田の城を攻落す等に至る五十餘項より成れり。中間脱漏あり。『群書類從』卷六百五十一、合戦部第八十一に收む。

あんきくしゆかん

安齋手簡 本一卷 伊勢 貞丈

伊勢貞丈の手簡を輯む。記載の事實は、諸故實に關する問答考証等なり。

あんきくしゆかん

安齋隨筆 本三十卷 伊勢 貞丈

皇國の典故、事物の權輿武家の故實字訓の正誤等のことを記せり。前集十五卷、後集十五卷より成る假名書の隨筆なり。

あんきく

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

あんきくしゆかん

安齋隨筆 本二卷 伊勢 貞丈

◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。て、前三十卷のとは別物なり。

あんきくしゆかん

安齋小説 本二十册 伊勢 貞丈

文學故實等に就きて解説し答問したるものを編輯したるものなり。大項、比那問答、齋宮齋院記、枕草紙抄、三社託宣考、求身抄、賀勢問答、鏡鞍記、武藏經之辨、和歌三神考、古鏡色目、和字衆説、正三記、驛路鈴考、俗説辨母衣辨、火打袋、武備根元、太刀打刀腹物腰刀、やの巻考、三種神考、軍器考、増註、軍器考餘評、花加津みの考、神代卷獨見、古今集三本三鳥考、日本紀安閑天皇錯簡考、弓の肥巻、破煙草の辨、火色挿練考、練色考、徒然草の大意、世機物語考、報世機問答、今昔物語問答、忠貞問答、増鏡問答、今職人歌合、源氏物語ひとりの、幼學問答、職原百敷草、婚禮法式、酌並記、庭訓往來扶翼の四十一あり。毎冊の終に、著者の跋、若くは校了の記、年月等を誌せり。

あんきくしゆかん

安齋叢書 本廿四册 伊勢 貞丈

有職故實の事、及び種々の考證等に就きて著せたる書、又は人の問に答へたる論辨等を輯録したる

あんきくしゆかん

安齋叢書 本廿四册 伊勢 貞丈

有職故實の事、及び種々の考證等に就きて著せたる書、又は人の問に答へたる論辨等を輯録したる

あんきくしゆかん

安齋叢書 本廿四册 伊勢 貞丈

有職故實の事、及び種々の考證等に就きて著せたる書、又は人の問に答へたる論辨等を輯録したる



あんしん

ものなり。材料は年次に拘らず下の如くに編次せり。第一冊に、矢羽文考、鳥糞考、春日神殿訪馬遊。第二冊に、東鑑不審問答、鑑具足辨、鑑直垂色目。第三冊に、煙草集説、古鏡色目、詞純、保倍衣邪説、第四冊に、禁色考、三議一統之辨、伊勢因州舊記、曾我物語、伊勢狂筆。第五冊に、うづぼの事、乗物考、勢語、憶断別勘。第六冊に、鑑色談、梅樹尾問答、親鶴履問答、馬上三物論評。第七冊に、笠掛引目考、蝦夷鑑先考、辨度七道具考、あかとり考、軍神問答。第八冊に、鳥帽子折問答、神道獨語。第九冊に、五六掛鑑考、輦考、鳴弦菴目考。第十冊に、狩衣考、付狩袴袴袴奴袴指貫考、引階支板引之事、押字考。第十一冊に、考説、甲冑名考、田樂考。第十二冊に、射家妾説集、殘儀兵の辨。第十三冊に、扶桑見聞私記辨、姓氏辨附説。第十四冊に、南嶺子語、秋寮閑語評、南嶺遺稿評。第十五冊に、高忠軍陣問書。第十六冊に、雜説問答。第十七冊に、法量之物歩立問書。第十八冊に、御馬古實評。第十九冊に、保倍衣推考。第二十冊に、源家八幡鑑考。第二十一冊に、本朝軍器考標疑。第二十二冊に、鞍登工記。第二十三冊に、諸般日記考註。第二十四冊に、鳥帽子考、平禮考、見聞諸家叙等なり。尙寫本によりては分合適宜にし、巻數必ずしも同じからざるものあり。

○伊勢貞丈は有職故實家なり。正徳五年乙未(二二七五)に生る。平氏にして安齋と號す。泰臣(藤千石)を領す。貞益の次男なり。兄貞陣父のあとを襲ぎて幾もなく夭死しければ、貞丈、封地を返官せり。幕府殊に舊領の内三百石を貞丈に與へて家を繼がしむ。貞丈幼より有職故實の研究を好み博覧強通、凡そ中古以後の記録に於きて尋討せざるものなく、

制度故事を以て一家をなせり。著書頗る多く、數十種數百卷あり。即ち管儀辨、愚得園筆附考、武器考、首書、同標疑、同補正評、同考餘評、同圖式補、馭馬故實評、武林原始首書、源家八幡鑑考、古鏡色目、鑑具足辨、鑑直垂色目、甲冑威毛色目、甲冑名考、梅樹尾尾問答、寶劍寶鑑記、刀劔問答、諸般日記考註、鞍鑑工記、鞍具鑑圖類、五六掛鑑考、鑑類、鳥帽子考、古代折鳥帽子圖、保呂衣推考、調度懸問答、空穂考、尾籠考、源平盛衰記問書、松島日記註、鳴弦菴目考、三種神器名考、位記口宣註、齋宮齋院記、禁色考、姓氏辨附説、驛路鈴考、新伊問答、今昔物語問書、赤鳥、額綱、波線、三木三鳥考、長鳥帽子、洗革、樂作、後院、位袍、袖籠調、日際之儀、武藏鑑、まゝなき、田樂考、二見浦、幼學問答、輦考、鳥糞考、春草、夏草、秋草、冬草、革類考、緩文考、細長考、振甲圖説、神道獨語、平義器談、要訓、射法妄説集、武門故實百箇條評、解嘲百箇條評、舊事紀綱傳、神代卷獨見、五武器談、鑑色談、武備根元、三議一統辨、鳥帽子折問答、安閑組錯簡考、尉子五編解、比那問答、源氏ひとりこち、狩衣考、平禮考、引刺考、脇指考、筒劔木也考、矢羽文考、直垂折附録、鑑着川次第、正三記、和字衆説、俗説辨母衣説辨、蝦夷鑑先考、詞純、軍職志、軍神問答、簡馬畫問答、笠懸目問答、押字考、三社記宣考、道風像考、逆類服考、辨度七道具考、乗物考、煙草集説、殘儀兵の辨、鏡鞍記、求身抄、和歌三神考、二上草、小車鏡、火打袋、非參議四位、雜説問答、同後編、諸編拔萃、考説、波筆、安齋問答、あるまし、百數草拾遺、王代圖略、大祓斷解、勢語憶断別勘、世繼物語考、徒然草大意、今川壁書解、武器要説考、見聞私記辨偽、南嶺子評、南嶺遺稿評、秋寮閑語評、酌

並記、家流問答、庭訓往來扶翼等あり。一書安齋叢書は、此の中なる幾種より成れり。著者は天明四年甲辰(二四四四)六月五日、七十歳にて没せり。

**あんしんまんびつ**  
安齋漫筆 六卷 伊勢 貞丈  
典章、故實、有職、及び事物の起原、文字等の事に就きて漫録す。其の綱目、大抵同著者の他の叢書隨筆の類と同じ。

○伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

**あんしんやわ**  
安齋夜話 五冊 伊勢 貞丈  
道徳知識及び故實等に関する隨筆なり。即ち教訓の事、典章の事、故實の事、事物起原、人情風俗、言語文章等數十項より成る。

○伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

**あんしんわくもん**  
行在或問 二卷 牧園 潜  
南朝三代の事績を或問的に記述論證せるもの。全體漢文にて物せり。引證簡約にして精確。正義の説明詳なり。文政十一年戊子(二四八八)の自序あり。

○牧園潜字は大野、茅山と號し、進士と稱す。筑後の儒者にて、龜井春に學び、柳川藩に仕へて文學たり。著書には行在或問の外、恬居雜記あり。明治の初年東京に歿せり。

**あんしんしんじやくしやく**  
安祥寺資財帳 一巻  
安祥寺の資財帳目録なり。

あんしん

あんしん

山城國安祥寺の資財調査書にて、寺料、佛帳、僧具、其の他等幾百種類を詳録す。前に同寺の略縁起を叙し、最後に、「上件資財帳録如右。若し不審官印、器後代輕覺諸官印、以爲公驗。將令後代見之者、慎重之不行」とあり。貞觀九年丁亥(一五二七)六月十一日少僧都法眼和尚位惠運の署名あり。續群書類從「卷七百八十、釋家部六十五」に收む。

**あんしんしやく**  
暗誦録 一巻 土肥 貫雅  
内に「和漢類聚暗誦録」と題して和漢名數に関する事を列挙せり。幼時以來、師に就て暗誦したるものに、更に見聞を加へて編輯したるものなりといふ。文化十一年甲戌(二四七四)の自序義例等あり。

○土肥貫雅の傳記は「易學發揮」の下にあり。

**あんしんのはふ**  
按針之法 一巻 島谷 定重  
航海針路の事、操船注意の法等を記述したるものなり。船人の參考として益あるべし。寛文十年庚戌(一七三〇)の自跋あり。

**あんせいけんもんし**  
安政見聞誌 三卷  
安政年間の大地震に於ける江戸の災害記なり。抑も此の變は、孝明天皇の安政二年乙卯(二五一五)十月二日夜亥時、大地震ありて江戸近國、四方凡そ二十里ばかりの罹災なるが、就中江戸は最も激烈にて實に酸鼻を極めたり。本書は著者が當時江戸中を奔馳して見るに隨ひて圖し、聞くに隨ひて記

したるものにて、文に修飾なく、詳しく實況を寫し出でたり。凡そ四十六項、畫圖二十八より成れり。附録あり。此の度の地震に関する種々なる印刷物を集め載せたり。元來此の地震に関する印刷物は凡て絶版を命ぜられたるが、尙、私に殘れるものなりとして數種類を掲げたり。

**あんせいけんもんしやく**  
安政見聞録 三卷 服部 晁善  
安政年間地震前後の見聞雜事を筆記したるものにて、上巻に地震の辨より、土人自身飢民を救ふ條に至る五項。中巻に父母に先だちて遁れ還て災に逢ふ條より、地震の方角をいふ條に至る五條。下巻に節婦衣を捐て夫の死體を拾ふ條より、蝦蟇巨蛇と聞ふ條に至る七項を收む。畫入假名書にして、兒女の讀物としたり。安政三年丙辰(二五一六)の自序あり。因果報を説き、子孫の爲めに勸善懲惡を示すといへり。著者服部晁善は保徳と稱す。

**あんせいごうざいし**  
安政御造營志 十卷 九條 尙忠  
安政年中宮城御造營に付、營營の原由より、遷幸濟拜領物語に至る數十項。細に其の事實を録して作進するところなり。今見ると、十冊箱入りにて存す。

○九條尙忠は左大臣たり。

**あんせいさんじふにかせう**  
安政三十二家絶句 三冊 額田 正

安政年間に於ける詩家の絶句を集めたるものなり。淡窓、星巖、拙堂、嶺溪、旭莊、黃石、竹外、佛山、枕山、船山、春濤、支峰、松塘、三樹、梅嶽、清狂、天江、湖山、其他附録を併せて三十六人の絶句を載録す。詩數總計七百四十九首あり。安政四年丁巳(二五一七)の刊行に係る。

**あんせいねんしやく**  
安政年録 二十四冊  
安政年間の法政書類を輯集す。同元年甲寅(二五一一)四月より、同六年己未十二月に至る年次によりて編録せり。

**あんせいひろく**  
安政秘録 五冊  
安政年間の記録書なり。前四冊は主として救書返上の事、櫻田の變等に關しての水戸景山公の書附、其の他多くの記録を集め、第五冊には清佛戰爭の事、清人の上疏數編を集めたり。編輯の年月及び編者の名を記さず。

**あんせいようぶんしやく**  
安政用文章 一巻 井上 葦月  
當代に於ける普通用文の模範なり。通俗の稽古本として用ひたるものなるべし。安政四年丁巳(二五一一)刊行す。

**あんそうせんせいがくわ**  
安崇先生學話 一冊 長谷川 遂明

あんしん



あんちん

伴部安崇の經學に關する雜語を門人との對話様に録したるものなり。味ふべき文字少からず。奥書に、享保十年乙巳(二三八五)の十一月、長谷川達明三浦義毅の兩門人が先生に開きて筆録せし由を記す。其の他此の書を校正したる改正達明録及び安崇と達明との問答を記したる己丑録をも合綴す。◎長谷川達明のことは「達明録」の下にあり。

あんちんはふじき

安鎮法日記 本二卷

村上天皇の應和元年辛酉(一六二二)より、堀川天皇の康和二年庚辰(一七六〇)に至る各御代に行はれたる安鎮修業の次第等を記載したるものなり。即ち應和元年、天祿三年、長保二年、長和四年、寛仁二年、長久二年、天喜四年、康平三年、延久二年、延久三年、承保三年、承暦三年、永保三年、嘉保二年、康和二年等に行はれたる凡て十五安鎮記を輯録したるものなり。『續群書類從』卷七百三十一、釋家部第十六に收む。尙別に堀河院の長治元年甲申(一七六四)より、後白河院の保元二年丁丑(一八一七)に至る安鎮法日記あり。同七百三十二卷、釋家部第十七に收む。

あんちんはふじき

安藤系圖 本一卷

安藤氏系圖。孝元天皇より、大彦命、武津川別命等本枝數十代を経て、安藤次郎季綱、秋田安藤次郎秀道に至る。『續群書類從』卷七百七十に收めたり。

あんちんはふじき

安東郡沙汰文 一册

あんちん

神事に關する記録にして安東郡(伊勢國安濃郡を、中古東西に分ちて、安西、安東二郡とせり)の御田、御敷、大餅、小餅等の收納、及び奉納の次第を記せるものなり。開卷の初めに元徳元年己巳十一月註之とあり。元徳元年は後醍醐天皇の御即位第十一年にして、紀元一千九百八十九年にあたる。『群書類從』五百〇一の巻に收む。

あんちんはふじき

鞍鏡新書 本十卷 栗原 信充

馬具鞍鏡に關する研究書にして、鞍鏡工譜、鞍鏡工華押、鞍鏡名所記、鞍鏡規矩の四種を訂正輯録したるものなり。序跋なく年代詳ならず。

◎栗原信充は上野の人にして幕府に仕ふ。寛政六年甲寅(二四五四)七月二十日江戸に生る。號は柳庵、晩年雅號して又樂と云ひ、姓を武田と改む。少壯の時より古典の研尋に務め、普く諸國の古社寺、及び舊家の古文書古器物の來歴等を考證し、數多の書を著せり。即ち本書の外、武器神鏡、甲冑圖式、刀劍圖考、鑿工譜略、令義解講義、玉石雜誌、柳庵隨筆、柳庵雜記、法隆寺寶物考證、先達續像、鞍鏡圖式、木弓古實、水雄岡志、日本紀私韻、職原抄私記、大内裏圖等あり。明治三年庚午(二五三〇)閏十月二十八日七十七歳を以て京都に歿せり。

あんちんはふじき

鞍鏡寸法記 本一卷

鞍鏡の寸法を記せる伊勢家の傳書なり。今見るところは因幡入道の名にて、元和三年丁巳(二二七七)八月十六日、兵部少輔へ傳ふる由の奥書あり。

あんちんはふじき

鞍鏡圖式 一 栗原 信充

古來の鞍鏡を圖説し、且其の寸法、製作法等を記述したるものなり。著者はさきに武林法量と云ふ叢書を物せり。其の書三十六卷、分ちて七集とす。本書は蓋し其の集中より抄録して袖珍となしたるものなるべし。天保年間(二四九〇年代)の作なり。◎栗原信充の傳記は「鞍鏡新書」の下にあり。

あんちんはふじき

安藤日記 本四十二册

著者の詳細日録。寛政五年癸丑(二四五三)より、同十一年に至れり。著者は安藤對馬守と記せり。

あんちんはふじき

安徳天皇御五十日記 一卷

高倉天皇の治承三年己亥(一一三九)正月六日に於ける、安徳天皇御五十日賀式の記事なり。即ち去年十一月十二日御降誕遊ばせられたれば本年正月一日五十日なるべきを殊に此の日を下し行はる。種々當日の有様、殿上殿下内外表裏の事委しくまられたり。

あんちんはふじき

安徳天皇御即位記 本一卷 清原 頼業

御即位大典の例法儀式を記述したるものなり。即ち高倉天皇の治承四年庚子(一一四〇)四月二十二日、甲辰の日御發跡三歳にて紫宸殿に即位し給ふ。

あんちん

按腹圖解 一册 太田 晋齋

常儀式に關する一切の次第を漢文にて記したり。『群書類從』卷七十二、公事部第二十五に收む。◎清原頼業の傳は「大外記類業記」の下にあり。

あんちんはふじき

案内者 五册 中川 喜雲

朝廷の儀式、及び畿内諸州に於ける神社祭禮、佛寺法會等のことを記したるもの。後輩諸儀式の手引となるべし。案内者の匿名も其の故ならむかし。◎中川喜雲は安藝國廣島の人にして、後、京都に住せり。北村季吟の門人にて、山櫻子と號す。京童、京童跡追、鎌倉物語等の著あり。寶永二年乙酉(二三六五)十月三日、歳七十にて歿す。

あんちんはふじき

安法法師集 一卷 僧 安法

著者の歌集にて、「吹く風にたぐひてなびく女郎花、たはる、さまに人を見らむ。萩の葉にそよときこえて吹く風に、おつる涙は露やおくらん」等より、白河に水かふ青の駒ひきを、波のたつとや餘所めしつらん。とのへし加茂のやしろの夕たすき、解るあしたぞ亂れたりける」等に至る百餘首より成れり。『群書類從』卷二百六十七に收む。

◎僧安法、俗名は源越なり。源融四代の孫、内藏頭遺麁の子なり。少壯の時より深く佛教を信し、遂に剃髮して僧となり、安法法師と號す。かへて和歌に巧にして中古三十六歌仙の一人たり。其の詠古今集に入れり。

あんちんはふじき

安樂問辨 一卷 手島 堵庵

按腹術を圖示説明せるものなり。按腹の方術十數種の圖を掲げて婦女童蒙にも領會し易きやう俗解し、且、移めて虚技を避け實用を主とせり。文政十年丁亥(二四八七)の著述刊行なり。◎太田晋齋(賀川晋)の傳は「解剖圖」の下にあり。

あんちんはふじき

安命論 一卷 河又 秀祐

名の示す如く天命に安んずべしと云ふ童子訓なり。著者の意は「戊申の春秀祐、安命論一卷を著す。其の旨辭を文飾せず。衆人をして讀み易からしめ、以つて天命に安んずるの資けのみ。其の人事を盡すは之れを聖賢傳に求めざるべからざるなり」と、嘉永元年戊申(二五〇八)の自序に記せり。◎河又秀祐の傳は「浩齋經說」の下にあり。

あんちんはふじき

闇夜一燈 本一卷 谷 宗牧

連歌の作法例等を記述したるものにて、主として附所の詞を列挙例解せり。本書は連歌師宗牧が一千宗養の爲めに秘傳せるものなるを、寫して長慶朝臣に進上したるもの、由奥書に「へり」續群書類從」卷五百、連歌部第三十に收む。

あんちんはふじき

安樂行院記 一卷

大藏卿通基の建立に拘る安樂行院の略記事なり。『群書類從』四百三十の巻にあり。

あんちんはふじき

安樂問辨 一卷 手島 堵庵

心學に基き、人慾を排して、安樂の本性を主張したるものなり。若輩の間に答ふとして、道を學ぶの要より、本心安樂を得る要までを説けり。安永八年己亥(二四三九)の自序あり。◎手島堵庵の傳は「我津衛」の下にあり。

あんちんはふじき

北山醫 按 三卷 北山 壽庵

祖父北山友松子の遺稿中より、其の治驗數十條を抽出したるものにて、全編漢文にて記せり。延享二年乙丑(二四〇五)刊行す。◎北山壽庵は肥前長崎の人にして大阪に醫たり。名を道長といひ、迷禪堂の號あり。醫を歸化僧化林、獨立等に學び、諸家の法をも參酌して治療を工夫し、大阪に出てて醫業を振る。學該博にして諸家に通ず。著す所、本書の外に北山醫話、首書醫方口譯集、首書醫方考、醫大成論抄、副補衆方規矩、名醫方考、編方考評議等あり。元禄年中大阪に歿す。

あんちんはふじき

非伊記 本二卷

...



異域同日譚

井伊家の法制、軍事規定等を編録して、幼主に言上したるものなり。慶長元年丙申(二二五六)九月十一日、曲淵宗立齋、菅沼雲仙齋、辻彌左衛門、石石備前守、馬場藤左衛門、廣瀬治右衛門、等連名にて、上役今村小兵衛、今村源右衛門に披露を請へる所なり。

異域同日譚

和漢の事實の類似せるものを集め、諸書を引きて一節一節に綴りたるものなり。鬼神、仙佛、玉侯、文臣、武臣、僧侶、婦人、巧工、技藝、雜事等の目に就きて研究せり。妄誕奇説多ければ學者の参考に資せず。元禄十三年庚辰(二三六〇)の自序あり。

○眞野時細は、尾張國津島神社の祠官にして和學に達せり。著書には、神代卷圖解、古今神學類聚抄、神家常談、本朝神階編、神道類聚抄等あり。元禄十六年癸未(二三六三)歿す。

異域同事録

和漢梵三國に於いて、事を同うせるものを、諸書に考へて記録したるものなり。例へば、詠歌感、鬼神といふ事に就きて、和國にては「古今和歌集」の序を、漢國にては「毛詩」の序を、梵國にては「佛說字經」を擧げて對照せるが如し。卷數六卷は前集、後集、續集の三に分ち、各集に二卷宛を収めたり。

異域同事録

○村田丁阿は明和七年庚寅(二四三〇)生れ、名を直温、通稱を小左衛門といひ、杖堂、春枝堂、靈籠等の號あり。剃髮して丁阿と號す。俳諧、詩歌、書畫等に巧みなり。博覽強記、和漢佛三學に通せり。考證抄録するところ頗る多し。一枝堂抄録、一枝堂全書、俚言集覽、考證千典、事物類字彙源抄類標、老松考、方策抄、三千石、五色石、袋草紙、鄭譯語原等あり。天保十四年癸卯(二五〇三)十一月十四日、七十二歳にて歿す。

井伊家附録

井伊家の功績を筆記したるものなり。一名を直政直孝略傳といへり。天正十八年庚寅(二二五〇)「相州小田原參陣の時分、御仕置御軍法從權現様直政に被下御直判、以下兩代間の軍功記録書類を贈載せり。

井伊家附録

○石原主膳正は、もと甲斐の山縣景景の銃士なりしが、天正十年壬午(二二四二)徳川家康に仕へ、秋葉山に誓ひて登壇を賜り、井伊直政の輔臣として附屬を命ぜられ、歴軍功あり。

井伊直政直孝略傳

井伊直政、同直孝二人の略傳にして、同代の古書類をも集録せり。

井伊年譜

寛弘七年庚戌(一六七〇)正月元旦、始祖備中守藤原共保の出生より、享保十五年庚戌(二三九〇)二月に至る家譜にして、直政、直孝、父子の事績を殊に詳にせり。編者は「切刀君草子舎」と署名せり。

井伊遺訓

萬治二年己亥(二二一九)六月、井伊掃部頭直孝が、其の息直澄へ、遺訓したる條々にして、奉公執政の要事を説けり。いま見るところは藤堂高虎の「藤堂遺訓」と合冊せり。

輜軒書目

著者の藏書目録なり。新井白石の「采覧異言」以下五十三部の目録を掲げ、漢文無點にて、問々簡短なる解を施せり。最後に附圖として運軍軍艦圖載せり。内外地圖の跋文九個を載せたり。

輜軒小録

山林、丘陵、動植物等の奇異珍妙なる物語およそ四十四項を書きあつめたる隨筆なり。其の自序に曰く、「昔、楊子雲、四方言語の異同をあつめ、輜軒絶代語といふ。輜軒といふは使の車なり。皇華の使、四方へ出て行くに、其の國々の詞をきくに依りて、其の書に名くるなり。予、幼にして先子に侍り、四方の士の來り集るに、其の國々の山林、丘陵、草木、鳥獸の奇異珍怪なるを物語するを、聞き覚え書き記し、予が世に及びて聞き得ること、予、自ら至り見るところ、先後をわきまへず、書き集めて輜軒小録と云ひて、後世子孫の見聞に供ふといふことまかりしと、本書の大體を知るべし。

輜軒小録

○伊藤長胤は仁齋の長子なり。通稱を源藏、號を東涯また篁々齋と云へり。寛文十年庚戌(二三三〇)生る。幼にして學を好み、長じて經義に委しく、性理の學に明らかなり。元文元年丙辰(二三九六)六十七にて歿す。弟子私に説いて紹述先生といふ。著書頗る多く、周易經翼通解、文集、詩集、復性辨、勢遊志、三奇一覽、古學指要、經史博論、辨疑錄、古今

輜軒書目

學變天命或問、聖語述、經史論苑、讀易私記、讀易圖例、周易義例卦變考、論孟古義標註、中庸發揮釋、大學定本釋義、語孟字義標註、童子問釋、周易傳義考異、四書集註標註、通書管見、大極管見、用字格、助字考、刊證正俗、作文真訣、名物六帖、帝王略譜、和漢紀元錄、後漢官制、本朝官制沿革圖考、三韓紀略、朝鮮官職考、釋親考、釋親考續編、蓋簪錄、蓋簪餘錄、東涯漫筆、閑居筆錄、春秋胡氏傳辨疑、漫筆、經說、己丑筆記、庚寅日錄、東涯談叢、鄒魯大旨、訓幼字義、學問關鍵、制度通、唐官鈔、乘燭譚、輜軒小録、今古教法沿革圖、唐官品圖、明官制圖、經學文衡、歷代官制沿革圖、家世私記、姓林全書、文體辨略、紀聞小賦、四書集註大全校正、五經集註校正、春秋左氏傳校正、文章軌範校正、論語集解校正、詩經正文校正、詩經說約校正、大禹謨辨、異學辨、權字考、訓蒙用字格、古學先生行狀、東涯先生消息等あり。

邑宰職事抄

邑宰の行政、兵事、經濟、裁判等に関する職事を記載したるものなり。

友山和尚傳

洛西山崎の人、本名は藤原士思、正安三年辛丑(一九六一)出誕してより、僧となり友山と法號し、難行苦業を積みて道徳知識の僧となり、應安三年庚戌(二〇三〇)六月一日、壽七十歳にて入寂せるまでの大略を漢文にて記せり。「撰書類從」卷二百

友山物語

著者の生存中、江戸に於ける種々の雜話を書記したるものなり。江戸の名所、市街に関する史談俗話等より成れり。

大道寺友山

○大道寺友山の傳は「岩淵夜話集」の下にあり。

熊志

熊志の脈症治法に関することを記述せるものなり。嘉永二年己酉(二五〇九)多紀元聖の序、安積倍の序、及び文政三年(庚辰二四八〇)の自序、終りに嘉永三年、男直寛の跋あり。

喜多村直

○喜多村直は一名を安政といひ、子温と字す。寛政年間、幕府の醫官たり。學該博にして、また本草に精し。著書は本書の外に、醫餘錄、國字統、土素譜、日光探藥記等あり。

熊志

熊志の圖説を詳記し、香川秀庵の非説を辨取したるものなり。文化年間の著にかゝる。

熊志

熊志 一卷 難波 義材

友山物語

友山物語 一卷 大道寺友山

大道寺友山

○大道寺友山の傳は「岩淵夜話集」の下にあり。

熊志

熊志 一卷 難波 義材

熊志

熊志 一卷 難波 義材



右史訓

右史訓 本二卷 森 尹祥  
書札の法式に就きて論述例示したるものなり。小柴研齋の「研齋雜錄」第三、第四の兩冊に收む。◎森尹祥の傳は「懷紙花抄」の下にあり。

祐子内親王家歌合

祐子内親王家歌合 本一卷  
永承五年庚寅(一七一〇)六月五日御催の歌合にして、堀河内大臣の列にかゝる。

祐子内親王家紀伊集

祐子内親王家紀伊集 一卷  
紀伊

著者の家集。短歌凡て七十八首より成れり。即ち「かや井(高陽院)」との七番の歌合に櫻」といへる題にて「あままたき霞なこめを山さくら、たづねゆくまのよそめにも見む」といへるより、「齋宮に下る人霜月はかり」といふ歌の返歌なる「神風にかばかり身にはままじかし、かたしく袖のさゆるよな」と云ふに終る。群書類從「第二百七十八の巻、和歌部百三十三、家集五十一」に收む。◎紀伊は葛原親王より八代の孫にて、從五位下經方の女なり。兄を紀伊守守雄といふ故に紀伊と呼べり。又、祐子内親王家に仕へたれば一の宮の紀伊とも云へり。生死の年月詳ならず。

熊耳文集

熊耳文集 十六卷 大内 承裕

著者の詩文集、熊耳は其の別號故に名とせり。第一卷に擬古、樂府、五七言、古詩。第二卷に五言律、同排律、第三卷に七言律、第四卷に五言絕、七言絕、第五、第六、第七卷には序文、第八卷記事、第九、第十卷は墓誌、第十一卷には祭文及び雜文、第十二卷雜文、第十三卷雜文及び書牘、第十四、第十五、第十六の卷には通じて書牘文を載せたり。天明元年辛丑(二四四)藤原の序、及び安永九年庚子(二四四〇)藤原の跋あり。男衛の校訂して上木する所也。◎大内承裕は唐津侯の備員なり。元祿十年丁丑(二三五七)に生る。字は子練、熊耳と號す。初め秋元子師に學び、後、徂徠に就けり。永安五年丙申(二四三六)四月、八十歳にて歿せり。

有章公譜

有章公譜 本一卷  
徳川七代將軍有章院家繼一生間の年譜なり。

有職問書

有職問書 本一卷 野宮 定基  
有職に關することを主とし、種々雜駁なる事實に就いて問答したるものなり。小宮山謙亭の質問に隨ひて著者野宮定基の答辯説明せるものにして始終問答的に記録せり。◎野宮定基は權中納言正三位にて、實は中院通茂の二男なり。松室と號す。故實に精し。寛文九年己酉(二三一九)に生る。少時より和學を好み、又故實を研究す。著すところは、本朝故實記、白黃問答、玉食供進抄、新野問答、平家物語考、野宮口語等あり。正徳元年辛卯(二三七)四十三歳にて歿す。

有職拾葉 本二卷  
有職中主として官階に關する事實を記述したるものなり。中には往々支那唐代の稱呼と比較對照せるところあり。

有職抄

有職抄 本七卷  
有職考證の書にて、禁中殿門の事より、裝束車馬の事に至るまで、諸般の故實等を考證して洩すことなし。此の書原より第一卷佚して存せず。寛永十九年壬午(一三〇二)の縣主秀芳の跋あれど、著者の名を記さず。

有職小説

有職小説 三卷 槇島 昭武  
有職故實及び朝章の名義等を略解せるものなり。「六冊に製本せれど巻は上中下なり」宸居、官家、院中、後宮、官爵、武林、其の他等宮廷の事を初めとして公卿、武將等の官階、行事、制度等百般の事實に就いて簡略に説明す。元祿十一年戊寅(二三五八)江戸須原屋茂兵衛の版行に係る。◎槇島昭武は和學者にして、享保年間の人なり。一名を都といひ、通稱を彦八と稱し、駒谷散人と號す。著す所本書の外、方丈記流水抄、首書身延紀行、書官字考節用集(世俗に合類節用集といふ)、近世餘談、關八州古職錄等あり。

有職小録

有職小録 本四卷 辻三郎兵衛

衣紋の事を記せるものにして、天明寛政年間、紀州藩侯の登營、及び佛參の時の裝束色目等を委しく記せり。この書は辻三郎兵衛が治田左衛門に就て聞書したるものなりと云ふ。◎辻三郎兵衛は紀州藩の士なり。

有職玉の枝

有職玉の枝 本一卷  
故實問答の筆記にして「本朝故實」と云へるものと同物異名なり。此の書、もとこれといふ題號なりしが、知己の人に示さん、に題號なければいかんとて、「有職玉の枝」と名け侍る、と小宮山昌世の序に見えたり。

有職備考

有職備考 本十五卷 藤咲 正方  
三種神器、御劍、大刀、契、節刀、鈴印等以下あらゆる有職の事項を編輯し、棊樂、舞、淨瑠璃、田樂、自排子等に及べり。著者皆て水戸彰考館に管庫を兼ね、轉じて編修員となりし時、凡そ二百八十四部の書によりて抄録するところなりといふ。増子淑時の漢文序、延享元年甲子(二四〇四)中元日の自作凡例あり。小池友賢の校正するところにして、十五卷の外に、序目一卷あり、總て九冊に寫傳す。◎藤咲正方は水戸の儒員にして、初の名は幹事、小右衛門と稱し、叔通と字し、仙潭と號す。少時より、藩の書史に擧げられ、享保中典書を以て彰考館に入り書庫を管し、後、編纂の事に與り、研究最も至る。また問々有職の書を讀み、其の考證すべきものを選びて、此の備考を作り上る。寛延二年矢倉奉行

とあり、代官を経て郡奉行に進み、老に至るまで民政布教に力を盡せり。寶曆十二年壬午(二四二二)七十四にて歿す。

有職問答

有職問答 五卷 三條西實隆  
有職に關する諸問答を記述したるものなり。大内義隆の問へるに隨ひて西三條道遠院實隆の答へたるものなり。萬治二年己亥(二三一九)の刊行。◎三條西實隆は内大臣公保の二子なり。康正元年乙亥(二一一五)に生る。長祿二年從五位下侍從に任ぜられ、遂に正二位内大臣に至る。永正十三年制髮して僧となり、名を幾空と改め、諸國を遊歴す。其の著書には、高野參詣日記、雲玉集等あり。天文六年丁酉(二一九七)八十三歳にて歿す。

有所聞書日記

有所聞書日記 本二卷 高阪 清則  
古今の雜説を輯録したる隨筆なり。上卷は紀州日高郡眞名古村に蛇身者の子孫ある事より、愛別離苦、會者定離といふ事に至る七十八項。下卷は太田道灌の事より、伊奈半左衛門下吏小田藤兵衛妻の事に至る二十九項。凡て百〇七項の雜語問答なり。著作の年月詳ならず。

右道論

右道論 本一卷 佐藤左衛門  
軍器武具の由來、故實等を問答體に説明したるものなり。右道は武略の意、之れに對して文道を左略といふ。明徳二年辛未(二〇五一)十月十三日、傳

者佐藤左衛門の與書あり。「當流問書」と合して、「弓馬叢書」の中に收む。◎佐藤左衛門は、大夫と稱し、入道して、沙彌道行と號せり。

祐天大僧正利益記

祐天大僧正利益記 三卷  
祐天大僧正が在世中の、勳化功力を假名書に記したるものなり。卷上に忠兵衛後家の怨靈得脱の事より、山田庄右衛門妻得益の事に至る十三條。中卷に名號験の事より、竹屋町の老邊得益の事に至る二十一條。下卷に紀伊國屋太郎兵衛女得益の事より、紀伊日高の船人得益の事に至る十七條あり。本書は寺田市右衛門といふもの、僧正の化導に歸して、參詣のとき見聞したるを、同寺六世得譽祐全が追加したるものなりといふ。それ等の事は文化元年甲子(二四六四)東漸寺澄譽宣契の凡例に詳なり。同五年出版す。

有徳院上意

有徳院上意 本一卷 徳川 吉宗  
徳川八代將軍有徳院吉宗の異見書なり。享保十九年甲寅(二三九四)十月八日澁谷和泉守良信を召して、大納言の不行狀を責めて、懇に説諭したるものなり。紙數僅に四枚。寛政九年丁巳(二四五七)の寫本に係る。「輪池叢書」中に收めたり。◎徳川吉宗の傳は「紀州政治録」の下にあり。

有徳公譜 本一卷



5081v

5082v

徳川八代將軍有徳院吉宗一生涯の年譜なり。

5081v 有毒草木圖説

二卷 清原 重臣

植物中、有毒の草木を擧げて圖説す。但し専ら當時の漢訳に據りて査定せるなり。圖畫は全く當時の畫家數輩の手に成れり。文政十年丁亥(二四八七)の版刻に係る。

◎清原重臣のことは「草木性譜」の下にあり。

5081v 有斐齋簡記

本四卷 皆川 愿

著者の聞見雜録なり。有斐齋は著者の別號、故に名とせり。書中歴史的の事、文學的の事、醫藥藥品の事ともあり。又往々諧謔の記事も交れり。◎皆川愿の傳は「淇園文集」の下に掲ぐ。

5081v 右筆條々

本一卷 藤原 行房

一名「行房右筆條々」の下に解題せり。

5081v 右筆用心抄

本一卷

習字の故實、書禮の法式等を記したるものなり。即ち漢字の筆蹟を解剖して、書法、運筆の順等を示し、且、其れに關する諸般の注意を教ふる條多し。白川家の筆蹟なるよしを記し、又卷端には、「千金莫傳」の語あり。年月詳ならず。

5081v 有廟御法會雜記

本一卷

寛延四年辛未(二四二一)四月二十八日、江戸東叡山に於て、有徳院の法會を相替みたるの雜記事なり。今見るところは、下總國岡田郡飯沼大生郷大生寺の藏によつて、寛政四年壬子(二四五二)寫本するところによる。

5081v 有斐錄

本二卷 三村 永忠

一名「備藩典錄」の下に解題せり。

5081v 右文古事

本十五册 近藤 守重

徳川家所藏の書籍に就き、其の幾分を解題したるものと、徳川氏代々の文事表、及び詩歌とを併せ載せたるものなり。其の總目錄を云へば、御本日記附註三册、御本日記續録三册、御寫本譜二册、御代々文事表五册、御代々御詩歌二册以上十五册中、解題書籍の部数は僅々百餘に過ぎず、解題の體も、寧ろ著者の徳川氏御書物奉行なりしより、藏書幾分の來歴を記し、兼て代々の文事的教養を表釋せんとしたるなり。文化十四年丁丑(二四七七)九月十日、本書を將軍家へ進上する時の上候案に曰く、「私儀紅葉山御文庫御預り御書物の由來相糺し、權現様以來、格別御大切の御書物は別段の御取扱に仕り、永久盡入損無之様手當可仕と、右御書物の譯、其の時代の書物を以て取調候處、第一權現様格別御世話被遊候處、長御寫本に御原本は勿論、台徳院様へ御讓本の類、其の由來明白に相分り、即ち追々書進候處、右御書物の譯は、不及申、御代々様御文徳の

5081v 有名具三十六歌選

本一帖

介類を詠したる古歌三十六首を集めたるものなり。而して毎句の下に具介の圖畫を掲げたり。三十六歌選は、他の歌集に倣ひて名を風流に選びたるものなり。編輯の年月、及び編者の名詳ならず。

5081v 優遊社漫筆

本一卷 田中 應清

著者が始めて投壺の禮を我が邦に用ひし事を記せるものにして、優遊社は應清の別號なり。此の書は應清の門人が筆記せしものにして、書名は恐らくは後人のつけしものならん。卷中の事實と其の範圍を異にせり。

◎田中應清は水戸の支封守山藩の人にして、江戸の儒者なり。字は子繩、通稱は三耶右衛門、江南と號せり。肥前唐津の儒員大内藤耳の門に遊び、三禮を講究せしこと多年。投壺の禮を傳へ、始めて其の法を唱へたり。著書は本書の外に、投壺指揮、投壺矢勢圖解等あり。

5081v 有林福田方

十二卷 僧 有林

醫藥に關する書にして、諸氣脾胃論に始り、脈賦急要に終る。首に諸藥炮灸論を載せたり。自序あれども著作の年月を記さず。版は明曆三年丁酉(二二二一)七に成れり。

5081v 神田蝶々子

一册 神田蝶々子

著者の發句帖なり。編述の年代を明記せざれど、寛文前後のものなるべし。

◎神田蝶々子の傳は「思出草」の下にあり。

5081v 十界和尚話

五卷

地獄畜生、餓鬼、修羅、人間、天上、緣覺、聲聞、菩薩、佛等の十界の景況を假想創作したる物語なり。著者は「酒屋橋子」と記せり。

5082

5081v

5082v

5082v 位階表

本一卷

推古天皇の御代に制定せられたる十二階、孝徳天皇の十三階、また十九階、天智天皇の二十六階、天武天皇の四十八階等の、階級勲位等を表説したるものなり。今見るところの書には、明珍系圖、大清風俗記、學校圖説、琉球樂器圖、琉客談記等を併せたり。思ふに、雜寫卷頭のものによりて、「位階表」とは名けるなるべし。

5082v 伊賀上野復讐實記

本一卷

寛永年中伊賀國上野に於ける渡邊駒馬の復讐實録の抜抄にて、山城日ノ岡復讐實記、但馬村岡復讐實記と併せて寫傳せり。天明五年乙巳(二四四五)十月二十八日寫本の奥書あり。

5082v 醫綱本紀

本四卷

上卷上に醫立、醫科、天道、道々、修身、是非、醫賢、醫行、道科、氣科、養科、平科、病科、人科、身科、心科、國科、年科、傷科。上卷下に病科。下卷上に脈科、方科。下卷下に異科、度科。以上廿四綱を漢文にて略説す。四卷一册に寫す。興住護版と印せる界紙に寫し、「興住護書」の印あれど、何人の、何時の著作なるかを詳にせず。

5082v 伊香氏系圖

本一卷

伊香津臣命を祖として、厚隆、厚政、厚持、等に至る凡そ數十代間の系圖なり。位官あり、功罰ありしものは、往々其の由を系圖の傍間に記せり。本書は貞享二年乙丑(二三四五)書き寫せしものなりと云ふ「續群書類從」卷百八十三、系圖部第七十八に收む。

5082v 伊賀記

一卷 北島 親房

伊賀國北島氏の領分に関する諸件を記録したるものなり。記録の年月詳ならず。

5082v 爲學要説

一卷 三宅 重固

修學の要旨を論述せるもの。卷末の自記に曰く、「學を爲るの曲折精微は、聖賢の教循に卜して叮嚀なり、其の書に考へて見るべし、今其の大意を撮りて諸生の爲に之れを説く。因て之れを筆記して以て此の席に在らざるものを示す。正徳元年辛卯(二二二七)九月三日」とあり。安永五年丙申(二四三六)合田誠美の跋あり。

5082v 醫學講談發端辨

一册 岡本 爲竹

支那に於ける醫學の著者、及び其の小傳、著書題目の意義、由來等を一々古書に參考して論辯したるものなり。書中收むるところ、上は黄帝内徑素問發端の辯より、醫學正傳或問發端の辯に至る凡そ十有餘。元祿十三年庚辰(二二六〇)孟春の作なり。

5082v



くがくし

岡本爲竹は一抱また一得齋と號せり。京師に出で味岡三伯に従ひて素難を講じ、同門の高足なりしが、一朝其の門を去りて、一家の言をなし、諸書

くがくし

醫學至要抄 二卷

國字にて「十四經引」を辯じたるものにて、生理的に人身を研究す。元祿十二年己卯(一三三九)一月の刊本なり。

くがくし

醫學字海 一卷

醫學に關する小辭典なり。即ち醫書素問、靈樞、難經、大成論、格致餘論、醫學入門、十四經、回春等より、熟字を抜出列擧して和訓を施したるものなり。

爲學適言 一卷 宮崎 成美

くがくた

蒙童初學者の入門に便したるものなり。故の甚、教は早きを尊ぶ、學問にあらざれば本然の性に復する事能はず、學問せずして事足といふは非なり、爲

醫學集成 二卷 青地 盈

人體生理を明示したるものなり。卷末に、文政十一年戊子(一四八八)九月四日校勘を了れる由を記す

爲學初問 二卷 山縣 孝孺

修學の要より、經濟の一般に至るまで、假名文に論述したるものなり。寶曆十年庚辰(一四二〇)出版。

醫學切要指南 三卷 岡本 爲竹

卷上に三焦心包有名無形之論、並相火之辨、腎間動氣之論、並一難之辨。卷中に勞瘵之論、並十四難之辨、右腎命門之論、並子宮之辨、命門穴之論、三百六

爲學玉帚 三冊 手島 信

心學道術に基きて雜論せるもの。其の要目を示せば、あら玉の春、克己復禮、致知格物、博文約禮、心身の安樂、主一無適、大人不失赤子之心、狂尺直尋、曾子と一休との差別、小過を以て妻を去る、道の體用、本心の體用、知性の外に第一悦、其の他凡て二十七條、皆假名文にて、狂歌等を交へ平易通俗に記せり。玉帚の名は、人々此の書を讀みて、日々に身心の穢垢塵埃を掃除するの意にとれりといふ。男

醫學節用集 一卷 杉山 和一

先天之事、後天之事、腹の見様之事、食物胃腸へ受て腐熟運理之事、三焦之事、非榮命經合之事、五臟に五臭五聲五色五味五液を主る事、脈之事。以上の目に就いて説論したる假名交り文にて、明治十三年庚辰(一五四〇)東京にて出版す。

醫學手斧立 二卷 坪井 爲春

内科外科に分ちて病理、方劑法、治療術等を極めて簡単に論述せり。蓋し蘭派に屬する醫書を譯したるものなり。『百科全書』に收む。

醫學編 二卷 坪井 爲春

其の字なり。翠竹庵、啓迪庵友松子、又蓋靜翁と號せり。後柏原天皇の永正二年乙丑(一四六五)平安に生る。幼より難養して等暗といひ、足利學校に入り、文伯を師として群籍を涉獵す。後、田代三喜に從て李朱の術を學び、業成りて京に歸り曲直瀨と稱す。人争ひて治を乞ふ。天正中宮中に召されて拜診す。之れより諸侯伯皆重禮を以て待遇す。傍ら醫學を講明す。人稱して醫學の中興となす。其の著す所、啓迪集、正心集、摘英集、要語集、雲陣夜話、養生物語、日用食性、切紙、指南鍼灸集、醫燈配劑、出燈配劑、捷徑辨治集等あり。文祿三年甲午(一六二五)四月正日八十九歳にて歿す。

醫學家文稿 三卷 望月 乘

漢土歴代に於ける醫書の始末、並に名醫の傳記等を載録せるものなり。寶曆三年癸酉(一四二二)服部元喬の序、同二年の自序あり。

醫學天正記 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學知津 二卷 宮田 全澤

陰陽、五行、氣血精神、虛實寒熱の他等を辯せり。四書五經及び諸子百家の書より、句々を抄出して各、辨を附けたるなり。延享元年甲子(一四〇四)三月刊行す。

醫學手斧立 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學編 二卷 坪井 爲春

其の字なり。翠竹庵、啓迪庵友松子、又蓋靜翁と號せり。後柏原天皇の永正二年乙丑(一四六五)平安に生る。幼より難養して等暗といひ、足利學校に入り、文伯を師として群籍を涉獵す。後、田代三喜に從て李朱の術を學び、業成りて京に歸り曲直瀨と稱す。人争ひて治を乞ふ。天正中宮中に召されて拜診す。之れより諸侯伯皆重禮を以て待遇す。傍ら醫學を講明す。人稱して醫學の中興となす。其の著す所、啓迪集、正心集、摘英集、要語集、雲陣夜話、養生物語、日用食性、切紙、指南鍼灸集、醫燈配劑、出燈配劑、捷徑辨治集等あり。文祿三年甲午(一六二五)四月正日八十九歳にて歿す。

醫學家文稿 三卷 望月 乘

漢土歴代に於ける醫書の始末、並に名醫の傳記等を載録せるものなり。寶曆三年癸酉(一四二二)服部元喬の序、同二年の自序あり。

醫學天正記 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學知津 二卷 宮田 全澤

陰陽、五行、氣血精神、虛實寒熱の他等を辯せり。四書五經及び諸子百家の書より、句々を抄出して各、辨を附けたるなり。延享元年甲子(一四〇四)三月刊行す。

醫學手斧立 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學編 二卷 坪井 爲春

其の字なり。翠竹庵、啓迪庵友松子、又蓋靜翁と號せり。後柏原天皇の永正二年乙丑(一四六五)平安に生る。幼より難養して等暗といひ、足利學校に入り、文伯を師として群籍を涉獵す。後、田代三喜に從て李朱の術を學び、業成りて京に歸り曲直瀨と稱す。人争ひて治を乞ふ。天正中宮中に召されて拜診す。之れより諸侯伯皆重禮を以て待遇す。傍ら醫學を講明す。人稱して醫學の中興となす。其の著す所、啓迪集、正心集、摘英集、要語集、雲陣夜話、養生物語、日用食性、切紙、指南鍼灸集、醫燈配劑、出燈配劑、捷徑辨治集等あり。文祿三年甲午(一六二五)四月正日八十九歳にて歿す。

醫學家文稿 三卷 望月 乘

漢土歴代に於ける醫書の始末、並に名醫の傳記等を載録せるものなり。寶曆三年癸酉(一四二二)服部元喬の序、同二年の自序あり。

醫學天正記 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學知津 二卷 宮田 全澤

陰陽、五行、氣血精神、虛實寒熱の他等を辯せり。四書五經及び諸子百家の書より、句々を抄出して各、辨を附けたるなり。延享元年甲子(一四〇四)三月刊行す。

醫學手斧立 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學編 二卷 坪井 爲春

其の字なり。翠竹庵、啓迪庵友松子、又蓋靜翁と號せり。後柏原天皇の永正二年乙丑(一四六五)平安に生る。幼より難養して等暗といひ、足利學校に入り、文伯を師として群籍を涉獵す。後、田代三喜に從て李朱の術を學び、業成りて京に歸り曲直瀨と稱す。人争ひて治を乞ふ。天正中宮中に召されて拜診す。之れより諸侯伯皆重禮を以て待遇す。傍ら醫學を講明す。人稱して醫學の中興となす。其の著す所、啓迪集、正心集、摘英集、要語集、雲陣夜話、養生物語、日用食性、切紙、指南鍼灸集、醫燈配劑、出燈配劑、捷徑辨治集等あり。文祿三年甲午(一六二五)四月正日八十九歳にて歿す。

くがくた

十五穴之論、膀胱府之論、並水道通閉之辨、陰陽有餘不足之論、臟之論、參差之論、五難診脈救法之論、並胃氣之辨、香蕪散之論、並氣付之辨。卷下に五行相生相尅之論、並五臟精神氣血營之辨、關格覆溢脈之論、張仲景傷寒方論之辨、並陰陽二症之辨、痘疹腎部無熱症之論、常歸地黃之論、補中加風劑之論、並世醫有風技之辨。以上の目を假名交り文にて略述し、小冊子に作る。正徳三年癸巳(一三三三)十一月の自序あり、翌年出版す。

醫學節用集 一卷 杉山 和一

先天之事、後天之事、腹の見様之事、食物胃腸へ受て腐熟運理之事、三焦之事、非榮命經合之事、五臟に五臭五聲五色五味五液を主る事、脈之事。以上の目に就いて説論したる假名交り文にて、明治十三年庚辰(一五四〇)東京にて出版す。

醫學手斧立 二冊 曲直瀨道三

著者の臨床治療の實例を集録したる者なり。病目六十餘を擧げ、毎條、實際患者の二三例を出して、その病狀、及び治療法等を筆述したり。事、皆天正年間に係るが故に天正記と云へり。寛文三年癸卯(一七二二)の刊行なり。

醫學知津 二卷 宮田 全澤

陰陽、五行、氣血精神、虛實寒熱の他等を辯せり。四書五經及び諸子百家の書より、句々を抄出して各、辨を附けたるなり。延享元年甲子(一四〇四)三月刊行す。

醫學手斧立 二冊 曲直瀨道三



くまのり

くまのり

伊賀越敵討 二卷

播磨國主松平相模守の家臣、邊渡數馬が、敵河合又五郎を、荒木又右衛門の助太刀に依りて、伊賀の上野に打果す始終の實記なり。明治十六年、尾形月耕の畫を入れ、實録文庫として一冊に活刷す。

くまのり

伊賀越敵討 一巻

徳川家康が和泉堺より伊賀路を越えて歸國したる時の事を記したるものなり。天正十年壬午(二二四二)六月二日、明智光秀、信長を殺害したる時のことなり。本書は「家忠日記」を本として大成記、石川忠總書留、泉原記事、林頼談御年譜附尾、吉川氏貞享の書上等を挿入して詳記したるものなり。

くまのり

伊賀國誌 本五卷

伊賀國の舊地誌なり。元祿十二年己卯(二三五九)中秋下弦、沙彌爲入の奥書に、此の書の由来を悉せり。其の全文を擧ぐ。有伊陽名所集四卷、元是望月長好門弟、伊陽上野住何某氏述作之所也、予貞享始年、過彼地之時、先師依同門固、暫宿彼宅、閑談之次、令見此書草案、元來、依好此事、是再見之上、其要不可之處々々、加置了簡、起歸路無幾程、彼人没、後同所住人得求彼書、爲增補、號伊水溫故、令清書、令見之、無用雜事、異說多之、依之彼同門之不忘固、故舊本捨不捨、更改與爲五卷、稱伊賀國誌而已」といへり。五卷一冊に寫傳す。

くまのり

伊家古籍考 本一巻 中川 修亭

本名「本朝醫家古籍考」の下に解題せり。

くまのり

伊賀史 二巻 大江 廣房

伊賀國の略歴史なり。著者の奥書に、應或人之簡撰、伊賀伊勢兩國史、蓋抄出於國史及諸家之記文。或復先年就任在予伊勢時、搜求寺社之書記者併記之とあり。以て本書の成立を知るべし。天永元年庚寅(一七七〇)に記す所なり。

くまのり

醫家初訓 一巻 丹波 元徳

醫家の徳業に關する要領を論述す。國字假言を以て、學童の啓蒙に供したるものなり。壬子十一月二十七日の自序あり。卷末に、男、元簡附言して、「右醫家初訓千有六則、嚴君所撰、簡、受而卒業、乃、愕然而嘆曰、至哉訓也、奉之於一家、不如與衆俱焉、遂捐俸錢、以授同人云」と記せり。全一帙、内閣に貴重本として藏す。

くまのり

伊香保紀行 三巻 跡部 良顯

元祿十一年戊寅(二三五八)三月二十三日江戸愛宕下を出でて、上州伊香保の温泉に入浴療養し、四月二十三日江戸に歸るまでの日記なり。名所舊蹟の事を誌し、また自題の詩をも載せたり。中巻は主として榛名山雜記、熊谷旅節夜話。下巻は塔澤温泉紀行(天和三年癸亥三月入浴の時のもの)。附録あり。母柳生氏の和歌、及、その往復する所の井上氏の女の詩歌、書簡等を收めたり。享保六年辛丑(二三八一)伴部安樂の序、及、自跋、結實保總の跋等あり。

くまのり

射形事 本一巻

伊勢弓馬叢書中の一書にして、射方故事四十餘條を記したる四枚の書冊なり。

くまのり

伊香保紀行 三巻 跡部 良顯

元祿十一年戊寅(二三五八)三月二十三日江戸愛宕下を出でて、上州伊香保の温泉に入浴療養し、四月二十三日江戸に歸るまでの日記なり。名所舊蹟の事を誌し、また自題の詩をも載せたり。中巻は主として榛名山雜記、熊谷旅節夜話。下巻は塔澤温泉紀行(天和三年癸亥三月入浴の時のもの)。附録あり。母柳生氏の和歌、及、その往復する所の井上氏の女の詩歌、書簡等を收めたり。享保六年辛丑(二三八一)伴部安樂の序、及、自跋、結實保總の跋等あり。

くまのり

射形事 本一巻

伊勢弓馬叢書中の一書にして、射方故事四十餘條を記したる四枚の書冊なり。

くまのり

伊香保紀行 三巻 跡部 良顯

元祿十一年戊寅(二三五八)三月二十三日江戸愛宕下を出でて、上州伊香保の温泉に入浴療養し、四月二十三日江戸に歸るまでの日記なり。名所舊蹟の事を誌し、また自題の詩をも載せたり。中巻は主として榛名山雜記、熊谷旅節夜話。下巻は塔澤温泉紀行(天和三年癸亥三月入浴の時のもの)。附録あり。母柳生氏の和歌、及、その往復する所の井上氏の女の詩歌、書簡等を收めたり。享保六年辛丑(二三八一)伴部安樂の序、及、自跋、結實保總の跋等あり。

くまのり

伊賀名所記 一巻 能登 永閑

伊賀國の略歴史なり。著者の奥書に、應或人之簡撰、伊賀伊勢兩國史、蓋抄出於國史及諸家之記文。或復先年就任在予伊勢時、搜求寺社之書記者併記之とあり。以て本書の成立を知るべし。天永元年庚寅(一七七〇)に記す所なり。

くまのり

伊賀者由緒御供御書付 本一巻

前項掲載の「伊賀者由緒書」と多少の詳略異同はあり。

くまのり

伊賀者由緒御供御書付 本一巻

前項掲載の「伊賀者由緒書」と多少の詳略異同はあり。

くまのり

くまのり

伊賀越敵討 二卷

播磨國主松平相模守の家臣、邊渡數馬が、敵河合又五郎を、荒木又右衛門の助太刀に依りて、伊賀の上野に打果す始終の實記なり。明治十六年、尾形月耕の畫を入れ、實録文庫として一冊に活刷す。

くまのり

伊賀越敵討 一巻

徳川家康が和泉堺より伊賀路を越えて歸國したる時の事を記したるものなり。天正十年壬午(二二四二)六月二日、明智光秀、信長を殺害したる時のことなり。本書は「家忠日記」を本として大成記、石川忠總書留、泉原記事、林頼談御年譜附尾、吉川氏貞享の書上等を挿入して詳記したるものなり。

くまのり

伊賀國誌 本五卷

伊賀國の舊地誌なり。元祿十二年己卯(二三五九)中秋下弦、沙彌爲入の奥書に、此の書の由来を悉せり。其の全文を擧ぐ。有伊陽名所集四卷、元是望月長好門弟、伊陽上野住何某氏述作之所也、予貞享始年、過彼地之時、先師依同門固、暫宿彼宅、閑談之次、令見此書草案、元來、依好此事、是再見之上、其要不可之處々々、加置了簡、起歸路無幾程、彼人没、後同所住人得求彼書、爲增補、號伊水溫故、令清書、令見之、無用雜事、異說多之、依之彼同門之不忘固、故舊本捨不捨、更改與爲五卷、稱伊賀國誌而已」といへり。五卷一冊に寫傳す。

くまのり

伊家古籍考 本一巻 中川 修亭

本名「本朝醫家古籍考」の下に解題せり。

くまのり

伊賀史 二巻 大江 廣房

伊賀國の略歴史なり。著者の奥書に、應或人之簡撰、伊賀伊勢兩國史、蓋抄出於國史及諸家之記文。或復先年就任在予伊勢時、搜求寺社之書記者併記之とあり。以て本書の成立を知るべし。天永元年庚寅(一七七〇)に記す所なり。

くまのり

醫家初訓 一巻 丹波 元徳

醫家の徳業に關する要領を論述す。國字假言を以て、學童の啓蒙に供したるものなり。壬子十一月二十七日の自序あり。卷末に、男、元簡附言して、「右醫家初訓千有六則、嚴君所撰、簡、受而卒業、乃、愕然而嘆曰、至哉訓也、奉之於一家、不如與衆俱焉、遂捐俸錢、以授同人云」と記せり。全一帙、内閣に貴重本として藏す。

くまのり

伊香保紀行 三巻 跡部 良顯

元祿十一年戊寅(二三五八)三月二十三日江戸愛宕下を出でて、上州伊香保の温泉に入浴療養し、四月二十三日江戸に歸るまでの日記なり。名所舊蹟の事を誌し、また自題の詩をも載せたり。中巻は主として榛名山雜記、熊谷旅節夜話。下巻は塔澤温泉紀行(天和三年癸亥三月入浴の時のもの)。附録あり。母柳生氏の和歌、及、その往復する所の井上氏の女の詩歌、書簡等を收めたり。享保六年辛丑(二三八一)伴部安樂の序、及、自跋、結實保總の跋等あり。

くまのり

伊香保紀行 本一巻

或る年の秋つた、江戸より、伊香保見物に往來せる和文の紀行なり。和歌も詠み入れ、形容も面しらく記されたと、文には假名遣ひ等も多し。何人の作なるかを知らず。

くまのり

伊香保之記 本一巻

上州伊香保の温泉に浴し、秋の半より、季秋の末まで滞在したる時の記にて、其の間、榛名山に遊びし事等も記し、自詠、及、同行者の和歌をも擧げたり。著者は中川久盛の妻にして、隠岐守定勝の女、松平氏なりといふ。

くまのり

伊かほの道のきぶり 一巻 倭文女

伊香保の紀行文なり。著者が十八歳の時の作なるが行文流麗優雅にして當時の老練の學者をして驚かしめたりといふ。而して此の書は倭文女が死後に紀念の爲にとて師友の編纂刊行せしものにして、附録には倭文女が友に送りし消息文數篇、平生の歌數十首、及び其の師賀茂真淵の撰せる倭文女の碑文を添へたり。寛政二年庚戌(二四五〇)の刊行に係る。

くまのり

倭文女の傳は「文布」の下にあり。

伊賀名所記 一巻 能登 永閑

前項掲載の「伊賀者由緒書」と多少の詳略異同はあり。

くまのり

伊賀者由緒御供御書付 本一巻

前項掲載の「伊賀者由緒書」と多少の詳略異同はあり。

れど、また當年の由緒事實を記したるものにて、参照の價値ある舊記なり。

くまのり

怡顔齋櫻品 一巻 松岡 玄達

櫻の品類を擧げて説明圖解せるものなり。怡顔齋は著者の一號にして、本書は単に「櫻品」といへり。詳しくは同書名の下に解題せり。

くまのり

怡顔齋介品 二巻 松岡 玄達

介の品類を集め、圖畫を附して説明せるものなり。本書は單に「介品」とも云へり。著者の博物書には品の名を附せるもの凡そ十部あり。怡顔齋十品と云ふ。本書は即ち其の一なり。載するところは、其の品を蟹、蝦、蛤、螺、龜、鱉、雜の六類に分ち、更に之れに和品を附し、凡そ一百五十餘種の名を正して、其の形狀を説明せり。寶曆八年戊寅(二四一八)刊行せらる。

くまのり

怡顔齋介品別本 本二巻 松岡 玄達

「怡顔齋介品」に着色したるものなり。故に別本といへり。詳しくは前掲同書名の下に解題せり。

くまのり

怡顔齋菌品 二巻 松岡 玄達

「怡顔齋菌品」に着色したるものなり。故に別本といへり。詳しくは前掲同書名の下に解題せり。











さげんそ

さげんそ

夷談俗話 五冊 串原 正峯

蝦夷の風俗、産物等を記したる隨筆なり。成書の由来は著者の序に、「公用に携り、如月上旬東都を發し、奥州路南部津輕を経て、海外蝦夷地へ赴き、松前より、蝦夷地の極奥曹谷といふ所に至り、秋も末になりて、石狩川より、シヨツ越しと云ふを歩いて、東蝦夷地に渡り、冬に至つて松前の旅館へ歸りぬ。蝦夷地に在りし中の、珍説奇事を其の地の人にも問ひ濡めて、宜用餘力の折柄に、書集めたり」とあるにて知るべし。寛政四年壬子(二四五二)の筆述に係る。

さげんそ

惟賢比丘筆記 一巻 僧 惟賢

入幡宮垂迹本縁事、以下同社に關する雜事を諸記中より記録せり。卷末に、建武二年乙亥(一九九五)鎌倉圓頓寶戒寺樞要の記録を收轉せる由を奥書す「續群書類從」卷五十八、神祇部第五十八にあり。

さげんそ

遺言類記 三巻 吉村 駿

「明史」南疆釋史等の中より、赴義途節の書を撰び淺見安正の「靖獻遺言」の體裁に倣ひて編輯したるものなり。實は「靖獻遺言」の續篇として編輯したりしが、更に考ふところありて、「遺言類記」に改めたりといふ。其の異なる所は、彼れは朱子學に基き、此れは陽明學に基けるにあり。其の目を舉ぐれば、楊繼盛の臨刑詩二章、高攀龍の遺表、呂維祺

さげんそ

さげんそ

の答友人書、莊烈帝の衣襟語、劉宗周の殉難詩三首、史可法の答清睿親王書、張肯堂の永訣詞、屈式組の絶命詩等なり。各著者の傳を記し、本文の所々に註す。慶應元年乙丑(二五二五)の自序あり、明治四年三冊に出版す。

◎吉村駿は安藝の儒者にして、隆慶と稱し、景嵩と字し、斐山と號す、著者には入學志、讀反心錄、牛畝村園詩文集等あり。明治十五年壬午(二五四二)歿す、年六十一。

さげんそ

異國海上路程之圖 一冊

世界地圖にて、五大洲六大陸ともに天度に配してあらはせり。圖端には三橋釣客の漢文序あり、また異國海上の里程、世界經緯の里程、天竺居士の經緯里程等を掲げたり。天明三年癸卯(二四四三)版行したるものなり。

さげんそ

異國降伏八幡宮御託宣集 一巻

異國降伏のことに就きて、豐後なる宇佐八幡宮の御託宣ありしことを記述したるものなり。編者の年月及び著者の名を詳にせず。

さげんそ

異國紀聞 一巻

寛延三年庚午(二四二〇)十二月、奥州盛岡郡白濱村、船頭又五郎、乘員六人にて、唐土福建省へ漂流したる時、見聞して歸りたる彼の國風俗、産物等の談を筆録したるものなり。「南部雜商實記」と大同

さげんそ

小異なり。

さげんそ

異國産物記 二巻

上卷に清國十五省の建置、方角、道程、時運、人物、戸口、北極度數、其の他を記し、下卷を外夷とし、朝鮮、琉球、大宛、東京、公趾等の土地、風俗、道程、人物等の事を記せり。題して産物記といふと雖も、寧ろ産物以外の事を記したり。卷末に、「右外國外夷合五十五國、於長崎以開傳處記之者也」と記せり。書中の記事には真享四年丁卯(二三三七)の事を最近のものとし、正徳元年辛卯(二三七一)寫本の奥書あり。

さげんそ

異國使僧小録 一巻

明朝朝鮮國等へ使せし僧侶の事績を記録したるものなり。開溪圓宣より左省鉅に至る三十五人の事績を記せり。尙對州以可庵輪番五僧の名を考究して載せたり。そは寛永十二年乙亥(二二九五)東福寺玉峯に始り、享保年中なる天龍寺古溪に終れり。

さげんそ

築刻書目外集 六巻 松澤 老泉

清の順修の編輯せる「築刻書目」(二百八十四部を收む)を増訂編輯したる漢書目(四百餘部を收む)なり。故に外集と名く。文政二年己卯(二四七九)の自序、同四年龜田與の序あり。

◎松澤老泉は江戸の人にして、名を夢、字を士磨、通稱を和泉屋庄三郎といひ、屋號を慶元堂と稱す。

さげんそ

異國標旗考 一巻 近藤 守重

世界各國の標旗を圖説したるものにて、寛政八年丙辰(二四五六)著者の奥書あり。コルチーリスケレルの著を譯補したるものなり。

さげんそ

◎近藤守重の傳記は「右文故事」の下にあり。

さげんそ

夷國斷實錄 三巻

寶曆二年壬申(二四二二)尾張國知多郡大野村、孫左衛門、乘員十五人にて、江戸より歸航の途中、難風に遇ひて、巴旦馬島に漂着し、三年を経て十五人の中、十一人だけ歸朝したることあり。本書は其の始末を記したるものなり。

さげんそ

異國張春之色 二冊 文盲散人

滑稽時事小説なり。著者の凡例に、「近來異國船たびたび渡來して、衆人を驚かしむる事むれんの至りなり。さばあれそが中に詩歌連俳滑稽まやらくの雅談もあれば、そを拾ひて此の書の種とはなしむ」とある如く、全篇異國船の渡來、及び海防などの事に關すること、文盲と音成、煙松、兩人との滑稽對話に作れり。孝明天皇の嘉永七年甲寅(二五二七)の著作に係る。著者文盲散人の本名明らかならず。

さげんそ

異國和解 五巻

和蘭國書を譯出したる地理書にて、第一卷に亞細亞洲、第二卷に亞弗利加洲、第三卷に南亞墨利加洲、第四卷に北亞墨利加洲、第五卷を和蘭國とす。歐羅巴洲を略して、其の中の一小國たる和蘭國

さげんそ

異國來往記 二巻

我が崇神天皇の六十五年戊子(六二八)以降、後水尾院の元和元年乙卯(二二七五)に至る間に、魏より明に至るまでの唐國、及、三韓、任那、中山(琉球)南蠻、蝦夷等の諸國に來往關係したる事を記したるもの。真享三年丙寅(二三四六)松浦默の序、元祿九年丙子(二三五六)僧寂本の跋あり。默の序中に、友人素菴子の編したる由あれど、氏名を記さず。

さげんそ

異國往來略譜 三冊 津田 正路

徳川時代の外國交通の事歴を記したるものなり。卷首に、中古より慶長初年までの外國往來の概略を記し、更に後陽成天皇の慶長八年癸卯(二二二六)より、仁孝天皇の天保十四年癸卯(二五〇三)に至る凡そ二百四十餘年間の外國との交渉、及び往來の事績を、當時の日記類、華夷變態、外蕃通書、邊要分界、正統長崎志等に據りて、年代を逐ひて記したれば、此の事に關する参考書としては價値あるもの、一なり。嘉永七年甲寅(二五二四)に記する所なり。

さげんそ

異國和解 五巻

和蘭國書を譯出したる地理書にて、第一卷に亞細亞洲、第二卷に亞弗利加洲、第三卷に南亞墨利加洲、第四卷に北亞墨利加洲、第五卷を和蘭國とす。歐羅巴洲を略して、其の中の一小國たる和蘭國

さげんそ

生駒記 三巻 竹内 隣山

生駒家數代の家傳にして、生駒親正が秀吉に仕へて、讃岐國高松の城主となりしより、其の子一正、正俊が關ヶ原、及び大阪の役に功を立てし事、孫齋後が魯鈍にして家中紛亂し、爲に領地を沒收せられし事を記せり。寶曆三年癸酉(二四一三)の著作に係る。

さげんそ

生駒家古文書 一巻

生駒家の古文書を集めたるものにして、天正年間より、寛永十一年甲戌(二二九四)に至るまでの注進狀、返書、及び感狀等、都て十七通を收めたり。

さげんそ

生駒堂 一札 燈 外

著者の俳句集なり。元祿三年庚午(二三三〇)八月の編述にかゝる。

さげんそ

伊佐須美神社縁起 一巻

題名の如く神社の縁起なり。寛文五年乙巳(二三五二)仲春神官の作れるところなり。

さげんそ

勇魚取繪詞 一冊

さげんそ



捕鯨法

捕鯨法の圖解に鯨肉調味方を附したるものなり。勇魚取給詞は肥前平戸の恩島、生月島の益富又左衛門といふ者の鯨漁實狀を繪詞にし、捕鯨の順序、鯨の種類、割割の方法、鯨肉の名稱、漁具の品類、漁夫の習慣等に至るまで、詳細に圖説したるものなり。小山田與清が、文政十二年己丑(二四八九)の跋あり。天保三年壬辰(二四九二)出版す。

伊雜皇太后宮年中行事

志願の國なる伊雜皇太后宮の年中行事を記したるものなり。正應二年己丑(一九四九)なる關宜信親の奥書あり。

伊雜宮舊記

一冊

伊勢答志那なる伊雜宮の舊記を編録したるものにて、二冊三卷あり、其の第二卷は「此卷は落紙御座候故哉覽、始終胡亂なる事にて候故、不及評候」とて全文を缺けり。思ふに在來三卷の舊記を取り出して、評論増減を加へたるものなるべし。

異扱要覽

一巻

江戸時代に於ける捨子、迷子、倒者、變死、病死、首縊、盜者、疵付、捨物、病人、酒醉、喧嘩、敵討、其の他の異變事件、臨時取扱方法を記したる一種の法定書なり。横濱小冊子に寫傳す。

諫草

二巻

一種の教訓書

一種の教訓書なり。其の自序に、「霖雨の淋しき砌り、凡に向ひ、聖賢の金言佳句を集めて、自身の箴とし、又け子孫の愚なるを諫めんが爲めに編める」云々といへり。以て其の名の出所と編著の趣意を知るべし。寶永三年丙戌(二三六六)の作なり。

十六夜日記

一巻 阿佛尼

京都より鎌倉へ下れる紀行日記なり。別名を「阿佛尼東くどり」又「阿佛尼海道記」又「阿佛坊道記」とも云へり。阿佛尼が、夫爲家の歿後、實子爲相の所領、播磨細川の莊を、異母兄爲兵に押奪せられたるより、之れを鎌倉幕府へ起訴して、其の判決を仰がん爲め、京都を出立せし當時の有様、即ち母子離別の景況より、道中月餘の日數を経て、漸く鎌倉に著くまで、過ぎゆく道々の有様を見聞につけて、感ずるにつけて、歌に詠み、文に書き、尙ほやがて鎌倉に着きぬる後も物にあひ、折にふれて、子を思ひ、郷を戀ふること、其の實情を記し、親族故舊と贈答せし歌文、さては過ぎしかたの事、行末の事、家の不運、身の薄命、歌道の衰微、子孫の困難等をかゝるまで、に記述したるものなり。其の「十六夜日記」と名けたるは、十六日を以て出立したるを縁にして名けたるなるべし。記事は、後宇多天皇の建治三年丁丑(一九三七)十月十六日發途後の事に係り、同弘安三年庚辰(一九四〇)頃、鎌倉にありて書き記したるものなるべし。

◎阿佛尼は、前但馬守平度繁の女にして、初め高倉天皇の皇孫女、安喜門院に仕へて、四條、また、右衛門左と稱へたりしが、後に大納言爲家の後妻とな

りて爲相、爲守等を生み、後別業して佛法に歸依し、名を阿佛尼と號せり。世に北林禪尼とも稱す。夫爲家は、祖父後成卿、父定家卿の後をつける歌仙なるが、阿佛尼また才學ありて、其の道に精しく、當時既に其の名を知られ、後世また歌を以て稱せらる。著書は「十六夜日記」庭の訓等なるが其の讀み歌は、歴代の撰集に入れるものいと多し。さて晩年、實子爲相の所領播磨細川の莊を爲相の異母兄爲兵に押奪せられたるより、之れを鎌倉に訴へ出でたり。「十六夜日記」は即ち此の時の紀行なり。折しも幕府の判決延引して四箇年にも及び裁判の結果は阿佛尼の勝利となり爲兵細川の莊を爲相に返し、阿佛尼は終に鎌倉の旅宿、極樂寺の境内月影谷に於て死去したりといふ。其の亡骸は同地英勝寺に葬りたるより、其の境内を阿佛屋敷と稱へたりとぞ。

十六夜日記殘月抄

三巻 北條 時鄰

「十六夜日記」を註釋詳解したるものなり。本文の字義、句意の講解、地理歴史に關する引證等最も親切なり。蓋し「十六夜日記」の古註釋中隨一の良書なり。其の殘月抄と名けたるは、本書中に、月のひかりがすかに残りたる「云々」といへる詞を縁として名けたるといへり。其の師小山田與清と共に編する所。文政七年甲申(二四八四)版行なり。

◎北條時鄰は常陸の人、和學者なり。學を小山田與清に受く。著書は本書の外に鹿島名所圖繪、相馬日記註等あり。

石井實祕録

二巻 石井 源藏

石井源藏、弟牛藏の兩人が、父兄の仇を復せし顛末の實録なり。源藏の父字右衛門は、青山因幡守の藩士なりしが、赤城源五右衛門の爲めに、鎗術仕合の遺恨によりて闘打にせられ、兄三之丞また返り討となりしを、源藏、牛藏の兩人が、廿餘年間、備に辛酸を嘗み、種々の艱苦を経て、遂に元祿十四年辛巳(二二六二)五月二十七日、伊勢國龜山に於て源五右衛門を討取りて、父兄の仇を復せし始終を記し、尙、正徳四年甲午(二二七四)に至れる、とともを記せり。當事者の自ら記し、書なれば、復讐の記事に於て洩す事なし。實祕の名に適ふと謂ふべし。

石井途志録

六巻 狼 溪

石井源藏同半藏の兩人が復讐の事實を記し、ものにして、寛延四年辛未(二四一一)狼溪の著す所なり。但し「石井實祕録」の當人の自記にして詳細なるには如かず。復讐の事歴の大略は「石井實祕録」の下を見らるべし。

石井常右衛門實記

一巻

話傳する、近江彦根の家臣石井常右衛門の一生浮沈の事績を、十五回の時代小説に作成せるものなり。何年何人の撰なるかを詳にせず。

石井明道道士

八冊 望月 高信

石川五右衛門傳記

二巻

石井其則同雄則の兄弟が復讐始末を記し、物語なり。即ち其則、及び其の弟雄則は、幼年の時父を赤堀水之助に討たれたれば、兄弟大石長雄を文武の師と頼みて、研磨し遂に元祿十三年庚辰(二二六〇)三月二十八日敵を討ち、父の仇を復することを得たり。本書は其の始終を記せるなり。冊數十冊の處、今見るもの其の二冊を開けり。

石川五右衛門傳記

二巻

俗間話傳するところの強盜石川五右衛門の一生を作成せる小説なり。明治十九年丙戌(二五四六)今古實録として、和本二冊に活版す。

石川丈山祝壽編

一巻 石川 四

寛文十二年壬子(二二三三)著者が九十の年賀に寄贈せられたる諸家の詩文を集めたるもの。内題には「新鶴石微君六々先生祝壽編」と題せり。弘文院林學士、林春常、林春東、人見友元、野子菟、平藤仙桂、楚允迪、菅由益、渡林庵、田中靜安、釋玄鴻、水野梅軒、大隅信治、大極道室、森島一枝、渡邊鋤月齋、石川克等の文詩を載せ、同年石川克の跋あり。或は「祝壽編」と題して行つものあり。

石川清之助筆記

一巻

慶應元年乙丑(二五二五)正月元日より、同三年丁

卯五月十九日に至る(元年六月十六日より、二年十一月十五日まで)西南軍策に奔走せる日記なり。元名を海西雜記「また、行行筆記」といふ。内外國の衝突、薩長州の關係、幕府當年の態度等を仔細に見るべし。

石川忠總留書

二巻 石川 忠總

諸家覺書の類を集めたるものにして、當時の實記なり。安部四郎兵衛入道定次の筆記、次に山中忠兵衛長嶽合戦の覺書、次に加藤宗月が伊賀越の記、又は北條丹後守が家人の手録、又は源講主殿頭家忠が日記どもを抄出せり。正徳五年乙未(二二七五)正月十九日寫せるよしを記す。

◎石川忠總は徳川氏の家臣にして、大久保忠隣の子なり。天正十年壬午(二四二二)に生る。大阪冬の役、及び夏の役に秀忠に従つて功を立て、累進して近江の膳所城に封ぜられ、慶安三年庚寅(二二二二)〇十一月二十九日に卒せり。

石谷土入記

一巻 石谷 土入

最初「直孝公之御咄覺書」と記して、井伊直孝が一生事績の大略を敘し、更に、右之外私存寄候七箇條之事として、其逸事七項を擧げ、最後に、右七箇條の書付、私儀は文武の道をも不心得、年八十迄暮し中候、餘久しく候に付、承候儀を申上候は、御心得にも成り可申かと存如此候、此段は内匠頭殿末期に私へ被仰候は、長命仕り、御心も被爲付候時分迄ながら候は、必ず御心付候様に一言なりと



くさか

くさかせ

も申上候様にと御約束を致し候間如此候、以上。寛文九年酉(二三二九)正月日、石谷土入、井伊吉十郎殿参りと記せり。其の由来知るべし。

くさか

石狩日誌 一卷 松浦竹四郎 蝦夷石狩の地誌にして、安政四年丁巳(二五二七)四月、實檢するところなり。萬延元年庚申(二五二〇)の凡例あり。

くさか

石車 一卷 井原 西鶴 俳諧集「物見車」を難破したる俳論なり。「物見車」とは今書の序に、「此の春の物見車として、俳諧歌仙の一卷を作り、諸國の點者二十五人に付墨を願ひうけて、其の身の樂みにせし事にはあらずして、先達の非をあらはし、頭帯といへども、道理に叶ふ所なし」といへるものにして、又、今書を「石車」と名けし所以は、同序に、「千人持の石車を、俳諧まゝとの道に引掛け、物見車を落花微塵に打くだきぬ」と云へるにて知るべし。元祿四年辛未(二三五一)の著述に係る。

くさかせ

醫學小言 六卷 原 昌克 醫學に關する説話なり。著者が説明せるところを門人等が假名書に筆述したる雜事なり。享和三年癸亥(二四六三)昌克の自序、及び文化二年乙丑(二四六五)田村玄仙の序あり。

くさかせ

醫學說約 本一巻 病名を列舉して一々其の方劑を示したるものなり。年代著者共に詳ならず。

くさかせ

石田軍記 五冊 石田三成に關する軍記なり。三成が秀吉在世の時に寵愛を受け、秀次を讒せし事などより説き起し、秀吉の薨後、幼主秀頼を擁して諸大名を誅らひ、徳川家康と難を構へて關原の大戦に及べること、終りに小西行長等と共に誅戮せらるるに至りし始末等を記したるなり。

くさかせ

石田軍記 本四巻 關ヶ原合戦を中心として當年前後の軍戦を記せり。一名「關原物語」ともいふ。第一巻は東軍會津遊發の事より、木曾川の川越、同新加納合戦の事に至り、第二巻は岐阜落城の事より野州會根城に於て敵の火付を召捕る事、第三巻に安藝中納言元安を味方に引入る、事より、關原合戦の事に至り、第四巻に江州佐和山城落去の事より、三成、行長、安國寺伏誅梟首の事に至る。凡そ廿九條より成れり。

くさかせ

石田城跡集 本一冊 石田三成没落の後、其の舊城下の傳説を集め記したるものなり。記者の名明ならず。

くさかせ

石田先生事績 一冊 心學道話を以て聞えたる石田梅庵の事績を詳述したるものなり。文化三年丙寅(二四六六)刊行す。門人等の録する所なり。

くさかせ

くさかせ

くさかせ

石田三成記 本一冊 秀吉薨後、石田三成に關する軍記にして、三成謀反の始より、其の没落の終に及び、徳川氏が征夷將軍に任ぜられし事に筆を止めたり。

くさかせ

石田三成記 本二巻 石田三成に關する記事を主として、秀吉、家康等の事を録せり。最初、太閤秀吉の事、大津落城の事より、家康進發、秀秋降参、秀忠對軍となることに至る。以上二十七箇條より成れる略記なり。

くさかせ

石なとり 本二巻 百華庵史 古歌を集めて、一々詳解す。卷末に、「此の二巻年々の反故のうらに書きすきみ置き侍るを、或人のただひとりもたる娘のもとに送り侍るとて、いとくなき人のもてあそびくさにもと思ふより、石なとりとは名け侍るものならず。百華庵史とあり。

くさかせ

石原記 本一巻 黒田土佐子 黒田大和守直純の母が、本所石原の別邸に於ける日記なり。享保二年丁酉(二三七七)正月二十二日、江戸小石川より出火して、延焼若干に及び、黒田直純が常盤橋の屋敷も焼失せしかば、其の母本宅造一營中、本所別邸に移居し、翌年十一月四日本邸に歸るまでの神佛參詣の記、近郊遊覽の事、及び詠歌等

を載せたるなり。

◎黒田土佐子は直純の母なり。

くさかせ

異字篇 一冊 僧 寂本 漢字の異字異體を集めたるものなり。例へば、國、固、固、固、忽、勿、後、后、死、死、亡、亡、亂、亂、等を網羅對照したるものなり。初學の便用少からず。貞享年間(二三四〇)頃の著述にして、元祿三年庚午(二三五〇)の刊行に係る。

くさかせ

寂本は高野山の住僧なり。寛永八年辛未(二二九九)山城國深草に生る。長谷川姓にして雲石堂と號す。應隆阿闍梨に就き兩部密軌及び灌頂を受く。應隆の死後快進阿闍梨を師とし、講徒日に新、内外の典書に通ぜざること無し。又、書畫彫工を善くし、殊に詩文に卓越せり。著す所、神社考辨疑、弘法大師弟子傳、異字編等二十餘部あり。元祿十四年辛巳(二三六一)十月歿せり、年七十一。

くさかせ

石森山繪圖 本一鋪 甲州山梨郡石森村なる石森山社の圖なり。本社、拜殿、瑞籬、燈道、石燈籠、湯釜、鳥居、四阿(あづまや)神明宮、及、末社五所の所在等を記し、十八種の奇石、勝地、名木、地形等を圖記せり。文化元年甲子(二四六四)十月、同郡錦塚村保右衛門といふものが、田中何某の役所へ差出したるものなりといふ。附録一巻あり。

くさかせ

石山寺縁起 本一巻

近江國志賀郡石山寺の聖武帝の敕願其辨僧正の草創なることより、其の來歴沿革を詳記したるものなり。即ち孝謙天皇の天平勝寶四年壬辰(四二二)より、靈元天皇の貞享元年甲子(三四四)に至る凡そ九百三十餘年間の來歴を詳記せり。卷末に安永二年甲午(二四三四)傳寫の趣を記す。「續群書類從」八百十二の卷、釋家部第二十七に收む。

くさかせ

石山寺圖 一鋪 近江國志賀郡なる石山寺の境内、本堂、及び諸堂を圖せり。同寺は天平勝寶六年甲午(四二四)僧長辨の創建したりしものなりといふ。

くさかせ

石山寺由來 一卷 近江國志賀郡石山寺の由來記にて、同寺天平勝寶年中に建立して、明和六年己丑(二四二九)まで、凡そ千二十四年になれるとて、其の間の略歴を記せり。卷首には、石山寺濫觴觀音靈驗を長歌調に綴り、卷尾に、近江入景の圖及び同和歌等を掲げたり。

くさかせ

醫書 本一巻 諸病に對する處方を略述したる横綴小冊子なり。漢文にて記せり。

くさかせ

異稱錦繡段 二卷 鈴木 長頼 本邦人の詩の支那の諸書中あらはれしものを集



くまのり

めたるものなり。著者が本朝外考を檢する折、本朝の文人、彼の土に渡りて、唐宋元明の人々と相唱和せし時にして、彼の土の書に遺りしものを、輯録したるものなり。本名「梁華詩編」といふべきを、書坊の姦策より、漫に「異稱錦繡段」と改題したるなり。本書は貞享二年乙丑(二三四五)の自序あるを全く寶永と偽作せり。

○鈴木長頼の傳は「日光山御宮再修記」の下にあり。

異稱皇朝風土記 本一冊 鶴峯 戊申

改名「日出風土記」の下に解題せり。「異稱皇朝風土記」の題號は、該書の原名なりしなり。

くまのり

異稱日本傳 本十五卷 松下 見林

支那朝鮮の諸書中より、我が日本に關する事實を、抄出訂正したるものなり。我が邦の事績、從來彼の土の書に散見するものあり。然れども往々傳聞の誤あり、是非真偽の混淆あるを以て、これが是正を謀り、支那歴代の正史以下凡百の書を渉獵し抄録し、兼れて國書を引徵して訂正したるものなり。上中下三卷に分けて都合十五冊とせり。元祿元年戊申(二三四八)の自序あり。同六年癸酉に刊行せり。○松下見林は、京都の儒醫なり。漢學及び國學に精し。寛永十四年丁丑(二二九七)生る。姓は橋、名は慶攝、字は諸生、西峯散人と號す。古林見宜に就き醫學を修め、年十五都講となり、二十一歳の時見宜の歿後、其の業を襲ぐ。博覽強記和漢の書に通ぜり。

○壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下にあり。

くまのり

位置式補義 本一巻 大塚 嘉樹

壺井義知の「位置式私考」を補釋したるものなり。著者の序に「爲我宗兄留、竊折衷壺井先生位置考註補一二之僻案、而筆以假字、或以俗言、而今黃口易得、見、故假題「位置考補義」と云ひ、同人の凡例に「條々壺井氏の位置式を本書として悉しく其次第に習へり。然して微志を加増するの條には其條の圈上に補の字を加ふるなり」と云へるもの、能く本書の内容を表明せり。「位置式考」を讀む人、須、彼此參照すべし。寛政二年庚戌(二四五〇)の著述に係る。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

位置式補義或問 本一巻 大塚 嘉樹

自著「位置式補義」に就き難解の點を問答體に俗解したるものにして、新に發明せるところも多し、彼書を讀むもの、また此書を一讀せざる可からず。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

古代の位置に關する考證なり。官、相當者以官書于位上、兼任相當官二以上者當依「官位令列分正兼、兼任文武兩官相當者以文爲「正武爲兼、官位不相當者以位書于官上(有「字行」二)、無相當の官必書「子位上、列姓戶名之法無尊卑」一也、其他數項あり。文簡にして全篇數紙に過ぎずと雖、據所精確なれば古代位署の制を知るに便利なり。「位置式補義」の著者大塚嘉樹が「文義約而事理明瞭也定爲位置式明鑑者也」といへるは蓋し適言にあらざるべし。

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

古來名語の、知識、道德上の事實を筆記したるものなり。卷一孝行之辨より。孔明之智謀至高之辨に至る廿五條。卷二戒智巧見愚辨より。柴木木村其助行孝悌事に至る十三條。卷三理氣之辨。卷四傳兵法之辨より。秀吉公御詠歌之辨に至る十條。卷五北條殿滅亡之辨より。賊臣董卓滅亡之辨に至る七條。卷六横田廣瀬武功の辨より。家康公船醫見柳御指南辨に至る廿六條。卷七爲臣者宜工夫六字辨より。名月之起辨に至る八條。卷八人而無醫術忠孝之道不能行盡辨と人物辨との二條。卷九逢心友大内義隆滅亡並元就公智勇之辨より。大江元就公元日祝之辨に至る八條。卷十栗田刑部之小姓討死之辨より。能興次第之辨に至る八條。以上百八條片假名文にて記す。書名は「古之學者爲人、今之學者爲己」の語にとりて、萬治二年己亥(二二一九)の自跋にあり。寛文二年壬寅(二二二二)出版す。

くまのり

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

官位書式の事を辨じたる問答體の書なり。著者の「位置式私考」と參照すべし。

○壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下にあり。

くまのり

醫事或問 二巻 吉益 爲則

醫事に關する諸或問に答へたるものなり。普通人に曉り易からしむる爲め、國語を以て平假名に示されたり。寛政十二年庚申(二四六〇)一月の版行なり、更に文化八年辛未(二四七二)十月再版す。○吉益爲則は名醫なり。元祿十五年壬午(二二二六)二(二)生れ、東洞と號し、公言と字す。父の門人津祐順に就て金瘡産科の術を學ぶ。後、大志を起し、天下の醫を先づ醫せざれば病を救ふべからずとて、京師に出て授導、著述をなす。即ち類聚方、藥微、方極、醫事古言、醫方分量考、方選、藥微編、醫斷、古法便覽、建珠錄、丸散方、東洞遺稿等あり。安永二年癸巳(二四三三)九月二十二日歿す、年七十二。

くまのり

石綿論 一巻 黒田 玄鶴

石綿を以て火燒布を製する事、並に、其の功用を記せり。文政五年壬午(二四八二)龜田梓の序、及び峯田奎の跋あり。

○黒田玄鶴は越後の人なり。

くまのり

爲人鈔 十巻 苦甜齋守株

くまのり

○壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下にあり。

くまのり

位置式補義 本一巻 大塚 嘉樹

壺井義知の「位置式私考」を補釋したるものなり。著者の序に「爲我宗兄留、竊折衷壺井先生位置考註補一二之僻案、而筆以假字、或以俗言、而今黃口易得、見、故假題「位置考補義」と云ひ、同人の凡例に「條々壺井氏の位置式を本書として悉しく其次第に習へり。然して微志を加増するの條には其條の圈上に補の字を加ふるなり」と云へるもの、能く本書の内容を表明せり。「位置式考」を讀む人、須、彼此參照すべし。寛政二年庚戌(二四五〇)の著述に係る。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

位置式補義或問 本一巻 大塚 嘉樹

自著「位置式補義」に就き難解の點を問答體に俗解したるものにして、新に發明せるところも多し、彼書を讀むもの、また此書を一讀せざる可からず。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

古來名語の、知識、道德上の事實を筆記したるものなり。卷一孝行之辨より。孔明之智謀至高之辨に至る廿五條。卷二戒智巧見愚辨より。柴木木村其助行孝悌事に至る十三條。卷三理氣之辨。卷四傳兵法之辨より。秀吉公御詠歌之辨に至る十條。卷五北條殿滅亡之辨より。賊臣董卓滅亡之辨に至る七條。卷六横田廣瀬武功の辨より。家康公船醫見柳御指南辨に至る廿六條。卷七爲臣者宜工夫六字辨より。名月之起辨に至る八條。卷八人而無醫術忠孝之道不能行盡辨と人物辨との二條。卷九逢心友大内義隆滅亡並元就公智勇之辨より。大江元就公元日祝之辨に至る八條。卷十栗田刑部之小姓討死之辨より。能興次第之辨に至る八條。以上百八條片假名文にて記す。書名は「古之學者爲人、今之學者爲己」の語にとりて、萬治二年己亥(二二一九)の自跋にあり。寛文二年壬寅(二二二二)出版す。

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

古來名語の、知識、道德上の事實を筆記したるものなり。卷一孝行之辨より。孔明之智謀至高之辨に至る廿五條。卷二戒智巧見愚辨より。柴木木村其助行孝悌事に至る十三條。卷三理氣之辨。卷四傳兵法之辨より。秀吉公御詠歌之辨に至る十條。卷五北條殿滅亡之辨より。賊臣董卓滅亡之辨に至る七條。卷六横田廣瀬武功の辨より。家康公船醫見柳御指南辨に至る廿六條。卷七爲臣者宜工夫六字辨より。名月之起辨に至る八條。卷八人而無醫術忠孝之道不能行盡辨と人物辨との二條。卷九逢心友大内義隆滅亡並元就公智勇之辨より。大江元就公元日祝之辨に至る八條。卷十栗田刑部之小姓討死之辨より。能興次第之辨に至る八條。以上百八條片假名文にて記す。書名は「古之學者爲人、今之學者爲己」の語にとりて、萬治二年己亥(二二一九)の自跋にあり。寛文二年壬寅(二二二二)出版す。

くまのり

爲人道 一巻 僧 慈雲

先著「十善法語」十二卷(安永三年の作)の大略を、譯述したるものなり。人の全うして、天命にも達し、佛道にも入るべしといふ、不殺生、不偷盜、不邪淫の三善業、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌の四善業、不貪欲、不瞋恚、不邪見の三善業、即ち身三口四意三の道を略述したるものなり。

○僧慈雲の傳記は「十善法語」の下にあり。

くまのり

醫心方 本三十巻 丹波 康賴

漢法醫術に關する諸件を輯載したるものなり。病

くまのり

○壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下にあり。

くまのり

位置式補義 本一巻 大塚 嘉樹

壺井義知の「位置式私考」を補釋したるものなり。著者の序に「爲我宗兄留、竊折衷壺井先生位置考註補一二之僻案、而筆以假字、或以俗言、而今黃口易得、見、故假題「位置考補義」と云ひ、同人の凡例に「條々壺井氏の位置式を本書として悉しく其次第に習へり。然して微志を加増するの條には其條の圈上に補の字を加ふるなり」と云へるもの、能く本書の内容を表明せり。「位置式考」を讀む人、須、彼此參照すべし。寛政二年庚戌(二四五〇)の著述に係る。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

位置式補義或問 本一巻 大塚 嘉樹

自著「位置式補義」に就き難解の點を問答體に俗解したるものにして、新に發明せるところも多し、彼書を讀むもの、また此書を一讀せざる可からず。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

くまのり

位置式私考 本一巻 壺井 義知

古來名語の、知識、道德上の事實を筆記したるものなり。卷一孝行之辨より。孔明之智謀至高之辨に至る廿五條。卷二戒智巧見愚辨より。柴木木村其助行孝悌事に至る十三條。卷三理氣之辨。卷四傳兵法之辨より。秀吉公御詠歌之辨に至る十條。卷五北條殿滅亡之辨より。賊臣董卓滅亡之辨に至る七條。卷六横田廣瀬武功の辨より。家康公船醫見柳御指南辨に至る廿六條。卷七爲臣者宜工夫六字辨より。名月之起辨に至る八條。卷八人而無醫術忠孝之道不能行盡辨と人物辨との二條。卷九逢心友大内義隆滅亡並元就公智勇之辨より。大江元就公元日祝之辨に至る八條。卷十栗田刑部之小姓討死之辨より。能興次第之辨に至る八條。以上百八條片假名文にて記す。書名は「古之學者爲人、今之學者爲己」の語にとりて、萬治二年己亥(二二一九)の自跋にあり。寛文二年壬寅(二二二二)出版す。

くまのり

伊水溫故 本四冊 菊岡 行宣

伊賀國の名勝地誌にして、全國の郷名、神社佛閣の由來沿革、神名宗旨、遺蹟の大要等を列記せり。貞享四年丁卯(二三四七)の著作に係る。

○菊岡行宣の傳は「世説一統」の下に掲ぐ。

くまのり

渭水聞見錄 本四巻 渭水 清世

蜂須賀家の記なり。正利より、正勝、家政、玉與忠英、光隆、綱通に至る七代間の編年史にして國家の大事は悉く漢文にて記し、家中提書の類は俗文のまゝに從へり。元文元年丙辰(二二九六)の自序あり。渭水清世逸人とのみ記して姓名を著さず、藩臣なるべし。

くまのり

○壺井義知の傳は「官職淨說或問」の下にあり。

くまのり

位置式補義 本一巻 大塚 嘉樹

壺井義知の「位置式私考」を補釋したるものなり。著者の序に「爲我宗兄留、竊折衷壺井先生位置考註補一二之僻案、而筆以假字、或以俗言、而今黃口易得、見、故假題「位置考補義」と云ひ、同人の凡例に「條々壺井氏の位置式を本書として悉しく其次第に習へり。然して微志を加増するの條には其條の圈上に補の字を加ふるなり」と云へるもの、能く本書の内容を表明せり。「位置式考」を讀む人、須、彼此參照すべし。寛政二年庚戌(二四五〇)の著述に係る。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

位置式補義或問 本一巻 大塚 嘉樹

自著「位置式補義」に就き難解の點を問答體に俗解したるものにして、新に發明せるところも多し、彼書を讀むもの、また此書を一讀せざる可からず。

○大塚嘉樹の傳は「若梧隨筆」の下にあり。

くまのり

伊須加の吟 本一巻

本書の巻頭に「自筆にてかゝまほしけれど、是れ







くせけん

り。引用古傳書凡て九十三部に互るといふ。安永七年戊戌(二四三八)の凡例あり。著者時に年六十二なりし由を記せり。  
◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。  
くせけんかしのよきいぬめがね

伊勢家應書藥師拔書 本一巻 伊勢 貞助

應の藥師數十條を記したるものにて、最初に應之抄八條の内を掲げ、應の鳥の事、應の事、付白鷹の事、以下藥師に關する條項を列擧説明す。  
◎伊勢貞助のことは「伊勢貞助雜記」の下にあり。

伊勢家禮式雜書 本十六冊 伊勢 貞丈

諸禮式、故實、文學、其の他に關する雜書なり。百四十餘卷より成れり。思ふに、伊勢貞丈の著書は、後人の編輯、當を得ざるもの多く、或は甲に出て、乙に入り、丙丁に重複することあり。故に本書に收めたるも世に單行本となれるもの多ければ、隨時一冊一部の書として解題せるもの多し。  
◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

伊勢源氏十二番女合 一巻 伊勢源氏の物語になぞらへて作り、文中に十二番の女合を組み入れていと面白く物したるものなり。十二番の組は左方、五條大后宮、二條大皇太后宮、有常女君、戀死君、夢語君、小野小町、齋宮女御、くせけんじじいはんをんなあはせ

伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

くせけん

伊勢、有常女御君、中納言女君、染殿内侍、初草君、右方は桐童更衣、海雲女院、裝上、裝上、臘月夜内侍、女三宮、權齋院、明石上、空蟬君、夕貝上、蓬生君、玉座内侍等なり。「群書類從」卷三十四、物語部第八に收む。

伊勢國司記略 本三巻 齋藤 正謙

伊勢國司北畠氏累代の傳記なり。一名を「北畠國司記略」と云ふ。即ち卷一城邑考並圖、卷二系譜考、卷三、卷四、卷五、卷六、卷七は家傳、卷八、卷九は族人傳、卷十家人譜、卷十一工藤家譜、卷十二關家譜、卷十三北勢四十八家譜等を掲げ、引用書目は六十餘部に互り、本文には一々その據所を明記して、精確詳細に北畠氏累代本支の傳記を敘述したるものなり。然るに、現存の本、第五卷に止まるは如何にか。惜むべきことなり。天保十一年庚子(二五〇〇)の著述に係る。  
◎齋藤正謙は儒學者なり。字を有終といひ、拙堂、又鐵研とも號せり。寛政九年丁巳(二四五七)江戸柳原の津藩邸に生る。幼より學を好み、長じて昌平塾に入り、日夕精研して最も古文に力み、卓然として一家をなせり。廿四歳にして藤堂高見の學校に學職となり、更に講官となる。後高見の子高猷に侍讀すること十數年、其の間江戶に從ひて天下の諸名士に交り、益聞見を廣め、名を天下に知らる。曾て遊學中、頼養を訪ひ、友人の禮を以て遇せらる。弘化元年、督學となり、文武の學政を總理す、一方には學則を定め、學徒を擇び、書籍を求め、文庫を立て、一方には劍客を延き、兵術を練りて此技を著述に係る。

伊勢國司諸侍役付 本一巻 伊勢古來の國司の石高諸侍の交名記にして、北畠少將親顯時代に及ぶ。卷末に「右渡會郡宇津津長峯鈴殿院所藏書、天明四年甲辰(二四四四)十月寫、佐波幹員」と記せり。

伊勢國緒古屋草紙 本二巻 古屋 久語

國史和歌の書等に尋討して、伊勢國の各郡郷に就き其の歴史、地誌等を考證編次したるものなり。自序、及、江島沿海の序等あれど、年代を記さず、二巻一冊に寫傳す。  
◎古屋久語の傳記は「伊勢風土記」の下にあり。

伊勢齋宮部類 本一巻 内題に「伊勢齋宮部類拔萃」と掲げて、都合七十一條、女手内親王の傳系等を、諸書に徴して詳記せ

くせけん

り。止由氣皇太神宮内人の拔萃する所なるべし。

伊勢祭主沙汰文 本一巻 大中臣精長

明暦元年乙未(二二一五)より、萬治元年戊戌(二二二一)に至る間の、祭主職沙汰文を編輯したるものなり。萬治元年八月の末記あり。右條々三年以來數通言上候事者雖多候、萬一太神宮之古法於相破候者、爲神慮、爲朝家一大事之故、不願精長身上、致言上候、偏奉仰御察者也云々といふ。著者大中臣精長は大宮司たり。

伊勢貞興返答書 本一巻 伊勢 貞興

武家の禮式故實に關する口傳書なり。すはうめきの事、御能く候事、弓矢受渡野太刀受渡、長刀鑑の渡方等以下數百項に渡りて記載せり。奥書に「此の一卷流々雖有之、記置通、加筆進之候。聊不可有外見之者也」とあり。元龜三年壬申(二二三二)七月四日の著なり。「續群書類從」卷六百八十八、武家部第三十四に收む。

伊勢貞助雜記 本一巻 伊勢 貞助

武家の禮儀故實を記述したる口傳書なり。最初御内書の御文旨として幾多の熟語を並列し、次に殿中酒宴の時の順序次第等より、以下凡そ數百項にわたりにてあらゆる儀式故實を詳記せり。「續群書類

從「六百八十九の卷、武家部第三十五に收む。

伊勢貞助は故實家にて別に伊勢應書藥師拔書、武雜書札禮部、下間大藏法橋守中條々の著あり。

伊勢貞丈家訓 二巻 伊勢 貞丈

著者の家訓。五常の事、五倫の事、家業の事、衣食住の事、神佛の事、酒色財妾の事、苦樂の事、懶惰の事、省身の事、改過の事、非理法權天の事、儉約の事、堪忍の事、自暴自棄の事、等名目をたてて懇篤に教戒したるものなり。寶曆十三年癸未(二四二二)十一月二十日の作なり。  
◎伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

伊勢貞親以來傳書 本一巻 伊勢 貞親

武家の故實作法を記したるものなり。卷頭「伊勢守貞親以來傳書第六」とあるを見れば、今第五までを闕きたるものか。「續群書類從」にも收めたり。

伊勢貞親教訓 本一巻 伊勢 貞親

著者が、其の子貞宗に書き示したる家訓書なり。即ち神佛を敬信すべきことより、日夜朝暮の注意、奉公の心得、實際の用意、修學習藝の事等、凡そ數十項を書記したり。最後に、「子時長祿去頃」とあり。長祿は後花園天皇の年號紀元二千百十七年より二千百十九年に至るなり。  
◎伊勢貞親は足利氏の臣なり。應永二十四年丁酉(二〇七七)生る。年十六にして兵庫助に任ぜられ

漸く進みて從四位上に敘せられ、文正元年内書右筆となる。後年罪を得て追放せられ、細川勝元に依りて僅かに舊職に復す。文明五年癸巳(二二三三)正月、五十七歳にて卒せり。

伊勢貞順記 本五巻 伊勢 貞順

食事の禮式、萬時之事、宮仕之次第、元服之次第、書札之次第等數十條を記したるもの。天文十八年己酉(二二〇九)正月の著なり。「續群書類從」本の「伊勢六郎左衛門貞順記」二巻とは自ら別物なり。  
◎伊勢貞順は六郎左衛門尉と通稱す。別に伊勢貞順約文書、伊勢六郎左衛門尉貞順記等の著あり。

伊勢貞順約文書 本一巻 伊勢 貞順

着類の染色、性質、着用法につきて論述したるものなり。約文は、紅梅、蒟蒻、増嶋、楡皮色、紫等にて色を得たるものを云ふ。各着用法を、男女年齢場所等に就きて普通一定の儀式的に説明したるものなり。凡そ數十項より成れり。天文十七年戊申(二二二〇)十一月十八日の著に係る。「續群書類從」卷六百八十七、武家部第三十三に收む。

伊勢貞久武雜記 本一巻 伊勢 貞久

武家の禮式故實等を記載したるものにて、凡そ數百項より成れり。末に永正十五年戊寅(二一七八)三



くせめた

月十七日山式部少輔の所へ御成時御一獻の次第といふを掲げたり。續群書類從「卷六百八十八武家部第三十四に收む。

◎伊勢貞久の傳は「道照愚草」の下にあり。

くせめた

伊勢貞陸自筆記 本一卷

伊勢 貞陸

殿中に於ける正月より十二月までの、御對面御祝以下の次第を記したるものにて、大判十餘枚の冊子なり。延享五年戊辰(二四〇八)二月、伊勢貞丈の奥書あり、右伊勢守貞陸自筆也。卷末自古聞之、以別本欲補之、未得焉といひ、更に追記して「貞丈按、此書の末は京都南禪寺の慈昭院にあるべし、尋求め寫すべし。此書の外題に伊勢守貞陸自筆と書たる手蹟、慈昭院先住の手蹟也。慈昭院の住、平州までは交通毎年なり。平州遷化以後、慈昭院をば慈氏院兼帯也、慈氏院よりは交通なし。仍尋求がたしといへり。

◎伊勢貞陸のことは「常照愚草」の下にあり。

くせめた

伊勢貞滿筆記 本一卷 伊勢 貞滿

書札の事に關せる故實口傳書なり。即ち進呈書、往復狀の認方、宿名、稱呼其他あらゆる用心注意に就き諸例を引きて説明したるものなり。天文二年癸巳(二一九三)七月の奥書に、右條々對南雖不少、御留依離去、今書進之候。定相違之儀可有之哉、一切不可有外見者也とあり。續群書類從「六百八十九の卷、武家部第三十五に收む。

著者伊勢貞滿の傳は詳ならず。

くせめた

伊勢參宮案内記 二卷 藤原長兵衛

上卷に齋宮の起、離宮院の事、以下外宮の事をば圖を交へて記し、下卷に内宮の記と圖とを掲ぐ。寶永四年丁亥(二三六七)の自序あり。

◎藤原長兵衛は伊勢山田一志の人にして、講古堂と號せり。

くせめた

伊勢參宮名所圖會 六卷

關月

京都より、伊勢參宮をなす順路を記したるものにて、其の間の名所、遊蹟、景勝等を、委しく記し、且、美しき繪圖を加へたり。藤波二位季忠の序、寛政九年丁巳(二四五七)閏七月なほの海驪の跋等あり。第五を二冊に作り、附録二冊を添へ都合八冊の書なり。

◎關月の傳記は「山海名産圖繪」の下にあり。

くせめた

伊勢參道里程抄 本一卷

尾張名古屋より出て、宮、桑名、四日市、神戸、上野、安濃津、雲出、松坂、新茶坊、小俣、山田等を経て、外宮、内宮に參詣し、朝熊、二見浦に出るまでの道中記にして、其の間の社寺、古蹟、名勝等を略記し、巻首に各里程を掲げたり。書中の記事によれば、貞享元祿間のものたることを知る。著者は尾張のものなるべし。

くせめた

伊勢詩志 一卷 鷹羽 龍年

伊勢の名所、遊蹟、山川、河海を詠出したる詩集なり。安政五年戊午(二五二八)八月の編。附録に詩論九條を附せり。津藩土井格の序と、男維孝の附録書一通とを巻首に掲げ、同五年山本崑の跋を載せたり。◎鷹羽龍年の傳は「養鳴庵存稿」の下にあり。

くせめた

伊勢集 本一卷 伊勢

「伊勢物語」の體に倣ひて、其の歌を順序したるものなり。始に「何れの御時にかありけん」と書出せるより、「おまつ波云々の長歌までは、伊勢の世心の初より書出して、宇多帝の御時、七條の後の未だ御息所にて、おはしましけるとき、仕へまつれるほど、帝に召し仕はれて、皇子産奉り、帝御讓位の後、仁和寺におはしましける時、皇子の薨去あり、後また元の所の宮に仕へけるが、かくれさせ給ひてよるべくなりたるまでの事を、昔物語の如く書記したるものなり。其の中、いとみそかに人に會ひたりけるを、人々やう／＼いひの、しりけり」と端書せる歌より以下は、伊勢の歿後に、人の書加へたるものなるべし。『萬葉集』の歌、または他人の歌等交れり。蓋、伊勢在世の時、自家の詠歌を書留る中に、古歌や、人の歌等をも書入れ置きたるを、編纂の際、識別せずして混入したるものなるべし。後の編纂者は、伊勢が中務卿敦實親王に會ひて生みたる女の申すなるべしといふ。

◎伊勢は大和守從五位上藤原原隆の女にして、七

くせめた

くせめた

伊勢神領内名所集 本一卷

伊勢内外宮より始まりて、竹河に終り、凡そ五十五箇所を擧げ、古歌を引いて其の事實を證明せり。元祿年中の寫本による。

くせめた

伊勢遷宮次第 本一卷 度會 延良

一名「二所皇太神遷幸要略」の下に解題せり。

くせめた

伊勢遷宮次第記 五卷 度會 延佳

條の後の宮の女房たり。寛平の間、更衣となり、皇子を生めり。父繼體は參議從三位家宗の二男にして、貞觀十三年辛卯(一五三二)四月十三日文章生となり、仁和元年乙巳(一五四五)八月十五日伊勢守に任じ、二年正月七日從五位上に叙せられ、寛平三年辛亥(一五五一)正月大和守に任じ、伊勢守となる。伊勢は、此の頃の所生なるによりて、伊勢と名けたりといへり。

くせめた

伊勢神名略記 一卷 度會 延經

内題には「二所皇太神宮神名略記」と記し、伊勢二宮攝社の神名、社地、並に齋宮、離宮、機殿等の事實を、漢文にて詳註す。元祿七年甲戌(二三五四)九月十一日の自跋、同年度會延經の序あり。

くせめた

伊勢太神宮參詣記 一卷 僧 土佛

康永元年壬午(二〇〇二)十月、伊勢太神宮參詣の時の記事にて、踏次見聞の瑣事等を詳しく記せり。貞享元年甲子(二三三四)三月京都にて版す。

くせめた

伊勢太神宮神異記 二卷 度會 延佳

伊勢太神宮に關する靈感神異の事を記載せし雜錄なり。寛文六年丙午(二三二六)の著作刊行に係る。

くせめた

伊勢路紀行 本一卷

江戸より東海道を経て伊勢に詣りて、伊賀越より大和を廻り、大和を経て京都に入り、復、東海道を江戸に歸る紀行なり。卷末に「延享元年甲子(二四〇四)守保誌」とあり。本書一名を「重那留」といへり。

くせめた

伊勢路の記 一卷 源 欣應

和文體の紀行文なり。著者が伊勢の太神宮に參詣せんとして、明和四年丁亥(二四二七)三月に、往吉を出で、大和を経て、伊勢の國に到りし迄の紀行なり。序跋等なく、刊行者の奥書あれども其の年月を記せず。

くせめた

伊勢路乃志類邊 一卷 茂 三



くせぢや

伊勢兩宮の事を記し、宇治山田の土産、朝熊嶽、二見浦への道踏、伊雜太神宮より、鳥羽、京、關東、東海道等の大略を記せり。寛延三年庚午(二四一〇)の自序あり。著者茂三は伊勢國桑名邊の人なるべし。其の姓を記さず。

くせぢやいぶるゐ

伊勢勅使部類記 本六卷

伊勢太神宮へ歴代奉幣使を立てたる、例書なり。奉宮例、勅使の心得、福宜の事等を始めとして、聖武天皇の天平六年甲戌(一三九四)より、後醍醐天皇の建長二年庚戌(一九一〇)に至る勅使の記、其の他歴代歴年の記事等を掲記せり。もと七卷ありしもの、開けて今は六卷を遺せり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢内外末社記 本一卷

伊勢内外末社の末社なる神名及び鎮座、末社八十五座と、外宮並に別宮四箇所に於ける十六座の攝社、四十七座との神號、及び各鎮座の所名等を詳細に記録せり。明暦二年丙申(一三二六)十月、勢州度會郡内宮神官腹巻主膳、荒木田弘尙等の勝稿するところなり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢長帳 本四冊 正友

著者の俳諧集なり。編纂の年代は記さざれど、思ふに延寶年中のものなるべし。

◎正友は伊勢山田の人にて杉田望一の弟なり。江戸に出て、芝罘町に住せり。俳人加友の弟子なり。

くせぢや

くせぢやいぶるゐ

伊勢二宮割竹辨難 本一卷 荒木田末壽

外宮豐受太神の事に就きて、本居宣長の「伊勢二宮割竹辨」の説を非難したるものなり。即ち外宮儀式文言、神樂歌、神御衣祭禮前後等の條々に於きて、本居と意見を異にせる點をば、「割竹辨」の原文を引きて論難せり。享和三年癸亥(二四六三)の著述に係る。

◎荒木田末壽の傳は「伊勢二宮割竹三四辨」の下にあり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二宮徴 本一卷 井上 淑蔭

伊勢内外二宮に関する考證なり。二宮鎮座の權輿、祭神の異同、名稱の由来等を、精確なる古史に徴して考記したるなり。慶應二年丙寅(二五二六)十一月の作。

◎井上淑蔭の傳は「神兵校威考」の下にあり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二社三宮圖 一冊 度會 行忠

着色にて、二社三宮を圖せり。年代、作者等を記さざるも、伊勢社内にて古刻したるものなるべし。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二所皇太神宮古老口實傳 本一卷 度會 行忠

伊勢二所太神宮御鎮座制定の事を略記したるものなり。

り。著者は本書の外に神法樂集、正友千句等あり。延寶頃の人なるべし。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二宮割竹三四辨 本一卷 荒木田末壽

著者が前に本居宣長の「伊勢二宮割竹辨」を難じて著したる「伊勢二宮割竹辨難」に對する本居大平の辨を更に返駁せしものなり。著者初め大平の許に、自著「割竹辨難」を贈りて、評論を乞ひしかば、大平其の書に頭書して、著者の説を難せしにより、著者、又、大平の頭書を引きて一々之れを返難せり。本書即ち是なり。文政五年壬午(二四八二)に記す所なり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二宮割竹の辨 本居 宣長

伊勢内外二宮の神體の事を論述したるものなり。更に本書を辨難したるものに、荒木田末壽の「伊勢二宮割竹辨難」「伊勢二宮割竹三四辨」等あり。併せ見るべし。本書には別に序跋等もなければ、年月未だ詳ならず。

◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下に掲ぐ。

くせぢや

にて、僅々數枚の小冊子なり。卷末に度會尙兼、度會守長等の奥書あり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二所皇太神宮神寶書 本一卷

二宮なる裝束類、其の他の神寶を番替調査列載したるものなり。抑、同宮は天武天皇の白鳳十四年丙戌(一三四六)以來、交年遷宮の例にて、其の度に裝束其の他を進納せらるれば、其の數、積みていと多し。本書は細に之れを調査して一々列載目録したるものなり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二所皇太神宮遷宮次第記 本一卷

伊勢太神宮の遷宮の次第を記せること名の示すが如し。發基本紀、延喜式、續日本紀、三代實錄等に據りて、天武天皇の朱鳥三年戊子(一三四八)より後光明天皇の慶安二年己丑(一三〇九)までの遷宮の次第を敘し、問々考證を附記せり。序跋なく、著者詳ならず。

くせぢやいぶるゐ

伊勢二所太神宮神名祕書 本一卷

伊勢兩宮及攝社末社の縁起等を記したる者なり。奥書に、「抑此神名帳行神主撰之、禪林寺殿(龜山法皇)御治世之時、内々奏覽預「寂感」云々とあり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢の家つと 二卷 井上 文雄

本居宣長の「玉露」、及び萩原廣道の「小夜時雨」中のことを論じたるものなり。「伊勢の家つと」といふ名は、本居宣長の著「美濃の家つと」石原正明の著「尾張の家つと」に擬へ、或る一種の所縁より命じたるなり。一卷は安政六年己未(二五一九)刊行せられ、第二卷は文久二年壬戌(二五二二)に版行せらる。

◎井上文雄は和學者なり。寛政十二年庚申(二四六〇)生る。通稱は元眞といひ、歌堂、柯堂又は調鶴と號せり。田安藩の侍醫にして、岸本由豆流に就きて國學を修め、後に一柳千古に從ひて和歌を學び其の技に達せり。其の著す所は、本書の外に、大和物語新註、冠註大和物語、大井川御幸考證、古今集序考、摘英集、調鶴集、和字法帖、歌堂初學抄、歌堂隨筆、柯堂枕談、柯堂叢考、文雄翁家集、八代集評論、和學辨、續靈語通、詞林葉、さきはひ草、道のさきはひ、假字一新、名乗字引、名字彙、思草等あり。明治四年辛未(二五三二)年七十二にて歿せり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢守聞書 本一卷

武家有關する筆記なり。奥書に、「此の一帖、豊後大友勢州へ不審候條、大方返答す。伊豫河野懸望候間寫申候」と見えたり。詳しき由来は知る可らず。

くせぢやいぶるゐ

伊勢守貞忠亭御成記 一卷

將軍足利義晴が十三歳の時、伊勢守貞忠が亭へ臨める時の記録。道中、供廻り、進物其の他のことを詳しく記したるものなり。大永三年癸未(二二一八

三)八月五日の記事なり。「群書類從」卷四百〇九、武家部第十に收む。

くせぢやいぶるゐ

伊勢守貞親以來傳書 本一卷

伊勢守貞親以來貞孝、貞宗、貞隆、貞忠、貞順等相傳へて記録したるものなり。永正、大永、天文年間の記事を掲げ、諸儀式に関する注意故實等を記したる「續群書類從」卷六百八十五、武家部第二十一に收む。「伊勢貞親以來傳書」と同物なり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢國郷帳 本一卷

伊勢一國の石高を郡村別に記載す。其の計、桑名、員辨、朝明、三重、鈴鹿、河曲、安藝、安濃、一志、飯高、飯野、多氣、度會の十三郡、千四百箇村、六十二萬一千二十七石四斗四升二合あり。卷末に、「元祿十三年庚辰歲(二三六〇)十二月、松平越中守、板倉周防守」と記せり。

くせぢやいぶるゐ

伊勢國神名帳考證 本一卷 度會 延經

延喜式神名帳考證中、伊勢國に関する部分なり。「神名帳」に載せたる伊勢國中の大小百六十餘社の社號、神名、所在地等を、神書古記に據りて考證したるものなり。正徳三年癸巳(二三三三)の度會智彦の序あり。智彦は著者と同年代の人なり。

◎度會延經は國學者なり。明正天皇の寛永十一年甲戌(二三九四)に生る。氏は出口、帶刀と稱せり。











いせもの

は弓矢を取て堪能なるのみならず、さらぬ小藝にまで達せずといふことなく、殊に歌道に達し、古今和歌集の秘訣を傳へたり。されば後年丹後田邊城に立籠れるとき、其の討死の後斯道の絶亡せんことを恐れ、相傳の書に和歌を添へて大内へ奉り、朝廷其の才學を惜み、三條大納言をして丹後に下向せしめ、幽齋を固める軍兵を去らしめらる。幽齋救済の辱きに感激して城を出て高野山に入る。其の著すところは本書の外に、幽齋筆禮書、百人一首抄、歌歌大綱抄、老の本管越、九州道の記等あり。慶長十五年庚戌(二七〇)八月、七十七歳にて京師に歿せり。徹宗玄旨泰勝院と法諱す。

いせものがたり

伊勢物語古意 七卷 賀茂 眞淵

伊勢物語の解釋なり、務めて古意のまゝに解釋せんとていと詳細に講ぜられたり。先づ總論には、物語の事、伊勢物語となつてたる事、業平朝臣の自記ならぬ事、伊勢の御の書ならぬ事、時世のたがへる事、作れる時代の事、古本今本及び作者の事、昔男てふ事、等について論證し、本文に入りては、各句毎節、詳細に解釋し、更に一冊の附録ありて、遺れたるを拾ひ、落ちたるを補ひて大成せり。  
◎賀茂眞淵の傳記は「冠辭考」の下に掲ぐ。

いせものがたり

伊勢物語殘考 三卷 春雨亭

伊勢物語の註釋。末文に云へる、とあり、「世に註本あまたあれども、初學のわらへなど見まどひければ、まればたき句」に註して、手びき草とす。

いせもの

依つて故事詩などは略したり。さることば、古註にくはしければ見給ふべし。また註の中に、後述考にくはしといへるは、前編後編十冊あり。後世あやまりしことをあつめ註し侍る。此の物語の難義なるをも註せしによりて、本文に略したるは、後述考にいへるなり。殘考と名づけしは、故人のもらせしを考へし故なり」と、本書性質の一端を見るべし。文化五年戊辰(二四六八)十二月刊行す。  
◎春雨亭は僧似雲の號なり。其の傳は「磯の浪」の下に掲ぐ。

いせものがたり

伊勢物語拾穂抄 四卷 北村 季吟

伊勢物語の註釋書なり。愚見抄、宵問抄、惟清抄、閑疑抄等によりて、此の抄を作りたるものなり。拾穂は著者の別號、故に名とせり。奥書に、此伊勢物語拾穂抄、季吟所撰也。蓋閑疑抄之外、或師説、或異説、或又拾其遺者、集之名、拾穂抄云、屬者豈肯此一書又開以余爲介、便獻上諸太上天皇、辱有覽、豈非所榮哉、仍以書其後矣とあり。寛文三年癸卯(二三三三)孟夏の筆なり。  
◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下に掲ぐ。

いせものがたり

伊勢物語集註 十二卷 和田 以悦

三條西内府實澄より老師一華堂兼阿へ傳りたる奥義を旨とし、かて諸註諸抄を參考對照して詳解したるものなり。而して第十一卷の末には系圖を附し、第十二卷には古註新註の說、及び大意雜說、眞字伊勢物語等の事を詳論せり。慶安元年戊子(二二三三)孟夏の筆なり。

いせもの

伊勢物語といふ名の事は上田秋成の「よしやあしや」の說に従ひ、伊勢の御のか、れしにはあらぬ事、又ことさらに時代をたがへて書きたる由などは賀茂眞淵の「伊勢物語古意」の說をよるしとし、此の物語中の系圖傳記どもは諸註にゆづり、此の物語の意にも文にも關係なき無用の考證はせぬと云へり。又他の二三書を評して、「拾穂抄といふものあり、臆斷、古意の二書の世にまだ弘らざりし時はこれにまされる註釋はなかりしかば、あまねく世の中に、もてはやる書なりしを、今はをさく見る人なきは、彼の二書にくらべては、こまなく劣りたればなり」云々と、又臆斷、古意を評して、「契沖法師のあらはせる臆斷と岡部大人のか、れたる古意とぞあたし註釋どもにくらべては、こまなく劣りける。此の二書の今はすりまきとなりて世にひるまりぬれば伊勢の物語はあきらかになりぬるやうに、皆、人思へり。さるは此の二人は古學を起したるいみじきもの知りなれば、其のいはれたることども一向に、よからんと思ひ定めたるなれど、其のときことば、互によきあしきあり。又共にわるきも少からず」とやうに云へり。思ふに著者はこれらの萃をぬき、煩を捨て、たゞしくすなほに註釋を試みんとしたるなり。文化九年壬申(二四七二)九月十五日の自序及び文化十二年乙亥(二四七五)三月十一日渡邊重興の序とあり。第六卷の最後に、「文政元年戊寅九月彫成」と記し、奴豆能舎藏版の印を捺せり。奴豆能舎は著者の別號なり。

いせものがたり

伊勢物語宵問抄 二卷 宵柏

伊勢物語の句々を取り出でて解釋したるものなり。宵柏問書の意よりとりて宵問抄とは名けたりといふ。本書は後に天覧に入れ奉りたりと、「綴群書類從」卷百十四の上下にも收む。  
◎宵柏は歌人なり。嘉吉三年癸亥(二一〇三)生る。字を夢庵、號を牡丹花と云ふ。幼時より歌を好み、長するに隨ひて、其の道に深入し、宗祇に

いせものがたり

伊勢物語箋 二卷 橋 守部

伊勢物語の註釋書なり。著者の凡例中に、「此の物語は、いたく詞すくなにかける版多ければ、物違きまざまなれど、思ひ有て斯くは註し試みつ。そは、大凡今の世の人のかけるを見るに、名高き人の文と雖も、言は多きに過ぎ、章句は長きに過ぎ、いたくみやびを失へるくせのあれば、其のけぢめを心得させんとての下心なり」と云へり。其の簡約なること知るべし。文政元年戊寅(二四七八)三月初日に記せり。  
◎橋守部の傳記は「櫻威道別」の下に掲ぐ。

いせものがたり

伊勢物語宗祇抄 一卷 僧 宗祇

伊勢物語の講義なり。後土御門天皇の延徳年間、著者が周防國山口にありて、「伊勢物語」の講義を開き、後、初學者の所望に隨ひて、其の講義を更に版行したるものなること、奥書に見えたり。故に一名を「伊勢物語山口記」とも云ふ。寛文八年戊申(二三二八)三月、宮城春意の序あり。  
◎宗祇の傳は「新菟玖波集」の下に見るべし。

いせものがたり

伊勢物語大體の意趣、及び難所等を取り出でて解釋したるものなり。但し牽強附會の說多くて信すべきもの少し。「群書一覽」にも、「これは在原滋春が作の由自序などにも記して、古く傳りたるやうに思はせる中頃の偶書にして、伊勢の二字を男女の事に就きなせり。滋春は業平の男にして、父の流を傳へて七箇條の腦髓を撰ぶ由書けり。其の書に男女相會の事を説て天下萬象五行四體みな伊勢なりなど書きたる事ども妄説云ふべからず」云々と云へり。著者が在原滋春と明記せること、恐くは後人の假託なるべし。

いせものがたり

伊勢物語宗祇抄 一卷 僧 宗祇

伊勢物語の講義なり。後土御門天皇の延徳年間、著者が周防國山口にありて、「伊勢物語」の講義を開き、後、初學者の所望に隨ひて、其の講義を更に版行したるものなること、奥書に見えたり。故に一名を「伊勢物語山口記」とも云ふ。寛文八年戊申(二三二八)三月、宮城春意の序あり。  
◎宗祇の傳は「新菟玖波集」の下に見るべし。

いせもの

伊勢物語大體の意趣、及び難所等を取り出でて解釋したるものなり。但し牽強附會の說多くて信すべきもの少し。「群書一覽」にも、「これは在原滋春が作の由自序などにも記して、古く傳りたるやうに思はせる中頃の偶書にして、伊勢の二字を男女の事に就きなせり。滋春は業平の男にして、父の流を傳へて七箇條の腦髓を撰ぶ由書けり。其の書に男女相會の事を説て天下萬象五行四體みな伊勢なりなど書きたる事ども妄説云ふべからず」云々と云へり。著者が在原滋春と明記せること、恐くは後人の假託なるべし。

伊勢物語大體の意趣、及び難所等を取り出でて解釋したるものなり。但し牽強附會の說多く、事實的證明には不適當なり。其の來歴又は引證せる和漢の書典として實事なく、昔物語の本意を失ふのみならず詞花言葉の便にもなりがたし、末學の輩ゆめ／＼借用すべからず、邪路に趣かんこと疑ひなしと先輩も云へり。

いせもの

伊勢物語大體の意趣、及び難所等を取り出でて解釋したるものなり。但し牽強附會の說多く、事實的證明には不適當なり。其の來歴又は引證せる和漢の書典として實事なく、昔物語の本意を失ふのみならず詞花言葉の便にもなりがたし、末學の輩ゆめ／＼借用すべからず、邪路に趣かんこと疑ひなしと先輩も云へり。



くせもの

くせものがたりげんせう

伊勢物語、知顯抄 三巻 源 經信

伊勢物語の語句につき、逐條問答體に、頭に問ふ答ふの詞を置きて解釋したるものなり。最初の第一巻には、伊勢物語の由來作者、其の他に就きて論ぜり。牽強附會の説多く、信すべき點少し。著者其の他につき一「條兼真の『愚見抄』」にも論じて曰く、「彼の知顯抄に、業平中将は馬頭觀音、小町は如意輪觀音の化身といへり。其の外胡亂なる事のみなり。これは後世に色好みの人、此の道の方人にせんために、經信卿の名をかりて擬作せるにやとぞ覺え侍る。誠に彼の痴の筆作ならば、定家卿見給はぬ事は有るまじきを、物語の名を始めとして、一事件用ひたること見え侍らず、いとおぼつかなき事なり」云々と。「綴群書類從」卷五百十一上中下三冊にも收めたり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢物語救講抄 二巻

後水尾院の御講義を聞書したるものなり。故に救講抄といふ。明暦二年丙申(二二一六)八月二十一日より、同九月二十九日に至り、凡て十二座を以て、妙法院宮、聖護院宮、飛鳥井大納言等へ御講義ありしものなり。

くせものがたりしほ

伊勢物語圖繪 三冊

伊勢物語毎條の意味を繪圖に書き表せるものなり。繪圖は有名な法橋玉山の筆に成り、文中の難

句も繪圖の補助によりて易解することを得べし。且、市岡猛彦の眞名本などを校合して、其の異同をも所々に頭書せり。文政六年癸未(二四八三)市岡猛彦の序文あり。其の後二年を経て刊行す。

くせものがたりしやう

伊勢物語添註 一巻 清水 濱臣

文章の本文を解し易からしめんが爲めに本文の側面に片假名にて註を添へ、且、語原など考へ難きものは別に燈頭に短き註を以て解けり。  
◎清水濱臣は月齋また泊酒舎と號し通稱を玄長といふ。安永五年丙申(二四三六)生れ、江戸不忍池の邊に住し、醫を以て業とせり。村田春海に就て古學を研究し、業成りて子弟を教ふ。最も歌文に堪能なり。著すところ、源氏物語名寄圖考、唐物語標註、月詣和歌集標註、中葉菅根集、自撰漫吟集、縣門遺稿、濱臣家集、語林類葉、辨字造語抄、旅路の打聞、庚子道の記標註、遊京漫稿、答問雜錄、泊酒筆話、萬葉集考註、古葉菅根集、近葉菅根集、同晩花集、泊酒舎家集、皇朝翰林、字說辨誤私考、古文類聚、杉田日記、總常紀行、朝敵辨、清石問答等あり。文政七年甲申(二四八四)八月十七日四十九歳にて歿す。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢物語童子問 十三巻 荷田 春滿

伊勢物語の熟語、難句、事實等に就き、順を正して、終始問答體に講解したるものなり。其の間は主として、幽齋の伊勢物語圖繪抄中の解より取り出で、答は全く著者が獨得の見に基づけり。初學者にとり

くせもの

ては特に親切なる註解書なり。本書を更に校訂修刪したるものに、伊勢物語童子問修刪あり、併せて參考すべし。  
◎荷田春滿は始め東丸また東萬呂と書けり(は和學者なり。寛文八年戊申(二二二八)に生る。姓は荷田宿禰として、羽倉を氏とし、通名を齋宮といふ。洛南稻荷の祠官なれど、家を弟に譲りて専ら國學の研究に従ひ、斯學の復古を主張せり。神代卷と萬葉集とに於いて家學を成す。中世以後淫靡風をなせるを慨して終身戀歌を誦まざりしは、其の見識の高潔なるを見るべし。京師に國學の學校を起さんとて官許を得、地を下するに及びしが、其の事成らずして歿せり。時正に、元文元年丙辰(二二九六)七月二日に六十九歳なりき。著書は大やう散失す、自ら焼失せりといふ。今日に残れるものには、本書の外に、神代紀抄、古今集古註考、萬葉集童蒙抄、出雲風土記考、春葉集、創學校啓等あり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢物語童子問修刪 二巻 度會 末雅

荷田春滿の伊勢物語童子問を校訂修刪したるものなり。同書の研究に參考すべし。  
◎度會末雅の傳は「宮水詩集」の下にあり。

くせものがたりなんぎやう

伊勢物語難義註 一巻

伊勢物語中、古來難解とする字句を取り出でて特に註解したるものなり。卷末脱文あれど其の儘に傳はれり。

くせもの

くせものがたりなんぎやう

伊勢物語難語序 一巻 屋代 弘賢

伊勢物語中の難義に註したるものなり。去るよし、八橋、まほしり、なかく、に、きつにはめなて、あひみては、いよげ、つくも、ほ、もにすむ、あふなく、霞に霧や、あまのさかて、等同物語中の難語凡て十二箇條の註なり。  
◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢物語拔歌 一巻

伊勢物語の全部につき、おのゝ其の詞書を取りて、單に和歌のみを抄出し、原書の順序に列載したるものなり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢物語山口記 一巻 僧 宗祇

伊勢物語宗祇抄の別名なり。故に詳しくは同書の下に解題せり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢兩宮御鎮座傳記 一巻

太田姫ノ命の御鎮座を撰集したるものなりといふ。此の本は雄略天皇の二十二年(一一三八)に、倭姫ノ命、彦和志理ノ命、其の他數名が、合議撰輯せしものを、繼體天皇の御宇飛鳥ノ命之れを筆記して、後代に傳へしものにして、伊勢十二書之首卷なりと云ふ。「太田命傳」とも、又は、「飛鳥ノ記」とも「伊勢二宮皇太神御鎮座傳記」とも云へりとぞ。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢兩太神宮末社記 一巻

内宮三座、内宮七所、別宮内宮所攝二十四座、内宮八十五社、外宮三座、外宮四所、別宮外宮所攝十六座、外宮四十七社等其の祭神の名を擧げたり。卷尾に、寛永二十一年甲申(二三〇四)外宮度會常長宮時考と記せり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢兩機殿記 一巻

伊勢太神宮の神服、麻織の兩機殿に關することゝ記録したるものなり。抑、機殿とは太神宮の御衣を織り成す御殿なり。此の御殿に關する雜事を、舊記に據りて數十項を抄出せり。

くせものがたりぢよんじやう

伊勢六郎左衛門尉貞順記 一巻 伊勢 貞順

武家の禮式故實等を主と記述したるもの。最初に三方の事、かはらけの事、おもひさしの事、おもひかへしの事、おもひとりの事、御氣さしといふ事、取りちがへ蓋の事等以下武家の禮式故實に關する事項數百を記せり。綴群書類從「卷六百八十七、武家部第三十三」に收む。  
◎伊勢貞順の傳は「伊勢貞順記」の下にあり。

くせものがたりぢよんじやう

異船渡來年表 一十四巻

外船來朝の年表、及び外船交涉事の記録を集め

たるものなり。第一巻には寛永元年甲子(二二八四)より嘉永六年癸丑(二五一一)までの外船來朝の略年譜と、寛政五年癸丑(二四五三)より、文化の初年頃迄の露國船取扱の始末を記し、以下年序を追うて、第二巻には文化元年甲子(二四六四)以後、第三巻には天保十三年壬寅(二五〇二)以後、第四巻には弘化元年甲辰(二五〇四)以後、第五巻には、弘化三年丙午(二五〇六)閏五月頃以後、第六巻には弘化四年丁未(二五〇七)以後、第七巻には嘉永六年癸丑(二五一一)六月頃、第八巻には同年七月頃、第九巻は同年八月、九月頃、第十巻は同年十一月頃、第十一巻は同年十二月、及び翌七年甲寅正月頃、第十二巻、第十三巻は同正月より四月頃、の外船と交涉事の記録を集め、第十四巻には安政二年乙卯(二五二五)に阿部伊勢守殿御渡書付、並に久世大和守殿御渡書付といふものを抄出せり。修史家が參考の資となすべし多し。集録者の名明ならず。

くせものがたりぢよんじやう

醫宗仲景考 一巻 平田 篤胤

漢の醫宗張仲景の事績を考證せるものなり。文政十年丁亥(二四八七)生田國秀、及び伴信友の序、川崎重恭の跋あり。  
◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

くせものがたりぢよんじやう

伊東岡崎記 一巻 僧 伊東

本書は別に數種の名あり、解題は一名、伊東法師物語の名の下に於てせり。

くせもの



伊東

伊東岡崎在城書記 和 一巻 僧 伊東

一名「伊東法師物語」の下に解題せり。

伊東氏筆記

和 一巻 僧 伊東

「伊東法師物語」と同物異名なり。詳しくは同書の下に記せり。

醫則發揮

五巻 河津 卓

主として人身生理を説き、推して禽獸蟲魚草木金石の分位に及び、著者常に解剖に従事し、數々人體を解きて生理を研め、傍ら西説を學び、大に研究するところありしが、西醫の藥製方術取るべきところなきにあらざれども、専ら腦神の説を唱へ、解體を説けるを慨して本書を作れりといふ。嘉永五年壬子(二五二)刊行す。

河津卓は忍藩の醫士にして、省庵と通稱せり。

伊東法師物語

和 一巻 僧 伊東

徳川家に關する一家の軍事手記なり。一名「伊東岡崎在城書記」といひて、著者が嘗て岡崎にありし時の實記なり。大高兵根入の事より、永祿十二年今川沒落の後、駿河平定の事迄を記せど、往々信用しがたき點あり。其の年月を明記せず。

伊東は豊前國宇佐郡に生れ、出家して後播磨

國赤松縣船越山の麓に住せり。軍學に長ぜるを以て信長清洲に召し下せしことありと云ふ。

磯づたひ

一巻 只野 眞葛

海邊旅行の紀行なり。劈頭に「葉月はじめの頃、磯づたひせんと思ふことありて、鹽がまの浦より、舟にのりて、東宮濱を過ぎて、代が崎につき」云々とあり。磯づたひの名も海邊旅行の心より附けたるなるべし。途中漁夫等の物語れる奇譚をも記し、文中短歌長歌等もあり。此の書「奥州ばなし」と合本にして行る。共に曲亭馬琴の評註を加ふ。天保四年癸巳(二四九三)春なる曲亭馬琴の跋文あり。

只野眞葛の傳は「奥州ばなし」の下に掲ぐ。

繪伊曾保物語

三巻

有名なる外國諷刺譚の翻譯にして、伊曾保といふ侏儒の一生、才覚の奇蹟を記し、また諸種の諷刺的諷刺雜話を記したるものにて、上巻二十條、中巻四十條、下巻三十四條に記したり。萬治二年己亥(二三一九)の開版にかゝり、我が國に於けるかの物語の最古譯文たるのみならず、一般翻譯文の先驅と看做すべきものなり。

磯馴松

一札

俳諧の集にて、松江維舟の門人等の作を輯集したるものなり。靈元天皇の貞享二年乙丑(二三四五)冬十一月の編なり。

石上

石上私淑言 二巻 本居 宣長

和歌のことに就て説明したるものなり。著者が古の世の心に立選りて、今の世の歌人にさしめことゝのやうに解き悟さんとて、歌といふこと、詠むと云ふ言の道を始めとして、凡そ歌の上に用あるものは、悉く之れを集めて問答體に説明せり。文化十三年丙子(二四七六)初秋刊本となる。

石上私淑言

二巻 本居 宣長

和歌のことに就て説明したるものなり。著者が古の世の心に立選りて、今の世の歌人にさしめことゝのやうに解き悟さんとて、歌といふこと、詠むと云ふ言の道を始めとして、凡そ歌の上に用あるものは、悉く之れを集めて問答體に説明せり。文化十三年丙子(二四七六)初秋刊本となる。

石上大明神縁起

和 二巻 愚 直堂

大和國山邊郡布留神社の縁起を詳記したるものにて、卷末に「元祿十二年大歲己卯(二三五九)十月二日、記此縁起畢、依高品火政宮階也、攝州縣江神學生黃鳥散人愚直堂」と記せり。乾坤の二巻藩業紙大本一冊に作る。

石上枕辭例 和 五巻 高橋 正澄

磯の洲崎

一巻 東條 義門

大和國山邊郡石上布留神社の傳記にして、石上布留神社要録、石上布留神社縁起と併せ寫傳す。其の事、寶永元年甲申(二三六四)の奥書にもあり。

宗禪は、神宮本社僧にして俗姓内山なり。

石上布留神社寺傳記

和 一巻 僧 宗禪

寛永十二年乙亥(二九五)六月、同寺の略縁起を記し、石上布留神社寺傳記、石上布留神社要録と併せ寫傳せり。

石上布留神社寺縁起

和 一巻 僧 昭煥

昭煥は桃尾山の社僧なり。本書の外に、「石上布留神社寺縁起」をも著せり。次に解題す。

石上布留神社要録

和 一巻 僧 昭煥

大和國山邊郡なる布留神社の要録を録し、石上布留神社寺傳記、石上布留神社縁起と併せ寫傳す。寛永十一年甲戌(二二九四)の作なり。

多くの枕辭を數へあげ、各、例歌と對照して其の意義を説明したるものなり。

磯の浪

二巻 僧 似雲

和歌作法に關する諸注意を記述したるものなり。著者の言に、むさのこ、うぢのきと、の君に、歌よま、ん心ばへを、何やくれやととひ申しに、こたへ給へりし事ともを、うけ給るまゝに、そのをり／＼の月日まで、くはしきものから書きあつて、磯の浪と名づけたるものなりといふ。種々奥儀傳の項多し。享和元年辛酉(二四六一)六月前中納言持豐の序あり。最後に本居宣長の跋文あり。

磯馴松

一札

俳諧の集にて、松江維舟の門人等の作を輯集したるものなり。靈元天皇の貞享二年乙丑(二三四五)冬十一月の編なり。

石上枕辭例

和 五巻 高橋 正澄

大和國山邊郡布留神社の縁起を詳記したるものにて、卷末に「元祿十二年大歲己卯(二三五九)十月二日、記此縁起畢、依高品火政宮階也、攝州縣江神學生黃鳥散人愚直堂」と記せり。乾坤の二巻藩業紙大本一冊に作る。

石上枕辭例

和 五巻 高橋 正澄

大和國山邊郡布留神社の縁起を詳記したるものにて、卷末に「元祿十二年大歲己卯(二三五九)十月二日、記此縁起畢、依高品火政宮階也、攝州縣江神學生黃鳥散人愚直堂」と記せり。乾坤の二巻藩業紙大本一冊に作る。

異代武鑑

和 十五冊

幕府評定所より引續きて内閣文庫に保存せるものにして、享保年度より、天保年度に至る。



くらりけ

くらりけ

和氣氏、丹波氏、惟宗氏、各數十代間の系傳を表記す。高山牛庵の遺本なりといふ。

くらりけ

醫道大意 二卷 平田 篤胤

醫道の大意を講説す。醫藥方術の根源より、生理醫術の制度要領等を論述したるものなり。原名を「志都の石室」といふ。著者が醫術研究中の考察を、後に講説して、門人共に筆記せしめたるものなり。凡そ醫術は最も大切の事なるにも拘らず、俗醫の風儀宜しからざるを憤りて、其の醫術の大穴幸運命、少彦名命の二柱より出でたりといふ歴史より説き起して、生理、醫術の大意に及べり。文化八年辛未(一四七二)正月の講説に係る。早田弘道の序、奥山正胤の跋あり。

◎平田篤胤の傳記は「古史傳」の下に掲ぐ。

くらりけ

醫道二千年眼目編 十四卷 郵井 純

醫に關する著者の考證、及び論說文を集めたるもの。目錄に股醫、周醫、扁鵲、春秋醫、漢醫、素問、九靈、本草、傷寒、雜病論、金匱要略、傷寒論取會、張仲景、類聚方、方極、藥徵、司命、萬病一證等あり。以て本書の内容を察すべし。文政十一年戊子(一四八八)の刊行に係る。

◎郵井純の傳記は「和方一萬方前編」の下にあり。

くらりけ

醫道日用綱目 一卷 本郷 正豊

醫藥に關する幾多の方法を記述す。「醫道日用重寶記」といへる古書を増訂して表題を改めたるものと見え、中には「醫道日用重寶記」と記せり。其の序文中に曰く、「醫道重寶記は、片郷の庸醫或は醫道に志ある俗家の爲めに、古人此の書を著す。始めには脈を診するの大法を述べ、藥性の樞要を顯す。中は病因を論じ、寒熱虛實を辨じて方を用ふる意を記し、並に加減の例を出して要劑數種を載せ、又經驗の丸散煉藥數品の名方雜方をあぐ、末には日用調劑の食性能遊及び針灸の要穴、或は五臟六腑の圖解に至るまで悉く之れを記せり。誠に手要小冊の中に、許多の至寶を融融し、傍近の素生淺きより深きに至る門津たり。但し印刷人を干にし、模寫手を百にす。昔て誤謬なきこと能はず。予僭論なることを知るといへども止に忍びず、即ち之れを校正し、粗、増益して書肆に授く云々と、よく本書の性質來歴を盡す。寶永六年己丑(一六六九)の自序なり。明治六年癸酉(一五三三)十一月再刻す。

くらりけ

伊太祈會三神考 一巻 紀伊國名草郡伊太祈會神社、大屋津比賣神社、郡麻津比賣神社の由來を考説したるものなり。

くらりけ

板倉伊賀守殿掟覺書 本一冊

板倉氏所司代中の法令裁法等を記録したるものにて、一名を「板倉政要」とも云ふ。詳しくは同書の下に記すべし。

くらりけ

くらりけ

板倉政要續篇 本十卷

板倉勝重、重宗父子が京都にての施政斷訟の大事を記せるものなり。一名を「板倉伊賀守殿掟覺書」といふ其の目錄の大綱を擧ぐれば、公事披讀式掟書(第一卷)諸作法掟(第二卷第三卷)洛中洛外町數人家改日記(第四卷)法度書(第五卷)公事掟(第六卷)より第十卷に至る等あり。徳川時代に於いて、官吏の名ありし板倉父子の法制如何を知るには、無二の資料たるべく、隨つて當時一般の狀勢をも推知すべし。「板倉政要續篇」九卷あり參看すべし。

くらりけ

板倉政要續篇 本九卷

板倉父子の治下に起りし訴訟上の實例雜話を列記せしものにして、數十項より成る。毎條稱贊的評言を加へたり。恐らくは板倉氏末裔の記述せしものならん。此の書亦板倉氏治政の要を知るに必要なり。前篇「板倉政要」と併せ見るべし。

くらりけ

板倉流馬療秘傳書 本二卷

馬の病症、並に其の治療法藥用等に關して詳記したる秘傳書なり。年代著者共に詳ならず。

くらりけ

板板記 本一巻 板板 卜齋

冊は蒲雲より盤まで、第六冊は床夏より藤葉まで、第七冊は若菜より柏木まで、第八冊は横笛より竹川まで、第九冊は福姫より寄生まで、第十冊は東屋より夢浮橋までを掲げたり。明應四年乙卯(一一五五)年春の著に係る。

◎牡丹花宵栢の傳記は「伊勢物語宵栢抄」の下にあり。

くらりけ

くらりけ

伊太利國王へ贈物留 本一冊

源氏物語の註脚書なり。最初に源氏物語の作者、作意、時代、異本、題號、由緒、準備等々を考證説明し、次に源氏物語中の難解の文句を摘出して解釋を施したるものなり。其の中第一冊は桐壺より帶木まで、第二冊は空蟬より末摘花まで、第三冊は紅葉賀より花散里まで、第四冊は、須磨より松風まで、第五

著者の見聞雜記。「一」慶長年中記又「板板卜齋覺書」といへり。嘗て家康に仕へて、軍陣、行旅、放鷹等に從ひし時、見聞したるものを雜記したるなり。慶長三年より、同九年までの筆記に係る。板板卜齋覺書といへば、往々後人の増入あることは既に先單も云へり。又前後に卜齋の小傳をも載せたり。◎板板卜齋は東部の醫員にして、別に如春史と號せり。天正六年戊寅(一五七八)に生れ、徳川家康に仕へて名聲あり。明暦元年乙未(一六二五)に病歿す。年七十八。

くらりけ

板板卜齋覺書 本一巻 板板 卜齋

著者の見聞雜記なり。一名を「慶長年中記」又は「板板記」とも云ふ。委しき事は「板板記」の下に記す。

くらりけ

伊丹俳諧派 一冊

攝津伊丹の蟻道、昔人、百丸等の編するところにて、元祿五年壬申(一三三三)の事なり。

くらりけ

伊丹發句合 一巻 平泉 鬼貫

攝津伊丹派俳人の句合にて、椎本才麿の評、鬼貫の跋文を加へたるものなり。享保十九年甲寅(一三九九)出版。近年發行の俳諧文庫第十四編、素堂集貫全集中にも收めたり。

くらりけ

伊太利國王へ贈物留 本一冊

源氏物語の註脚書なり。最初に源氏物語の作者、作意、時代、異本、題號、由緒、準備等々を考證説明し、次に源氏物語中の難解の文句を摘出して解釋を施したるものなり。其の中第一冊は桐壺より帶木まで、第二冊は空蟬より末摘花まで、第三冊は紅葉賀より花散里まで、第四冊は、須磨より松風まで、第五

幕府評定所より引繼ぎて、内閣文庫に保存せるものなり。年代は詳ならず。

くらりけ

醫斷 一巻 吉益 爲則

専ら漢醫古法を論じたるもの。延享四年丁卯(一四〇七)冬十月の序あり。寶曆九年己卯(一四二九)刊本となる。

◎吉益爲則の傳記は「醫事或問」の下に見るべし。

くらりけ

一庵禪師行狀 本一巻 僧 正宗

京師の人藤原天祥が元徳元年己巳(一九八九)誕生してより、一庵僧となり、應永十四年丁亥(二〇六七)十二月二日七十九歳にて入寂せるまでの行狀略記なり。續群書類從「卷二百三十九、傳部第五十」に收む。

くらりけ

一雨餘稿 二巻 僧 元明

著者の詩稿。寶曆十二年壬午(一四三二)釋元皓の序、安永元年壬辰(一四三二)龍公美の序等あり。

くらりけ

一葉抄 本十冊 牡丹花宵栢

源氏物語の註脚書なり。最初に源氏物語の作者、作意、時代、異本、題號、由緒、準備等々を考證説明し、次に源氏物語中の難解の文句を摘出して解釋を施したるものなり。其の中第一冊は桐壺より帶木まで、第二冊は空蟬より末摘花まで、第三冊は紅葉賀より花散里まで、第四冊は、須磨より松風まで、第五

冊は蒲雲より盤まで、第六冊は床夏より藤葉まで、第七冊は若菜より柏木まで、第八冊は横笛より竹川まで、第九冊は福姫より寄生まで、第十冊は東屋より夢浮橋までを掲げたり。明應四年乙卯(一一五五)年春の著に係る。

くらりけ

一座相談物銘書 本三冊

幕府評定所より引繼ぎて内閣文庫に保存せり。寶曆二年壬申(一四二二)のものなり。

くらりけ

一時軒隨筆 三巻 岡西 惟中

和歌、連歌、俳諧及び他の雜事を記述したる隨筆。著者の別號を取りて書名とせり。本書は後世改名して「砂金草紙」と名け、卷を四に作れりといふ。

◎岡西惟中は俳人なり。寛永十六年己卯(一三九九)生る。一石、又一時軒と號す。四州鳥取の人、大阪に出てて醫を業とす。西山宗因に就きて俳諧を學べり。元祿五年壬申(一三三三)八月十日、五十四歳にて歿せり。

くらりけ

一字題百首 一巻 本阿彌長根

一字題の狂歌を拾集したるものにして、其の數凡そ數百首あり。一題毎に數十首はあれども強に一題に就て百首づつあるにはあらず。

◎本阿彌長根の傳記は「校正古刀銘鑑」の下にあり。



くちのん

一字篇 一卷 村田 了阿  
種々の古事を廣く和漢の書に考へて記録したるものなり。編年詳ならず。

◎村田了阿の傳は「異域同事錄」の下にあり。

くちのみせ

一字御抄 八卷 後水尾院

歌學の書。天地山海よりあらゆる動植物に至るまで、其の結題中の文字をいろはに分けにして、各題詠の作例を考究すべくやう物し給へり。又題の虚字熟字等をも部類し、古今集以下の歌集に就きて各詠格の歌を引かせ給へり。元祿三年庚午〔二三三〇〕刊本となる。

◎後水尾院は慶長元年丙申〔二二五六〕降誕あらせられ、後陽成天皇の禪を受け、御年十六にして即位し給ふ。後、位を讓りて院にあらせらるゝ、こと五十二年間。帝は和歌の道に通じ、かれて畫を巧にし給ひき。延寶八年庚申〔二三四〇〕寶曆八十五にて崩じ給ふ。

くちのん

一乗要訣 三卷 僧 源信

一乗佛教の所談なる、一切有情悉皆成佛の義を明にし、無佛性の有情もありと立つる法相宗の五姓各別の義を破斥したるものなり。

◎源信の傳記は「往生要集」の下に掲ぐ。

◎「くちのん」の傳記は「くちのん」の下に掲ぐ。

一樹陰一河流抄録 本一卷

くちのん

古來よく因縁の事に引用せる、「一樹の陰一河の流」といふ古句に就き、和漢の書を引きて、其の出所本義等を考證説明したるものなり。

くちのん

一代要記 十五卷

卷首開けて、允恭天皇より花園天皇に至る御代々の御事績の要を略叙し、御一代毎に上皇、皇后、皇子女、さては執政の大臣、以下重要な諸職の經歷を列記したる所、最も、この史の特色とすべし。史籍集覽の中に刊行せり。著者の氏名傳らず。

くちのん

一條家裝束抄 本一冊 一條 兼良

一條家に着用せる裝束の制を記せるもの。束帶色目の事、直衣の事、布袴の事、狩衣の事、水干の事、帶劍の事、車馬の事、隨身者の事、以下十數項を立てて委細に記述せり。文明十二年庚子〔二二四〇〕の筆録に係る。

◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下に掲ぐ。

くちのん

一條禪閣單皮道之記 二卷 一條 兼良

一名「藤川の記」の下に解題せり。

くちのん

一條大納言家歌合 本一卷

石名取の題を讀めるもの左右十一首より成れり。「群書類從」第二百十三の卷に收む。

くちのん

一條天皇事記 本五十八卷 瑞 保己一

一條天皇御一代、即ち紀元一千六百四十七年より同一千六百七十一年に至る二十五年間の實録にして、瑞保己一が幕府の命を受けて編纂せし史料中の一なり。

◎瑞保己一の傳記は「群書類從」の下に掲ぐ。

くちのん

一日三百韻 一冊 青木 春澄

著者の一日三百韻なり。年時は記されど、天和後の作なるべしといふ。

くちのん

一人三臣和歌 本二卷

後柏原院、三條西實隆、冷泉政爲、冷泉爲廣の歌を集めたるものなり。故に此の名あり。最初後土御門天皇の文龜元年辛酉〔二二六一〕三月二十四日初度の御月例の歌より、後柏原天皇の永正五年戊辰〔二二一六〕十二月御百首の歌に至る。編者詳ならず。最初御月例の註に「今上御製並三臣之詠進等、抄出之當時宗匠不遺于此三輩、歟、雅俊卿稱古不足歟、世之所推難比于此間、乎者、依略之畢」とあり。

くちのん

一念多念證文 一卷 僧 親慧

淨土真宗の教義に就き、一念往生、多念往生の證據とすべし諸書本文を和訳したるものにして、「真宗法要」第一冊に收む。正嘉元年丁巳〔一九一七〕八月六日の著作に係る。註釋には興隆の「一多證文錄」等あり。

◎親慧の傳記は「教行信證」の下に掲ぐ。

くちのん

一念多念分別事 一卷 僧 隆寛

淨土宗の教義中、一念往生、多念往生の事を明し、其の一方に偏執す可からざることを示せるものなり。著作の年時は詳ならずと雖、建長七年乙卯〔一九一五〕四月二十三日真宗の祖親鸞の傳寫に係り、「真宗法要」第八冊に收めらる。末疏には素深の「人殺」(寛保二年作)等あり。

◎隆寛は淨土宗長樂寺派の開祖にして、粟田關白五代の後胤資隆の子なり。初め常蓮院慈鎮和尚の弟子となり、天台の教義を究めしが、後、黒谷の源空に歸依し、専修念佛の行業怠りなかりき。源空配流の時、隆寛亦相模國飯山に徙り、此の處に留りて布教すること十數年、安貞元年丁亥〔一八八七〕十二月十三日に寂す。行年滿八十なりき。著す所、本書の外、顯選擇、四十八願義等あり。

くちのん

一の谷圖 本一冊

一の谷は攝津國八郡郡にあり、一の谷、二の谷、三

くちのん

一宮神祠碑 一卷

河内國一宮神祠の事を記せり。一宮は交野郡坂村なる交野神社にして、此碑は久しく廢壞したりしを、寛政八年丙辰〔二四五六〕伏見の人岡田宗興といふもの、九箇村の農民に謀り、修理して翌九年復舊の功を奏したりといふ。篆額は從四位下行式部權大輔兼大内記菅原朝臣長親の筆。碑文は前祠祝岡田阜、書は江戸海保卓鶴の手に成れり。此の書附録として、小磯氏逸子の假字文、一の宮の記、菅原本房が萩を植うる詞、岡田本親の神の教等を掲げたり。

くちのん

一枚起請 一冊 宗 量

著者の俳句集。元祿四年辛未〔二三五一〕五月の編にかゝる。

くちのん

一枚起請論 二冊 僧 忍激

淨土宗の安心起行を極めたる圓光大師の「一枚起請文」を註釋詳解したるものなり。一に「吉水遺書論」といふ。

◎忍激は淨土宗の僧なり。城州法然院に住職たり。俗名を二見信阿と云ふ。正保二年乙酉〔二三〇五〕

くちのん

一枚起請文 一枚 僧 源空

淨土宗の開祖、源空の遺識なり。或は「一紙誓文」とも稱し、建曆二年壬申〔一八七二〕正月、末期に臨み、記して弟子勢親に授與せしものにして、簡短に淨土宗の要義を説述せり。

註釋 本書を註釋せるものには、慧然の「仰信義」僧録の「遺語訣」慧雲の「鈔」以上淨土真宗、以下淨土宗に用ふる所「西樂の「見聞」了譽の「註」真阿の「鼓吹」隆長の「但信鈔」超然の「新記」素信の「匡解」謙方の「誓言論」忍の「諸說辨斷」洞空の「昔日鈔」及び古家集空の「旁觀記」忍激の「遺書論」等あり。

◎源空の傳記は「選擇本願念佛集」の下に掲ぐ。

くちのん

一樣記 四卷 葛間 勘一

くちのん



くらやみ

錢穀、租税、檢地等の事を記せるもの。題號の趣意は、自序によると、我が邦の税法は、各國、其の法を異にするに、推究するときは、悉く一様に歸するの意なりと云ふ。地方一様記」として、一冊に寫傳せるもあり、天明元年辛丑(二四四一)比の作なり。

くらやみ

一夜敬慎談 三卷 須藤 敬布  
道徳敬慎の事を記せり。一々問答的に敬戒の意を含めたるものなり。弘化三年丙午(二五〇六)の自序、及び辻元徳の跋あり。

くらやみ

一夜四吟 一冊 谷口 蕪村  
蕪村、杉真、几童、嵐山の歌仙を集めたるもの。安永二年癸巳(二四三三)の編にかゝる。近年發行の俳諧文庫第十二編、蕪村曉堂全集中にも收めたり。  
◎谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

くらやみ

一夜百首 二卷 祇園 瑜  
著者の詩集なり。寶曆十年庚辰(二四二〇)の自序、及び其の他の序跋あり。寛政九年丁巳(二四五七)の刊刻に係る。

◎祇園瑜は紀州藩の文學者なり。延寶五年丁巳(二三三七)に生る。字は白玉、又は汝環と云ひ、南海、又は鐵冠道人と號す。十四歳の時、父に隨ひて江戸に出て、木下順庵に從學し、最も詩作に長ず。詩鑑に於いて、奇才を運らし、新井白石、雨森芳洲等を驚かせしことあり。長じて後、幕府の儒職となり

て聲價益々揚り、白石、及び梁田蟄巖等と相伯仲せり。寶曆元年辛未(二四二一)九月八日、年七十五にて歿せり。著す所、本書の外に詩學逢原、鏡花水明集、詩談等あり。

くらやみ

一流手綱口傳書 一巻 萩野 康清

弓馬故實の書にて、手綱の式法一百十箇條を説明す。天文十八年己酉(二二〇九)八月十一日康清が小島興吉といふものに傳ふるものなり。「弓馬叢書」の中に收む。

◎萩野康清は、天文年代の馬術家にして、彌六と稱す。著書は此の外に、馬庭乘、手綱五十首註等あり。

くらやみ

いつを昔 一巻 榎本 其角

俳句の集なり。元禄三年庚午(二二五〇)出版す。表紙の裏に「俳諧に力なき置此集のうへへ學く入べからず。去來校」と題せり。  
◎榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

くらやみ

伊豆海島風土記 六巻 佐藤 行信

伊豆海島の物産風土等を圖説す。第一巻第二巻には旨と風土氣候を記し、第三巻に種々諸木の圖を掲げ、第四巻に諸種草の圖を載せ、第五巻に藥品草木の圖、第六巻に魚鳥海藻等の圖説を掲げたり。天明元年辛丑(二四四一)吉川義右衛門秀道と

くらやみ

いふものをして、伊豆諸島を檢討せしめたる時の結果なり。  
◎佐藤行信は此農司の官吏なり。

くらやみ

逸號年表 一巻 藤井 貞幹

古書等に逸したる年號を收録したるものなり。自序に曰く、「續日本紀、神龜元年十月朔日、詔して曰く、白鳳以來未嘗以前は、年代支違にして、尋問明にし難し、而して未嘗白鳳の二號を日本紀に皆載せず、其の他水鏡、諸書に載る所の紀號、國史にも亦見る所なし。俱に、未だ其の故を詳にせざるなり。今、一々推すに支干を以てし、輯録して年表となす。其の遺漏の如きは、後考を俟つ」とあり。寛政九年丁巳(二四五七)柴野邪彦の序あり。

◎藤井貞幹は一に藤原貞幹とも云ふ。國學者なり。享保七年壬寅(二三八二)京都に生れ、字は子冬、一名好古、無佛齋と號し、通稱叔藏と云へり。僧門より出て、國學を好み、尤も、考證に長ぜり。著はせる書、本書の外に、國朝書目、好古小錄、好古目錄、好古雜錄、好古餘錄、古瓦譜、集古十圖、六種金石圖考、衝口發、金石遺文考、無佛齋文集、等あり。寛政元年己酉(二四四九)八月、六十八歳にて歿せり。

くらやみ

伊豆鑑 一巻

國中部分各村高、道法、金銀山、國中總高、田方畑方の高、四郡村數、村高、御領、私領、社領、各郡高、國中諸役之覺、三島御年貢地佛之覺、島々御扶持方、島々より渡る納八丈御用米、八丈島より納辻織物

替わけ御替物等の事を記述せり。

くらやみ

一角簪考 二卷 木村 孔恭

一角動物に就て圖説したる博物書なり。即ち一角獸、一角魚の幾種類を取り出でて考證圖説せり。其の凡例に曰く、「本邦先哲之諸書、除、采覽異言外、舊皆以國字記之。今改爲漢語耳。昆陽漫錄一書、因傳寫多致誤、其書中人名地名等、有不可得而考者、今以唐土之字音、而不改正之。亦唯欲不失其本色也。其餘諸書藥名亦準之」と又曰く、「諸物名諸譯義皆莫與六物新志、異、故不別辨之。讀者若涉于疑、則就彼凡例中、而判之可也」とあり。以て其の性質を知るべし。天明六年丙午(二四四六)季冬の作に係る。  
◎木村孔恭は元文元年丙辰(二二九六)浪華に生れ、字を世儒といひ、異齋また兼復堂と號す。物産の學に精しく、詩を善くし、書畫に巧なり。十五六歳の時、京師に出て津島桂庵に就きて本草學を學び、又、小野蘭山に從て益之を究む。著書には、銅器由來記、異齋印譜海外佚書目、藝苑贅言、一舟山園記註、沈氏畫屢註、兼復堂書目、異齋詩草、溫泉記述等あり。其の他校訂の書十有餘部、享和二年壬戌(二四六二)六十七歳にて歿す。

くらやみ

嚴樞本大人四十賀歌集 一冊

鈴木重胤四十の賀の歌を集めたるものなり。嚴樞本は鈴木翁の號、故に名とせり。歌題は通じて、寄國祝にして都合二十六人の寄贈に係る。皆重胤が

くらやみ

社中の人々なり。事は嘉永四年辛亥(二五二二)の九月に係り、重胤の序を附けたり。編輯者の名を記さざれど、門人の編なること知るべし。

くらやみ

一休和尚行實 一巻

一休和尚の行狀隱歷を記述したるもの。全編漢文五枚より成る。續群書類從卷三百四十二、傳部五十五に收む。

くらやみ

一休和尚諸國物語圖繪 一巻

一休和尚一代間の事績を記し、中間に圖繪を挿入したるものなり。即ち「一休諸國物語」に數多の圖繪を挿入したるなり。文章事實は唯も原書と差ふところなし。

くらやみ

一休和尚年譜 一巻

一休和尚が應永元年甲戌(二〇五四)出生してより文明十三年辛丑(二二四一)十一月二十一日、八十八歳にて入寂せるまでの履歷を年序的に記載したるものなり。續群書類從卷二百四十二、傳部五十四に收む。

くらやみ

一休骸骨 一巻 僧 一休

一休が骸骨の夢に託して、佛法の奥義を、縱横に理解したるものなり。康正三年丁丑(二二七四)月八日、虛堂七世東海前大徳寺一休子宗純の著せるよ

くらやみ

一休可笑記 五巻

滑稽に作り成せる教訓的物語なり。此の書、本文は卷首に、「善惡五戒座敷」と題せる如く、飲酒戒、殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒の五段に分れ、每段數項を分ちて、其の意を敷衍し、講談體滑稽的に物せり。さて、可笑記とも名けたるなれ。題頭には、一休和尚に關する、一切の珍聞奇談を擧げたり。

くらやみ

一休諸國物語 一巻

一休和尚が一代間の事績を記したるもの。主として諸國雲水中の事績を記す。材料は俗書俗説より得たるもの多く、從つて、奇怪の談も少からず。

くらやみ

一騎歌盡 一巻 加藤 照

兵法種々を全様の句法に綴りて諷刺的に作りたるものなり。其の跋文に曰く、「古者捕公の兵法を本として諸流の正説を加へ、且、其の諷誦に便ならむことを欲し、今様の句法に擬して之れを吾が家の



小童に授く。或は能く兄唱へ弟和し、晨夕に對唱して、口を上り心に悟らば、弓矢とる身の高見山、踏み分け上る龍の道まるべにもならむかと云ふと、著者の趣意知るべし。文化三年丙寅(二四六六)刊行す。

◎加藤源は儒者にして、常陸笠間の藩士なり。文化八年辛未(二四七一)に生る。字は伯敬、櫻老と號す。學、和漢に通じ、維新の際、力を致せしことあり。明治十七年甲申(二五四四)七十四歳にて歿す。

〓 〓 〓

一休はなし 四卷  
一休和尚の逸事を録したる書なり。大徳寺に日々参りて沙彌喝食等より聽きたるものを輯録すとの序あれども、其の人の名を署せず。一休和尚といひなき時且那とたはむれ問答の事、一休魚を食ひて高札を立て給ふ事等、凡て四十七項を擧げたるも、荒唐不稽の事少からず。寛文頃の挿畫あり。

伊都岐島八景 三卷

安藝國嚴島八景の詩歌を集録したるものなり。八景とは嚴島明燈、大元櫻花、瀧宮水盤、鏡池水月、谷原樂鹿、御笠浦雪、有浦客船、彌山神鳥是れなり。題者は冷泉中納言爲綱卿にして、景(一)に堂上家の詩歌、圖、作者稱號等を記し、正徳五年乙未(二二七五)參議公長の跋、正三位藤原光兼の奥書あり。中巻には嚴島の事實、八景の説明、地下僧徒の詩歌。下巻には八景に關する俳諧發句等を掲げ元文四年己未(二三九九)淺生庵野坡の序、龜田窮樂の發兌に係る。

發兌あり。三卷一冊に版行せり。

〓 〓 〓

一騎受用抄 二卷 片山 秋扇  
軍戦に關する故實を記述したるものにて、卷尾に軍伍隊列の圖をも載せたり。著述の年月詳ならず。◎片山秋扇の傳記は「古戰場夜話」の下にあり。

〓 〓 〓

五十槻園藏書目錄 一巻 荒木田久老  
荒木田久老の藏書目錄なり。五十槻園は久老の號、故に名とす。和漢の藏書四百數十種を列擧せり。◎荒木田久老の傳記は「萬葉集楓の落葉」の下に掲ぐ

〓 〓 〓

一騎前意得 三冊 田中 世誠  
武術の事を記したるもの。陣中の衣食住、兵器、武器、乘馬等の事より、武士の覺悟、修徳、學問等の事に至るまで、凡そ四十餘項を設けて、叮嚀に説示せり。本書上巻と中巻とは寛政十一年己未(二四四九)と、其の翌年とに作られ、下巻は文化元年甲子(二四六四)に作られたり。◎田中世誠のこと、は「逸民新語抄」の下にあり。

〓 〓 〓

嚴島繪馬 五巻 千歲園藤彦  
嚴島神社に掲げられたる諸種の扁額を縮寫したるものにて、書畫を併せて百餘種あり。各扁額の故實、筆者の略傳を記し、掲額の場所をも指示したる

ば、畫家の參考たるべく、又、遊人の手引ともなるべし。天保二年辛卯(二四九一)なる藤原資愛、賴香坪の序、及び自序あり。

〓 〓 〓

嚴島御本地 一巻  
藝州嚴島明神の緣起を其の根本より俗説のまゝ、詳しく記載して最後に、「保建二年三月十六日に清盛嚴島を思召立ち給ひて、治承元年に此の緣起を御寶殿に納め給ふなり秘すべし秘すべし」の附言あり。續群書類從「卷七十五」に收む。

〓 〓 〓

嚴島神寶圖 一巻  
安藝國嚴島神社の什寶、八幡太郎義家、新羅三郎義光、小松内府重盛、大内義隆、毛利隆興守元就及、無名氏等の甲冑を圖したるものにて、着色なり。天明三年癸卯(二四四三)伊勢貞丈撰の奥書あり。

〓 〓 〓

嚴島圖會 十巻 岡田 清  
明細なる嚴島の圖會なり。前五巻は名所記にして、嚴島の本社を初め、島内の神社佛寺、名所等の圖を掲げ、其の構造、儀式、景致等を委細に説明し、繪には名儒大家の詩歌を題し、剩へ其の眞蹟をも每巻に掲げ、畫また通常の圖會と趣を異にせり。後、五巻は寶物圖會にして、數百の寶物の眞圖を出し、詳細なる解説を施せり。著者の凡例中に、「繪に道芝記の作ありと雖、畫圖少なきが故に、實地を履ざる人の爲に眼を喜ばしむるに至らず、涉獵足らざる

が故に、事績を案する人の爲に益あることなし。之によりて、此の度の擧げは、日本紀古事記等の古書は更にも云はず、野史神官に至るまで、勉めて據となることは、本文を其の儘に載せ、聊かも私意の添削を加へざるものなりとあり。天保六年乙未(二四九五)同七年の久我通明、田中芳樹の序、同八年の自序、同十二年の吉村廣野の跋あり。此の書田中芳樹、賴香坪、加藤源の校訂をも經たり。文政十年丁亥(二四八七)起業同天保十三年壬寅(二五〇二)の發兌に係る。

〓 〓 〓

嚴島詣日記 一巻 今川 貞世  
康應元年己巳(二〇四九)三月、左大臣足利義滿、安藝國嚴島へ參詣したる時、著者供奉して、同月四日都を立ちて、同二十八日歸京したるまでの日記なり。書中自詠の和歌數十首を載せたり。本書或は「鹿苑院後嚴島詣記」とも題せり。◎今川貞世の傳記は「今川盛書」の下にあり。

〓 〓 〓

嚴島道芝記 七巻 小島 常也  
嚴島に關する詳細なる通俗案内記なり。初二冊は本社に記して、已下每一冊に、外宮末社、彌山寺院、島廻り、名所舊蹟、年中行事、雜錄等を載せた

〓 〓 〓

り。元祿十年丁丑(二三五七)の著作に係る。

〓 〓 〓

嚴島名所舊蹟 年中行事 一巻  
安藝國嚴島の本社より、境内の諸舎、名勝古蹟を記し、年中の神事祭典の事を略記す。

〓 〓 〓

一卷書口傳 一冊  
蹴鞠に關する秘傳を筆記したるものなり。奥書に、「此一巻書の上巻は、建治二年十月一日より見始め、同十八日に見了り、見ては口傳を受まいらせて書きあつめたる物也」とあるのみにて、記者の名等知るに由なし。恐くは古くより其の道の家に傳りしものならん。建治二年丙午は後宇多天皇の御時にして、紀元一千九百三十六年なり。

〓 〓 〓

伊豆郡村志 一巻  
題して「伊豆國總高御領私領寺社領三島領並に島島覺」といひて、寺社領私領高、御藏入高を擧げ、三島付き六村、三島組二十一村、谷田組二十村、田中組二十村、内浦組二十村、狩野組二十七村、大見組二十七村、東浦組五村、仁科組八村、松崎組二十村、加納組二十二村、稻生澤十九村、川津組十七村等の高、總人數、御朱印付き大島、利島、新島、神津島、三宅島、御藏島、八丈島、小島、青々島等の四方、戸數、年貢高等を列擧せり。

〓 〓 〓

一己持用集 十巻  
終始武士道を論じ、かれて兵法を辨じたるものなり。年代著者を詳にせず。

〓 〓 〓

一齋淨稿 四巻 佐藤 坦  
著者が詩文の抄録なり。第一巻に序十七記六、第二巻に啓一、論一、策一、辨三、說十、原二、墓碕三、墓誌一、墓表一、碑陰記一、第三巻に引二、題四、跋五、替三、銘一、遊記三、賦五、第四巻に古今體詩三百〇一首、詩餘六首を掲げたり。日次の末に著者の端書あり。曰く、「右雜文總七十首、古今體詩及詩餘合三百〇七首、從亂稿中鈔出、題曰淨稿、以其淨寫之耳。辭則蕪穢、言淨云哉」と。蓋、本書は一齋手記の原稿なり。往々添削書入等もあり。文化八年辛未(二四七一)孟春の編に係る。◎佐藤坦の傳記は「愛日樓文集」の下にあり。

〓 〓 〓

一切成就祓抄 一冊 伴部 安崇  
一切成就祓の辭の行義なり。一切成就祓の如何なるものなるかは、卷首に度會氏傳を引きて曰く、「此の祓は日本姫命の神宣にして、伊勢兩宮傳來の太神辭なり。其の詞甚だ簡易にして、意味また親切なり。祓は祭政の要にして、其の事至つて廣しと雖も、本意此の祓に漏るることなし。學、道者は常に不擇淨穢、唱へ奉り、又、大祓を修する時、之れを用ふることなり。凡て悔、惡、逆、除、災、就、福、本



新神垂加の禊詞なり」とあるに知るべし。

本書はこの禊詞の意義を解釋したるものなり。◎伴部安業は止定齋、又八重垣翁と號し、通稱を武右衛門といふ。山崎安齋の垂加神道を信じ、大に研究して其の旨を得たり。著すところ、神道講意鈔、安鎮本祀神備同旨等あり。享保の初め六十餘歳にて歿せり。

伊豆相模武藏寺社實物記 本一巻

伊豆相模武藏の寺社に實藏せる、古器物、古文書類を列記したるものなり。何人の調査し、編輯したるかは詳ならず。

一茶句帳 一巻 小林 一茶

一茶自筆の稿本にして、文政二年己卯(二四七九)以下の手帳なるべしとて、近年發行の俳諧文庫第十一編「一茶大江丸全集」中に收めたり。

伊豆雜志 本一巻

當國總高より、風土、神社、作舟、温泉、武士、名所、古蹟、産物、三島大明神、三島曆、伊豆詞等を擧げ、附録に、國高、村々朱印、宮寺品々控、伊豆國島の覺、並山古城の覺、島の覺、北條美濃守氏規居城、天正十八年庚寅(二二五〇)落城の後内藤氏城主となり、又慶長六年より代官支配となりて、享保十四年己酉(二三八九)に至る各代官の氏名等を記す。

一茶發句集 二冊 小林 一茶

著者の俳句數百首を集めたるものなり。嘉永年中出版す。外に魚淵、二休等の十四家の校定したる文政の版あれど、嘉永版はそれを増補したるものなりといふ。俳諧文庫第十一編「一茶大江丸全集」中にも收めたり。

◎小林一茶は信濃の俳人にして、通稱を彌太郎、號を俳諧寺といふ。幼にして母を喪ひ、自ら鬻を辭して、風雅の道に志し、素丸、隨齋、成美等に就て俳諧を學び、遂に一機軸を出せり。性落にして、誅するところ自ら脱俗せり。江戸に出て下谷坂本に住したりしが、後、國に歸りて、文政十年丁亥(二四八七)十一月十九日歿せり。年六十五。著書は別に「ならが春」あり。

一山國師語錄 二卷 僧 一寧

卷端には「一山國師妙慈弘濟大師初住四明紫峰山祖師禪語語錄」と記し、侍者了眞の編輯するところなり。上卷に、祖印語、寶陀語、建長語、兼住圓覺語、再住建長語、淨智語、南禪語、小參、法語、拈古、頌古、下卷に、偈頌、佛祖贊、自贊、小佛事、行記、宸書國師號、宸書寶札、應制祭文、大師號宣命、等を收む。芝罘石の序、茂古林、明東生、本中峯等の跋あり。元祿四年辛未(二二五二)京都にて出版す。

として我が邦に來り。正安元年己亥(二九五九)太宰府に着舶す。副元帥北條貞時これを聞きて伊豆に流し、後、其の道徳を慕ひて巨福寺に迎ふ。後宇多上皇また其の德望を開きて之れを召し、春遇を加へ給ふ。文保元年丁巳(一九七七)十月、病によりて歿す。年七十一。上皇親臨に幸し、國師の號を贈り給ひたりと。

一山國師妙慈弘濟大師行記 本一冊

支那の僧、一山國師妙慈弘濟大師の道徳、略履歴を漢文にて記述したるものなり。「續群書類從」卷二百二十九、傳部第四十に收む。

伊豆山略縁記 一巻 僧 周道

伊豆大權現由來の大略を記したるものなり。もと此の權現は、天照大神第一の皇子、正哉智勝勝速日天忍忍耳尊を祀り奉れるものとて、古來其の古縁起は別に六軸ありて、家康以下代々朱印の證明を與へて、關東總鎮守たりしといふ。本書は其れ等古縁起書中より抜出したる略縁起書なり。著述の年代詳ならず。

逸史 十三卷 中井 積善

徳川家康一代の事績を記せるものなり。首卷には徳川氏系表参考書目録を載せ、第一卷に源平以下徳川氏迄の治亂興亡の迹を略敘し、第二卷以下を本編となせり。正親町天皇の永祿三年庚申(二二二〇)に起り、後水尾天皇の元和二年丙辰(二二七六)に止る。要するに家康一代の事績を詳記し、問々論贊を附したり。寛政八年丙辰(二四五六)脇長之の序、同十一年の自序あり。

◎中井積善は儒者なり。享保十五年庚戌(二二九九)〇〇〇生れ、通稱を善太、字を子慶といひ、號を竹山といふ。中井履軒の兄なり。宋儒性理の學を、五井蘭洲に受けて出藍の稱ありき。其の學宋說に依據すと雖も、棄つべきは斷じて捨て、他説と雖も、取るべきは進んで取る。又兼て詩文を善くす。後年父藝庵の創始せる懷德書院の長となりて、數多の學徒を養成す。平素仕官を好まず、薩肥の諸侯重幣を以て聘すれども應ぜざりき。其の著、詩律兆、非論評微、遊陰志、洛陽志、社會私議、竹山文鈔、草茅危言、西上記等あり。本書「逸史」は、曾て著して幕府に進上せるといふ。文化元年甲子(二四六四)二月二日、七十五歳にて歿せり。

伊豆志 本十六卷

最初伊豆國の名義より、延喜式なる神名九十二神、近世九十二神の尊號居所等を論じ、崇神天皇伊豆國に命じて船を作らしめ給ひしが、我が國船の始

めなる事、又應神天皇の御宇伊豆國に科して枯野船を作らしめ給ひたる等より、當國の風土、天城山の事、土人の氣質、當國出生の諸姓、忠勇名氏、僧流、女流、遊家等の事を録し、其の他地理歴史に關する一切の事項を雜記せり。其の毎所に郡名を擧げざるが如きは搜索上の不便少なからず、編輯の法を得ざるものといふべし。十六卷二冊に寫傳し、奥書に「伊豆國田方郡住人伊東氏祐綱入道道順傳書を書按あつたる稿也」とあり。

一州和尚行實記 本一巻 僧 惠應

雙林二世中興開山一州和尚の行狀實記。周防國熊毛郡宇佐木郷に生れ、十三歳にて僧となり、長享元年丁未(二二四七)十一月四日入寂するまでの道徳、履歴を記述せり。明應二年癸丑(二二五二)仲冬初四日、雙林第三世嗣法比丘前最乘益英惠應の草するところなりといふ。「續群書類從」卷二百四十二、傳部第五十四に收む。

◎惠應は益英と字す。三條家の裔にて、父防州に謫居中應永三十二年甲辰(二〇八四)十二月二十三日生れ、翌年父に隨ひて遠州に移る。甫めて六歳、今浦山金剛寺に入りて僧となる。長享元年丁未(二二四七)一州の遺命によりて雙林に住し、三世の嗣法となる。永正元年甲子(二二六四)十月十四日、年八十一にて寂す。嗣法十人あり。敕して紫衣を賜ひ、寶光智證禪師と號す。

聿修館遺稿 四卷 松平 定通

著者が詩文の遺稿を輯めたるものなり。聿修館は著者の堂號、故に名とせり。天保十一年庚子(二二五〇)〇〇〇林衡の序、及び男定毅の跋あり。

聿修堂藏書目錄 本一巻 丹波 元簡

和漢の醫藥に關する藏書目録なり。聿修堂は著者の別號、故に名とせり。即ち本草、經解、傷寒、脈、書、證治、方書、婦人、小兒、痘疹、草科、眼科、口科、養生、鍼灸、說部、叢書、雜書の十六類に分ちて、凡そ九百五十餘種を收めたり。

聿修錄 二冊 藤堂 高兌

藤堂家の始祖、藤堂和泉守高虎が一世間の記録なり。卷末に世子大學頭高久の行狀を附記せり。編中ま、世間の傳説と翻歸するところあれど、蓋し本書や正に庶幾からん。水戸榎中納言齊脩、大學頭林衡等の序跋あり。蓋し藩臣津阪孝緯の代撰したるものにて、「聿修錄」の名は、水戸公の賜ひたるものなりといふ。

一絲和尚夜話 一巻 僧 文守



5022

佛法に関する雑話なり。佛教の眞理を説き、俗間の邪説を述べ、數百千の雑話を書き記せり。寛永二十年癸未(一三〇三)の作なり。一名を「大梅山夜話」といふ。

◎文守は江州江原寺の住僧なり。元和四年戊午(二二七八)生る。字は一絲、桐江と號す。初め江戸の澤庵和尚に從ひ、後京都に出てて愚堂に見え、印見解を呈し、遂に印記を受け、法皇の寵遇を蒙る。壯年にして在世佛乘國師の號を賜はる。茶道を善くし、又書を好みたり。正保三年丙戌(二二〇六)三月十九日二十九歳にて歿せり。

5023

伊豆志稿 十三卷 秋山 章

伊豆一國の詳細地誌なり。懸崖沿率より、あらゆる地理人情を記す。寛政十二年庚申(二四六〇)三月、十三卷七冊に寫傳す。

◎秋山章のことは「南方海島志」の下にあり。

5024

一色丹波系圖 本一巻

一色家の祖、義兵泰氏等より、氏次、氏信、氏定等に至る系圖なり。「續群書類從」卷百十六、系圖部第十に收む。

5025

一枝軒隨筆 本五巻 野村 尚房

歌學其の他の事に關し、數多の書中より抄出したるものなり。元禄年中より、寛延年中にかけて、著者が閱讀せる書中より、隨時抄出したるものなり。

5026

一枝軒は著者の一號。◎野村尚房は備前國岡山の人なり。一枝軒と號し、權六と稱す。梅月堂宣阿の門人なり。本書中にも宣阿の歌を引けること多し。其の著には、本書の外、「三玉桃事抄」あり。

5027

伊豆志大神考 一巻 松岡 調

伊豆志中なる八前の大神に就きて考證したるものなり。古事記の説、又は本居宣長の説等を疑ひて考證したる單編論文なり。

◎松岡調は平田家の門人和學者にて香木舎と號す。讃岐の人、田村神社の宮司なり。天御中主神、神所在辨、伊豆國八前の大神考、齊明紀、童話辨、讚岐國官社私考等の著あり。

5028

一枝堂抄録 本二百六十二巻 村田 了阿

和漢の雜書二百九十一種抄録なり。文學、語學、史學其の他の諸學に關するものを網羅せり。一枝堂は著者の別號、次に和書部、漢書部に分けて其の總目次を舉ぐ。

〔和書の部〕六國史、新儀式、大鏡、增鏡、十訓抄、續故事談、吉野拾遺、古今著聞集、内裏式、世繼物語、宇治拾遺物語、無名抄、源平盛衰記、袖中抄、延喜式、保元物語、平治物語、本朝神社考、常草紙、清水物語、本朝世説、東海談、喜多古登、宗五大草紙、陸奥記、奥州後三年記、前太平記、東西遊記、百物語、南嶺遺稿、關田耕筆、將門記、純友追討記、

周易古占、南柯記、兩京新記、李膺百樂、書要錄、鸞子、性理字義、國語、神異經、抱朴子、唐才子傳、公是先生弟子記、碧溪詩話、獨醒雜志、梁谿漫志、赤雅、諸史然疑、榕城詩話、萬寶全書、異苑、北戶錄、禽經、歌經、柳塘記、溪蠻叢笑、可儀堂文集、樂府雜錄、淮南章、讀易私言、元包數義、檳榔記、論語筆解、論語拾遺、疑孟、華陀傳、費長房傳、左慈傳、衛恒傳、鮑明遠集、農書、耕織圖詩、煬帝迷樓記、金川瑣記、維西見聞記、鍾離、大學石經、詩小序、詩傳、詩說、幽怪錄、聲調譜、王大令集、洛陽名園記、釋常談、胡氏詩識、四民月令、遼陽遺書、陶彭澤集、漢武故事、說文檢字、四修、獻筆表、京氏易傳、揚帝海山記、軍林寶鑑、易稽覽圖、詩疑、擊出小樵、博異記、本事詩、陰符經正義、雜事律、宋譯麻利支天經、大唐創業起居註、張寶真靈位業圖、漢雜事秘辛、玉堂雜記、佛國記、談龍錄、鬼谷子、三世相、開卷錄、五度五世五構、武侯心書、李義山詩註、子華子、容齋隨筆、文中子、熊氏筆乘、鐵圍山叢談、三國誌、神異經、蔡中郎集、避暑錄話、東京夢華錄、貴耳集、西京雜記、續幽怪錄、劉子、全唐詩話、夢溪筆談、長頸王考證、資備餘談、晏子春秋、新序、搜神記、西陽雜俎、說苑、賈子新書、顏子家訓、榮根譚、楊子法言、新齊諧、春秋繁露、五雜俎、續齊諧記、鹽鐵論、神仙傳、高子傳、論衡。(以上百八十七種)

◎村田了阿の傳は「異域同事錄」の下にあり。

5029

一枝堂全書 本八十四巻 村田 了阿

和漢佛に関する諸書諸抄を編輯したるものなり。主として漢書佛書より成る。左に其の總目を舉ぐ。

5030

異域同事錄、細腰抄、佛庵先生和歌集之跋、葵齋考證、梅檀瑞像考證、數目字源、三經五類、大藏釋名、起世經、樓炭經、立世論、大集經、日藏經、月藏經、字、金珠品類、四諦、十二因緣六波羅密、泥犁稱志、佛舍利略證、三十二相、八十隨好、駱駝志、蒲泥志、流傳馬典據、三寶鳥典據、九々考證、大寶嚴經類字、增慶阿含經類字、聖典類字、秘密類字、五國史本訓、經籍彙言、周易鳥獸章、木類字、尙書字原、毛詩獸部類字、毛詩木部類字、毛詩魚鼈部類字、成山錄、慈星、五色雲、諸古抄勘文、紀州道成寺本說、筆系圖、守庚申法、三戸咒符、四天王奏鉢、雜寶藏經、撰集百緣經、佛說生經類聚、藏骸骨識生處、死亡原始、影標錄、六種震動、一字編、楊林枝葉、和歌色葉集類字、本草和名類字、事物紀原類字、祖庭事苑、拾言記類字、異俗佛字編、世說故事苑、學習捷圖、難行要覽類字、慈琳音義梵語、釋氏人名表、疊韻、大藏目錄類字、大藏乘。(以上六十九種)

◎村田了阿の傳は「異域同事錄」の下にあり。

5031

伊豆七島全圖 一帖 東條 信耕

伊豆全國、並に七島の地圖にして解説あり。地圖は伊豆半島を中心として七島、及び相武房總の海岸を圍して地理の大勢を知らしめ、國郡の境界、城下、村野、菜場、各地間の里程、方位等を詳密に記入し、且、小笠原無人島の圖を添へたり。解説には、各島嶼の幅員、田畝の段別、戸口、物産、神社、佛閣、山川を擧げ、小笠原島の沿革を敘すること、最も詳密なり。此の書、多くは土谷高暢の南島雜志(文政の末年、即ち二千四百八十七八年頃の所記)に依れり

5032

雲根志、多武峯少將物語、香爐遊、祇園物語、和語連珠、閑談筆記、市井雜談集、平家物語、新著聞集、法華經驗記、善惡兩面常樂集、風流七小町、法妙童子、空華隨筆、續扶桑隱逸傳、非木石、若草物語、貫布福乃水地、關の秋風、小野小町行狀記、武藝小傳、桃花葉、江戸咄、江戸雀、江戸名所記、江戸惣鹿子、懺悔物語、三時五堅固年並考、一樹陸一河流、復辟齊東俗談、朝顏物語、武藏野踏草、數目字例、人物異名、濫觴抄、正字考、日本一、享和儀軌總目錄、印名類字、秋齋問語、狂言記外、本朝俗誌、樽卷談苑、撈海一得、沙石集、三國塵瀟問答、藥師通夜物語、南嶺子、昔々物語、松の葉、好色一代男、田村の草紙、善惡鏡、當世知慧鏡、當世たがみの上、前々太平記、舞の草紙、四方の硯、諸國里人談、義經記、神社啓蒙、花月燈紙、御伽草紙、諸曲内外、諸古抄、曾丹集、金玉集、散木集類字、夜會記、藤樹先生年譜。(以上百〇四種)

〔漢書の部〕晉書、魏代辭、白虎通、文海披沙、遊生八賢、管子、人物志、東觀漢記、物類相感志、邵氏問見前後錄、唐國史補、黃石公集書、天隱子、芝蘭子外編、無能子、齊丘子、獨異志、輟耕錄、物理小識、潛夫論、唐國史、古文孝經、富簡、兩漢刊誤補遺、涉史隨筆、客杭日記、祖石齋筆談、七類書識小錄、中論、戸子、洛陽伽藍記、述異記、道言内外編、癸辛雜識、春渚紀聞、帝範、臣範、困學紀聞、風俗通、前漢書、商子、鶴林玉露、月令廣義、五行大義、韓非子、齊民要術、金樓子、熙朝樂事、湛淵靜語、孫廷尉集、野客叢書、文館詞林、老學庵筆記、枕中記、古微書、古列女傳、新續列女傳、湘山野錄、書史會要、蓬海集、乾鑿度、元包、潘嵐、京氏易略、關氏易傳、周易略例、

◎東條信耕の傳は「近代著述目錄後編」の下にあり

5033

伊豆七島明細記 本三巻

伊豆七島の風土、人口、家畜、産物、及び政治經濟に關する事等を記せり。年代著者共に詳ならず。

5034

伊豆七島明細譜 本一巻

大島、新島、利島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、及、小島、青ヶ島等の四方里程、江戸よりの海里、戸口の數、牛馬の數、流人の數、社寺の數、年貢金高、御救米高、田畑土産、廻船漁船の數其の他一切の統計に關する、ことを記載せり。卷末に「寶曆三年丙辰(二四五六)四月より十二月までの事なり。(二四一三)十二月」と記せり。

5035

伊豆島日記 本一巻

巡見使に從ひて伊豆諸島を歴覽したる時の日記にて、風俗、土産、人物等を圖を掲げたり。寛政八年丙辰(二四五六)四月より十二月までの事なり。

5036

逸史問答 二巻 中井 積善

大阪なる藤川實といへるが、「逸史」中の書法稱謂に就きて難問せるに、毎條答辯したるものなり。「文豹一斑」の中に刊行す。原書「逸史」と併せて參考すべし。

5037

◎中井積善の傳は「逸史」の下にあり。



伊豆順行記

和 二卷

村々を分ち、上巻伊豆山村より、岩科村に至り、下巻道部村より竹介村に至り、各村四邊の限りを記し、山川、土産、社寺、墳墓、古蹟、器財、文苑、等を擧げ、古文書、制札等の寫しをも載せたり。

伊豆勝覽

和 一卷 秋山 章

卷首伊豆國と題して、日本紀應神天皇の歌、釋日本紀の註を掲げ、伊豆海、伊豆御山、走湯島、漢子(まはこ)、戀社、大島、波津島、伊豆崎、三島管笠、三島木綿等を古今の諸書に考徴したるものなり。正誤八所、附録三十所、追神六所あり、考證頗る精確なり。寛政二年庚戌(二四五〇)の自序あり。

◎秋山章の傳は「南方海島志」の下にあり。

一心戒儀軌

和 一卷

禪宗受戒の儀法を論記したるものにて、漢文なり。内に「達磨相承一心戒儀軌」と題せり。文明十五年癸卯(二四三三)九月二十二日、大虚和尚の秘本を借りて寫す由の奥書あり。

一心居士詠草

和 一卷 源 忠暉

著者の詠草詩歌を編輯したるものなり。一心居士は著者の別號、故に書名とせり。著者忠暉の傳は詳ならず。

一心妙戒教

和 一卷 僧 湛園

明僧無我菩薩普禪師の行狀を漢文にて記したるものなり。受戒弟子湛園惠證、凝禪柏堂等の編輯するところにして、元祿十二年己卯(二三九九)博多妙樂寺僧性宗の序あり。今見るところは延享三年丙寅(二四〇六)の寫本に於ける。

一宵話

二卷 牧 墨徳

著者の雜談隨筆なり。草薙劍、日本刀、東方日出處、蝦夷、雁の故郷、酒泉、和歌感應、福佛坊、稻荷狐、鍾馗大臣、朝鮮易者、千字文、唐土に無き佛書、等の項目あり。文化七年庚午(二四七〇)の著作に係る。

一夕醫話

三卷 平野 重誠

醫事に關する一時の問答、凡そ十有四條を録載したるもの。世の醫師、動もすれば、西説の爲めに動かさるゝことあるを慨して、此の書を著せりといふ。慶應元年乙丑(二五二五)二月刊本となる。

平野重誠は江戸兩國藥研堀に住したる醫師にて、元亮と通稱し、革齋道人また指海漁者と號し、源姓を稱す。著書は本書の外に、養氣説、大日本開闢由來記、其の他の數部あり。

逸代雜記

和 一卷

古老物語の筆記にて、一名を「童聞」とも云へり。最

初に武將の事を記し、長尾景虎、川中島合戦の注進

狀を掲げ、次に大坂陣軍法の事より、天和二年に至る時々の進書、注進狀の類を集め、最後に藤堂大學頭家中條令を出す。凡て五十四條。享保七年壬寅(二三八二)書寫の奥書、及び文化八年辛未(二四七二)書寫の兩奥書あり。

逸堂座主日記抜書

和 一卷 堯恕 親王

寛文三年癸卯(二三三三)二月四日の日記より元祿八年乙亥(二三五五)正月二十五日に至る日記の所々を抜抄したるものなり。

◎堯恕親王の傳記は「逸堂集」の下にあり。

逸堂集

和 二卷 堯恕 親王

著者逸堂の詩文集。詩文の數、凡そ三百餘首を收め、書末に著者の行狀を掲げたり。弟子堯慈が元祿八年乙亥(二三五五)秋七月に編輯せしものなり。◎堯慈親王は後水尾天皇第六の皇子にして、寛永十七年庚辰(二三〇〇)十月十六日に生れ、逸堂、又薩達磨と號す。天寶聰明にして學を好み、又佛法に歸依す。八歳の時始めて妙法院に入り、堯然法親王の弟子となり、十一歳にて薙髮し、五十六歳にて卒し給ふ。著者所、本書の外に、大乘經述律儀傳、排歌、智者大師別傳註別、等あり。

一刀兩斷

和 一卷 玄武 庵

佛語に關する論述

東武白山下なる佛語者玄武庵のもとへ、奥州小名濱の吏、柏之、知足、感鬼の三士が、尋ね來りて入門を請へる最初、佛語者の心得、一家の秘法等を説きて、直言直筆、根本的に指示したるものなり。さて、こゝに「一刀兩斷」の名もあるなれ。斯道の學者にとりては有益の條多し。安永九年庚子(二四四〇)八月の作なり。

◎玄武庵は佛人なり。江戸白山に住して醫を業とせり。白山老人と號す。嘗て村上兵部將に就きて佛語を學び、盛に美濃風を唱へたりき。寛政十年戊午(二四五八)正月十九日歿せり。享年未詳ならず。

佛句の集

東山天皇の元祿四年辛未(二二三五)の編にかゝる。

神戶定之

神戶定之は京都の佛人にして、東林軒と號す。鶴冠井令徳、山本西武等の門人にて、元祿十三年庚辰(二二三六)九月六日歿す。辭世の句あり「朝がには久しきものよ五十年」といふ。

一得錄

和 一卷 岡田 勝興

儒教、性命仁に就きて論究せるものなり。其の自序に、「語に曰く、愚者の千慮、必ず一得あり。既に之れを愚と謂ふ、安んぞ其の一得の得、九百九十九失の失にあらざるを知らんや。亦唯、自ら棄るに吝く、適ち聖經に就て道徳中性命仁を指摘し、附するに鄙意を以てし、諸れを座右に置き、以て觀玩に供し、且、書紳に當つ」と云へり。以て著者の趣意、本

伊豆内親王御願文

和 一帖 伊豆内親王

全文五十七字より成れる祈願文を、橘逸勢の眞蹟、行書にて認め刻したる習字帖なり。其の文の最初に、「菩薩戒弟子從五位下藤原朝臣平子登首和南奉納山階寺東院西堂香燈禮料事」とあり。天長十年癸丑(一四九三)九月二十一日の撰に係る。

伊豆内親王

和 一卷

卷頭「伊豆の道草」と題して、江戸赤坂田町より伊豆権現、熱海村に入るまでの記なり。加茂季鷹が天明の序、菅原まさとしが安永の跋等あり。著者の名は序等によりて見るに、赤井源次(ゆきと)といへるもの、如し。

伊豆日記

和 二卷 小寺 應齋

伊豆七島の巡遊日記なり。主として八丈を記し、風俗習慣、地理、歴史等を詳記す。下巻は全冊圖畫のみなり。編輯及び發行の年月詳ならず。二卷三冊に作る。一名を「八丈島記」ともいへり。

小寺應齋

和 二卷 小寺 應齋

◎小寺應齋は江戸の市人。天保頃のものなり。

伊豆日記

和 一卷

源頼朝に關する記事なり。頼朝が清盛に殺さるべかりしを、池尼禪尼の請によりて、伊豆に流されたる發端より、遂に出世の旗擧するに至るまでの經歷を記したる俗書なり。奇怪不合理の事等多くして、事實の信するに足るもの少し。

伊豆日記抜集

和 一卷

伊豆日記の中より、大事件のみを抜き出でたるものにて源頼朝に關する記事なり。原書と同じく信すべからざる條多し。

稜威雄詰

和 五卷 橋 守部

國學者の漢學論に就きて、又漢學者の國史論等に就きて、我が國體上より論辯したるものなり。さて「稜威雄詰」とは名けたるなれ。其の開卷大旨の條に曰く、「此の度此の書を撰みたるは、我が學の先づ人々の漢學を論へる、又漢學する人々の國體の事いへる中に、くちをしく、いきどほるしき事どもありてなり。その中にむかしの人の説どもはまばらく措て、近き世にしては、賀茂氏の國意考殊にいまだし、如何なるをりのすまびなりけむ、彼の翁にはいと似けなきそらゝの言をなんいへりし。極めてかりそめに書き捨てられしものなりつらむな。はやく其の世に失もせて版にさへありのこせれば、近江の僧海島が如きものにすら、云ひ破られ



Shen

Shin

たる、是れ其のうれたき一つなり。其の後は本居氏  
の葛花、錯狂人など云ふものあれど、唯難者の言  
と、世に所謂五十歩百歩の答へなる、是れ其のくち  
なしき二つなり。又其の後、平春海が摘批、又春海  
眞園が問答あるは、遠江人の古野の若菜、或は信濃  
人のますみの鏡など云ふ書あれど、それらは何れ  
も香が神典の旨をだにいまだよくも解せられざり  
つる人々なりければ、そのいへるすぢいとまだし  
くて、中々なる事の多かる、是れ其のあかね三つな  
り。又世々の儒者ら何れと記しおける書の中に  
は、御國の名なれとも、皇朝廷の御社とも、國家の  
御大事ともなりぬべきほどのことさへに見えける  
を、それらなほ何とも待答へすて、彼のちひささい  
どみ争してやむめる、是れその慣らしき四つなり。  
それもむかしのこととなりはて、今いふ人のな  
くば、さてもあらむな。つひに漢學する輩のそしり  
かまとなりはて、今は鄙の末にまで、其れなまこ  
と、思へる人々の多くなれるは、是れその辨へで  
はえあらぬ五つなり。故に、たびば、彼のちひささい  
ことの上にはか、はらずて、如何にもさし置きが  
たきおもきことどもをむれと辨つ云々と。以て一  
書の梗概を窺ふべし。天保十年己亥(二四九九)四  
月八日の著。

◎萩原正平は氣吹適金平田篤胤の門人、伊豆の和  
學者なり。其の著書は本書の外に、古史言行頌、矢  
筈の山ふみ等あり。其の子正夫、父の遺志を繼ぎて  
増訂伊豆志稿を校正したるなり。

伊豆國神階帳 一卷

伊豆の國三箇郡内の神明帳なり。三島大明神以下  
八十餘の神明を擧げ、各其の位記を記せり。康永二  
年癸未(二〇〇三)十二月二十五日、同國在籍伊達  
某の筆記に係る。群書類從三十三の卷に收む。

伊豆國土産録 本一卷

土産物を列擧して、一々性質、和名、異名、形狀、尺  
寸、所在地等を記したるものなり。土部に三種、金  
玉部に四種、石部に三十八種、植物部に六十四種、  
鑛部付産部に二十二種、禽獸部に十五種、製造部  
に數十種等を擧げたり。

伊豆國輿地全圖 一折 鶴峯 戊申

伊豆國一圓を、郡名、郡境、陣屋、驛市、新田、支村、  
道路、古城、古戰場、關所、神祠、佛宇、名勝舊蹟、温  
泉、臺場、廻船見當、燈明等に符記分彩せり。嘉永  
二年己酉(二五〇九)春三月の作なり。

神階録 本二卷

◎鶴峰戊申の傳記は「神階録」の下にあり。

稜威言別 三卷 橘 守部

神代記の和歌を抜き出でて註釋せるもの。此の書  
は、初め「蘆荻抄」と名けて、著者少壯の時著せし  
ものなるを、後、日本紀の註釋「稜威言別」を著すに  
至り、和歌の註は凡て此の書に譲り、題號をも「稜威  
言別」と改めたるなり。弘化四年丁未(二五〇七)古  
山文興の跋、及び自序あり。

稜威道別 五卷 橘 守部

神代紀を註釋せるものなり。天保十四年癸卯(二五  
〇三)出雲宿禰尊孫、荒木田神主久守の序、翌十五  
年青木永章の序、及び同十三年の自序あり。

伊豆走湯俳諧 本一卷 齋藤 徳元

伊豆熱海在湯中の百韻獨吟なり。末に落陽建仁寺  
に益長老の和漢狂句を擧げたるは、當時俳會の序  
請ひ受けたるなりといふ。寛永九年壬申(二二九  
二)自らの奥書あり。

伊豆國式社政略 二卷 萩原 正平

「延喜式」なる伊豆九十二社の祭神、緣起等を簡略  
に記述したるものなり。式社政略、總攝要等を附録  
とせり。

通稱を齋宮といひ、帆亭と號す。磯田信長に仕へて  
二千石を領し、後進退して徳元と號す。松永貞徳の  
門人たり。寛永五年江戸に出て馬喰町に住して、和  
歌を教授し、後俳諧を専にし、同十八年、俳諧初學  
抄を發行す。是れ江戸に於て俳書版刻の始めなり  
といふ。正保四年丁亥(二三〇七)八月二十八日、八  
十九歳にて丹後に歿す。天橋立五臺山智恩寺に葬  
る。法名を「徳元大居士」といふ。一説に、正保元年  
若狭に歿せりともいふ。

逸風土記 本一卷 今井 似閑

後に解題せる引用風土記と同物なり。今、見る本  
にして異るところは、本書には弘化二年乙巳(二五  
〇五)九月、平東雄の、「右仙覺萬葉集註釋所引、而  
本朝風土記十八國逸文也、此者吾善友藤原御斯乃  
書而於久良禮多留也」との奥書ある點にあり。

第一瓢百題 一卷 中島 這季

算法の小冊子にて、孝明天皇の萬延元年庚申(二五  
二〇)の自序あり。

一遍聖繪 十二卷 僧 圓伊

時宗の祖一遍上人の行狀繪卷なり。京都六條道場  
金蓮寺の什寶たるより、一に「六條縁起」と稱せり。  
先輩の鑑定に世尊寺行房の書なりといふ。跋中に、  
正安元年己亥(一九五九)八月二十三日四方行人聖

Shin

Shin

戒之れを記し、圖に法眼圓伊の筆に成れるよし見  
えたり。

◎圓伊は畫に巧なる僧にして法眼たり。正安二年  
庚子(一九六〇)一遍上人繪傳十二卷を畫く、其の  
山川樹色は意趣最も高しといふ。

一遍上人繪傳 四卷 僧 他阿

時宗の祖一遍上人の繪傳なり。一遍は後字多  
天皇の建治二年(一九三六)始めて時宗を唱へ、遍  
く諸國を遊化して、伏見天皇の正應二年己丑(一九  
四九)に至り、攝津兵庫に於て入寂せり。本書は其  
の行狀の概要を記し、ものなれども、元、其の宗信  
徒の爲にせしものなれば、記事の神祕に流れて、史  
實に乏しき憾あり。著者に就き疑點なきに非ずと  
雖も、今は姑く直談鈔の説に従ひ、時宗の第二祖他  
阿彌陀佛の進作とす。本書は二祖の繪傳と合刻し  
て、全部十卷となし、前四卷には一遍の行狀を記  
し、後六卷には二祖の行狀を記す。

一遍上人繪詞傳 四卷 僧 他阿

時宗の祖一遍上人の繪詞傳なり。一遍は後字多  
天皇の建治二年(一九三六)始めて時宗を唱へ、遍  
く諸國を遊化して、伏見天皇の正應二年己丑(一九  
四九)に至り、攝津兵庫に於て入寂せり。本書は其  
の行狀の概要を記し、ものなれども、元、其の宗信  
徒の爲にせしものなれば、記事の神祕に流れて、史  
實に乏しき憾あり。著者に就き疑點なきに非ずと  
雖も、今は姑く直談鈔の説に従ひ、時宗の第二祖他  
阿彌陀佛の進作とす。本書は二祖の繪傳と合刻し  
て、全部十卷となし、前四卷には一遍の行狀を記  
し、後六卷には二祖の行狀を記す。

一遍上人繪詞傳直談鈔 九卷 賞山

一遍上人繪詞傳を註釋したるものにして、本傳の  
文句に就きて詳細なる引證解釋を施せり。正徳四  
年甲午(二三七四)の著作に係る。全部九卷の中、繪  
詞傳の註解は前六卷にて終了し、第七卷には神傳  
撮要鈔、及び一遍上人尊願文釋指鈔を、第八、九卷  
には別願和讃直談鈔を合刻せり。俱に同人の著作  
なり。

一遍上人行狀 本一卷

釋一遍上人が一生間の傳道德行等の大略を記した  
るものなり。紙數僅に三枚より成る。「續群書類從」  
卷二百二十三、傳部第三十四に收む。

一遍上人年譜略 本一卷

時宗の祖一遍上人が一生間の履歷を年序的に記載  
したるもの。即ち四條天皇の延應元年己亥(一八  
九九)二月十五日誕生してより、伏見天皇の正應二  
年己丑(一九四九)八月二十三日入寂せるまでの事  
を詳しく記述せり。本書は兵庫眞光寺の自版なる  
由を記せり。「續群書類從」卷二百二十三、傳部第三  
十四に收む。



一遍上人六條縁起

一遍上人が正應二年己丑(一九四九)八月二十三日、五十一歳にて入寂せるまでの一生行實を、二十段に分ちて詳叙したる假名文なり。巻頭に安永五年丙申(二四三六)淨阿彌禪の序あり。

◎聖戒は終始上人侍座の弟子にして、最も事實を詳にせり。正安元年己亥(一九五九)八月二十三日之れを記し、法眼圓伊をして畫圖を加へしめたるものなり。

一遍上人

一編半 二冊 國友

俳句の集にて、元祿十三年庚辰(二三六〇)京都井筒屋より發行したるものなり。

◎國友は伊勢國の俳人なり。

一步

二卷

上下二卷にて、なほの事、假名遣の事を論じたるものなり。即ち上卷に、過去のて、なほの事、現在のて、なほ、同調の事、現在ののの通ひの事、現在ののらんの事、付りらんの事、未來のて、なほ、同調の事、自の調の事、他の調の事、疑の調、同て、なほの事、治定のて、なほの事等を論じ、下卷に、中のえの假名を書く事、端のへの假名を書く事、奥のひの假名を書く事、奥のひの下の知の事、ひの假名をみの聲によむ事、ふの假名を書く事、端のいの假名

を書く事、むの假名の事、うの假名の事、中のおの假名の事、はの假名をわの聲につかふ事、わの假名を書く事、五音圖等を辨じたり。一名を「一步假名遣」と云ふ。延寶四年丙辰(二三三六)正月、大阪にて發行せり。

一步千里集

林 信充

著者の詩集にて四時題、雪題、月題、花題、節序、人品、戀題、難題、問答題、學字題、官類、奇類、單類、詠物、その他十哲、和漢地理、人物等を賦したる絶句、律詩、排律等を收む。寶永二年乙酉(二二六五)の自序あり。其の中に、褒貶に依て進退し、積句成章、遂に百を累て千に及ぶの意によりて書名を撰びたる由を云へり。十卷五冊に作る。別に「後一步千里集」四卷あり。併せ見るべし。

◎林信充の傳記は「孝十五郎傳」の下にあり。

一本堂行餘醫言

香川 修徳

醫事、藥法に關する論述なり。今試に第一卷の目次を擧ぐれば、診候、處方、用劑、量則、水率、煎法、服度、撰藥、撰艾、食療、浴泉、灸治、藥治等なり。以下あらゆる病症を擧げて、各病因、療法、處方等を論断したるものなり。一本堂は著者の堂號、故に書名に冠せり。天明八年戊申(二四四八)の上梓に係る。◎香川修徳は京師の醫なり。字は太仲、秀庵又は一本堂と號す。姫路の人なり。十八にして京都に往き、後藤良山に寄り、伊藤維楨に就き、専ら文學を

修め、居ること五年、業大に進み、同門に憚らる。既にして儒は父の遺意に非りしを以て、意を決して醫たらんと欲し長山に乞ふ。長山よりて古道を興すべきを勸む。是に於いて徳を修め、志を勵まし、精を專にし、講究累年大に得る所あり。悉く師説を明らかめ、撰選、行餘醫言、醫事説約、傷寒説考、灸點圖解等の著あり。

一本堂藥選

香川 修徳

動植物中の藥品を選擇したるもの。即ち草木水魚介禽蟲等に就き、凡そ二百〇七種を選擇研究せり。享保二年丁酉(二二七七)正月の發行なり。

◎香川修徳の傳記は「一本堂行餘醫言」の下にあり。

一本堂藥選續編

香川 修徳

藥品の事を記せる書にして、試効、選修、辨正の三項に分ちて敘述せり。享保十五年庚戌(二二九〇)伊藤長胤の序、同十四年己酉の自序あり。續編は本編の遺漏を補ひたるものにして、元文三年戊午(二二九八)の自序あり。

◎香川修徳の傳記は「一本堂行餘醫言」の下にあり。

一品内親王家歌合

白隠

長久二年辛巳(一七〇二)五月、同家の歌合なり。

壁生草 二卷 僧 白隠

和泉式部集

五卷 關 祖衡

佛敎の大意を説き、諸先徳の行狀等を述ぶ。全編七音句に作りて、一般の誦讀に資せり。最初の三四句を例示すれば、若人欲成菩提道、須觀四弘誓願輪、縱餘入得不二門、無菩提心墮廢道、等の如し。凡二千百句あり。壁生草附幼稚物語といふ。明和三年丙戌(二四二六)江戸に出版す。

◎白隠の傳記は「白隠和尚晚年施行歌」の下にあり。

和泉志

五卷 關 祖衡

日本輿地通志の、畿内部分第四十四より、第四十八までの和泉誌を、別刷單行したるものなり。享保二十一年丙辰(二二六九)出版す。著者關祖衡は越前國の人なり。

◎和泉式部は歌人なり。越前守大江雅致の女にして和泉守橘道貞に嫁す。道貞歿したる後上東門院に仕へ、後に藤原保昌に嫁せり。

◎中谷願山の傳記は「孔方圖會」の下にあり。

和泉式部續集

二卷 和泉 式部

前に解題せる「和泉式部集」の續編なること名の示すが如し。續群書類從「第四百四十八の卷に收めらる。

◎和泉式部の傳記は「和泉式部集」の下にあり。

伊豆三島文書

和泉國大繪圖 一折

伊豆の國三島神社内に藏せる古文書を集めたるものなり。集收の年代、及び編輯者詳ならず。

和泉國大繪圖

和泉國内なる五百三十四社の神名、位記、所在等を列記せり。續群書類從「卷六十二」に收む。

和泉國地圖

一國の略圖にして、傍に和泉國の名義、茅渚海の事、堺、全剛山、岸和田より諸方への里程、谷川渡より渡海諸方への里程等を記せり。享保二十年乙卯(二二九五)の原刻を、安永五年丙申(二四三六)再刻したるものなり。圖は堺の人河合守清の筆するところなり。

和泉國地圖 一冊 中谷 願山

和泉國の繪入名所記なり。初に和泉國號の始、茅渚の譯、堺人物志、堺名器等を詳記し、以下各郡の神社佛閣、名所舊蹟の緣由、及び其の概況等を委細に案内せり。卷中挿圖多く、古歌等をも記入したり。圖は竹原信繁の寫す所なり。寛政七年乙卯(二四五五)花山院家藤原愛徳の序、及び著者の跋あり。其の翌年の刊行に係る。

◎秋里離島の傳記は「近江名所圖會」の下にあり。

逸民新語抄 一冊 田中 世誠



越後の際士野村勘次の道徳經世に關する隨筆を抄録せしものにして、門號は抄録者の附けしものなり。奥書に、右抄録する所の語、伊門の教にて、其の根元は宋學より出づ」とあるにて、本書の性質を概知すべし。寛政二年庚戌(二四五〇)の世誠の序ありて、本書の由来を記せり。

◎田中世誠の傳記は不詳なれど、其の著書には、本書の外に、一騎前意得、分職略説、遠乗凌策等あり。

出雲大社記 本一巻

同社の縁起成立等を記録す。自序あり其の名は記さざれど、千家某の作なる事は知るべし。卷末に、天明二年壬寅(二四二二)十月十五日、高野信道寫本の奥書あり。此の本には「日御崎雜記」を合併す。

出雲大社記事 一巻

出雲大社の由来縁起、及び事實年中行事等の事を記したるものなり。著作の年代詳ならず。

出雲三社記 本一巻

出雲なる大社、御崎社、佐陀社の略記なり。各社の寶庫、書庫、寶器目録、祭禮、年中行事等を初めとして、大社再興の事、國造館の事、其の他御崎、佐陀兩社に關する幾項を輯載せり。

出雲寺記 本一巻

出雲寺は山城國愛宕郡にあり。卷首に同寺僧泰壽源秀等が延長四年丙戌(一五八六)春秋三季編輯會興復の願文を掲ぐ。文中に傳教大師の遺蹟にして、延暦年中よりの勝地なることを辨せり。末に「八所御靈略記」を掲げ、此の記には明應八年己未(二二五九)八月、大膳大夫春原國枝等四人の名を註す。

出雲大社宮杵築大社記 本一巻

本社、末社、攝社、諸舎の構造より、藏書目録、古文書、寶器目録、祭禮、年中行事、故事、造營事實、遺事等を詳記し、附録に大社再興記、造營寄地、願書繪旨、御教書、國造事實、大社八景、杵築景境志等を掲載せり。

出雲國大社圖 一編

本社、諸末社、山川、國造館、橋梁、鳥居、諸門、廻廊、瑞籬、拜殿、舞臺、廳舎、火燒屋、神庭會所、御手洗井、水屋、神供井、文庫等を悉く圖出せり。

出雲國懷橋談抄 本二巻

此の書は一名「國橋談」の下に解題せり。

出雲國造神壽後釋 二巻 本居 宣長

出雲國造神壽詞の註釋なり。毎條、初に賀茂眞淵の「祝詞考」の説を掲げ次に著者の解釋を出せり。寛

政五年癸丑(二四五三)の出雲宿禰後秀の序あり。◎本居宣長の傳記は「古事記傳」の下に掲ぐ。

出雲國風土記 本一巻

意字、鳥根、秋鹿、新羅、出雲、神門、飯石、仁多、大原の九郡を記し、各郡末に郡司、主張、大領、少領、權任、少領、擬少領主、政權主政の氏名等を掲げたり。卷末に「天平五年(一三九三)二月三十日、勘造秋鹿郡人神宅臣金大國造帶意字郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島」と記せり。

出雲國風土記考 本一巻 荷田 春滿

「延喜式」等を引證して「出雲國風土記」の誤字闕文等を考訂したるものなり。寛保二年壬戌(二四〇二)荷田在滿の奥書あり、右一巻養父春滿、往年奉命校正官本出雲風土記之内所手録、以贈下田師古也。師古死後其父泉翁返之、以故在子家」と。

伊豆母廼美多麻 三巻 川北 丹靈

一種の神代文字といふ、あなもしに基きたる論辨なり。第一巻に總論、假名の辨、五十音の出現の圖、五十音正位舌働の圖、五十音正位開口廣狹の圖、五十音正位十行の辨、平上去の三聲。第二巻に、ア、ヤ、ワの辨、ア、ヤ、ワ、カ、サの五行並水兒の飛、ア、イ、リ、カに一音の語なき辨、アの行のイの説並

ア行の字あり、又外の字に變る事、ア、イ、リ、カ四ツの音に語の中下にては自ら替ける辨、ヤツの二行の辭の活用。第三巻に言語清濁並相通の辨、鼻音の假名並國字用格、口語の音便、んとの字並假名の辨等を掲げたり。芬木元達と云ふもの校正して、文久二年壬戌(二五二二)中條中務大輔、間宮永好、松平信幹、芬木元達等の序あり。元治元年甲子(二五二四)江戸に發行せり。著者川北丹靈は朝弘と稱す。著書數部あり。

出雲日御崎社圖 一編

日沈宮神宮兩宮の諸社諸屋を圖し、社家、山川、海邊、諸島、怪岩、奇石等を圖せり。

出雲風土記假字書 三巻 富永 芳久

出雲風土記を假字書にしたるもの。凡例に、此の記書けるやうとして「寛政といひし頃、梅舎大人の櫻木にありて、世にほとし給ひし訂正本の訓を旨として、古事記傳、内山眞龍の解、伴信友の校合本、平田篤胤の古史成文、岡部東平の説、其の外見開ける先達の考をも合せ、猶讀み得がたき事どもは、藤垣内大人に問ひあきらめ己がさかしらなも加へて、草假字に寫し、傍に本書の文字、また正字をも附けて斯くはなしつ」云々といへり。安政三年丙辰(二五一一)の自序、四條大納言藤原隆生の序、本居豐頼の序、堀尾生津麻呂の跋等あり。

出雲風土記考 本十巻 横山 永福

出雲風土記を註解考證したるものにて、十巻五冊に寫傳す。第一冊に意字部。第二冊に鳥根郡、秋鹿郡。第三冊に新羅郡、出雲郡。第四冊に神門郡、仁多郡。第五冊に飯石郡。第六冊に大原郡。第七冊に秋鹿郡。第八冊に新羅郡。第九冊に出雲郡。第十冊に意字部。第一冊に意字部。第二冊に鳥根郡、秋鹿郡。第三冊に新羅郡、出雲郡。第四冊に神門郡、仁多郡。第五冊に飯石郡。第六冊に大原郡。第七冊に秋鹿郡。第八冊に新羅郡。第九冊に出雲郡。第十冊に意字部。

逸話 本二巻 室 直清

多郡。第五冊に飯石郡、大原郡等を掲げたり。凡て十巻五冊に作れり。

名越 克敏

いつらば五十音にて我が五十音を初體用令助の五類に分ち、其の音訓に就きて、種々論述例解したるものなり。「輪池叢書」中に收めらる。

異朝書籍考 本一巻

漢土の經、史、子、集の書、凡て百三十種を解題したるものなり。



5765

るものなり。片假名交り文にて美濃列一枚十行(一行十八字)づつ、凡て三十五枚に略記せり。卷末に慶安二年己丑(二二〇九)二月下旬の記入あり。此の時の作なるべし。明治三十三年予が編纂したる『漢書解題集』第一冊に收入せり。著作者に就て廣く諸家の著述目録に搜索し、又數多の同學者にも承合するところありしが、未だ其の何人なるかを詳にせず。然るに其の末記年月の、彼の林鷲峯の日本書籍考の慶安二年二月下旬と記載せると同年月にして、異朝書籍考の名の、日本書籍考の名と相對せる、また其の簡略なる體裁、及び假字遣等の同様な點よりするに、或は同人の手に成れるにはあらずやと思はる。但し假に同人の著作とすれば、何故に、日本書籍考には異朝書籍考を併行せずして、經典原流を附録したるかを疑はざるを得ず。姑く疑を存して他日の考究を期す。

5766

射手方問書 本一卷

『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、歩立かいそへの事三十條を記し、所々伊勢貞丈の標註あり。寛政四年壬子(二四五二)貞春の奥書あり。

5767

射手方問書 本一卷

『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、一名を「弓馬問書日記」といふ。著者が、小笠原山城守より、文安五年戊辰(二一〇八)同六年の間に傳授したるものを書き留めたる故實也。卷首に弓馬故實六箇條を記して、此の六箇條は師弟の契約もなかりし時、山

5768

城守に傳へ承りし事なり。文安四年三月廿八日」と記し、以下諸項、多くは傳授の年月日を書せり。著者は小笠原豊前守と記す。

5769

射手方問書 本一卷 野部 宗淨

『伊勢弓馬叢書』中の一書にして、同故實六十餘條の附書なり。今、天文九年庚子(二二〇〇)十二月十九日の寫本による。

5770

出羽神社考 本一卷 照井 長柄

『延喜式』神社名帳の出羽國田川郡伊氏神社の所在地、祭神の事等を考證したるものなり。

◎照井長柄は羽前田川郡の人にして通稱環平、初め田村長柄といふ。佐藤神符滿に從ひ、皇國醫道を學べり。鈴木重胤の門人にて國學者なり。

5771

井出演記 本一卷

延享三年丙寅(二四〇六)三月二十七日京都を出て東海道を経て四月十五日江戸に着し、五月三日江戸を立ち木曾路を経て同十四日京都に入る紀行なり。最初京を出でし時の歌に「都を今日ばうちいでの濱」と詠むるによりて書名を撰べりといふ。出と井出とは假字遣違へるをかし。

5772

以傳五種 三冊

混合記、信濃宮傳、十津河記、底倉記、足利治亂記の

五書を合卷したるものなり。此の書の編輯者、其の年代、並に、卷中五書の各著者は何れも詳ならず。此の總標題は「疑以傳疑の物語より取り」と云。「混合記」は應永四年丁丑(二〇五七)南朝の忠臣世良田政義、桃井宗綱と謀して宗真親王の御子、兵部卿伊其親王を上野國に迎へ、義兵を擧げしが、敗軍打續き、再び伊其親王を奉じて、西歸せんとせし途中、敵兵の襲ふ所となり、應永三十一年甲辰(二〇八四)八月十五日、信濃國大河原にて伊其親王自殺し給ひし始末を記し、終りに親王の傳、供奉諸士の傳等を載せたり。題號は王の石塔が、信濃國混合の聖光寺に在るより取りしならん。長享二年戊申(二二二八)九月十八日の記述に係る。信濃宮傳」は後醍醐天皇の第三の皇子宗良親王が延元元年丙子(一九九六)の比より、十數年間遠江、信濃、上野、常陸の間を數回往復して、賊軍と戦ひ玉ひ、弘和年間遠江國にて薨去せられし間の事を記せるものなり。題號に「信濃宮」といふは、この親王のことなり。「十津河記」は後龜山天皇の元中九年壬申(二〇五二)南北朝統一の後、吉野十八郷、及び十津河に在りて、北朝に降らざる南朝の遺臣等が、永享元年己酉(二〇八九)に義兵を起し、尋で嘉吉三年楠二郎等内裏に討入り、神璽を奪ひ萬壽寺宮を奉じて吉野に入りしことより、長祿年間に赤松造臣等萬壽寺宮を害して南朝の皇統絶えたる迄の事を記せるものなり。「底倉記」は南朝の忠臣藤原義治の子義隆、天授二年丙辰(二〇三六)上野國新田にて義兵を擧げしより、戦鬪流浪の後、應永十年癸未(二〇六三)に相模國、底倉の温泉にて自害せし迄の事を記せるものなり。題號は死地の名を取れ

り。『足利治亂記』は、室町氏全盛を極めたる義隆の時より、義持を経て、義教に至る間の出来事を記し、筆を赤松滿祐の義教殺害に止めたり。已上五書相關聯して當時の歴史を調査する參考たるべし。

5773

伊藤維楨送水野公二序 本一冊

伊藤 仁齋

5774

伊東系圖 本一卷

工藤祐經を祖として從五位下大和守祐久、其の子左京亮祐由に至る系圖なり。『續群書類從』百六十一の卷、系圖部第五十六に收む。

5775

辨伊藤仁齋送淨屠道香師序 一卷

伊藤 直方

5776

伊藤長胤勢遊記 一卷 伊藤 長胤

享保十五年庚戌(二三九〇)夏四月、伊勢に遊びたる時の紀行にして、其の途中の勝景佳境を記し、往來詩を挿みたり。卷首に鸚鵡石と盤石との圖を掲げ、卷尾に同伴三門生の鸚鵡石の律三首を載す。本書は單に『勢遊志』と寫傳せるもあり。

5777

絲櫻春蝶奇縁 十卷 瀧澤 馬琴

一の時代小説なり。組織の大要、時は天文元年九月十七日に起りて、同十八年に終り、地は武藏、相模は互りて、鎌倉を中心となせり。管領盛廣、約に背きて其の家臣五十四家東六郎に恩賞を興へざるに端緒を開き、東六郎一文字の陣羽織を抱きて鎌倉を去り、後、又、陣羽織が故郷に還るを以て大團圓とす。而して俠客蟻蝶丸綱五郎、美女小糸の兩人實に書中の主人公たり。これ此の書名ある所以なり。挿畫は豊清(柳齋豊廣の子)十六歳の作にして、文化九年壬申(二四七二)の著なり。

5778

絃絲のみさは 一卷

詩經の題を借りて、絃歌を集めたるもの。例せば、周南の十一首を、みまこ(り)蘭離、葛かつら(葛覃)、はば、くさ(卷耳)、さかりき(樛木)、きりぎりす(蟋蟀)、桃のわかばえ(桃夭)、うさぎあみ(兔置)、おほば(采芣苢)、川のほとり(淇水)、填の木(汝墳)、鱗のあし(麟之趾)等にて、以下同じ體に、召南の部十四首、邶風の部十九首、鄘風の部十首等あり。各諸家の作にかかり、和音の考訂は浪華菊水、平安小島、浪華小野村三檢校のしたるものなりといふ。華風の凡例あり、同人の編なるべし。寛政三年辛亥(二四五一)京都にて出版す。

5779

田舎句合 一卷 榎本 其角

著者が俳諧二十五番の句合なり。延寶八年庚申(二三四〇)松尾芭蕉の判詞あり。京都井筒屋庄兵衛版行す。俳諧文庫には、第一編「芭蕉全集」中に收む。

5780

田舎莊子 十三卷 丹羽 栲山

莊子の體例に倣ひて、寓言諷刺的に、其の情懷を述べ世俗を諷刺したるものなり。蟻王壁書、燕子清談、黃鸝入夢、龜嶺儲釋等以下數十目を假名書す。外編を、禮樂射御書數、田舎莊子、附録上中下の十三冊に作れり。享保十二年丁未(二三八七)の序あり、翌十三年大阪書肆出版す。

5781

威奈卿墓誌銅器銘 一帖

丹羽栲山の傳は「天狗藝術論」の下にあり。